村更生に萬丈の氣焔を吐き、銃後の勞力問題も難なく解決されてゐる。

和納なる地名は、或る說によれば、古事記、垂仁帝の御宇に見ゆる「和那美之水門」とあるところなりと云ひ、尤もな理由である。

村內には和納郵便局、和納信用組合、村上天皇皇子桃井親王墓(傳說)、願善寺大信寺、福成寺、廣海寺、楞嚴寺等あり小學校は高等科を置き、十三學級編成、共鬪作業、體育奬勵、愛鄕精神の徹底など見るべき施設が多い。

鎧鄕村

本村は郡の稍々中央、卷町の北につづき、東は鎧潟に臨み、越後平野の沃地を占め、面積〇・八四二方里、人口約四千人を有する中級農村にして、道路、交通機關完備し、越後鐵道付根驛へ十町、縣道通じ、バスの便あり、西川による水路の運輸も完備し、氣候風土共に農業に適し、また灌漑の便もよく、農產には頗る惠まれてゐる。牛馬の飼育奬勵、宅地利用の合理化、桑園の改良、更に家內工業の奬勵が行はれ、その實績見るべきものあり、特にまた最近は敎育風俗に關しても改良せられつゝある。

大字押付なる押付八幡は、また鎧八幡とも稱され、鎧潟の名勝と共に、本村が他に誇示し得るものである。他に無格社一あり、寺院は應聲寺、淨照寺、念稱寺本念寺、泉上寺、蓮照寺等があり、いづれも賽者の影を絕たない。

升潟村

曾根町の北に隣り、一帶の水田にして水量豐富、濕田なるを免れない。升潟、兵右衞門新田、大潟村古新田、浦村新田大關村古新田、升岡新田、貝柄新田、三角野新田、堀上新田、與兵衞新田等の部落より成り、面積〇・四六七方里、人口二千三百人である。大字升潟のほかは、何れも新田の名稱を附ける所より見ても開拓の近代なること分明である。

越後線曾根驛へ半里、縣道南北に貫通してバスを通じ、交通の便良好である。明治二十二年自治制施行以來分合のことなく今日に至れる一村にして、住民の多くは農業に從事し、耕作を以て生活としてゐる。從つて米は本村產物中の第一位を占め、年產額も相當である。

警察は卷署管內、郵便は曾根局管內である。神社九、寺院光西寺ほか一を有し村民は信仰心に篤い。

中野小屋村

本村は十九箇の大字より成る。卽ち中野小屋、明田、保古野木、前野外新田、大友、大潟、田潟、藤野木、小瀨、道河原、金卷新田、田島、下泉、曾和新田、旱潟、勘助鄕屋、笠木、高山、槇尾がそれだ。蒲原平野中、代表的水村と稱すべき地にして、水田桑畑の間に徐々に發達せる小部落を多數含めたのである。面積は〇・九方里、人口四千二百人を有し、殆ど農業に從事し、米と繭とを主要產物

としてゐる。

越後線曾根驛へ一里、縣道あり、バスが通つてゐる。交通至便である。

小瀨尋高(八學級)、笠木尋常(四學級)の二小學校あり、敎育上の諸施設は整ひ優秀な成績を擧げてゐる。なほ村內には郵便取扱所、產業組合があり、寺院には圓光寺、慶念寺、善寶寺、寶光院、願正寺、勝樂寺などがある。

黑埼村

當村は郡の北東端に在つて、新潟市へは、西南僅か數町を隔つてゐるに過ぎない。北方の一帶は坂井輪村と水陸相接し東南方一帶は信濃川、中之口川を隔てゝ中蒲原郡に連なり、西方は坂井輪村、中野小屋村と相接し、西南は升潟村、味方村に隣接してゐる。

中之口川、信濃川沿岸の大字は、土地やゝ高いが、西するに從つて低窪となり池沼をなしてゐる。東西一里七町、南北二里十四町、面積一方里二七强を擁してゐる。戶數一千六百餘、人口約二萬、農を第一に、商、工の順により生業となしてゐる。

當村は明治三十四年、町村大分合の結果、當時の金卷村、鳥原村、黑島村、木場村、板井村の五ヶ村を合併して一村となしたものである。當村は信濃川、中之口川の兩河の左岸に位してゐるところから、また地勢平坦低濕な關係等から、溝渠東西に走り、南北に通じて舟楫の利が極めて便である。殊に信濃川、中之口川には汽船の往復あり、下は新潟市より上は中蒲原郡白根町を經て燕町に至る。交通運輸 樞軸をなしてゐる

黑崎村農會をはじめ部落農事實行組合部落農區、水稻部落採種組合會その他の團體が、何れも發刺たる活動をなし、產業方面に貢獻してゐる。

當村附近名勝の地としては、緒立八幡宮、鷲の木の櫻、逆竹の舊蹟、波切の御名號それに、燒餅の舊蹟などがかぞへられる。

味方村

本村は白根町に近接し、味方、白根、吉江、吉田新田、山王、山王新田、大倉大倉新田、居宿等の部落より成り、中之口川の堤防に倚り、面積〇・九四四方里人口四千九百人である。

北越雜記によれば、

味方村は村上領にて、三條陣屋の支配下とす、此村は四近皆彌彥庄と稱するに、獨り大槻庄と稱す、

と記載される。村內に實盛と字する畑ありて地中より瓦器類を掘出すこと屢々なれども、その由來は詳かでない。また大字吉江には、上杉家の臣、中條氏の一門吉江家の舊墟と傳へられるものがある。寺院は圓性寺、高念寺、西源寺、常敬寺照嚴寺、法順寺、圓德寺、願信寺、善了寺等がある。

また味方鄕用排水改良事務所、味方郵便局、七穗圖書館、味方圖書館、產業組合などがある。

四ッ合村

白根町と本郡白濱との中間に介在し、早通川の水量豐富なる河川縱横に通じ、且又所々に湛水池を有し、千餘町歩の水田に對する灌漑は充分である。

古くは四ッ郷屋と稱され、鎧潟の東北にあたる。横戸、山口新田、熊谷ほか十五部落を併せて成り、面積一方里、人家は概ね縣道筋または諸川の堤丘上に建てられる。越後線曾根驛へ約一里、交通の便は惡くはない。

村には村立御成婚記念四ッ合圖書館、四ッ合信用組合、大正購買組合のほか各種團體の組織を見、いづれも活潑なる活動を展開して成績良好である。小學校では勤勞愛好の精神鼓吹につとめ、郷土の實情に立脚した各種施設大いに見るべきものがある。

なほ村内寺院には、嚴念寺、長禪寺、法讃寺、善養寺、西八寺、西念寺などがある。

大原村

本村は、茨島、國見、今井、大曾根、新飯田潟上新田、新飯田潟下新田、下大原、番屋、上大原等の部落より成り、面積〇・五三三方里、村内一般に低濕の地にして水田多く水を湛ふ。いはゆる潟端低濕地の南端に位置し、漆山村に隣接する。人口約二千五百人。

明治三十五年一月、共和村と潟前村とを合併し大原村と稱したので、村内水田五百數十町歩にのぼり、米穀を以て重要物産となす。

縣道東西に通じ、白根町及び卷町へはバスの便がある。

村内には私立癸亥圖書館、産業組合、眞言宗長周寺、同行德寺などあり、村民は概して、質實勤勉、社會奉公の念に甚だ篤い。

今次支那事變に對しても、一村一丸となつて克くその責務を果し、貯蓄の實行勤勞奉仕等、特に良成績である。

月潟村

本村は創始以來、實に八百年の歴史を閲してゐるが、併しこれが記錄を明かにすることは出來ない。何人が創始したかを詳かにしてゐないが、中世以降、月潟村と稱したのである。

永祿年間のことか、信濃の國より阿部九左衞門といふものがこの地に移住し來つて、當時の荒蕪地を開發したと傳へられてゐる。享保二年、村上領四萬石を高崎、村上の二藩に分つにあたり、本村外十四ヶ村を釣寄組と稱した。

明治初年、廢藩置縣と共に新潟縣の管轄となり、同十二年の郡區改正に際し、本村十四ヶ村を川前組と稱して西蒲原郡に屬したのである。同二十二年町村制實施にあたり西萱場及び大別當村と合して秋津村と稱し、同三十九年四月一日、四通村、中合村とを併合して月潟村と改稱今日に至つてゐる。時に大橋養作氏を事務取扱者となし、同年八月曾山志計雄氏

を初代村長に推し、續いて市島熊治、青柳良太郎氏を經て、曾山毅八郎氏を現村長に仰いでゐる。

本村の戸數は六百餘戸、人口約四千人をかぞへ、米の外に梨、種煎餅、飴、笈笠、大別當鎌などを産し、何れも天下に嘖々たる名聲を博してゐる。

本村は中之口川に瀕し、年々田畑の水害多く、生活の道が立ちがたいところから、同村の農角兵衞といふものがこれを憂ひ、子供に獅子舞をさして、農業の餘暇に諸國を廻り勸進せしめたが、これを越後獅子舞の、元祖とするといはれてゐる。

道上村

郡の中央、鎧潟の東南方に在り、蒲原平野の平坦地にして、道上、福島、河間三ッ門、打越、牧ヶ島の六大字を合して成る農村である。各部落は所々に點在し四時典型的な農村風景を現出する。

面積〇・五九三方里、人口二千八百餘人を有し、漆山村を通じて西は卷町に連り、卷町まで二里、白根町へ一里餘、共にバスの便がある。

米の産額多く、養蠶がこれに次ぎ、近時農業經營の改善、米作の統制、金肥の節約、副業奬勵等に良好な成績を擧げ、他の模範となつてゐる。

教育方面に於ても常に新時代に適應するやう、諸施設を改善し、道上尋常高等(七學級、打越尋常(三學級)の二小學校と青年學校とを有し、青年團、在郷軍人分會その他の社會教化諸團體と共に活潑な活動を展開してゐる。社寺は村社宇智神社ほか二ヶ寺である。

松長村

蒲原平野中央部の農村にして、西方は大通川を挾んで米納津村と界し、長所、館野池、大嘉新、館野、松橋、長渡、眞木、羽黒、姥島の諸部落より成り、四邊は廣漠たる沃野である。

明治二十二年町村制施行、同三十四年隣接加奈居村を合併して、面積〇・五三七方里となつた。彌彦線燕驛へ一里半、バスの便がある。産物として第一が米で他に農産物及び手工業的なものが僅少であるが、別に見るべきものはない。各戸に一本以上の柿の木のあることは本村の一大特色である。

松長東尋常(三學級)、松永西尋常高等(五學級)の二小學校と青年學校とは、成績よく、就學率も良好である。本村の社寺は無格社十五社、綠芳寺、專精寺、專德寺、久昌寺がかぞへられる。

小中川村

郡の東南端に位し、中之口川の堤防により中蒲原郡新飯田村と相對する。小古津新、又新、二階堂、勘新ほか十一部落より成り、面積は〇・六四二方里ある。

古來米繭の生産と消長を共にせる農村にして、この二つが村内の最重要物産である。産業組合、村農會等では、常に米繭の增産と品質改善に努力を拂ひ、村民

また一致協力し、これが達成に努力しつつある。彌彦線燕驛へは一里、バスの便がある。

教育機關の擴充は村有力者の多年の宿望で、小學校は勿論、在郷軍人分會、男女青年團、村教育會等に對する補助額は相當多額に上つてゐる。村民も概して教育に理解深い。

村内社寺は兒木神社、重蓮寺、正定寺福泉寺、寶泉寺、萬福寺等である。

小吉村

中之口川の左岸に位し、中蒲原郡曾根村と相對す。往時はしば〳〵中之口川の氾濫に遭遇し、耕圃地は皆原野荒地と化せしも、村民の努力により、今日の美田を見るに至つた。

對岸に國道あり、白根町及び三條市へはバスの便がある。高野宮、長場、浦潟新、東中、六分、門田、東船越、針ヶ曾根等の部落を以て鳴り、面積〇・五〇四方里である。水田四百七十餘町歩、畑地百餘町歩を有し、村民は概ね農耕の業に從ひ、米作が最も多い。養蠶組合、畜産組合の奬勵、低利資金の借替等、勸業施設よく整ひ、土木工事も近來頓に目覺ましく、殊に銃後施設としての出征軍人遺家族慰問援護は完全である。

村社寺院には圓明寺、淨源寺、新光寺名願寺、得淨寺等がある。

小池村

信濃川の北岸に位し、中之口川の分流する所である。村誌に

福嶺庄道金は萬年年間中之口の河口を疏通したる地とす、中之口は初め須頃村に分派したりしが、水駛走せざるを以て更にその西方なる道金の村内を穿ち通水せり、即ち今の中之口是也

と見える。

面積約〇・五方里、生産物の主なるものは米、麥、大小豆等の農産及び農具器械類で、稻扱、萬石、唐箕等は本村の特産である。越後線地蔵堂驛、彌彦線燕驛及び三條市へ一里乃至二里、いづれもバスの便がある。

社寺は諏訪神社ほか十五社、安了寺、西福寺、至德寺、淨宮寺、極成寺等あり安了寺の藤は縣下に名高い。教育機關としては小學校二、青年學校を有し、就學率は良好である。水利組合、農會、産業組合は特に優良團體といはれる。

島上村

信濃川の幹流を前にし、川中島の頭首に當り、洪水の時、奔流の激突地にして明治二十九年の如き大水害の惧れありしが、治水工事完成して後は、憂患は全く一掃せられた。

柏崎風土記によれば、本村横田は信濃川堤防に多數の埋樋を設け、灌漑の水を引入れたことが出てゐる。明治四十四年町村合併の際、舊笈砂、熊麥、横田の三ヶ村を合同したもので、面積〇・七七方里を有す。

生産は殆ど農産に限られ、米、大根、

馬鈴薯、胡瓜、甘藷、濱栄等が多い。金融は産業組合が主となり、最近、貯蓄奬勵の結果、その成績良好である。なほ組合としては養鶏、園藝、副業各組合があり、いづれも相當の好成績である。地蔵堂に町接するが故に交通至便だ。寺院は因德寺、長宗寺、清蔵寺、本覺寺、西敬寺ほか三ヶ寺をかぞへる。

南蒲原郡

位置・地勢 横に廣く、縱の短かい米の越後の眞ン中に位置した南蒲原郡は澎湃とした日本海を距る西方四里、東は福島縣南會津郡並に本縣北魚沼、東蒲原の二郡に連接し、西は千歳不凍の信濃川と中之口川を隔てゝ西蒲原、三島の二郡につゞき、南は古志郡、北は中蒲原郡に境して、東西十四里、南北十二里、面積五十方里、人口十一萬七千六百人をかぞへる。

河川には刈谷田川、國境粟ヶ岳の朽葉の下を潛つた五十嵐川の清流あり、信濃川は北に向つて郡の西端を流れ、その他中之口川、加茂川、下條川、猿橋川、五社川の諸川縱横に走つてゐる。

郡の東端部には守門、駒ヶ嶽、鞍掛、閼見、丸倉、粟ヶ岳の聳ゆる山の波が、緑に高く、地勢自ら二分されて、山間部は植林畜産に適し、平坦部は所謂蒲原平野に屬してゐる。

沿革 かうした南蒲原郡は古より越後に屬し蒲原郡の一端に編入されてゐた。その開闢は遠く、垂仁天皇第八皇子五十日帶日子命が越君となり玉ひ、越後の國に下向し、初め魚沼地方から漸次本郡に來玉ひ、飯田に御住居を營んで、沼澤不毛の地を開墾し、庶民に耕耘の業を勸め給ひてより、田圃大いに拓けて沃野遠く連り、當時下沼と稱した不毛の地は變じて良田佳圃となり、總稱して下田と呼ぶやうになつた。近年に至るまで五十嵐川沿岸一帶の地は下田郷と呼ばれた。

和名抄郷名には青海、小伏、勇禮の三郷があるが、青海は今の加茂町、小伏は大西村、勇禮は井栗村附近一帶の總稱であつた。莊園の制度を施行された時、大槻莊(三條市附近)、青海莊(加茂町邊)、大西莊(大面村邊)の各莊に分たれた。

王政維新の後、明治十二年四月、郡區改正によつて蒲原郡より分裂して南蒲原郡となつた。

區劃 分裂獨立當時の町村數は三町二百六十八ヶ村を有したが、明治二十二年三月自治制の發布に基づいて町村を分合廢置し、四町五十九ヶ村となり、更に三十四年にその區域を改正して四町十八ヶ村としたが、その後三條町に市制が施行されたり、村が合併されたりして、現在は左の三町十四ヶ村である。

町 加茂、今、見附。

村 井栗、大崎、下條、田上、大島、長澤、森町、鷹峰、本成寺、福島、大面

新潟、萬卷、中之島。

畜　業　郡内住民の過半數は農民にして、生産總額二千六百二十萬圓の中九百五十萬圓は農産物で、別に工産の千四百八十萬圓を除けば、郡内第一の産業である。その他では蠶糸類四十萬圓、畜産類十八萬圓、林産九十萬圓、鑛産四十萬圓があり、水産は記するに足りない。

農産の第一は米で、次が蔬菜、大豆、果實、麥の順である。また養蠶は副業中の首位にあり、下田郷一帯の地方には楮の産あり、坂井、中之島、福島方面は大麻の産地である。遠く文化年間より大麻は栽培され、文久年間より漸く隆盛となつたのである。

郡内養蠶の嚆矢は鹿峠村で、今より二百年前すでにこれを副業として飼育し自家用に供したといふ。その後安永年間には見附町で、天保年間には大崎村で行はれ、蠶糸業は漸時盛んになつた。

農業もさることながら、南蒲原郡は工産地として有名だ。工産、特に織物地である。殊に見附織物の名は天下に冠たるもので、安政の頃よりすでに結城木綿の産地として名高かつた。また加茂の羽二重、木綿縞も産額が多い。

勝地古蹟　前は大川うしろは深山、石の唐櫃で出場がない、の俚謠で有名な笠堀の三溪をはじめ、眞生ヶ池、八木ヶ鼻、五十嵐神社、青海神社、見付、柳橋今町の各古戦場、田上鑛泉、加法寺温泉矢田鑛泉、四十八地蔵、十八阿彌陀、三十三觀音札所、五十嵐城址、大面城址、月岡城址、護摩堂山城址、和田城址、見附城址、高城城址、池殿館跡などがある

加　茂　町

信濃川支流加茂川の兩岸に跨り、人家稠密にして、産業の盛況縣下有數の地と稱せられる。萬葉集に

天離る鄙はあれど水鳥の鳴は善き里加茂山と名づけてあるも、其郷を圍める御山、賀毛河と人の渡るも其山の帶にせる川、然れこそ我皇神の宮柱太敷き立てれ、水鳥の鳴は佳き郷、内日朝都おもほれ山の名川の名

と嘆美しあるはこの地のことである。古くは青海と稱し、和名抄に、越後國蒲原郡青海郡とある地である。堀河天皇の寛治四年、青海郡内石河庄公田四十町を賀茂上下兩社に御供用として奉られ、次で賀茂兩社を延喜式内青海神社境内に奉祀した爲め、いつしか、加茂と改るに至つた。慶長三年新發田藩の所領となり、寛政元年幕府直領に移り、弘化四年桑長藩の預り地となつた。古來北陸街道に沿ふ名邑で、信越線開通後は、近郷物資の集散町となり、郡内第一の繁華地である。

由來機業の盛んな地で、加茂縞及び羽二重の産地として著聞し、近年は生絹及び巾織物を出す縣下人絹織物の先驅地である。また箪笥、建具、澁紙、白玉粉、瓦等、工場組織を以て製造し、以上のほかに絣結城、マンガン絣、うどん、マカロニーの産も尠なくない。

官公衙學校並に諸團體には、警察署、縣檢出織物檢査所支所、加茂木工作業所

縣穀物檢査所出張所、區裁判所出張所、郵便、縣立加茂農林學校、青年學校教員養成所、加茂圖書館、養德文庫、實業協會、第四銀行支店、越後輸出織物販賣利組合、加茂信用組合、加茂織物同業組合郡酒造組合、普通水利組合、町農會等があり、名所舊蹟としては縣社青海神社、村社長瀬神社、長福寺古戦場、加茂次郎義綱墓、大旃峠、矢留杉、加茂新田大池その他がある。

今　町

今、東西一里、南北一里十八町、面積九百十二町八反歩を有する本町は、幕府時代は新發田藩主溝口氏の領するところであつた。寛永の頃に至り、これより先き三島郡寺泊町に漂着して居住せる羽後國酒田町の漁民十數名が轉住し來り、今の橋場町の地に家居して開墾に從事したといひ傳へられてゐる。後地名の新田を上下に分ち、上新田下新田と稱したが、寛文の頃に至つて下新田を今町新田と改稱したのである。

延寶六年坂井道を築いて大に交通に便し、三條方面への通路は字新町より刈谷田川に沿ひ、今の安田、丸山などを經たものであるとされてゐる。爾來幾度か變遷を重ねて今町新田は漸次發展して市街地となり、遂に農村部落たる上新田と分離したものといはれてゐる。

本町の戸數は一千二百、人口六千六百餘、農を最とし、商と工とに從事するもの多く、工産物の筆頭は毛筆で、年産約三十萬本、その他醬油、酒、人絹織物、燒酎、味噌等を産してゐる。

本町役場は町長一、助役一、收入役一、學務委員九、區長二四、書記六、屋二めつて、村行政が處理されてゐる。各種の團體としては在郷軍人分會、尙武會、戰友會、海軍協會、國防婦人會、分會後援婦人會、青年學校後援會、教育會、青年會、婦人會、處女會、愛國婦人會、社會事業助成會等が設けられ、その何れもが職分に對して忠實なる働きをなしてゐる村社二、無格社九、寺院五あり、住民は質朴熱心、そして崇祖敬神の念に篤いものがある。

見附町

越後古代の地圖によると、本町は「三付」の文字を以て表示されてゐる。有史以前(即ち約三千年)すでに先住民族の有力な活動舞臺であつたことは、隣接の古志郡北谷村大字耳取に石器時代の遺蹟があり、また出雲神社の變形たる素盞嗚尊の大蛇退治の傳說や、本町觀音山で石器を拾つた人のあるなどによつて、それが立證される。

本町は平安朝時代には蒲原の勇禮郷と古志の久原郷とに屬し、鎌倉幕府時代には大面庄に屬してゐたやうである。そして南北朝時代には北軍の勢力範圍に於かれ、宇町幕府時代には上杉氏の領有となり、戰國時代に入つては長尾爲景の領地となり、元和年間村上藩主堀丹後守直寄の所領となり、寛永年間二男丹後守直時

遺領を繼ぎ、安田庄三萬石城主となり、その子丹波守（後ち丹後守）直吉に傳へた。爾來その子孫の村松藩主の領有に屬して明治に傳へ、同二十二年の町村制施行と共に見附町と改稱して現在に及んでゐる。

廣袤東西八・一粁、南北四・一粁、面積一九・五平方粁を有し、東南は長澤村に、東北は大面村に、北西は新潟村に、西は葛卷村に、それ〳〵連接し、西南は刈谷田川を境して古志郡北谷村、同上北谷村、同下蘆谷村に對してゐる。

本町の行政區數は五二、戸數二千九百戸、人口約一萬五十五百人、商業を營むものを主位に、工業、農業等に從事し、小學校の外に見附青年學校、町立高等女學校、町立高等實踐女學校、幼稚園、圖書館の設けがあり、神社一五（うち村社二）、寺院一二がある。

名所舊蹟には　明治天皇行在所、新田公園、觀音山の展望、城山城址、杉澤寺の櫻などがある。

井栗村

當村の起源については、しかとした正史の據るべきものはないが、今より一千餘年前、既に一の部落をなしてゐたと、いひ傳へられてゐる。

現在は井栗、塚野目、大宮新田、鶴田下谷地、西潟、北野新田、白山新田、須戸新田、柳場新田、柳川新田、三貫地新田の舊村を大字となして、一村をなしてゐる。戸數五百八十餘戸、人口四千二百餘人を有し、多くは農を生業としてゐる。村社一、無格社一二、寺院は六。

官公署には井栗村役場、井栗郵便局、井栗駐在所があり、團體には井栗村農會産業組合、在鄕軍人分會、青年會、婦人會などの設けがある。

一村の産業方面に活躍すると同時に、非常時下に處して、銃後の護りを堅うしつゝある。

崎村

郡の北西部、三條市の東南にあり、五十嵐川の東岸を占め、全村概ね耕圃山地相半し、東半は丘陵蜿亙して山林原野となり、西北面は開けて越後平野に連り耕田穰々としてゐる。東大崎、西大崎、中新、籠場、三竹、下坂井、北入藏ほか二大字より成り、面積一・四八六方里、人口五千七百人である。

大崎は舊庄保の號名である。これは今三條八幡宮の金口（徑一尺二寸）に誌してあるの銘に、

奉納大崎保八幡宮御寶前文明三卯年願主新保盛秀

とある。

竹林が多くて筍の産出あり、また竹材が容易に得られるところから、籠笊、竹行李、蠶籠などの製造行はれ、最近は藝術的な風俗人形、竹塗等が研究製作されてゐる。

本村はこれを大崎並に保内の二學區に分ち、學區毎に小學校を設置する。修養及び社會教育團體は活動活潑にして、在

鄕軍人分會、教育會、男女青年團、婦人會等の緊密なる聯繫の下に、銃後の援護も先づ滿點である。

麻布谷鑛泉場、下坂井鑛泉あり、共に消化器病、貧血症に特効がある。神社は中山神社をはじめ、八幡神社、神明社等十數社を有し、寺院には永明寺、西福寺寶藏寺他三ヶ寺がある。

下條村

郡の東部に位し、加茂町の西に連り、南に高館山聳え、地域東西に狹く、南北に伸び、その北端は信濃川に至る。全面積の三分の二は山地で、大字天神林のみは越後平野の平坦地を占める。

下條、天神林の二大字より成り、略風土記を按ずるに、

加茂下條氏は越後新發田の一流にて、下三條三郎重繼を祖先とす、ついで上杉景勝の頃に下條駿河守忠親あり。

と見える。村内西光寺には加茂次郎義綱の墓と傳ふるものがある。

納税成績の良好なことは、全國優良四十ヶ村の一に數へられ、二十年繼續優秀の表彰も受げてゐる。村内消防組は全部公設で、加茂署管内他に類を見ない。これを本村の二大特色とする。村民の政黨的色彩は多少見られるが、村政上に露骨にあらはれる程ではなく、一概に思想善良といひ得る。教育も順調に發達し、小學校は一校、冬季のみ分教場を設けて、兒童の安全と便を圖つてゐる。交通は信越線加茂驛へ數町にして便利である。

主要産物は米、麥、里芋、大根、馬鈴薯、蒟子、藝苔等の農産物が最も多く、これに次では杉、松、桐等の木材、副業には機業が行はれ、藁細工品の製造並に養蠶も盛んである。

田上村

郡の最北端に位し、中蒲原郡矢代田村に隣接する。西方は信濃川に臨み、土地平坦にして、大字保明は加茂川の信濃川と合流する地點にあり、東方にある田上山は同地方火山岩脈の中央を占めて石材を産出する。地勢南部は丘陵にして稍々北西に傾斜して蒲原平野につゞき、信濃川、加茂川流域は地味肥沃にして田圃よく拓けてゐる。村を分ちて羽生田、田上千刈新田、吉田新田、川船河、坂田ほか六大字とし、面積二・〇七八方里、信越本線羽生田驛を有し、新潟市へ六里二十五町、新發田町へ十里、三條市へ二里三十二町、各鐵道または縣道によつて連絡し、村松町へはバスが通つてゐる。交通は至便だ。

大字羽生田には延喜式蒲原郡土生田神社がある。字湯川には石腦油の天然噴出井がある。了玄庵の繋ぎ榧は越後七不思議の一にかぞへる。羽生田驛の北一里、了玄庵境内にして、當榧は枝の兩假に生ずる葉の葉面表裏反轉して、一見表面の枝と裏面の枝と接する如くして、外觀頗る奇異である。羽生田の延命地藏も縣下に有名である。

産物は米を第一とし、作付反別は年々

増加し、品質優良を以て聞え、米に次では麥、大豆の栽培が多く、副業としては養蠶、養鷄、養豚が盛んである。また石材、瓦等も產す。

大島村

本村は郡の北端、信濃川の流域にあり地勢は大體平坦であるが、土地高低の差多く、水路また曲折せるため、從來排水の便が悪かつたが、近來は設備完成して耕地の開拓は全村に普及してゐる。信濃川と中之口川との中間岬角狀の地にして須頃島とも呼び、文字通り川中島ともいふべき地で、村名もまたその地形より起つたものであらう。三條市の西北に當り下須頃、上須頃、井土卷、大島ほか三大字を含み、面積〇・七四四方里、凡て耕田桑地より成る一村である。

三條市及び燕町との中間にあり、いづれもバスの便を有し、交通狀態は良好である。住民は殆ど農を以て立ち、主產物は米、麥、大小豆等にして、近年、園藝作物も大いに發達を遂げ、副業としては養蠶、草鞋、二子繩製造等が比較的に多い。各種團體はいづれも見るべき成績を擧げてゐる。

長澤村

當村は郡の東南に位置を占めてゐる。東は五十嵐川を隔てゝ鹿峠村と相對し、西に見附町、大面村、本成寺村あり、南は森町村と古志郡下鹽谷村に接し、北は大崎村に連つてゐる。

東西二里餘、南北一里餘、その總面積は約二方里に達する。そして當村の地形は殆んど三角形で、東方五十嵐に沿ひ、南北西の三面は山岳起伏相連り、土地西より東に傾斜し、川岸より西方に向つて耕地、實地の平坦地あるも、全面積の約五分の一に過ぎない。

縣道三條大江線は當村の東部を貫通し乘合自動車各地に通じて至便を極める。縣道村松見附線は東西に通じ、荻堀に於て交叉し、長澤村尾線は長澤より大面を經て栃尾町に至る里道は縱横に各部落及び耕地間に通じ、東西の交通は自在である。鐵道彌彥長澤線は、大字荻堀まで通じ、人畜の交通、貨物の運輸頗る便、乘合自動車は森町村まで通じてゐる。

當村は元和元年以來、村松藩主の管領地だつたが、明治二年二月新發田藩主の管領に移り、同三年三月廢藩置縣によつて新潟縣に屬したものである。同二十二年四月町村制實施により笹岡、檜山、花關、中ノ原の六大字を笹岡村荻堀、原、桑切、笹卷、大澤、長澤、駒込、廣手、大平の九大字を長堀村、上大浦、馬場下大浦の三大字を大浦村高屋敷、瀧谷、島潟、福岡、高岡の五大字を高島村と稱し同三十四年十一月、以上の四ヶ村を合併して長澤村と稱し、現在に及んでゐる。

戸數現在九百餘、人口五千五百餘、主として農を生業となしてゐる。小學校の外に青年學校あり、村社一、無格社二二寺院數六、各種團體には村農會、在鄕軍人分會、男子青年團、女子青年團、婦人

會及び國防婦人會、養蠶實行組合、緬羊養豚、養狸、養兎等の各組合がある。

森町村

本村は東西十里、南北三里、面積約十三方里を擁し、長澤村、鹿峠村、古志郡上鹽谷村、福島縣南會津郡伊北村などに隣接してゐる。

本村は一千年以前に部落をなしてゐたと傳へられてゐるが、その沿革等は詳かでない。明治維新前は村松藩主堀氏の采邑であつた。廢藩置縣と共に新潟縣の所轄となり、行政區劃を改めて大小區制が布かれ、森町組と稱し、第十八大區小七區となつた。同十二年大小區制が廢されて郡區制となり、戸長役場を一村或は二三ヶ村に置かれたが、同十七年八月その區域を擴張し、吉ヶ平以下の八ヶ村を合併し、牛野尾外七ヶ村戸長役場を牛野尾に、栗山以下の八ヶ村を合併し、北五百川外七ヶ村戸長役場を北五百川に置き、森町、田屋の二ヶ村は飯田村外七ヶ村戸長役場に、棚鯖外三ヶ村は笹岡村外十ヶ村戸長役場に屬した。

現在の森町村は吉ヶ平外二十一の大字から成り、戸數一千餘戸、人口五千八百餘人をかぞへ、殆んど農を以て生業としてゐる。產物は米、木炭、木材、砥石などで、郵便局、營林署官舍、部長派出所、巡査駐在所、軍人分會、教育會、青年會、婦人會等の設備がある。

なほ本村の名勝地としては八木ヶ鼻、笠堀の橋、吉ヶ平の大池、雨生ヶ池、八木鑛泉などがある。

鹿峠村

五十嵐川の東岸に在りて長澤村と相對し、東南北の三面には青山を負ひ、地勢高燥である。

大字鹿峠ほか十二部落より成り、面積二・七九四方里。往昔、下內鄕または五十鄕と稱し、郡の東半部を占め、他と觸立した一區をなしてゐた地域の內で、現在、東西二里、南北一里八町の廣袤を有し、東北より西部にかけて駒ヶ嶽の連峰袴腰の山脈が連亙し、河川は五十嵐川、鹿熊川の二川があるが、鹿熊川は夏期河水涸渴して舟運の杜絕することが往々である。

重要物產を擧げれば、米、大豆、甘藷馬鈴薯、大根、靑芋、漬菜等の農產物が主位で、副業としての養蠶、葡萄栽培も多く、林業として木炭、薪炭材、杉材、桐材あり、この他鮭、鱒、鮎等の水產物も擧げられ、養鷄、養豚も近年ますます旺んになつて來た。

本成寺村

當村は郡の西南部に位し、東は長澤村西は福島村、南は大面村に接し、北は三條市、大崎村に連つてゐる。

鐵道信越本線は、村の中央を南北に貫通し、西端には國道第九號線あり、東部山手に沿ひ縣道加茂見附線、中央平坦部には縣道三條見附線あり、運輸交通に極めて便利である。

當村の起源については、あまり詳細に知ることは出來ないが、明治初年大小區制の行はるゝや、第十七大區一小區に屬し、同二十二年町村制の實施に際し金子村、槻田村、本成村を構成し、同三十四年一月町村合併により右三村全區域を以て本成寺村を組織したのである。のち大正十三年の一月一日、三條町と境界變更の結果、大字西本成寺、四日町、曲淵、新保の一部を割いて三條町に編入し、現在の字數は十六ケにして、村役場を大字片口地内に置く。

戸數を百七十餘戸、人口五千七百餘、農を主業となして生計を立てゝゐる。産業としては米を最なるものとし、養蠶、養鶏、養豚などが旺んである。

福島村

郡の西北部に位し、東は三條市につゞき、西は坂井村及び今町に、南は大面村に、北は刈谷田川、信濃川を境して西蒲原郡に連つてゐる。全村越後平野の沃野にして、古來米繭の生産地として三條領内の要地といはれ、灌漑頗るよく、惠まれたる農村である。三條驛へ一里半、バスの便ありて交通も便利である。

行政區劃は新堀、東光寺、若宮新田、一ッ屋敷、渡前ほか十五大字に分れ、面積一・四八四方里を占め、人口は六千六百人である。主要産物は前記米繭のほか麥、大豆、果實、蔬菜類の農産物が擧げられ、織物、養蠶、その他副業工産物がこれに次ぐ。

諸團體には村農會、教育會、尚武會、在郷軍人分會、男女青年團、産業組合等あり、村内鎮座の神社は二十六社、寺院は六ケ寺である。勤王家片桐省介は本村の出身である。

大面村

三條市の西南二里の地を占め、東半は丘陵性にして、西部は蒲原平野の耕地となり、水田相[illegible]く。明治三十四年、從前の大潟村及び帶織村を合併して成る一村で、東西二里一町、南北一里四町、面積一・四三一方里を有す。

大面とは舊庄名である。鐵道、國道、縣道を一村に集めたる觀あり、交通の便頗るよく、見附町、今町及び三條市の中間に位し、將來大いに發展の可能性を有してゐる。村内には穀物檢査所出張所、郵便局、帶織驛有り、また高安坂の古戰場、村社鹿島神社、日枝神社、石動神社石油採掘坑、鱗泉浴場等遊覽の地も尠なくない。

新潟村

信越沿線の地にして、今町の東に隣する。大字小栗山、新潟、指出、芝野、江向新田、片桐、梅田、下島等より成り、面積〇・五九一方里にして人口約二千九百人をかぞへ、大字小栗山は本村東部にあり、丘陵を負ふてゐるが、その他の部落は越後平野の低平地にある。

帶織と見附町の中間に當り、信越線見附驛へ半里、縣道通過し、三條市及び見

附町へはバスが通ひ、交通の便頗る良好である。大字小栗山には當國第十七番の觀音堂あり、庶民の信仰が篤い。維新史料によれば、本村もまた戊辰戰當時は東西兩軍亂戰の地であつた。

産物は米、繭、石油を以て主たるものとし、村内には教明寺、淨恩寺、淨土寺天德寺、明仁寺、不動院等の寺院あり、また本村は勤王家として有名な大橋一藏を生んだ村である。

葛巻村

當村は舊幕時代には、永く村松藩主堀氏の所領だつたが、明治元年水原民政局の管轄となり、同二年また村松藩に隷し廢藩置縣後新潟縣に屬した。同二十二年町村制の實施と同時に葛巻、傍所、鹿熊青木、山吉、連水、反田、北野、加坪川福島、柳橋、市野坪の舊十二ケ村が合併して葛巻村と改稱、今日に至つた。

東に見附町、西に刈谷田川を界して中之島村、南に古志郡新組村、北に今町及び新潟村に隣接してゐる。東西四・三六軒、南北四・九六軒、面積一二・二平方軒を占め、戸數約五百、人口三千四百餘を擁する農村である。

當村には特に大字福島及び附近大字の經營にかゝる「福島農繁托兒所」の設けがあり、春秋二季の農繁期間、約一ケ月間開設、農村のために貢獻してゐる。

中之島村

當村は郡の西南に位置し、外廓は河川にて圍まれてゐる。即ち東部は刈谷田川を隔てゝ今町、葛巻村に對し、南西部は猿橋川を境して古志郡黑條村に面し、西部は信濃川を隔てゝ三島郡與板町、大河津村、また北部は西蒲原郡島上村に相對する。從つて當村は地域頗る廣汎にわたつてゐるが、一の丘陵なく、南方より北方に向つて極めて平坦なる緩斜をなし、頗る農耕に便してゐる。

當村々落は外廓を廻る河川に沿つて配在する。即ち東部なる刈谷田川沿岸に存する村落を俗稱小川通り、西南部の猿橋川沿岸の村落を上通り、また西北信濃川沿岸の村落を大川筋と稱する。そしてこれ等の村落を連結する環狀通路は多くは村道にして車間の通行に支障はない。

幹線道路として國道は長岡より大口、灰島、中之島を經て今町、三條に通じ、縣道は三線ある。その一は今町より中之島を經て當村中央部を横斷して中野に於て二線に分たれ、一は三島郡與板町に通じ、一は中條新田を經て西蒲原郡地藏堂町に至る。その二は三條より福島村を經て當村赤沼に至り、當村の北部を横斷して下沼を通じ、中條新田を經て中部横斷線と合して地藏堂町に至る。その三は長岡より押切驛を經て押切思川を通り、見附町に至つてゐるが、これは短距離に過ぎない。

また鐵道は當村南部に押切、中部には約半里の距離に見附驛があり、なほ信濃川、刈谷田川、猿橋川は何れも舟楫の便開け、村内外の交通極めて便利である。

東蒲原郡

位置地勢　本郡は、東は福島縣河沼耶麻の二郡に接し、西は中蒲原、南蒲原の二郡に連り、南は福島縣大沼、南會津の二郡に隣し、北は北蒲原郡と境し、東北の一部が僅かに山形縣西置賜郡と交はる。而して全郡平地少なく、山嶽四方に連亙して千山萬嶽波濤の如く起伏する。その主なる山嶽をあげれば

大日嶽	豐實村	二、一二三米
飯豐山	同	二、一〇五米
烏帽子山	同	一、五七二米
御神樂嶽	西川村	一、三八六米
蒜場山	日出谷村	一、三六三米

等あり、その他高陽山、笠倉山、鍋倉山日本平山、魚止山、駒形山、筆塚山、太郎山、棒掛山などはいづれも千メートル以上の高山である。

而して郡內山嶽は主に火山岩にして山勢嶮峻、山骨を露はし、特に阿賀川峽谷の風光は譬ふるものがない。

阿賀川は會津四郡の諸水を合せ來つて郡の中央を貫流すること十二里、郡內の諸水を受けて西北流して中蒲原、北蒲原二郡の境に入る。

郡內殆ど平地を見ない。

沿革　本郡は昔時小川莊と稱し、明治十二年行政區劃を定められるに當り、一郡となつたもので、皇化に浴せる始めを詳かにせずと雖も、崇神天皇が四道將軍を派遣せられし時、大彥命が當地を巡案し、阿賀川に沿うて本郡を通過せられ御神樂嶽に登つて諸冊二神を奉祀されたのである。

古くは會津侯の領地で、會津より代官を津川に派してゐた。されば明治五年三月には若松縣（後福島縣となる）に屬したが、明治十三年五月、蒲原郡を分けて新潟區及び東西南北中の郡に分けた時五に東蒲原郡と稱し、後、明治十九年五月より新潟縣の管下に移り、以て今日に至つた。津川町ほか十ヶ村に分れる。

町　津川

村　兩鹿瀨、日出谷、豐實、小川、上條、西川、東川、揚川、三川、下條

產業　郡の主產業は林業である。しかし產額からいへば工業が主である。即ち、

工產	九、九五七、〇〇四圓
林產	八四五、八一六圓
農產	七五七、二七〇圓

これに次で鑛產及び蠶絲類あり、總額は千二百萬圓を超える。

津川町

當地は往時小川莊と稱し、會津藩の采地であつた。天正十八年、蒲生氏郷の臣北川土佐が麒麟山狐戾城代となり、元和二年には津川代官所が置かれ、爾來引續き明治維新に及んだ。東西三十二町、南北二十五町、周圍四里十一町の面積を有し人口約四千人である。

本郡第一の市邑地にして、町には警察署、郵便局、區裁判所出張所、小林區署等の官衙をはじめ、郡農會、郡蠶絲同業組合、郡木炭同業組合、郡畜產組合、その他郡の各種團體事務所が置かれ、且つ町の公共團體としては在鄕軍人分會、男女青年團、教育會、婦人會、商業組合、漁業組合、實行組合、赤十字少年團等がある。產物は米を以て第一となし、次で魚類の收穫あり、木材（特に桐材）、蔬菜類、繭、木製品の產多く、附近村落から生產される物資は殆ど全部が當地に集りこゝで取引され、商業も隆盛である。金融機關としては第四銀行、新潟貯蓄銀行各支店、津川信用組合がある。

また縣立津川農林學校も當町にあり、商業青年學校、小學校と共に教育の充實が圖られてゐる。神社には鄕社住吉神社古四王神社鎭座し、遠近に信仰者多く、寺院には京都知恩院派の新善光寺ほか四ヶ寺がある。麒麟山、御小屋館跡、船番所跡、阿賀野川等の名所、舊蹟はその名廣く人口に膾炙する。

兩鹿瀨村

東南北の三方は榛樹山を初め、五百米內外の峰巒連亙し、西方のみ展けて津川町に接してゐる。村の中央を阿賀野川の溪流が蜿曲蛇行して走り、鹿瀨、白鹿瀨の兩部落がその對岸をなす。

會津領の時、鹿瀨組九村と云つたのは今の兩鹿瀨、豐實、日出谷の三ヶ村を總稱したものである。溫故拾要抄には「鎌倉の僧某、昔鹿瀨邑に方八町の地を錢五貫文にて買ひ、多寶寺を草創す、云々」の記事が見える。村內草倉銅山は會津新風土記に依れば、元文四年より銅を採り寛政二年吏員を置いてその事を司らしめ明治維新の際、これを民業に任せ私採を許したといふ。

東西一里、南北二里餘、面積一・八七二方里に及び、米、蕎麥、薪炭、蔬菜、苹果、鮭、鱒、鮎、馬匹を主要物產とし磐越西線鹿瀨驛ありて交通の便は極めて良好である。

日出谷村

本村は往昔より日出谷と呼んだ地方で津川町より松坂峠及び崎嶇一里に涉る越戸峠を通過して東西三里强の地に位置する。廣袤東西二里四町、南北一里三十町にして六部落より成る。

遺文傳說によれば、文治五年佐原十郎左衞門藤連公が會津を賜はりしより始まり、天正十七年伊達家の領となり、翌十八年蒲生氏卿會津に封ぜられてこれに屬し、その後加藤式部少輔、保科宰相、松平若狹守等の支配を受けた。

日出谷驛を距る十八町の中村部落にある觀音堂は、本尊に秘佛聖觀音を安置し大同二年の創草、堂宇は間口三間奥行三間、飛驒匠の建築に係る。德瀨部落に鎭座する白山神社の境內には姥櫻の大樹あり、目通り廻り一丈八尺、廣さ及び高さ各十五間、樹齡凡そ一千年を數へる。ま

た字宮野には長者の住居址あり、時々矢の根石、石器、土器が發掘される。

豐實村

本村は郡の東端に位してゐる。飯豐山を分水嶺とし、西北に面してゐるが、東は山形縣中津川村と福島縣一ノ木村とに境し、西は本郡小川村に、南は福島縣奥川村に、北は北蒲原郡赤谷村に隣り、西南は福島縣群岡村、西北は本郡日出谷村に連つてゐる。

本村の創設年代は明かに知ることは出來ないが、皇紀一千三百七年、孝德天皇の大化三年、蝦夷防禦のため沼垂柵が設けられ、そして津川を東方防禦の分班とせられた當時から、一千三百七十年元明天皇の和銅三年蒲原郡に「五鄕」を置かるゝに至るまでの約七八十年間に、本村の實川が上條村小出牧野、三川村細越、兩鹿瀨村向鹿瀨の部落と共に、郡内屈指の最古の部落として形成されたものであるといはれてゐる

後鳥羽天皇の文治五年源頼朝が奥羽の藤原氏を征伐する時、會津に入りたる當時、戰功あつて佐原義連を會津に封じたので、本村は會津藩に屬し、佐原十部義連の領有となつた。天正十一年蒲生秀郷が會津に封ぜらるゝに及んで、津川町に代官所を置き、寛永二十年保科正之の會津を領すると共に、本村も小川莊鹿瀨組としてこれが支配を受け、會津藩に統治せらるゝことゝなつた。

當時の本村は菱潟村、船渡村、麥生野村、新渡村、馬取村、實川村の六ケ村から成り、明治維新若松縣に屬し、支廳を置かれたが、間もなく出張所に代つた。同八年菱形村と船渡村とが合して菱渡村となり、麥生野村と馬取村と新渡村とを合して麥馬渡村となつた。同九年菱渡村と麥馬渡村と合して豐田村となり、同年福島縣に轉屬して日出谷村、豐田村、實川村、鹿瀨村、向鹿瀨村の五ケ村を以て日出谷村外四ケ村戸長役場を日出谷村に置くことになつた。同十二年の郡區改正と共に東蒲原郡と稱し、同十九年五月、新潟縣に編入せられ、同二十二年町村制實施と共に組合村役場を解散し、豐田村と實川村とを合併して豐實村と改稱、今日に至つてゐる。

廣袤は東西一六、〇〇米、南北一三、〇九〇米で、面積は一四二・四〇方粁である。現在戸數は三百餘、人口は約二千農を業となしてゐる。

小川村

本村は郡の東南端に位し、津川町を距ること一里餘の地で、東西三里十六町、南北二里十三町の面積を有し、縣道若松線に沿ひ、十部落より成る。

舊藩時代には越後より會津城下及びその附近に鹽その他の物貨を運搬する唯一の要路に當つてゐた爲め、住民殆ど全部は荷馬を追つて生計を立てゝ來たが、明治維新後、鐵道の開通と共に輓馬に依る運搬は衰へ、代つて農蠶業が隆盛を呈するに至つた。

されば現時當地の産物として一般に知られるものは、米、大豆、蕎麥、紫蕨、木材、木炭、薪、杉皮、栗、柿、百合、鐵器、馬匹等である。水田は百七十町歩を有し、米は縣の奬勵品種に統一されてゐる。また近時有畜農業が旺んになり、馬、豚、兎等の飼育者は年々增加の傾向を辿つてゐる。

上條村

本村は西方に二倉山カタガリ山の高峰を受けて、その山脚に抱かれ、常浪川の急湍數條ありて溪谷をつくり、耕地に乏しく、村内概ね山林原野である。

往昔、上條谷とは常浪川の山谷一帶を總稱し、本村及び西川、東川の三村を含んでゐた。舊會津領の時は、上條組三十ケ村に分れてゐた。今は兩鄕、拂川、九島、小出の四大字より成り、津川町の南西一里餘にして、東西二里、南西一里餘面積二・三六二方里を占める。

盤越西線津川驛へ二里弱、山間なれば交通は便利でない。住民の多くは農を本業とし、傍ら製炭、製紙を副業とし、現今は養蠶業も相當發達してゐる。

字兩鄕に猪隼人の遺跡石祠があり、その東北部に五ケ塚がある。平塚といふ。小字を設け、木像二體を安置し、優婆尊と稱へる。また九島地内には源頼政の臣渡邊唱丁七の住居したといふ城址があり城山と稱へる。大字拂川にある日光寺は延暦年中、傳敎大師の開基といひ、瀑布巨杉、奇岩見るべきものあり、拂川の景勝として有名である。兩部の瀧は、一は高さ十丈、一は十五丈の二條の白布並び懸るを以て、別に夫婦瀧の稱あり、當國屈指の名瀑である。

西川村

南に御神樂を主峰とする會津國境の分水嶺あり、面積十四方里にして東西一里半、南北十里に及ぶ面積を有すと雖も、概ね原野山林にして、村内を縱貫する室谷川沿岸に僅かの平地點在し、部落も多くこゝに聚る。

往昔、上條谷と稱したる山谷の一部にして、住民は專ら薪炭並に伐採の業に從つてゐるが、米、麥、大豆、粟、蕎麥等の農産物も尠なからず、室谷よりは若干の紫蕨を産し、品質良好なるを以て普通品よりは三四割方高價に賣却出來る名産である。

古來村内は道路險惡であつたが、逐年村道も開鑿され、津川西川線は大正十二年縣道として認定を見、室谷川や常浪川も利用されて交通運輸の便はよい。

名所舊蹟には松坂新路の碑、御生宮峰の洞窟、神谷室谷の穴居時代の遺跡などがある。

東川村

東南の二面は福島縣との分水嶺なる山脈に包圍され、村内到る處山岳重疊し、柴倉川の水源地をなす。部落は山間原野の間に點在し、大字三實分は村の西北なる日山の背後にある。

三寶分、東山、三方、小手茂、七分、大倉等の部落を含み、面積七・三五三方里の大村であるが、山村にして交通に惠まれず、磐越線津川驛までは約三里を要する。

所謂上條谷の一部を成すものにして、傳説に依れば、大字東山の山中に松橋殿なる貴人寓居せる事あり、また中山と云ふ地に高倉宮似似王の遺跡と稱して數多の傍證を擧ぐる者があるが、未だ史家の定説を得ない。

村内には私立東川村青年圖書館、東川産業組合、東山土工森林組合、淨土宗地藏院、眞言宗井龍寺がある。

揚川村

津川町に近き農山村にして、明治十三年戸長役場制度が布かれた當時は、清川西村と共に津川町に組合役場を置いた。古くは小川莊下條組に屬し、舊六ケ村を併せて成り、今の阿賀野川は元は揚川と呼んでゐたに因み揚川村と名づけた。東西三里、南北二里餘。

往古は運送業を營むもの多く、大正二年磐越線の開通後は、農業、製炭、養蠶業が振興を見た。從つて米、木炭、木材薪材、石材、栗、紫蕨、柿、馬匹等は本村の主なる産物で、西の澤には亞鉛鑛、阿賀野川沿岸には石灰を出す。

また阿賀川沿岸は、到るところ風景絶佳にして、岩石亂立し、本尊岩、惠比壽岩、屏風岩、袈裟掛岩等の奇岩あり、懸崖數百尺の岩石突起の間には、老松古杉が趣を添へ、また白米瀧と稱する烈水溪天正の頃まで小田切平六の住居したと傳へる要害山等の古蹟にも富む。また鄕社八幡神社は延曆十二年の創建にして、源義經の筆に成るといふ願文が藏され、大字谷澤には龍耕寺あり、明應元年の創立に係り、古木鬱蒼としてその古きを偲ばしむるに足る。

三川村

阿賀野川上流の北岸に位し、北は飯豐連峰の背嶺を以て北蒲原郡と堺する。村内山丘連亙し、山林原野多く、地勢概して高原性である。村の中央を新谷川が貫流し、その沿岸に僅かながら平地を見、諸部落はこゝに聚つてゐる。村民は概ね農蠶林業に從事する。

新發田、津川間の街道筋に當り、磐越西線白崎驛を有し、山間と雖も交通の便は惡くない。明治四十一年六月、舊綱木村を併せて現區域となり、面積八・八五二方里である。大字岩谷に哀禍鑑戒之碑あり、また平等寺もこの地である。平等寺境内には平維茂の墓及び老杉あり、杉は天然記念物に指定され、境内の藥師堂は特別保護建造物に指定されてゐる。大谷銀山のありし五十澤は、今、内川と改められた。大字綱木は會津風土記にも見える舊い部落である。

下條村

郡の西端に位し、東西三…、南北五里餘、九部落より成り、阿賀野川は村を東

西に貫流し、縣道がこれに沿ひ、部落は更にこれを挾んで點在する。

住民は專ら農業及び山林業を主とし、米、麥、木炭、石材、亞鉛、瑩石、杉皮鐵器、蕎麥、大豆、山百合、紫蕨、柿、繭の産出が多い。養蠶は明治十年頃より發達し、一時郡内第一の盛昌を謳はれたが、今は稍々衰微の傾向にある。村内各所、殊に阿賀野川南岸一帶は美林として知られ、林産物は郡内總額の約五分の一を占めてゐる。

五十島驛の西方に在る村社若松八幡神社は大鶴鶏尊を祭神とし、他に村社三社大神社、同若松神社あり、いづれも古き歴史を有すと傳へられ、寺院は正壽寺、西照寺（僧呑龍の開基）あり、大字石間地内には天正の頃築いたといふ小田切彈正の館址がある。

三島郡

位置地勢　三島郡は殆ど縣の中央に位し、地形南から長く斜に東北に延び、北は大河津分水を隔てゝ西蒲原郡と境し東南は信濃川を隔てゝ南蒲原、古志の二郡に對し、南は北魚沼、西南は刈羽と接し、西北六里は日本海に臨み、遙か佐渡に相對する。面積三百十五方粁餘ある。

地勢概ね平坦で、平地は全面積の三分の二を占めるが、中央には刈羽八石山より發する小木城山脈が起伏し、また高くはないが出雲崎から寺泊邊に連亙する海岸山脈がある。このほか小木城山脈と並走する新城山脈や小木城山脈と海岸山脈をつなぐ分水山脈がある。

その間に渚海、黒川、島崎の諸川は、それら山脈丘谷に發源し、南流して信濃川に、北流して新信濃川に入り、地形自ら北部、中部、南部の三に分れる。

沿革　大國主命が越後に來り、頸城居多の地から海路出雲崎へ來給ひしと傳へられ、寂寞荒凉の日本海に面して出雲崎一帶の海岸も、實は上代越後文化の生みの母胎であり、搖籃でもあつた。これは確かに三島郡の誇とすべきものであらう。石器時代の遺跡も所々に發掘される。

元明天皇の和銅年間に初めて三島郡が置かれたが、今の三島郡は、當時古志郡の一部で、古志郡の文化の中心は出雲崎地方であつた。當時の三島郡は今の刈羽郡の地にあたる。

後醍醐天皇の皇子宗良親王が、出雲崎の地に滯在したひ、當地方の人が王事に奔走したことは有名である。

足利の頃は一定の領主なく、上杉謙信の時、その配下に屬した。豐臣氏より德川氏に至つて、本郡は數藩の管下にあつたのみか、一村にして數藩に分屬するものさへあつた。卽ち、高田藩、長岡藩、村上藩、與板藩、その他、桑名領、上の山領、淀領が入交り、その中に更に公領さへ加はつてゐた。

産業　本郡總生産額は年に約一千萬

間餘にのぼり、生産額の最も多いのは農産で總額の二分の一以上を占め、續いて工産があり、水産はその額あまり多くないが、他郡市に比して多い方で、最も少いのは鑛産である。今、その産額を示せば、

農産	五、六二九、五一二圓
蠶糸類	五二九、三〇五圓
畜産	一三二、七九七圓
林産	三〇七、一〇三圓
水産	三二一、五四三圓
工産	三、〇一四、八七三圓
鑛産	二三二、三七六圓

である。

農産物のうちでも、米、麥、豆類、野菜等が最も多い。米作では大河津を第一に、寺泊、來迎寺、西越、日越等がこれに次ぐ。果樹の栽培はあまり振はないが柿、栗に稍々氣焔を吐いてゐる。

交通 本郡には國道は通つてゐないが、縣道は實に四十有一線に達し、坦として砥の如き道路は四通に達し、殆ど完成してゐると云つてよい。これに伴ふ橋梁も漸次改設せられ、從來の木橋に代るに鐵筋コンクリートの近代式永久的のものとなり交通道路は實に惠まれてゐる。

郡内を通過する鐵道は、國有に信越、越後、魚沼の三線、私設に長岡鐵道の一線がある。信越線は古志郡宮内驛より來り、信濃川を渡つて本郡に入り、來迎寺塚山を經て刈羽郡に去る。その距離僅か二十キロである。越後線も郡内の距離十五キロである。今後、新潟白新線、新潟新發田線の兩線完成の暁は、裏日本縱貫の幹線として、將來大いに期待すべきものがあらう。

千田村には飛行場ありて空の航空に便し、港灣は出雲崎と寺泊の二を有し、共にその入船數は新潟、直江津兩津に次ぐ成績である。

遺跡 神武天皇御東征の業成るや、直ちに天香語山命をこの地に御遣しになつたが、命は今の寺泊野積から彌彦、岩室の邊にかけて農耕漁鹽の業を敎へ給うた。上古文化の中心であつただけに、舊蹟傳說は他郡に比して非常に多い。また寺泊、出雲崎は佐渡へ渡る當時の大事の港であつた。しかも佐渡は流謫の地である。公卿も流されて來たし、名僧も流されて來た。それのみか上皇さへも御遷幸になられた。それに關する舊蹟、口碑の多いこともまた他の及ぶところでない。佐渡が詩の國、歌の國であるとせば、三島は舊蹟、傳說の里である。

關原町

本町は郡のやゝ南部に位置し、東西十三町、南北一里十六町、面積〇・五三八方里を有する人情溫和、醇厚にして勤儉の氣風あり、且つよく協力一致、政黨色を以て事を構へたことがない。

東は日越村に隣り、西は黑川を隔てゝ日吉、宮本の兩村に對してゐる。南は西山の麓に沿つて深才村に連り、山澤丘旱相半する、北は萬頃の田の彼方王寺川村及び日吉村に接し、一度郊外に佇めば小

木の城跡靑巒に摺んじて指呼に迫り、山脈のうねり絶えざる際涯、彌彦の靈峰が遙に霞んでゐる。

本町は興國年中、枇杷島の領主宇佐美越中守孝忠の支配下にあつたが、正平年間宇佐美駿河守定行の領地となり、後ち上杉謙信、同景勝の所領となつた。蓋し「字笹川の郷、白鳥の莊、大積の堡」と稱したのは、この頃に始まつたと傳へられてゐる。

降つて慶長三年來は堀久太郎、松平上總介、酒井左衞門尉、松平伊豫守、松平越後守などの、支配を繼續したが、當時は一望荒凉の地に過ぎなかつた。寛文二年柏崎村枇杷島の人關矢清左衞門といふものの開發によつて、今日の町を生むの基因をなしたのである。天和元年松平越後守伊豫へ配流さるゝに及んで、貞享三年まで御藏入となり、この間天和三年津軽越中守の臣大導寺隼人をして本土一般を檢地せしめた。後ち稻葉丹後守等の所管となり、明治元年王政復古の際は越後守の所轄にあり、同二年再度松平氏の領に復した。同四年柏崎縣の管轄となり、次で新潟縣に轉じ、昭和九年四月一日町制の施行を見るに至つたもので、戶數七百餘、人口三千六百餘を有し、その鬱勃たるの力は、着々として町格の完備にと邁進しつゝある。

脇野町

當町は脇野町、元崎、上岩井、中條、新保、大野、下河根川、瓜生、その他無氏戶の菖蒲新田、烏雲新田、瓜生市郎左衞門新田、瓜生權六新田などが合併から成り、町役場を大字脇野町に置く。

東に古志郡福戶村、下川西村、東北に黑川村、西北に西越村、大津村、南に日吉村、王寺川村がある。東西二十八町餘南北約五十四町、その面積〇・六八九方里を占めてゐる。戶數約七百、人口四千百餘人で、約四百戶は農を本業となしてゐる。

當町の公署その他として圖書館、男子青年會、女子青年會、敎育會、尙武會、軍人分會、婦人會、納稅組合、地主會、農會、耕地整理組合、郵便局、巡査駐在所、停車場、山東耕地整理組合聯合會、女工保護組合、新潟水電株式會社出張所、郡女工保護組合聯合會、帝國在鄕軍人會郡聯合會、株式會社六十九銀行脇野町支店等の設けがある。

與板町

新潟市を距ること十五里、信濃川の西岸に在つて水陸運輸の便に富み、本郡第一の市邑にして、北陸街道と長岡街道の交會地にあたり、全町の商況頗る活潑である。

寛永十一年、長岡城主牧野忠成の二男康成が一萬石の墾田を賜つてこゝに陣屋を置いたが、三世康重の時、元祿十五年信州小諸城へ轉封され、井伊氏これに代つた。その後井伊氏に變遷あり、寶永二年に至り、井伊氏の族直矩與板二萬石を賜はり、この地に陣屋を建てた。文化元

年、城主格に列し、陣屋を修めて城と稱し、以て明治維新に及んだが戊辰の役に東軍與板を攻めた時、五月下旬より爭戰七十日に亙つたといふ。郡制時代には郡役所が置かれた。

町は與板、元與板の二大字より成り、長岡鐵道與板驛及び上與板驛あり、縣道四方に通じ、長岡市、見附町、地藏堂町等へバスの便がある。

面積〇・六五七方里。

神社には鄕社都野神社、無格社一四、寺院は本願寺與板別院ほか十四ヶ寺がある。都野神社の祭神は、筑紫宗像姫で、相殿に息長足姫之大神、譽田別之大神を祀る。都野明神ともいはれ、大津の神社の謂で、代々藩主鎭護の神として祭られ鄕民の崇敬を收めた。例祭は毎年八月十四、五、六の三日間で、境内末社に神明社、金比羅社、菅原社、稻荷社等が鎭座する。村内の妙法寺、三島城址は舊蹟として著聞する。

因に當地は古くは信濃川の水路定まらざるを以て、激流奔騰の入江であり、上下の船の休泊所であつた。依つて大津の莊與板町と記されたのがその初めである。

出雲崎町

郡の西端、日本海に面するところに在り、往昔より北陸街道の一要津として市街を形成した。現に柏崎新潟間の國道通過し、越後鐵道出雲崎驛あり、寺泊、刈羽郡石地町へバスの便がある。

近世、幕府の代官所を置いたところで諸郡散在の公領六萬石を支配した。戊辰役の時には、水戸藩の脫走兵がこゝに屯したけれども、官軍に敗られた。維新に至り、民政局が設けられ、後、柏崎縣より新潟縣管轄となり、明治三十四年町制を施行して今日に至つた。

尼瀨、住吉町、石井町、羽黑町、鳴瀧町、木折町、井鼻、勝見等の大字を含み面積〇・一七五方里である。町には出雲崎築港事務所、出雲崎警察署、長岡區裁判所出張所、出雲崎郵便局、尼瀨郵便局井鼻郵便局、町立出雲崎圖書館、私立敎化文庫などあり、第四、柏崎兩銀行の支店も存し、團體には出雲崎信用組合、雲之浦信用組合、三島郡水產會、出雲崎漁業組合などがある。

一代の奇僧傑僧としてその名聲を傳へられる僧良寛は、この地の出身である。町には寺院が多く、運行寺、圓正寺、圓明院、海圓寺、養泉寺、西方院ほか二十一ヶ寺をかぞへる。明治天皇行在所、良寛堂、尼瀨油田は名所として知られ、尼瀨油田は本邦石油の發祥の地ともいふべきところである。

寺泊町

圓上山麓の西方海岸に在り、市街狹長にして帶を延べたる如く、後方に山陵を負ふ。附近一帶は縣下有數の漁業地として聞える。十數年前築港完成し、爾來船舶は一層輻湊するやうになつた。

佐渡呼べば佐渡も答へん夏の海

と小波が詠んだ如く、寺泊は越佐連絡の

要津にして、また中越の門戸に當つて居り、佐渡ヶ島との間には海底電信が敷設されてゐる。寺泊、白岩、京ヶ入、本山辨才天、川崎ほか十九大字より成り、面積二・四三一方里、橋南谿の東遊記を見るに、

出雲崎より四里東北に寺泊と云ふ所あり此所も頗る繁華の地なり、此寺泊は佐渡へ第一に近き地にて十六里の海上なり、(中略)昔爲家大納言佐渡國配流の時、此寺泊の驛にて數日風を見合せて逗留し給ひける時、此里の遊女初君といふを相知りたりし、初君別を惜みて和歌を詠む。其和歌今に町の中程の南側に石碑に彫付て殘れり、碑面を見れば「物思ひ越路の末の白浪も立歸る日の有とこそきけ遊女初君」とあり

と記され、古來北陸道の要驛にして、順德上皇佐渡御遷幸の砌り宿らせ給へる遺跡あり、また日蓮上人の同じく佐渡配流の時の遺跡もある。その他名勝としては日蓮上人說法十七日に及びしといふ法福寺、鮒、尊菜の名產地たる圓上寺潟、眞言宗の僧弘智法印の自ら乾涸したといふ西生寺内の卽身佛、石器時代の遺物たる二つ塚、アルカリ性食鹽泉の寺泊溫泉圓福寺内の佐藤忠信の墓等がある。

また町には寺泊警察署、縣水產試驗場長岡區裁判所出張所、寺泊郵便局、私立寺泊通俗圖書館、第六十九銀行支店、漁業組合がある。

片貝村

本村は郡の東南端にあり、西北方面は山岳連亙し、北から東南にかけて耕地が拓け、東方は信濃川の流れに沿ひ、交通の便は長岡鐵道が村内を通じて良好なるほか、縣道小千谷與板線が村の稍々西部を走り、また無數の里道が網の目のやうに擴がり、往來頻繁である。

戶數約千二百をかぞへ、人口は六千六百を超える。面積南北二里、東西一里。住民は殆ど農を以て生業とし、產業は一般に活氣あり、殊に村農會の目覺しき活動による裨益は頗る大きい。

村内に村役場あり、高梨尋常高等小學校、片貝尋常小學校、片貝尋常高等小學校、片貝青年學校等の敎育機關を始め、村農會、實業組合、產業組合、郵便局、衛生組合、女工保護會、消防組合、在鄕軍人分會、男女青年團、婦人會が置かれて、また指定村社一を有する。

大字片貝は、明治維新前は松平肥後守の所領であつたが、維新の改革により小千谷民政局支配となつた。また大字高梨はもと牧野備前守の所領たりしところで一時公領にも屬した。大字山屋は夙に片貝に所屬してゐた。明治二十二年、以上三ヶ村を合して自治制を布き、今日の片貝村をつくつたのである。

來迎寺村

信濃川と澁海川の合流點に位し、地勢概して平坦なる沃野である。地形よりすれば北魚沼郡に屬すべき地である。近時信越本線、長岡鐵道及び魚沼線の交會地にあたり、鐵道交通の要路にして、小千谷へはバスも通じてゐる。村名の由來は

佛教に關係あるやうに思はれるが、その詳細は不明である。宮川外新田、浦、道半、突切島、中澤ほか九大字より成り面積一・〇二五方里を占める。官公署及び諸團體には澁海川改修事務所、縣穀物檢査所出張所、浦村、來迎寺兩郵便局、村役場、村農會、在鄉軍人分會、男女青年團、消防組、漁業組合、神谷、來迎寺、繭絲、來迎寺各產業組合等があり、社寺は村社八幡宮、無格社一、安淨寺、慈敬寺、慈光寺、地藏寺、長永寺、朝日寺、本法寺を有す。小學校は來迎寺、神谷各尋高、浦、中野島各尋常四校ある。

塚山村

郡の南端にあり、東南西の三方は山嶽を以て北魚沼郡及び刈羽郡と堺する。澁海川は本村を貫通し、高低少なからざるも沿川には耕地あり、田百七十町歩、畑百五十六町歩を有す。地勢上は古來北魚沼郡に屬すべき地なりと稱されるも、諸種の關係より三島郡に屬し、西谷、東谷塚野山の三大字より成り、面積〇・八七八方里である。

往昔、太田の堡に屬し、多少の變革はあつたが、その區域に變化はない。町村制實施以來今日まで分合なき固有の一村で、また從來納稅の成績及び、產業上に關し表彰されしこと再三に及ぶ郡內の優良村である。

米及び繭の產が多く、村民の多くはこれに生活の基礎を置き、特產として百合の栽培が盛大である。また塚山製糸工場があつて、製糸も本村主要產物の一に數へられる。

信越線の沿線で、村內には塚山驛がある。縣道犬伏線及び原停車場線も村內を走り、自動車の便がある。

村には縣穀物檢査所出張所をはじめ、塚山郵便局、塚山信用組合等あり、社寺は村社八幡神社、眞言宗の寶光院などが擧げられる。

岩塚村

郡の南部に位し、東は來迎寺村、西は大積村及び刈羽郡北條村、南は塚山村並に片貝村、北は深才村等に隣接し、西方には桝潟山脈あり、中央以東は平坦にして蒲原平野に通じ、澁海川は南より北に向つて村の中央を貫流する。

往古、當地は太田莊と云ひ、德川時代に至るまで部落一定しなかつたが、その主なる領主を擧げれば、寬永三年松平越後守領に、天和元年津輕越中守領に、貞享三年稻葉丹後守領に移り、元文六年には公領となり、嘉永元年牧野備中守の支配下に入つた。明治三十四年飯塚と岩田村を併せて岩塚村と稱した。

生產は農產物が最も多く、米、豆類、蔬菜類に次では木製品、繭糸、清酒等がある。なほ近頃は村農會が指導の中心となり緬羊の飼育が奬勵され、その實績すでに見るべきものあり、今後は羊毛加工品に進展せんとしてゐる。

史蹟には桝形城址がある。これは上杉氏の臣甘糟近江守景持の居城にして、今

なほ本丸、二の丸の殘礎がある。勝平城址は建仁年間當郡の守護職飯沼遠江守賴泰の築いたもので、爾來代々の居城となり、その後幾多の兵亂を經、太田兵衛は上岩田五疋屋に住し、勝平を以てその奧城と定めた。また澁海川は昔は四海川といひ、

おぼつかなしらみの川のかはる瀨を
いかなる人の渡りそめけん

と古歌にもうたはれた名所である。

深才村

郡の南部、澁海川左岸に位し、西部は山地をなし、岩積、大積、宮本の諸村に續き、南は澁海川を隔てゝ來迎寺村に、北は關原、日越の二村に、東北は古志郡上川西村に接し、大字本大島は村の北端にあり、信濃川を挾んで長岡市と相對する。上富岡、深澤、親澤、福田ほか七大字を有し、東西約三十二町、南北凡そ三里、面積一・一九八方里あり、西に山を負ひ、東に平地を持つ。

官公署及び諸團體には村役場（上富岡）本大島郵便局、在鄉軍人分會、男女青年團、村農會、信用組合、漁業組合等があり、寺院は阿彌陀寺、圓覺寺、圓超寺、願誓寺、正林寺ほか四ケ寺を數へる。

米を村內第一の產物とし、これに次では繭の生產が頗る多い。長岡鐵道沿線にして、村內に上富岡、深澤、才津、西長岡の四驛を置き、長岡市に接し交通の便良好である。

日越村

深才村の北に接し、桝形山は本村南隅に於て山勢盡き、全村膏沃なる越後平野中に位し、水田五百六十町歩、畑百八十歩を有し、北才津、福山、喜多、石動富安ほか十六字より成り、面積〇・六二二方里である。

往古の所謂才津の地にして、深才村と同じく沖積津野の一部をなす。長岡鐵道は村の南を走つて日越驛及び上除驛を置き、長岡市へはバスが通じる。

產物は米を筆頭に、蔬菜、馬鈴薯、繭等が主要なものである。金融は日越信販購利組合及び日越信用組合を重要機關とし、農家によく利用されてゐる。

小學校は一校、尋常科十二學級、高等科二學級に分れ、出席歩合九八％を示し成績良好である。また村立圖書館が設置され、所藏部數千三百冊、青年男女の讀書慾を滿たすに充分である。

王寺川村

明治二十二年、寺寶、王番田、河根川能上古新田の四部落を以て一村をなし、自治制を施行した。黑川は本村の西南方にて二川に分れ、王子川を東方に流せども、兩者は脇野町の東方に於て再會し、稍々北流して信濃川に入る。字王番田はまた大番に作り、昔、妙法院二品法親王の移り住まはせ給へる地なりといふ。字寺寶は治風に作り、親王の供奉治部卿と云へる人の名より起つたものである。

村は日越川の西につらなり、面積僅か

〇・一八九方里の平坦なる小農村にして長岡鐵道王子川驛あり、縣道は南北に通じ、交通至便である。

村内には村立王寺川圖書館、王寺川産業組合あり、寺院は究竟寺、淨願寺の二寺有し、何れも眞宗である。また儒者青柳剛富は知つてゐても、それが本村出身なることを知る人は少い。

宮本村

郡の南偏り、關原町の西につゞき、大積村の北に並び、西に山嶽ありて一部は刈羽郡との境をなし、北は日吉村に連つてゐる。宮本、堀之内、東方の三大字より成り、面積〇・八三九方里にして、人口約二千六百人をかぞへる。

古來與板及び長岡より柏崎へ通ずる驛道に當るを以て、その名知られ、近時關原及び大積間のバスも運轉され、長岡鐵道關原驛へ一里、村勢の發展頗に顯著なるものがある。大字東方は大積堡の東部の義なりといふ。村内を黒川貫流し、民家はその流域に聚落する。

水田二百四十區町歩、畑地百六十町歩の耕地あり、米及び繭は本村主要物産の首位を占める。村には村立宮本圖書館、宮本産業組合あり、寺院には眞宗長福寺同長明寺、眞言宗不動院、同法明院などがある。

大積村

本村は四圍に山嶽をめぐらし、西南方なる刈羽郡分水界より發する水は宮本川となつて村内を流れる。大、三町田、善田、三島谷、水梨新田、灰下、千本平、田代等の諸部落より成り、面積一・四四三方里にして、有租地は千三百九十町歩あり、耕地は水田二百六十六町歩餘、畑地百四十五町歩に分れる。また山林は約九百六十町歩に上る。戸數四百四十餘、人口千九百人である。

舊大積保の地にして、近時、長岡鐵道を本村より柏崎へ延長する計畫ありしが本村までバス開通のため、一應取止めとなつた。長岡鐵道關原驛へは縣道により凡そ一里半、バスが通ふ。

村民は養蠶業を主とし、米及び繭の産が多い。また村内には大積郵便局、大積産業組合あり、寺院には安養寺、光照寺大日寺を有す。

日吉村

本村は明治十八年下村新科、下村古科を合して島越とし、更に同二十二年町村制實施に際し島越、七日市、雲出の三字を合併して日吉村と改稱、現在に至つたもので、村役場を大字島越に置く。

本村は郡の中央に位し、西部一帯は山脈を以て圍繞し、東部は沃野よく開け、黒川その間を貫流する。北は脇野町、大積の兩村に連り、西北は山脈を隔てゝ西越村及び刈羽郡内郷村に接し、西南は宮本村、東は王寺川、東南は關原町に隣する。縣道與板片貝線に沿うて面積一方里餘にて、一千十二町餘、縣廳より西南七〇・七粁のところに在る。

本村西部一帯の山脈は謂ゆる中央油帯に屬し、明治の初年頃より手掘を以て採掘を試みたるもの十數坑に及んだが、後ち米山石油株式會社機械鑿井を試みてからは、或は藏王、日本、寶田、東西などの諸會社競つて掘鑿を試み、共に相當の出油あり、事業に時に消長はあつたけれども、出油は今に持續してゐる。

戸數五百餘戸、人口三千五百餘、全村の殆んどが農業に從事してゐる。なほ本村の村訓に

一、至誠村是を尊奉し忠實勤勞の村民たるを期すべし

二、自治自營を信條とし勤儉力行よく經濟建設に忠實なる村民たるを期すべし

三、協同輯睦して平和と秩序とを尊重する村民たるを期すべし

四、滅私奉公以て郷土を美化し理想の大日吉村建設のため貢獻する餘力ある村民たるを期すべし

を大書し、擧村この理想に向つて驀進、具現化を期圖してゐる。

大津村

笠拔連峰の東麓に位し、丘陵起伏して高低あれど、平地その間に點在し、部落は主に平野に聚つてゐる。北は與板町につゞき、西方山中には溫泉が涌出する。氣比宮、蓮花寺、中永、上條、逆谷、藤川、宮澤、横原、山澤等の部落を含み、面積一・二九二方里にして、人口約二千八百人である。

大津は舊庄名にして、本村現區域はその一部である。

主要産物には米、繭、鶏卵、兎、木炭蓮等あり、特に木炭は年産十五萬貫の多きに達してゐる。村農會では木炭のより一層の増産と茸の養殖に努力してゐる、産業組合は大津、大正の二組合あり、利用率多く、農業倉庫を兼營し、縣下優秀組合の一である。

小學校は大都尋高（六學級）、第一大津尋常（六學級）の二校あり、青年學校の設備もよく、昭和五年、成績良好なるため縣知事から表彰された。また私立蓮峰圖書館がある。

神社は村社氣比神社ほか無格社一、寺院は寛益寺、稱念寺、長樂寺、法華寺等あり、寛益寺は大字逆谷にあり當地方切つての名刹である。

黒川村

近世、吉河庄と呼ばれたところで、與板町の東南信濃川沿岸の農村にして、中田、南中、古津、蔦都、成澤、古川新田の六大字より成り、西に黒川の小流あり村名はこゝに起因する。

面積〇・三一二方里、有租地三百三十三町歩餘あり、耕地は水田二百七十餘町歩、畑地約四十町歩にして、その他宅地十四町歩、原野六町歩があり、山林は一町歩に滿たない。戸數百八十五、人口千百をかぞへ、住民の多くは農を以て生業となし、米は本村第一の重要産物にして年十萬圓を突破する。黒川産業組合は、近時その活動が活潑である。

與板町へ一里弱、バスの便あり、バスはまた長岡市へも通ずる。眞宗照覺寺は古い淨刹である。黒川小學校は五學級編成され、高等科を置く。

大河津村

郡の西部、信濃川の屈折する地にあたり、西川の一流はこゝより分れる。明治四十二年、東洋一の分水工事を起して以來、下流の水害は免れた。執ケ會根、馬越、岩方、仁ケ村、外新田、田尻、町輕井ほか二十大字より成り、面積一・七三六方里を有す。

信濃川の氾濫を防ぐため、大河津に分水路を設けんとするの議は、明治三年以來の懸案にて、その間暴動起りしが、漸く明治四十二年度に於て着手し、爾來十七ケ年の歳月と、二千五百萬圓の工費とを費やし、大正十五年大河津より寺泊に向つて二里半の東洋一の新河路開鑿工事を完成した。この工事は越後の産業文化に大なる轉機を與へた。

長岡鐵道岩方町、輕井の二驛及び越後鐵道桐原驛、同大河津驛が置かれ、大河津驛は兩鐵道線の接續點をなす。寺泊町及び地藏堂町へはバスが通じ、交通の便良好である。

本村農家の經濟更生の第一歩は、肥料の自給自足による肥料代金節約を以て始められ、增産計畫の實施されてゐる農産物は米、麥、豆類にして、農家副業としては豚、兎、鶏の飼育が盛んである。各種産業はその種別により各々組合を設け消費と販賣の統制をとつてゐる。

小學校は五社、山ノ脇、五千石の三校あり、各校に青年學校を併設し、前二者には高等科が置かれる。教育費は各校按分式に分配せられ、精神統一、教育の向上、村内の融和を計る目的を以て學區制は廢されてゐる。更に女工保護組合、男女青年團、婦人會は各優秀なる指導者ありて資質の向上が圖られてゐる。

桐島村

大河津村と丘陵を以て背後を接し、大字島崎の西に僅かの山地あれど、中央を島崎川が貫流し、土地概して平坦にして島崎川筋の大村として知られる。越後線の兩側を占め、明治三十四年五月、隣村を合併して村制が施行された。大字島崎は稍々市驛の狀をなす。

面積〇・六四四方里。

農業は村農會が中心となり、十八部落の農區の水稻競作會、苗代品評會等を毎年行ひ、産米の增收を圖り、また種兎を無償配附して養兎を奬勵し、最近は更に養鶏に力が注がれてゐる。紫雲英、菜種裸麥等の裏作は成績よく、副業としては藁工品が多い。各部落の物資の融通は、月六回宛島崎部落に市場を開き、更に各區長は部落民の需要品目等を特に聽取して需要供給の圓滑を圖つてゐる。

教育は古くから一村一校主義を以て當り、分散的に設置されてゐるものよりも内容の充實を圖ることが出來て好成績を擧げてゐる。

社寺には村社宇奈具志神社、永念寺、妙德寺、妙滿寺、勝宗寺、正源寺、淨善寺、繁慶寺、法養寺、隆泉寺あり隆泉寺境内に僧良寛の墓あり、奇僧として知られ、天保年間、六十餘歳にて歿した。

島田村

桐島村の南に接し、西は山地にして日本海に面し、東方は丘陵連亙して與板町につらなる。中部には平地あり、島崎川が貫流する。

舊幕時代小島谷千石の地にして、稻葉氏の采邑であつた。戊辰の役に五月中旬より七月末頃まで兩軍轉戰の地である。大字村田の妙法寺は日蓮宗の名刹と傳へられる。その他寺院には安全坊、蓮念寺金藏坊、西福寺、淨元寺、乘光寺、治暦寺、信盛坊、本行寺、大乘坊、泉藏坊、大榮寺、大光寺などがある。

梅田、小島谷、阿彌陀瀬、若野浦、下富岡、曲田ほか十部落より成り、面積は一・三一五方里、越後鐵道に沿ひ、小島谷、妙法寺の二驛を置く。

農業は村農會が中心となつて村内を六部落農區に分ち、各區毎に採種圃を設置し、また堆肥奬勵には指導員の巡回を行ひ好成績を擧げてゐる。現に副業として は養鶏、養豚、養蠶等の組合が組織せられ、その販賣は各組合が完全なる統制をとつて行つてゐる。農閑期を利用しての竹細工、藁製品、蔬菜栽培等が奬勵されてゐる。なほ島田産業組合は古き歴史と充實せる内容とを持つ點で、郡下でも第一位を占めてゐる。

明治三十四年に本村ほか二ケ村が合併されし時、一村一校主義により島田尋高校が設立され、昭和六年校舍を增築、現在十二學級に分れ、理想的鄕土教育が施されてゐる。また青年學校は補習學校と稱してゐた時代、昭和九年、成績良好の故を以て縣知事より表彰された。

西越村

郡の西邊に位し、村内は丘陵山崗連亙して刈羽郡との分水界をなし、島崎川及び別山川の水源地をなす。柿木、高畑、馬草、乙茂、藤卷、神條、吉川ほか二十七大字を含み、面積二〇・八二二方里の大村にして、出雲崎町に接し、越後鐵道による交通は便利である。

西越は舊庄名にして、古志郡の西邊なるよりこの名は由來した。村内社寺には無格社一社、圓德寺、延命寺、敎念寺、多聞寺、正應寺ほか十二寺がある。

産業の概略を見るに、養鶏、養豚、養鯉は甚だ盛んにして、これが販賣は村農會及び産業組合が其勞を取り、就中、養鶏は本産業の重要地位を占める。更に製炭、苗木の栽培、養蠶も尠なからず、竹細工、漬物、堆肥は農會が中心となり各部落農區が競爭的に努力してゐる。産業組合では果實、莚、繩、藁工品の共同販賣に力を注ぎ一般によく利用せられ、業績頗る顯著である。

小學校は從來三校ありしが、先年これを二校とし、共に高等科を置き、西越校

は七學級、上西越校は十四學級に編成される。現時、一村一校主義が唱へられてゐるが、村内區域の大なる地理と的關係により未だ實現を見ない。

古志郡

三島郡の東信濃川の右岸にして、北魚沼郡の北である。南蒲原との境界は田野相接するところにある。

今の古志郡は古の古志郡の東部にて、その全域ではない。和名抄に五郷に分れてゐるが、今略推すべきは大家の一郷に過ぎない。大家は蓋し出雲崎に當り、海濱に面する。

按ずるに高志國、越後とて上代より名高きは、北陸出羽までの總號であるが、本來はこの古志郡の地を根として、遠く擴布したものゝやうである。國郡制置の際に、古志郡の名を立てられたのは、その根本を明示したに外ならない。國造本紀に

高志國造、志賀高穴穂朝御世、阿閉臣祖、屋主男心命三世孫、市入命定賜國造

とある高志國は即ちこの根本の地にあたる。延喜式本郡に伊奈具志神社と云ふは正しくこの國造の祖廟である。然るにこの祖廟の伊奈具志社も今は亡び、總じてこれらの古傳も土俗間に微見すべきものなく、僅かに妙見驛三宅社徴ありて猶大彦命の裔孫三宅人の跡を傳ふるのみ。

北より東は南蒲原郡、南は北魚沼郡、西は三島郡に接する。地勢は、郡の中央を南北に走る鋸山一帶の山峰によつて郡を二分される。東は刈谷田川の上流なる栃尾谷で、西は信濃川の沿岸である。

郡内各所に油井あり、總稱して東山油田といひ、原油はこれを鐵管で長岡市に集め、柏崎製油所に送られる。信越線は郡の西部を通り上越線も本郡で分岐する。

郡内栃尾町ほか二十八ケ町村を含み、人口九萬二千に近い。

栃尾町

東山山脈の東方に展開せる栃尾平野上にあり、刈谷田川流域の一都邑にして、紬織物の名産地である。栃尾、山田、一ノ渡戸の三大字より成り、面積〇・二四八方里を占める。

この町は戰國時代に春日山、三條市と共に越後三城下といはれ、今、二ケ所に栃尾城址が殘つてゐる。その一は町家の東なる一段高き丘にして、他は郊野にて今は畑と化した。即ち岩野原である。この原をば貞治年中野州宇都宮黨の芳賀禪司の居さる跡と傳ひ、本庄美作守慶秀の據りしもこゝである。上杉謙信十三歳の時、春日山の難を遁れて、栃尾へ下向し本庄慶秀を頼りて暫く世の形勢を窺ひたることあり、今因緣の地は三尺坊と稱し舊蹟として傳へられる。

町には栃尾鐵道栃尾驛あり、長岡市へ汽車及びバスの便が通ずる。縣道四方に

走り、人面原、赤谷へもバスは通ひ、交通至便である。官公署學校團體には栃尾警察署、縣栃尾作業所、長岡區裁判所出張所、栃尾郵便局、栃尾實科高女、平和記念栃尾圖書館、產業組合、織物同業組合などあり、栃尾銀行、長岡銀行支店を有し、商況頗る隆盛である。

社寺は無格社一、觀音寺、西嚴寺、常安寺等にして、常安寺は禪宗の古刹、北越軍記に

天文十一年、叛逆人起りし時、虎千代君を春日山林泉寺に匿し奉る、折節栃尾淨安寺の增門寮來り、栃尾へ御伴申本庄美作守を賴まれ云々、十九年、景虎公門寮和尚の介抱により、一命助りたりとて、常安寺建立云々

とあるのが當寺である。今もこの寺には謙信公置酒の畫幅を藏する。

上組村

東西一里餘、南北約二里、面積一・四一四方里あり、信濃川の東岸に位し、長岡市の南に接續する。東南隅に大峯山の丘岡あり、他は皆平坦なる耕地である。太田川が村を南北に貫通し、灌漑の便を與へてゐる。

攝田屋、宮内、溝、今井、平島、大島、水梨ほか二十部落より成る大村にして、上組とは川上の部落の俗稱より來たものであらうといはれる。大字宮内には上杉定正の居城の跡なりと傳へられるも、その次第は詳かでない。大字宮内には鐵道停車場あり、攝田屋は戊辰の役に長岡兵屯所の地であつた。明治二十二年四月村制施行、同二十四年十一月石坂、中通、宮内、前川の諸村を合併し、現今の上組村となつた。

信越線宮内驛は上越線との接續點にして、長岡市へはバスの便がある。

村には攝田屋郵便局、縣立上組農學校、隔離病舍、六十九銀行支店、上古志農業倉庫上組產業組合、養蠶組合、漁業組合、上組繭市場、石材產業組合、水害豫防組合二、上組市場、普通水利組合三、曲新町副業組合、上組商工會、農家共榮組合、藁工品組合、農業改良實行組合、耕地整理組合等がある。

社寺は村社高根彦神社、無格社三六、圓融寺、光德寺、光福寺、勝覺寺、定正院ほか九ケ寺を有し、定正院境内は鎌倉扇ケ谷の管領上杉敎朝の息、修理太夫定正の館跡にて、寺は僧疊英の開基なりと云ふ。圓融寺及び洞照寺は共に、西國三十三ケ所の札所である。また名勝には湯澤鑛泉場が著名である。

十日町村

六日市村と上組村の中間に位する一小村落にして、十日町、高山、向島新田、中池、片田、小島古新田の六部落より成り、面積〇・三五七方里、人口約二千四百人をかぞへる。

戊辰の役に、七月二十九日、長岡兵が妙見口の來襲を拒がんとしたところで、今は上越本線及び縣道長岡街道が南北に並走し、宮内驛へ一里、バスの便あり、

交通狀態良好である。

古志十日町郵便局、至誠產業組合を有し、寺院には正樂寺、善行寺、專福寺、臨西寺あり、いづれも淨土眞宗の末刹である。古くは志度野岐庄に屬し、二位大納言家領であつた。

耕地は田三百八十町歩、畑四十六町歩にして、米と繭を主要物產とする。

六日市村

本村は郡の西南隅に位し、南は北魚沼郡に界し、西は信濃川を距てゝ三島郡片貝村に相對す。東南に金倉山が聳える。六日市、蛇山、瀧谷、渡澤、犬茂島、黑田新田ほか七大字より成り、面積一・〇一八六方里である。戊辰の役に就き、維新史料の記述によれば

七月二十五日、曉八半に、長岡城賊兵乘取後、日夜迫合、廿九日妙見六日市より進擊草生津に打入、城下火掛候處、賊兵居兼、浦瀨村福井村へ引取申候。云々

とあり、相當の苦戰地であつた。

大字妙見は古志郡の南端、信濃川右岸の小驛にして、三國通にあたり、長岡へ二里半、北魚沼郡堀之內へ六里、小千谷へ二里である。妙見には三宅神社あり、俗に妙見社といふ。式內三宅神社二社とあるはこの神社である。榎峠は一に妙見山ともいひ、戊辰の役に、東軍が死守して官軍の來攻を支へたところである。東方金倉山、半藏金山に連り、長岡の屏障をなしてその要路に當る。

今、上越線越後瀧谷驛あり、交通の便比較的良好である。住民は殆ど農山林の業に從事し、氣風淳朴、米麥を主產物とし、產業組合、漁業組合が組織される。

石津村

信濃川に跨り、六日市村の西に接し、岩野、釜ヶ島の二部落より成り、大字釜ヶ島は信濃川の砂洲上に發達したる部落にして、岩野は川の左岸の田邑である。郡の西南に當り、北は十日町村に接し、西及び南は三島郡と境する。

面積〇・二九九方里にして、人口千三百有餘を算し、水田八十町歩、畑七十餘町の耕地あり、未だ開拓されざる原野は二十數町歩殘つてゐる。產物は米繭を以て主なるものとする。

釜ヶ島、岩野の二尋常小學校あり、學級は共に三學級、鄕土の實情に立脚した各種施設に特色を發揮し、小さいながらも成績見るべきものがある。また村內には私立の石津村養成文庫が設置される。寺院は信光寺、光德寺の二にして兩者とも眞宗に屬す。團體には產業組合、漁業組合その他がある。

上川西村

本村は信濃川の西岸に位し、長岡市と相對する。村內一般に土地低平にして、沿岸には突堤を築く。本村及び下川西、福戶の三村は、往昔、川西と稱されたが後、分合行はれて各獨立の一村となり、本村は下柳、小澤、寺島、蓮潟、鼠島、宮脇、荻野、藤澤、三ツ鄕屋、古正寺、

田屋、槇下、槇山、卷島、上野等の部落を含み、面積〇・七〇四方里である。

三千五百の住民は殆ど全部が農耕の業に從ひ、米と繭は本村重要物產にして殊に米は十八萬圓の年產がある。耕地は水田四百六十餘町歩、畑地二百十餘町歩である。原野は約二十町歩あり、漸次若人の手によつて開拓されてゐる。上川西信販購利組合は優良業績を示して郡內に名あり、利用者は年々增加の一方にある。村內寺院には敬光寺、寶國寺、蓮乘寺、長樂寺、雲外寺がある。信越線長岡驛へ約一里を距つ。

數年前より金肥節約の堆肥生產を積極的に奬勵し、現在殆ど百パーセントに普及してゐる。本村にては村農會と產業組合とは聯携して產業方面のみならず、生活の改善、勤勞奉仕、精神作興にも努力し、村納稅成績は良好にして表彰されたこと一再ならず、農林省の役人や縣內務部長の稱揚を受けたことがある。

福戶村

東は上川西村に接續し、西は三島郡と境する。全村平坦なる耕地に惠まれ、面積〇・三一六方粁、片端、高野ほか五大字より成る。

往時は川西と稱されし地の一部にして明治二十二年獨立して町村制を施行された。長岡鐵道脇野町驛へ約半里、同西長岡驛へ二里、この間不定期自動車の便がある。寺院には光傳寺、淨秀寺、佛願寺があり、いづれも眞宗に屬す。

戶數僅か二百五十戶足らずの一小農村ではあるが、昭和七年、中小農家の內生活困難と推定されるものには負債整理組合を組織して加入を奬勵したが、該當者が殆ど無かつたといふ程、經濟狀態は極めて良好である。

農業經營には常に改善が加へられ、養鷄、二毛作、紫雲英栽培は特に督勵されてゐる。小學校の奉安殿は規模の大なる點に於て縣下第一の稱がある。

下川西村

郡の西北端、信濃川の西岸に在り、西は三島郡黑川村と境を接する。全村平坦にして沃野開け、面積〇・七四方里、來傳、吹谷、松尾、寒澤、栗山澤の諸部落より成る。

往昔は上川西、福戶と共に川西と總稱されたところで、明治二十二年、町村制を施行して獨立の一村となつた。

栃尾町へ縣道にて二里、途中バスの便がある。

村內寺院には圓福寺、明行寺、來光寺來迎寺等がある。

西は三島郡與板町に近く、東北は南蒲原郡今町に遠からず、また信濃川を船で遡航すれば長岡市にも幾里でもない。かく近隣に農產物の主要消費地を有するが故に、單に米麥繭等の主產業のみならず蔬菜その他もまた本村產物中の主なものである。實に地理的に惠まれた村といふことが出來る。

黒條村

長岡市の北方一里、信濃川の東岸に在り、北は南蒲原郡中之島村に境する。高見、下下條、黒津、川邊、天神、十二潟等の部落より成り、面積〇・六四四方里に及び人口二千七百人に近い。

古の黒津と地にて、長岡より中之島今町を經て三條市に至る縣道は村内を過ぎ今町長岡間のバスも通る。信越線押　驛へ十五町、同城岡驛へ二十町、交通至便で

水田五百有餘町歩、畑地百六十餘町歩を有し、米の年産二十數萬圓、繭は一萬二三千圓を上下する。黒條信用組合をはじめ、各種産業團體の活動は近來頓に活況を呈し、本村産業經濟上に幾多の功績をもたらしてゐる。

寺院には願敬寺、西福寺、正嚴寺、淨林寺、遍照寺があり、全部眞宗に屬する古刹である。

山通村

長岡市の東南に位し、東半は丘陵連亙して悠久山、三ノ峠山、南蟬山などが聳立する。しかし西北は平坦にして越後平野の沃地に連る。宮内村の東にあたり、高畑、長倉、鉢伏、大町、町田、青木、山澤、柿の大字より成り、面積〇・八三七方里を占める。

大字鉢伏は、明應六年の越後檢地帳に合二萬二千九十刈、鉢伏別當並衆徒中」と載せられたところである。

戸數二百六十餘、人口八百七十餘を有し、土地は有租地八百六十餘町歩にして耕地は田二百九十六町歩、畑七十一町歩に分れ、山林は四百七十餘町歩の多きを占める。産物米を第一となし繭及び林産物がこれに次ぐ。栃尾鐵道長倉驛及び悠久山驛あり、汽車及びバスの便により長岡に近い。寺院は敎德寺、廣西寺、淨照寺、靈善寺、了元寺等あり、名勝に鉢ヶ峯の一本杉がある。

栖吉村

長岡市の郊外東南にして、土地丘陵に富み、悠久山が聳える。西片貝、栖吉、成願寺、野崎ほか五六字より成り、面積一・七二二方里、栖吉に普濟、善照の二禪院あり、長尾家の開基といふ。城塞の跡もあり、一說に謙信公の外祖父肥前守顯吉の有ならんといはれるが、他にも說あり、略風土記には

按に長尾の一族に古志氏ありて、古志景治の子氏景同景信等の名見ゆ、其城址を傳へず、此栖吉或は其跡かとも考察されてゐる。

村内には縣社蒼柴神社、村社栖吉神社正圓寺、淨願寺、常福寺、專行寺、善照寺、通善寺、普濟寺、龍淵寺その他佛閣多く、蒼柴神社は悠久山公園内にあり、長岡城主牧野忠辰を祭神とし、事代主神を配祀する。悠久山公園は長岡市の經營にして、市の東方三軒、東山西緣を公園となし、境域廣大、古松老杉櫻樹多く、幽邃なる閑境である。しかもグランドやプールの設備もあり、冬はスキー場とも

なる近代的公園だ。この他名勝には成願寺溫泉、吉永鑛泉がある。

村には栃尾鐵道通り、長岡市へ汽車及び自動車の便あり、交通狀態良好、産物は米を主とし、一部には商業も盛んに行はれる。

山本村

長岡市の東北約二里、通稱東山の麓にあり、西方一帶に越後平野に面す。部落は一直線をなし一里五町、東部に東山油田がある。

源義家の奥州征伐當時すでに邑をなしてゐたといふ。字浦瀨に高津谷八庵の城址あり、上杉、堀、牧野の諸氏の支配を受けた。戊辰の役には官賊兩軍轉戰の地となつた。今、本村は所謂八町沼の東なる丘陵を占め、明治十七年浦瀨村ほか七ケ村の戸長役場を置き、同二十二年村制施行し山本村と稱した。浦瀨ほか七大字より成り、面積一・三七方里、栃尾鐵道浦瀨驛及び加津保驛を有し、交通の便に惠まれてゐる。

東山油田とは浦瀨を中心とする古志郡一帶の油田の總稱である。浦瀨鑛泉、鬼小島彌太郎の墓、高津谷城址、血の峰城趾の名所舊蹟あり、八幡太郎渡橋の跡には、越路とは鬼住む里と思ひしに云々の碑がある。

本村は蜂谷柿、はつちん柿の本場だ。年額數百圓といつただけでは僅かだが、これが農村にかける柿だけの賣上高と聞けば驚かざるを得ない。柿ばかりではない。製莚、養蠶、養鷄、養鯉等も隆盛である。

村内に三小學校あり、屢々合併問題が起つても實現しないが、青年學校は一校に統一されてゐる。

富曾亀村

長岡市の東北に連り、全村一帶越後平野の平地にして豐沃なる耕田が多い。亀貝、富島ほか六大字より成り、面積〇・四七三方里である。信越線城岡驛及び栃尾鐵道稻葉、小曾根、下新保の三驛を有し交通至便である。村内寺院には寺命寺妙音寺、敎念寺、西福寺、龍源寺等あり共に古刹である。

米を主産物とし增收計畫より産額年毎に多く、副業としては製繩、養鷄、養蜂が各農家に自主的に行はれ、當局指導と相俟つて好成績を示してゐる。

敎育は小學校二校のほかに分敎場があるが、分敎場を廢止して二校の内容を充實させるの議が起つてゐる。現時、兒童出席率は縣内模範校の一にかぞへられ、青年學校が併設される。

從來學區間の對立は自立にまで影響して常に相爭つたが數年前からその弊もなく、平和村の名を得てゐる。

新組村

郡の北端に位し、北谷村、山本村、富曾亀村及び黒條村に圍繞され、地勢一般に平坦である。

鐵道交通の便があるので、文化の程度

は他村に比してより發達してゐる。全村は下新町、漆山、百束、四ッ屋、福井ほか六大字に分れ、諸部落は概ね八町沼開田に在る。東西一里、南北一里、人口約三千人である。

米作を以て主要産業となし、畑作の大豆がこれに次ぐ。副業の第一は養蠶で、近時漸減の傾向にあるとはいへ、未だ相當の産額を有する。

村農會、産業組合の最近の活動は目覺しきものあり、これに加へて畜産組合、養蠶組合等の運動が、生産の逐年增加に與つて功が多い。

小學校は漆山、百束、新組の三校がある。在郷軍人分會、男女青年團、尙武會婦人會等では各々緊密なる連繫の下に、社會奉仕と社會教化に顯著なる實績を擧げてゐる。

村社その他の神社併せて十二社、天滿宮最も知られる。寺院また多い。舊蹟としては明治天皇行在所趾あり、聖跡を訪ねて杖を曳く者が多い。

北谷村

當村は郡の最北端に在り、北は刈谷田川を隔てゝ南蒲原郡見附町に對し、南は山本村に東は上北谷村に、西は新組村に接續してゐる。南東部は丘陵的山地を形成して漸次、西北に向つて緩傾斜をなし、村の中央に突出してこれを南北に二分する。そしてこの丘陵部を圍んで村落と耕地とがあり、耕町は肥沃平坦にして灌漑排水して良好である。

當村の開發は相當古いものであつて、村内の處々に先住民族の使用した石器、土器類が散在し、村社小丹生神社は延喜式内社にて寺院中には大同年間の知紋にかゝるものさへある。往古古志郡高波の莊に屬し、中世に至つて城氏の支配するところとなり、後ち佐々木氏、新田氏、高氏、上杉氏、長尾氏、堀氏等の領するところとなつたが、元和四年長岡藩主牧野忠成の所領となり、明治維新に及んだのである。

廢藩置縣後、柏崎縣に屬したが、次で幾變遷かを累ねて同二十二年北谷村と改め、現在に至つたものである。廣袤東西二十九町、南北一里十町、面積一・七一四町餘、戸數約七百、人口約四千、農に從事するもの餘四百戸、工は百二十餘戸商は六十餘戸をかぞへる。

修養團體に青年會、南部婦女會、北部婦人會あり、産業團體に農會をはじめ農事實行組合、養蠶實行組合、織物組合、副業組合など設立されてゐる。神社に村社一、無格社七、寺院に九をかぞへる。

上北谷村

栃尾町の西方にあり、村内は山岳起伏して丘陵多く、刈谷田川は山間を縫つて北に流れる。十三大字より成り、面積は一・一七六方里に及ぶ。村内には戊辰の役の舊跡少なからず、土谷、栃窪等はいづれもその地である。栃尾鐵道上北谷、上太田、本明の諸驛あり、栃尾町見附町間のバスも通り交通便利である。寺院に

は源昌寺、慈眼寺、東福寺、瑞雲寺等あり、村民の信仰をあつてめてゐる。

米及び繭を主産物とし、蔬菜園藝も盛んにして、村農會の後援の下に統制販賣をなし、長岡市、栃尾町、見附町方面に大なる販路を持つて居り、溫床栽培が普及してゐる。製炭、養蠶、養豚の各組合組織され、家内工業も盛大である。産業組合では昭和九年農業倉庫を建設した。

小學校は一校にして分教場二あり、男女青年の季節教授は男子は夜間、女子は晝間これを行つてゐる。

下鹽谷村

栃尾町の北に連り、刈谷田川の本支流は本村の北部及び西部を流れ、西北隅に於て合し、西に向ふ。所々に丘陵の起伏を見、耕地と山地は相半する。

下樫出、楡原、岩野外新田、水澤、鴉ケ島ほか十四部落を含み、面積一・七一二方里に上る。村に岩野藏王堂あり、今金峰山と改稱する。社の傍に三條城主平六俄景の墓と傳ふる古塚あり、長岡藏王はこの祀より分祀したといふことが諸書に見えてゐる。

栃尾鐵道楡原驛あり、人面原栃尾町間のバスも村内を走る。楡原は古くから開けたところで、明應檢地帳にもその名散見する。

村内には二日町郵便局、鹽谷産業組合無格社若宮社、曹洞宗善昌寺、眞言宗妙圓寺、眞宗正福寺がある。

上鹽谷村

郡の東北端に偏し、東北二面は南蒲原郡と境する。村内を丘陵蜿瓦し、鹽谷川の發源地をなす。舊鹽谷の一部にして、大字鹽中に鹽井ありしこと北越奇談に載せたるも、今日その事情は詳かでない。面積二・七六五方里、瀧ノ口、入鹽川ほか十部落より成り、栃尾町へ二里半、會津に通ずる街道がある。社寺は村社巢守、神社、眞言宗遍照院、日蓮宗圓隆寺等を有す。

本村で特筆すべきは製炭事業である。年々增産に次ぐに增産を以てし、昭和八年には工費九百餘圓を以て三十六坪の木炭倉庫が建設され、下鹽谷村と連繫を取つて販賣統制を行つてゐる。また笊籠、箕等の製造を主眼とする副業組合が設立され、製品は栃尾町、長岡市及び四隣の村々に販賣して收益が多い。

小學校は從來四校であつたが、今は上鹽、鹽川の二校となつた。

東谷村

栃尾町の東南に接し、東は南蒲原郡と境する。村内山嶽丘陵蜿蜒し、刈谷田川の水源地をなし、東南には守門嶽の高峰を望む。守門嶽は眺望よく

千重八百重ふりつむ雪の穴窓に
煙立つなり古志のやまざと

と詠まれたところで、南蒲原と北魚沼の郡界をなしてゐる。

村はもと栃堀といはれ、今は泉、栃堀菅畠、赤谷、宮澤ほか四大字より成り、

面積三・一〇八方里を占める。村役場は大字泉に置き、こゝから栃尾鐵道栃尾驛までは一里、バスの便がある。

村内には産業組合、施業森林組合その他の公益團體ありて産業經濟並に社會文化の向上發展に努め、また社寺には村社巣守神社（二社）阿彌陀院、高德寺、長輪寺、妙樂院、玉泉寺等がある。玉泉寺は栃尾町常安寺末にて繁國秀茂和尚を開基とする曹洞宗の古刹である。

入東谷村

本村は郡の東部にして、東谷村と西谷村の中間に位し、西南は中野俣村に續いてゐる。北東には東谷村との村境をなす海拔五百五十尺の栃堀藥師山が長い山裾曳き、東南方は北魚沼郡と境界、藥師山に連つてゐる。土地一般に高燥、丘陵に富む。

明應六年の越後檢地帳に、本村大字吹谷、松尾、來傳等の地名が見える。今、五部落を以て一村となし、面積一・一八三方里あり、長岡鐵道與板驛へ一里、自動車の便があり、また縣道栃尾小出線が村内を貫通する。

戸數約三百七十、人口二千弱を數へ、耕地は田百九十餘町歩、畑百七十町歩を有するに過ぎないが、山林は八百九十町歩に近い面積を持ち、從つて米繭のほかは殆ど林産物ばかりである。

荷頃村

栃尾町の西南に接し、南隅に五百山、鋸山が聳立し、村内は山嶽丘陵が重疊し西北に東山油田がある。

荷頃はまた逃入と書せしことあり、古書には濁と記載され、明應檢地帳にも濁と見える、明治三十四年十一月町村合併して現區域となり、面積一・六一六方里北荷頃、一之貝ほか四部落を含む。大字比禮の石油坑井は明治三十年頃より湧出したものである。こゝにも戊辰の役の戰蹟がある。役場は大字北荷頃に置き、こゝから栃尾鐵道栃尾驛まで一里である。

社寺には村社諏訪神社（二社）無格社四、雲帶寺、曹源寺、觀音寺あり、名勝に鳥帽子嶽の鬼穴、一之貝大池、建石、稚兒清水、鶴城山、陣ケ峰峠、大平山及び熊坂長範の舊跡森立峠がある。

曾ては養蠶村として榮えた村であるが時代と共に産業にも變遷あり、今では繭の代りに柿を産し、鶏が殖え、豚が鳴き兎が跳ね、池には鯉が、馬小屋には子馬が數を增した。

女子青年團はヘチマコロンを作つて團服を制定作製し、男子青年團では實習試作地を有して實地研究をし、また兩青年團員を以て組織する軍樂隊式音樂團は縣下に有名である。しかも青年團も青年學校も縣及び文部省の表彰を受けてゐる。

西谷村

荷頃村の背後にあり、四方を峻嶺に圍繞されたる山間の僻地である。牛藏金と栃尾との間を改稱して西谷と名付けたといひ、所謂栃尾谷の一村である。

縣道沿線の地なるも山間にして交通は不便、栃尾町へ二里である。村は中、西野俣、森上、木山澤、田之口の五大字より成り、面積〇・六二三方里を占む。

産物は從來米と繭とを主なものとしたが、近年に至り、養鶏、養兎、果樹栽培に長足の發達が見られる。殊に柿栽培は各字に二名宛の接木技術員を村費を以て雇傭して繁殖を促せしことあり、現に大阪方面に販路を持つてゐる。また婦人會では銃後の警備、勇士の慰問のみならず自ら主體となつて蔬菜の栽培に努めて見るべきものあり、堆肥普及成績は縣下第一等と稱される。産業組合は明治四十年の設立。青年團は全國的に優秀なもので曩に文部省より表彰された。

中野俣村

西中野俣、東中野俣の二部落より成り面積〇・八二方里に及ぶ本村は北は、山嶺を以て北魚沼郡上條村と境し、地勢極めて高峻である。本村と西方牛藏金との間の一谿は古くから西谷と稱される。社寺には村社吉野神社、大榮寺、東光寺などがある。

山嶽多きため、農耕よりも養蠶の方が盛大である。しかし最近では稍々衰微の徴を見せ、養鶏、養兎がこれに代ると共に、産米の增收、筍、うど、ぜんまいの加工、植林などが勢を得て來た。全村擧つて産業增進の謳歌に明朗な氣分が溢れ銃後の力强さを思はせる。

小學校は一校、諸施設に山村の特色を發揮して良成績を收め、青年學校は曾て青年訓練所時代査閲官より賞讃の辭を受けた。青年團では道路改修、出征軍人遺家族への勤勞奉仕など盛んに活躍し、他の模範とされる。

牛藏金村

五百山及び鋸山の東方山蔭にあり、四周高峰に圍まれたる山間の一小村にして面積〇・七三五方里、里道にて長岡市へ三里、バスが通つてゐる。

戊辰の役に七月二十五日官軍が長岡栃尾附近の合戰に敗れ、走つて河西へ退き能はざる輩は南走して一之貝及び牛藏金の地に逃れたといふ。

山間僻地なる故、産業は從來養蠶を以て主要なものとしたが、先年の繭價暴落以來衰微を辿り、その後、産米の增收、養蠶以外の副業の積極的普及奬勵、肥料の自給自足等が叫ばれ、農業技術員の採用、堆肥增産奬勵、製炭講習會の開催等により産業文化に一新紀元を劃し、今や村農會、産業組合、村役場の三者が一丸となつて銃後の援護に邁進してゐる。

青年學校は昭和九年縣より指揮刀を贈つて表彰された優良校、在郷軍人分會は大正八年本部の表彰を受けた。

種苧原村

五百山連峯と北魚沼郡界の山岳との間に在る山間の一村落にして、面積一・〇三七方里である。北魚沼郡廣瀬地方へ流れる和田川の水源地をなし、北は牛藏金

西は鳳口峠、東は北魚沼郡上條村、南は大道峠に至る諸道路も、古くは樵杣人の跡付けたる通路であらうが、村當局の熱心なる道路開發の意志と村民の協力とにより、今は山村としては道路よく開けたる部落として聞え、里道にて長岡市へ四里、交通機關には惠まれないが、道路の完備と相俟つて漸次交通狀態も便益多からんとしてゐる。

米と繭は主要物産である。種芋原信用組合の活動見るべきものあり、本村經濟上に及ぼす影響は大きい。寺院には眞宗廣照寺がある。

大田村

郡の南方に位し、四面山岳に包まれ、中央に僅少の平地がある。蓬平、虫鹿、濁澤、南平の四大字より成り、面積一・五〇六方里、太田川上流の山村にして、信越線宮內驛へ二里、大字濁澤から道路は北に伸びてゐる。村內寺院に慶覺寺、阿彌陀寺、永泉寺、念法寺がある。

前述の如く四面山岳なるため耕地に乏しく、米は自給自足の程度である。從來は養蠶が副業の主位にあつたが、今は衰へ、蜂谷柿、鯉等の栽培飼育がこれに代つた。養鯉組合があり、多數の鯉は京都大阪、名古屋をはじめ、東京、富山、山形、秋田方面にまで販路を持つてゐる。また狸の飼育が流行し、製炭も年五千俵に及んでゐる。

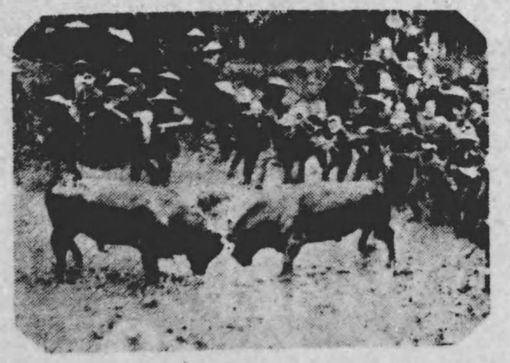
村內には五小學校あり、內二校は高等科を併置する。青年學校は成績特に良好で、教練に精神修養に辯論に青年層の活躍は目覺ましい。

竹澤村

郡の南方に位する一山村にして、村內を流れる溪流は四走して信濃川に入る。明治二十六年、この山中に石油井を試掘せしことがあつた。

面積〇・三七六方里、人口千六百餘人を擁し、長岡區裁判所出張所、竹澤郵便局、竹澤信用組合等が村內にあり、村役場より上越線小千谷驛まで二里半、交通の便に惠まれない。

村農會が中心に、部落毎に農業特勵委員が設置され、また採種組合を組織して品種の統一を計るなど、本村產米增收方策は萬全を期されてゐる。從來副業は養蠶が主であつたが、最近はこれに代つて養兎が全村に普及し、皮は自家加工して陸軍省に納め、肉は罐詰にして賣出され



本村名物の闘牛

る。柿、栗、梅、花梨の栽培、緬羊の飼育も漸次多くなりつゝあり、また天然に惠まれた本村は、養鯉の盛んなところである。殊に三色鯉は二百餘年の歷史を有し、近時全國的に有名になり、注文殺到の狀態である。

闘牛は當地名物の第一であらう。當局ではこの行事を奬勵の方針である。

小學校は一校である。青年學校は縣下屈指の優良校で、曾て青年訓練所時代に文部大臣の視察を受けたことがある。

東竹澤村

本郡の南端、北魚沼郡と郡界を限る山間の一農村にして、北は太田村、西は竹澤村につゞく。小松倉、梶金その他の部落より成り、芋川の東方なる小松倉を主部落とし、村名よりすれば竹澤村より新しく開拓されたやうである。

國道にて上越線小千谷驛並に越後川口驛へ三里、交通の便に惠まれずと雖も、近年、道路の發達頓に顯著にして、交通狀態も大いに改革を見んとしてゐる。

戶數二百三十餘、人口千二百有餘にして、面積〇・六八方里を有し、山林約三百五十町歩に及ぶも、耕地は僅かに田七十三町歩、畑七十町歩に過ぎず、米を主作物であつたが年產幾許ならず、却つて養蠶の如き副業に見るべきものあり、林產物も尠くない。

東山村

芋川の南岸の山村にして郡の最南部に在り、南に山脈走つて北魚沼郡との境界をなし、北に金倉山の高峰が聳える。南稻荷ほか三部落より成り、面積一・四五一方里、上越線川口驛へ二里、交通は便利と云ひ難い。社寺に無格社白山神社、瞞生寺、寶林寺、圓柳寺を有す。

山岳甚だ多くして、耕地面積少く、田畑の如き全面積の十分の二に過ぎない。故に從來米穀の不足には常に惱まされて來たが、近年、村農會が中心となり、各部農區をはじめ青年有力者の活動により漸次增收を圖つて、今日では飯米は自給自足の域に達してゐる。副業も從來は不振狀態にあつたが、蔬菜、園藝、果樹の栽培、鯉、兎、豚の飼養を奬勵し、その他製炭業が普及し、山芋、山葵、百合の增殖に實績を擧げ、胡桃、無花實の栽培も多くなり、果實は京阪神に、山芋、山葵、百合等は長岡新潟方面に出荷する。兎は主に小學校兒童に飼育せしめ、成兎は統制販賣をしてゐる。なほ、堆肥の增產は郡內屈指といはれ、產業組合は縣下有數の成績を擧げてゐる。

小學校は四校あり、いづれも青年學校を附設する。男女青年團及び婦人會等では精神教育の普及を圖り、銃後後援、貯蓄實行、勤勞奉仕に邁進してゐる。

北魚沼郡

古の千屋郷の地で、魚沼三郡の北偏にして、古志、三島の諸郡に接し、小出の邊は荆上郷の中あらう。

北は三島郡の一部、古志郡及び南蒲原郡の一部に隣り、東方一帯は福島縣南會津郡、南は群馬縣利根郡、南西は南魚沼郡及び中魚沼郡、西は刈羽郡と境す。郡の東境には深山連亙し、また三國山脈は郡の東南部を横斷し、駒ケ岳、槍ケ嶽等の峻峰がある。その間に湯ノ谷ありて、温泉が湧出する、河川は魚野川が南魚沼郡より來りて、郡の西部に於て信濃川に合流して北流する。

鐵道は省線上越線が南魚沼郡より來り郡の西部を通つて古志郡に入り、信越線に合し、十日町線は川口より分岐して中魚沼郡に入り、魚沼線は信越線の來迎寺より起つて小千谷に至る。小千谷は越後縮の産地として著聞する。

郡内に次の如く三町十三ケ村があり、人口は八萬百餘をかぞへる。

町　小千谷、堀之内、小出

村　城川、吉谷、山邊、千田、川井、田麥山、川口、湯ノ谷、藪神、廣瀬、須原上條、入廣瀬

なほ現勢を統計的に見れば次の通りである。

生産總額	七、五二五、六九八圓
農産額	二、七七六、五三一圓
一戸當り生産額	五四六圓
農業倉庫棟數	四棟
學齢兒童	一六、三六一人
小學校教員	三一六人
民有有租地	二三、一五六町
面積	一、〇五〇・七七方粁

小千谷町

郡の西北部に位する一名邑にして、町の東端を信濃川が北流し、これを境として小千谷、稗生の二大字が對立する。西は城川村に連り、南は山邊村に、北は城川村に隣接する。地勢平衍にして、町の南部に舟岡山あり、頂上に立てば遠く八海山、駒岳、銀山平の諸嶺を望み、近く信濃川の清流を俯瞰し、風光明媚にして常に遊覽の客を絶つたことがない。

また本町は越後絹布、小千谷縮の本場にして、機業地として北國屈指の生産を有し、全國的に有名である。

もと郡役所の所在地であり、本郡文化の中心地として物貨の集散場となり、商況旺盛である。從つて交通運輸の係もよく、清水越の國道開鑿完成後は、群馬縣より長岡市に通ずる國道十號線が町の中央を縱貫し、町の東部には鐵道上越線が走り、信越本線來迎寺驛より分岐し、西小千谷驛を終點とする魚沼鐵道があり、また國道にはバスの便あり、信濃川を利用する水運と相俟つて交通至便を極め、産業文化と共に當地方に於ける交通の一

中心地をなしてゐる。

堀之内町

小出町の西に接し、魚野川の溪谷に跨る名邑である。附近は養蠶盛んにして、土地の風俗に屋豪はやしあり、郷土色豊かである。

古來三國驛路に當り、浦佐と川豐口の中間に位し、雪譜に、堀内八幡宮の花水祝の記事あり、古くから開けたところである。大正十五年四月一日、田川入村、堀之内村を合併し、同年十一月十日町制を施行、今日に及んだ。

新道島、星野新田、龍光、下島ほか十三部落より成り、東西一里、南北二里、面積四・四三九方里を有す。町には職業紹介所、郵便局、大正文庫、第六十九銀行、第四銀行各支店、産業組合二、郡農會、郡農業倉庫、郡蠶絲同業組合、苗木組合、郡畜産組合、漁業組合二があり、社寺は村社八幡宮、永林寺、弘誓寺、金剛院、寶藏寺ほか六ケ寺をかぞへ、名勝に下倉城址がある。交通は、上越線堀之内驛により至便、この鐵道に沿うて國道あり、また中魚沼郡へ縣道が通じる。

曾て商三農七の環境の中に、獨立小學校七校をかぞへ、歴代村長はこれが合併を圖つたが失敗を重ね、昭和七年に至り十萬餘圓の經費を以て中央校の增築を機會に附近三校の合併が實現した。昭和十年よりは高等科を廢止し、三ケ年制度の乙種農業學校程度の實業學校が設立され今日に至る。

小出町

郡の南部、魚野川の流域にあり、破間川、羽根川の二川を右にして、左に佐梨川あり、東北に廣瀬谷を控へ、地勢概ね平坦である。即ち破間、魚野の縱谷と、佐梨川の横谷とが作る十字谷の頭部を占め、東は會津の大高原を控へ、その交通の路頭に方り、また南魚沼郡への關門となつてゐる。交通は從來三國峠を越えて關本へ出る三國線が唯一の街道であつたが、後、清水越の國道が開鑿されて一層の利便を與へられるに至つた。上越線小出驛がある。バスは湯澤町、栃尾又温泉須原、小千谷へ通ずる。

もと會津藩の領内にて、小出島には會津藩の役人居り、六十里越を以て若松城下へ通行した。されば明治◇辰の役には東軍に黨し、西軍とこゝに激戰を交へたのである。

生糸、繭、米、木炭を主要物産とし、商工業が盛んである。町には警察署、縣木炭檢査所支所、縣蠶業取締所支所、縣穀物檢査所出張所、長岡區裁判所出張所郵便局、産業組合、農業倉庫、郡木炭同業組合等あり、社寺に村社清水河邊神社無格社一、觀音寺、正圓寺、林昌寺などがある。

城川村

郡の西端にあり、西は山陵を以て刈羽郡及び三島郡と境し、この山中に地獄谷油田がある。東は小千谷町に連つて一般

に平坦、南は吉谷村に、北は千田村に隣接する。

魚沼線平河驛より、また村北部を千谷川山谷線、中央部を土川山田線の縣道が横斷し、藪川時水街道も村を貫き、車馬の往來しげく、交通至便である。

明治三十四年十一月、城川村、千田村の中大字山谷櫻、町村を合併した。面積一・〇四九方里あり、住民の多くは農業及び養蠶業を主とし、織物、麻眞田の製造が盛んである。果實の栽培や養鷄なども副業として營み、赤蕪は本村特産物として廣く知られてゐる。

縣社魚沼神社、村社伊米神社、寺院六ケ寺あり、時水城址、穩回の橋、有明橋字都宮明神等の名所舊蹟がある。

吉谷村

郡の西端に位し、南北に長く、東西に短く、東吉谷、西吉谷、四ツ子の三大字より成り、周圍一帶は山岳丘陵に依つてかこまれてゐるが、堂ノ笠山、鵜堂山等の支脈を除けば概ね平坦である。千谷川はその源を中條釜峰より發し、東岸に大字四ツ子を控へて北流し、字勝田に於て大白川を併せ、更に北流して字大柳に至つて城ノ入川に合流する。

村の西端に縣道小國線が開通してはゐるが、全村を擧げては此便に據ることを得ず、なほ甚だ不便の地も少くない。

東西は一里一町、南北は一里六町にして、面積一方里弱がある。

産物の主なるものは米で、副業の主位は養蠶である。農閑期を利用しての藁細工製品も多く、これは悉く村外に移出される。その他大小豆、稗、蕎麥、甘藷、馬鈴薯、大根、漬菜、茄子、瓜類等の農産物及び織物、木材、薪炭なども本村主要物産に擧げられる。

本村には未だ村社と稱すべきものなく各部落に無格社數社あり、その祭日は一定し、九月に例祭を行ふ。寺院には圓滿寺がある。

山邊村

小千谷町の南に接續し、村内至るところ丘陵の連亙するを見る。東に信濃川の巨流が北に向つて環行する。

山本、谷内、西中、片貝、池ヶ原、池中新田、鹽殿の七大字より成り、人口三千有餘、面積一・〇六四方里を占め、上越線小千谷驛へ三粁半、魚沼線西小千谷驛へ二粁である。

人心は質朴、勤勞を愛する精神に富み縣下優良十六ケ町村中の一に加へられしことあり、自治に、産業に、教育に、非の打ち所を持つてゐない。

産業としては先づ養豚と桑苗とを第一に擧げなければなるまい。副業生産の半分はこの二者が占めてゐる豪勢さだ。之に次いでは園藝、製莚、製繩、養鷄、養鯉等が盛んである。これら副業助成のために綜合副業組合が組織設立され、指導統制宜しきを得てゐる。又堆肥增産の實際は牛馬の飼育にありとし、殊に支那事

變による馬匹徵發の影響を除去するためにも養畜農業が奬勵される。

昭和七年以來、村當局では村税の輕減と村民美風の增長を二大施政方針として邁進し、青年團、青年學校、婦人會は郡下の模範である。最近、在鄕軍人分會の活躍も顯著である。

千田村

本村は郡の西北隅に位する小村にして東は信濃川を隔てゝ古志郡及び小千谷町の一部に接し、西北は古志郡と三島郡との境界をなし、南は小千谷町及び城川村に接續する。地勢概して平衍にして、信濃川流域にあるため、地味肥沃豐穰にして農耕に適する。

元千田村及び三佛生村、鴻之谷村の三ケ村を合して現在の千田村を作つたもので、元千田村は千谷、小栗田より成り、千谷は慶長檢地の時に千屋村と稱し、その後天和三年の檢地に千谷と改めた。貞享三年、千谷村の開墾地を分離して、市右衞門新田、長兵衞新田と稱し、明治十八年皆復舊してその名稱を廢した。三佛生村の由來は、往時、村民信濃川に漁し阿彌陀、藥師、觀音の三佛像を得た爲めこれを村名としたと口碑に傳へる。また元鴻之谷村は、鴻之巢、坪野、三野の三ケ村より成る。本村は以上の三ケ村を明治三十四年に合併したのである。

村内小栗田尋常小學校は明治七年の創立開校、同十一年校舍新築、十八年より二十年まで小栗田小學校と稱し、同四十二年現在地に校舍新築して移轉すると共に現校名に改め、大正九年增築を行ひ、更に屋内運動場を新築した。

川井村

中魚沼郡岩澤村と堺し、信濃川右側の河岸段丘上にある農村で、地勢丘陵に富み、耕地は概ね桑園である。

古來河水氾濫のため災害を受けしこと屢々であつたが、河川工事完成後は、その難を完全に免れた。川井、川井新田の二大字より成り、面積〇・六〇六方里、十日町鐵道内ケ卷驛を有し、交通の便は惡くない。

明口明神は無格社なるも式内古社川合神社ならんと傳へられる。また駒形山妙高寺は正平七年の開基にして、慶長年間の再興なりといふ。

全村を分ちて四農區とし、農區毎に採種圃を經營し、富民協會、縣農會主催の競作會に加盟して賞を受けてゐる。鶏、鷄、豚、兎の飼育多く、兎皮加工も行はれ、また柿や栗の栽培多く、最近は胡桃も普及してゐる。

教育は一村一校主義にて進んでゐる。青年學校は、男子は通學制、女子は季節的で、査閲官より表彰されしこと數度に及んでゐる。勤勞愛好精神に充溢せること郡下の模範である。女子青年團は、女工としての出稼者が多いので團員は少いが、在鄕諸孃は良妻賢母涵養の素質に邁進し、「銃後の護りは女子の手で」、をモットーに活動目覺ましきものがある。

田麥山村

郡の西南部に位し、中魚沼郡下條村と境する。村内山林多く、耕地は田百五十餘町歩、畑百三十町歩の僅少なれど、概ね蠶桑園である。

町村制施行前より田麥山村として獨立の一村をなし、今も變化はない。國税完納成績良好な村である。十日町線内ケ巻驛へ近く、交通の便惡くない。

面積一・一八七方里、戸數二百四十餘の山間の一小村であるが、部落農民の採種圃經營、競作會、堆肥品評會等を行つて産米の増收を圖るなど、産業の發達に苦心し、見るべき成績を擧げてゐる。副業には百合、ぜんまいの栽培、製炭、製莚、養鶏、養兎等あり、殊に百合は本村特産物の第一で年産千圓以上に達し、木炭は木炭組合の統制下に年五萬貫以上を出し、最近は冬季家内工業の一として箕の製造が盛んである。

教育は一村一校主義を以て進み、小學校は高等科を併置する。青年學校は成績良好で、査閲毎に査閲官より表彰を受けてゐる。女子補習教育は季節教授を行ひ青年團では公共事業奉仕、殊に銃後の勤勞奉仕に熱心にして、その他心身の鍛錬農業講習、巡廻文庫等を行つてゐる。

川口村

信濃川及び魚野川の合流地點にあり、十一箇の大字より成り、諸部落は概ね眞野川に跨り、西岸段丘上に聚落する。大字西川の兩川の中間岬角狀岸にある。面積一・七二方里。

往時の三國驛路の一渡航路にして、はじめ六部落を合併したる一自治區なりしが、昭和四年三月、元神生村廢止につき大字相川ほか五部落を更に合併した。こは十日町線の分岐點である。また本村大字和南津は、古事記に見ゆる高志國和那美之水門なりといふ。この水門の舊址は小ケ谷町の東南二里半にあり、垂仁天皇の御宇、皇子譽津別王、御年三十にして猶ほ言ふ事能はず、或時偶々鵠の空中を過ぎるを見て語を發して何物ぞと問ひ給ふ、天皇、人をして鵠を追はしめ給ひしに、この地に網して、捕ふるを得たりといふ、故に和南津と號すと傳へる。また村内には鮭孵卵所その他の名勝あり、社寺には村社川合神社、安養寺、西藏院林興庵、實積社、萬覺寺がある。

鐵道上越線及び十日町線の分岐點にあたり、越後川口驛を有し、交通至便、縣道また發達しバスの便がある。

湯ノ谷村

小出町より南東佐梨川に沿うて遡り、越後駒ケ岳の北方分水嶺をなすところにあり、枝折峠を越えれば北ノ又川となり奥日先に至る。本村南東部一帶の大高原地帶である。

古くは折立村とも云つた。大湯村より山中八里八町人跡なく、越奥の堺にして何國何郡の山と云ふこともなかつたが、湯ノ谷の折立村の人、彼の山奥阿賀川へ

魚を捕りに行き、これより會津領只見村と上田領湯ノ谷の出入りとなつたけれど江戸表に於ては、山は會津の地、支配は上田（六日町）と仰附られた。明治三十五年十月元八箇村及び元湯ノ谷村を合併し現在の湯ノ谷村が出來た。

大澤、井口新田、吉田、七日市、七日市新田ほか十六字を含み、面積二二・五四九方里の大村である。佐梨川に沿うて縣道は小出町に通じ、栃尾又温泉よりバスの便がある。

二又川と只見川の合流する地點に銀山平あり、千古斧鉞を加へざる密林で、奥日光まで連り一大仙境をなす。栃尾又温泉は古來子持湯として聞え、婦人病、胃腸病に効あり、佐梨川に沿ふ幽邃境で、避暑の好適地である。この他化石渓、大湯温泉などの名勝がある。

山又山に圍まれてゐるため、水田面積は極めて僅少で、從來、收穫は飯米にも足らず、移入米によつてこれを補ふ狀態であつたが、昭和八年頃から産米の増收を目標に産業改善に邁進し、今では自給自足してなほ餘裕を見るに至つた。副業の首位たる木炭は、木炭倉庫を建設して販賣を統制して居り、その他製紙、藥工品、木工品等の副業あり、殊に製紙は家内工業として縣下第一の産額を有し、品質も良好である。

藪神村

西は小出町に接し、南より東北面一帶は高原山脈に掩はれ、羽根川は本村東部に水源を發し、諸流をあつめて西走し、西方にある破間川と共に奥野川に入る。村に木葉石を産し、これを硯に製す。

新保、一日市、池平、池平新田ほか十三部落を含み、面積四・〇九九方里、上越線小出驛へ一里弱、バスがある。

藪神の村名は南魚沼郡にもある。明治三十四年、藪神、羽川島の一部を併せて一自治體組織され、同三十五年四月より町村制を實施した。村社大石神社、無格社六、安泉寺、永昌院、吉祥院、乘源寺眞福寺、萬行寺、明王院の社寺がある。

從來本村の産物は米、木炭、ぜんまい程度で、産額も大したことはなかつたが近年に至り、産業の開發、豫算生活の實行が奬勵され、水稲採種圃一町六反歩の經營をはじめ、堆肥品評會を催ほして多産者に賞狀を下附するなど、種々の奬勵方策を講じ、産業經濟の發展充實の跡顯著なるものがある。副業として木炭のほか、製莚、箕、パナマ帽、麻裏草履等の増産も著るしく、製紙の改良、柿の接木胡桃の栽培普及、養鯉の隆盛など見るべき點は多々ある。

小學校は二校あり、分教場一を有す。補習教育は頗る優秀にて、昭和七年には縣より表彰を受けた。

廣瀬村

本村は破間川及び和田川流域の山林原野地帶を占め、入廣瀬村と共に、破間川谷を領し、古くは廣瀬郷と稱した地の一部である。

和田、東中、山口、泉澤新田、田尻、並柳、連日、小庭名、小庭名新田、吉平ほか十四大字を含み、面積二・六三三方里、大字並柳は舊名を小田と稱し、ここに須門大明神がある。卽ち守門(すもん)嶽の山神を祀り、下の宮といひ、廣瀨鄕中の大社である。舊記に

廣瀨之內下之宮、須門大明神、高頭五斗、永代令寄進之候也

と見える。小出町へ一里、縣道通じ、バスの便もある。

村內には四つの圖書館あり、小學校は內容殊に充實し、また社寺には前記村社須門神社のほか、村社巢守神社、無格社一、曹洞宗興珊寺、眞宗慈眼寺、同專明寺等がある。

須原村

須原、赤土、須川、三淵澤、大倉澤ほか五大字より成り、面積四方里に亘る大山村にして、高原、越後の兩山脈に圍繞され、村の中央を破間川が貫流し、小平地をつくつてゐる。

元西頸城郡糸魚川藩に屬し、町村制施行後、明治三十四年十一月現區域を以て一自治區をなした。村には三淵澤、樽淵大倉觀音堂、須川桂ヶ瀨等の名勝あり、寺院に曹洞宗圓明寺、同普門院を有す。

米、繭のほか林產物の產あり、村內官公衙團體には長岡區裁判所出張所、須原郵便局、村立圖書館、大倉澤產業組合、須川、宇津野、上折立各森林組合、須原織物改良組合、第四銀行支店などあり、山間と雖も產業並に文化の發達著るしきものあり、交通は破間川に平行して縣道あり、上越線小出驛へ三里、バスの利便がある。

上條村

郡の北端に位し、地形は蝸蝸の兩翼を擴げた樣によく似てゐる。東隅に守門山あり、地勢高燥、破間川は東より延行し來り、本村南部に於て西南に方向を轉換し、魚野川に合流する。

西名、澁川、長島、上長島新田、東之名等九部落より成り、面積四・〇〇七方里に及び、有租地二千四百六十町歩餘を有するが、耕地は僅かに田二百七十餘町歩、畑百三十餘町歩に過ぎない。但し山林は千九百町歩に近く、原野も百四十五町歩にのぼる。

住民は農蠶業を兼營し、米繭の產が尠なくない。

小學校は上條尋高（四學級）高倉尋常（三學級）、福山尋常（二學級）の三校を有し、青年學校、上條村圖書館もあり、山村ながら敎育施設は充實する。須原まで徒步により、ここから小出町へバスの便がある。

入廣瀨村

東には會津との分水嶺たる越後山脈が連走し、南は越後駒ヶ岳の東麓より北は守門山に亘る地域を占め、面積一七・七〇七方里、郡の東部の廣大なる高原地域を占め、その間、黑又川、末澤川が縱橫

に貫流し、北部にて平石川に合流し、破間川となつて西南方に流れる。

平地少く、部落は概ね平石川に臨んで點在してゐる。

往時、廣瀨鄕と稱した地の一部で、上越線小出驛へ約五里半、上條を經て途中須原よりバスの便がある。村內名勝に布引の瀧あり、守門岳麓にかゝり、縣內第一の名瀑布で、下流なる破間川に產する鮎は本郡の一名產である。

本村では約二十年前から每年五石取藏作會なるものを行つて產米の增收に努力し來り、伸び上らんとする努力の歷史は相當長い間續き、一段から一段へ、常に上昇の跡を遺して來た。村には一万町歩の林野があり、木材伐採及び製炭業が盛んである。白炭を主とし、村內五ヶ所に木炭倉庫を建設して統制販賣を行つてゐる。最近は百合の栽培、家內工業としての製紙、木細工が盛んになり、柿、甘藍の普及を見てゐる。

小學校は二校あり、高等科を置き、昭和八年、五千餘圓を以て室內運動場が建設された。青年學校は、青訓時代縣の表彰を受け、指揮刀を授與された。

南魚沼郡

總說 本郡は越後國の南隅に位し、東西九里二十町、南北十三里十二町の廣里を有し、東南は群馬縣利根郡並に吾妻郡に境し、西は長野縣下高井郡及び中魚沼郡に接し、北東は北魚沼郡に隣する。面積は六十三方里二四六である。

四方は山嶽峻嶺を以て圍まれ、恰も屛風の中に在るやうである。西南淸津川の左岸では苗場山最も高く、海拔二千百四十五メートル、その北方中魚沼郡境には神樂峰、雁ヶ峰がある。群馬縣境には三國山脈が連亙する。西方には西山山脈ありて樽山、桝形山、高山、柄原峠等がある。平地は極めて少く、たゞ魚野川及びその支流沿岸に限られる。河川の大なるは魚野川及び淸津川の二である。

沿革 魚沼郡の創始は史蹟の徵すべきものがないが、人類の棲息したのは、遠く石器時代に初まり、當時の遺物が今も發見されることがある。

鎌倉時代には於田庄の名見え、越後二十四庄の一にして、院の御領備中前司信忠預る所とある。本郡に賦役の課せられしは、建久四年夏、源頼朝が富士野に狩した時を以て嚆矢とする。

當時、上下各五鄕に分れ、上五鄕とは湯山、關、富實、早川、大木六を指し、下五鄕とは大池、美佐島、大卷、八海、新堀の總稱である。鎌倉時代の末には、伊豆守長久の支配を受けた。

その後上杉氏、堀氏を經て德川時代に至り、高田城主松平忠輝の領となり、長嶺城主、長岡城主の支配も受け、一部は幕府直轄地にもなつた。

區劃　現在全郡を分けて次の二町十六ケ村とされ、總戸數一萬一千六百戸、人口六萬九千八百餘人である。

町　鹽澤、六日

村　三國、三俣、神立、土樽、湯澤、石打、中之島、上田、五十澤、城内、大巻、藪神、浦佐、大崎、東、伊米崎

產業　生產年額は五百六十數萬圓に上り、農業最も盛んにして、養蠶製糸の業がこれに次ぐ。

農產	二、九二二、三〇一圓
蠶糸類	一、一九〇、九〇九圓
畜產	一六二、九五九圓
林產	四三三、六五九圓
水產	二七、三〇二圓
工產	九一七、九三九圓
鑛產	四、九一〇圓

人情　本郡の人情風俗は概して質素簡樸である。これ本郡が地勢交通の不便なりしため、勢ひ都會の風潮に遠去かり從つて郡民一般が領主の命令を從順に服膺した結果であらう。

義理堅きは本郡人士特有の美點にして隨つて村政の纏りよく、組合の制、隣保の宜は最も美はしく行はれ、吉凶相扶け水利の工事、道路の普請、或は害虫の驅除、惡疫の豫防等、苟も一村の利害に關することゝいへば、各自己を捨てゝ誠實その事に盡すなど、賞すべき點が少くない。

鹽澤町

本町は郡の中央に位し、東は魚沼川を界として中之島川及び上田村に接し、西は一帶の山を以て中魚沼郡に境し、南は石打村、北は六日町に連り、自然の形勢により四圍の區劃をなし、西部一帶の高地より魚野川流域に至る間は自然の傾斜をなし、伊田川、樺野澤川、餘倉澤川等により灌漑の便がある。

面積一・六方里、戸數千二百餘、人口約八千人あり、舊幕時代には富貴鄕と稱された地で、郡區改正以前第十三大區小三區富貴組と呼び、自治制實施に際して鹽澤、中目來田、富貴、栃窪、吉里、大富、上島の舊七ケ村を合せて一村を形成し、明治三十三年に至り、町制を布いて鹽澤町と改めた。

最近數年間に於ける生活の改善、社會施設の充實は、郡下第一と稱せられ、縣下に於ても模範町村の一に擧げられてゐる。特に納稅に就いては、町長はじめ村當局者が率先して各部落を說き廻り、成績最も良好である。

生產物中の主なるものは織物、酒類、蠶繭、生糸等で、總額約百萬餘圓に上つてゐる。清水トンネルをくゞり拔けた上越線は本町に鹽澤驛を置き、またこの鐵道に沿ふて縣道が南北に走り、交通の便良好である。

六日町

郡の中央に位し、魚野川の流域にのぞみ、旅客の往來、物貨の集散頻繁なる繁榮の市街にして、警察、稅務署、區裁判所、營林署、蠶業取締所支所、穀物檢査

所支所、土木派遣所、木炭檢査所支所、郵便局、その他縣立六日町中學校、六日町實科高女、六日町圖書館等の教育機關銀行支店、產業團體等がある。

舊時、このあたりは上杉家の領地にて坂戸城はその累代の居城であつた。謙信もこゝで病死した。その後、堀秀治の公臣、堀丹後守直寄が、坂戸城を賜はつたが、慶長十五年、直寄は信州飯山より長岡に移り、次で村松城主となるに及んで坂戸は廢城となつた。明治三十九年町村合併の時、町制が布かれた。

この町より岐れて東南群馬縣に通ずる清水街道は、今、鐵道開通のため荒廢の極に達し、昔日の面目はなくなつた。東に三國の峻嶺あり、西に越後山脈連走しその中間に展開する魚野川盆地の中心都市で、昔は信濃水上交通の上限とされ、川の左岸に位し、入舟を以て殷盛を見せた。長岡より水路十六里、人口七千餘、郡內產業文化の中心地である。

坂戸城址、八箇の紅葉、藤上野原及び池野世ケ原の鄙駒並に古墳、上田八幡宮（一名矢落宮）の名所舊蹟がある。

三國村

郡の南端にあり、三國山脈を以て群馬縣に連り、西は苗場連峰を障壁として長野縣と境する。地勢高峻清津川の水源をなし、地域甚だ廣く、面積八・七六一方里に及ぶも、戸口は稀少である。

明治二十二年自治制施行に際し、淺見二居の組合役場を置き、三十四年これを合併して三國村と稱した。苗場山麓には數ケ所に溫泉湧出し、諸病に効を奏して浴客の來り治するもの甚だ多い。本村淺見、二居は三俣村三俣と共に、所謂三國の三宿といはれ、信越線開通前の要驛にして、大雪の候には、三宿に數百の旅人滯在せりと傳へ、諸侯の參勤交代にもこの街道を通過した。

特殊の山村野菜を產し、養蠶を行ふものあるが、木製品の如き特產品の製作に從事するもの多く、產業狀態は優良といふことが出來る。

新潟市を距ること約四十里、群馬縣に通ずる縣道の通過地で、交通は比較的便利で、車馬の往來頻繁である。

三國峠は、三國街道が三國山系を橫斷するところを云ひ、南は上州路にして、諸侯の參勤交代も當峠を以てなされ、今は上越線開通し清水街道は荒廢したが、當街道は現に上野國への通路として用ひられる。

三俣村

郡の南方、苗場連山の東北に位する山間溪谷の僻地にして、東西一里、南北二里、面積四・一〇五方里あり、古來三國三宿中、比較的人煙の多いところであつた。上越線越後湯澤驛へ一里半、交通狀態良好と云ひ難い。

耕地少く、田十町餘、畑五十數町歩に過ぎず、村民の多くは林業または手工業に從事し、指物、箱類、杓子、木炭等が主產物となつてゐる。

村内は掛貝温泉場あり、浴客極めて多く、また諸病に効く。

大正七年の大雪辷りのため、全村全滅の悲境に遭遇したことあつたが、村民の協力、鐵の如き更生の意氣は、よくこれを復活し、以て現今見るが如き平和なる優良村となるを得た。

神立村

三俣村及び土樽村の中間に位置し、他村は廣大なるに反し、本村は面積僅かに〇・九七四方里に過ぎざるも、これは地理的關係に因るものである。四周は山嶽を以て圍繞され、射有林野八百町歩あり植林に見るべきものがある。東西一里、南北は十八町である。

舊十ケ村を合併して成る一村にして、神立とは神社領の謂なるべしといはれ、式内神社の名に因んで神立村と稱したのである。新潟市を距ること約三十五里の地に位し、村の兩端に縣道が走り、上越線湯澤驛へ一里弱、バスの便あり、交通は稍々便利である。

米、繭を主産物とするが、耕地は僅かに田八十三町歩、畑七十五町に過ぎない風俗は醇朴、納税成績極めて良好で、幾度か表彰を受けてゐる。社寺には村社魚沼神社、大敎院、泰宗庵、實珠庵等がある。

土樽村

郡の南方東部にあり、三國山脈を分水界として群馬縣に境し、魚野川の水源をなす山村である。昔から獨立の一村であるが、村名の由來は今に詳かでない。

戸數三百六十餘、人口二千三百人に近く、面積は八・一八五方里である。村内に私立土樽圖書館、土樽産業組合、村社兩山神社、曹洞宗瑞祥庵、天台宗本明院等がある。

上越線に沿うて中里驛を置き、有名な清水トンネルは、一方の出口を本村内に持つ。上州と越後の境に要害たりし清水峠も、昭和四年十二月、胴體を開鑿貫通され、同六年遂に世界有數の難工事も竣工を見た。新潟より江戸へは、昔は三國街道が主道であつたが、時代はめぐつて上越線の開通となり、新潟上野間の距離五六十マイルも短縮されたのだ。

清水峠の西には大劍太山あり、本村内に聳立する山丘の主峰である。

湯澤村

魚野川の溪谷地にして、西に高津倉山聳え、曾ては三國街道の要驛點として榮えたことあるも、現在は上越線の一邑となつた。しかし附近に温泉あり、冬季はスキー客に殷賑を呈する。六日町及び小出町へはバスが通ふ。

古來獨立の一村にして、嘗て隣村神立土樽と合して石白鄕と稱した。その後湯澤村戸長役場の管轄となり、明治二十二年自治制施行して今日に至つた。

村内には溪流多きが故に、これを利用して電氣事業を村營としてゐる。また湯澤温泉、新温泉等、温泉に富むを以て村

有温泉を漸次改良して現代的設備をほどこし、浴客誘致の途を講じてゐる。湯澤温泉は湯澤驛の西北半里、魚野川左岸丘上にあり、單純泉で、中風に效がある。この附近は日本有數の降雪地で、しかも東京より僅か數時間にて達せられる故、將來性あるスキー地としてシーズン毎に頭角をあらはし、温泉附近なる布場の練習場は初心者によく、大峰山、飯土山スキー踏破は熟練者に興味あるところである。この他瀧澤不動堂、諏訪神社等の名蹟に富み、また村内には郵便局、銀行支店、發電所、青年會、圖書館、各種團體等あり、寺院に天台宗大岳寺、同本城寺の古刹がある。

石打村

越後山脈の東陰に位置し、魚野川の西岸に臨み、田園廣漠として耕耘の利を納むるに適地である。されば農藝業は本村の重要産業にして、米の年産十數萬圓に上り、田畑併せて約五百五十町歩の耕地がある。また村有林野は八百町歩にわたり、村民は植林に精勵するところあり、富裕な一村である。

明治二十二年上關村ほか二ケ村を分立せしも、同三十九年合併して村名を改稱し今日に至つた。下一日市、關、關山、上野、上一日市、宮野下、君澤、大澤、大窪、南田中の諸部落を含み、面積二・八二六方里である。

上越線に沿うて石打驛を村内に置き、國道も通じ、小出町へは毎日バスが往復し、交通の便良好である。

村内寺院として關興寺、大光院、大智寺、法授寺、宗善寺、藥照寺などが擧げられる。

中之島村

鹽澤町と魚野川を挾んで相對し、大里川は東南より、登川は西南より、共に本村地内に於て魚野川に合流する。この二川が作る三角點近傍は平地をなし、南は丘陵つゞき、飯土山が聳立する。

西方魚野川、東方登川の兩川に取卷かれてゐるが故に、中之島なる村名は出來たものと考へられる。

中子新田、鉾子、萬條新田、姥島新田ほか十一部落より成り、面積二・〇七二方里にして、山林六百六十町歩、耕地は畑百三十町歩、田七百町歩である。上越線鹽澤驛へ約半里、交通の便は稍々良好と云ひ得る。

村内社寺に、村社木六神社、同石上神社、無格社八龍神社、天台宗大正院、同大林寺、同來泉寺、同安樂寺、曹洞宗實林寺、同文殊院、同龍泉院、同楞嚴寺等がある。

上田村

東南面に三國山脈の高嶺を負ひ、その支脈は村の東側を西北に向つて連亙し、全村殆ど山嶽に掩はれた一村で、登川は村の南隅に源を發し、支流をあつめて北進し、村の西北に於て魚野川に合し、この合流點附近は、所謂鹽澤盆地の一部に

して平坦である。

舊上田庄に屬し、明治三十九年四月、町村合併以來變遷なく、その後の自治發展上に見るべきものある模範村である。長崎、瀧谷、蟹澤新田、清水、姥澤新田一ノ浦、早川、三郎丸、枝吉、雲洞等の部落を包含し、面積六・四五方里、上越線六日町驛へ二里あり、バスが通ふ。

本村婦人會は明治四十二年の創立して會員四百名を擁し、銃後婦人の責務を完ふして成績がよい。村農會、在鄕軍人分會、男女青年團、產業組合等も一意業績の發揚につとめてゐる。

五十澤村

東南は三國の主嶺を以て群馬縣と境を劃し、地形は東北に長く南西に短く、高峯峻嶽起伏重疊し、魚野川の支流たる三國、五十澤の兩川は、村の中央を流れ、西北隅に於て合流する。

明治三十四年、東西南五十澤を合併して村制を施行した。五十澤は八海山の南谷で、村名これより起つた。

三國川は溪流の長さ六里ばかり、水源を中之俣山に發す。大同方に

三國山藥、魚沼郡三國山人等之所傳方濕毒結毒、かのししのつの黑燒、きはだ、二味粉製、而溫酒用

とあるは、この三國川の山谷の村民の所傳である。また八海山は越後山系駒が嶽の西に並び、標高一千七百米、山頂に八海明神を祀り、万年堂といふ。

村は宮、津久野、津久野上新田ほか二十大字より成り、面積一〇・三六五方里に及ぶ。上越線六日町へ二里、縣道野中六日町線及び大崎宮ノ脇線が通り、車馬の便がある。

牛ケ嶽、卷機山、才月山等の名勝多く社寺には無格社二、曹洞宗萬松寺、眞言宗養德寺、眞宗正法等がある。米、繭、木炭を主產物となし、養蠶實行組合、森林組合その他各種團體の活動は全體主義的統制下に好績を擧げてゐる。

城內村

上越線五日町驛の東方につゞく農村にして、東北南の三方は三國山脈に屬する山嶺を以て圍繞され、西方のみ展けて魚野川盆地に連つてゐる。魚野川の對岸は大卷村である。

八海山の麓なる長森の地にして、古くは藪神庄城內鄕と稱した。今は上原、上出浦、下出浦、上藥師堂、野際、妙音寺ほか十五部落を包含し、面積三・〇九九方里である。

北越軍記に

永正七年六月、山內管領上杉顯定長尾爲景と椎屋合戰、無勢故上州へ被引取候、爲景の相圖にて高梨攝津守大軍にて出會、廿日妻有庄長森原にて又合戰、上杉方總敗軍に成顯定討死

と載せ、當村が古戰場たりしを傳へるが妻有庄といふは間違ひである。

大字田崎は長森の南にて三國川に近く古くは千屋鄕の地で北魚沼郡に屬してゐ

たところである。

社寺には村社八海神社、無格社一社、龜福寺、西珠院、玉泉院、榮久院、長福寺、常樂院、大勝院、法音寺、萬願寺、眞淨寺、善照庵等を有し、法音寺は大字藤原にあり、俗說に藤原不比等の子麻呂政照の創立といひ、上杉氏中興の寺で、寺領百二十石を有つてゐる。

大卷村

越後山脈中、笠置山の東麓にあり、西半は山林原野に掩はれ、東半は魚野川盆地にして耕桑の地に富む。大字五日町は村の東北隅に位し、三國街道に沿ふて街衢をなす。五日町とは、南方の都邑六日町及び北方藪神村の九百町、伊米ケ崎村の西部なる十日町部落と共に興味を喚起する地名なるも、その由來は明かにすることが出來ない。

村は四十日、奥、寺尾、大杉新田、北田中、宇津野新田、靑木新田、野田、これに前記五日町を加へたる諸部落より成り、面積一・五九八方里、上越本線五日町驛を有し、三國街道縱貫し、大崎村へバスが通ずる。

村には郵便局、大卷圖書館　野田靑年圖書館、大卷信販購組合、農業倉庫などあり、寺院は鬼西寺、正眼寺、寶藏寺、光正院、宗龍寺等があげられる。

藪神村

郡の西北部、浦佐村の南に接し、地形稍々矩形狀をなす。西は大部分山地丘陵にして、東方に魚野川盆地に屬する平地が僅かながら展開する。

城山新田、名木澤、今町、九日町、市野江、芦田の大字より成り、面積一・八一二方里にして、北魚沼郡にも同名の村がある。上越線浦佐驛へ一里、バスの便あり、交通は比較的便利である。

人口四千人に近く、殆ど全部が農蠶の業を以て生計を樹て、米と繭は本村の主要物產である。土地は有租地千二百二十餘町歩にして、耕地は水田三百十餘町歩畑地三百六十餘町歩あり、山林は四百八十町歩の多きによる。

藪神尋常高等小學校は十一學級編成、靑年學校を併設する。村にはまた村立圖書館を有す。社寺は村社若宮八幡宮、無格社一、圓通院、善應寺、大龍院、洞源寺、龜嚴寺、南方院等である。

浦佐村

郡の西北端に位し、北魚沼郡と地を接し、魚野川西岸にあり、對岸伊米ケ崎村と共に本郡北面の門戶を扼してゐる。六日町を去る水路四里、更に二里にして小出町へ出られる。

浦佐、五箇、鰕島の三大字より成り、面積一方里、上越線浦佐驛より、國道は村を南北に走り、バスの便がある。大字浦佐は背後に山嶽を負ひ、街道に臨み、小市街を形成する。

村內に普光寺あり、毘沙門堂と稱し、古文書を襲藏することの多き、縣下第一に推される。眞言宗にて、本堂は大同二

年の造營である。こゝの行事なる眞堂押には、雪中も厭はず、十里二十里の遠くより男女來り集り、灯ともし頃に至つて寺内に入るや、衣服を脱棄てゝ男は眞裸になり、女も單衣に細帶一本をしめて堂内に入りて七押七踊する奇態なる祭りが行はれる。

大崎村

魚野川の東岸に位置して藪神村と相對し、東南は峰續に圍繞せられ、中央に方谷山が起伏し、地勢高低一樣ならず、西北面は水無川の扇狀地形にして桑園が多い。大崎、柳古新田、今町新田、海士ヶ島新田、穴地、穴地新田、水尾、水尾新田等の部落より成り、面積一・一三五方里である。

足利末期の頃より上杉氏領にして、その後幾度か變遷あり、德川幕府の譜代の諸侯をして交々これを治めしめた。明治維新には水原村の支配をうけ、柏崎縣となり、同六年新潟縣管轄に移り、同三十四年水尾村を併せて大崎村と稱した。

上越線五日市驛へ一里、縣道通り、バスの便あり、交通不便でない。

村社大前神社は式内古社として知られその他村社八海神社、無格社十二社、天豪宗三法院、曹洞宗龍谷寺、眞言宗胎藏寺等の社寺がある。

東村

郡の北端にあり、東に山嶽をめぐらして北魚沼郡との障壁をなし、地勢高燥、西方は水無川の形成する扇狀形耕地にして蠶桑地が多い。

組織は茗荷澤、黑土、黑土新田、船ヶ澤新田、茗荷七新田、荒金、堂島新田、桐澤、荒山、山崎、大桑原、門前ほか五部落を合併して一村となし、面積四・五五方里にして、耕地は田三百三十餘町歩畑三百二十町歩を有す。米と繭は本村の主要物産である。六百戸の住民は殆ど全部が農蠶に從事する。

小學校は赤石、三田の二校を有し、共に高等科の設置ありて七學級に編制される。私立赤石圖書館がある。

縣道の通過地にあたり、小出町及び五日町へバスの便あり、交通狀態は比較的良好である。村内社寺には村社坂本神社無格社二、成就院、寶明院、來寶院、淨光寺がある。

伊米ヶ崎村

本村は浦佐村と共に郡の北端を占め、北魚沼郡小出町と相對する。東は鳴藏山の山脚に壓され、東南には笠倉山の餘脈があり、共に北魚沼との郡界をなす。西方は魚野川盆地にして、小出町から六日町に至る縣道の通路にあたる。また南は東村に接壤する。

虫野、十日町、岡新田、大浦新田、大浦、千溝、板木、原虫野新田、伊勢島新田等より成り、部落名が示す通り、新田の多い村である。面積一・三五四方里に及び、上越本線小出驛へ一里、バスの便あるも、東半は交通不便である。

村内八色原は水仙の名産地として知られる。村社諏訪神社、無格社一、曹洞宗西福寺、同寶泉寺、同林泉庵、眞言宗遍照寺、同頼實院、同大京院等の社寺を有し、村風醇朴、信仰の念に富み、且つ愛鄕精神の徹底した村である。

中魚沼郡

地志 郡の地形は恰も木の葉のごとく、信濃川が中央を貫くは葉の脈線に似て北流して岩澤橋を過ぐる間、諸溪川の集注するは支脈に類し、稍々廣濶して郡界を去る葉柄の如くである。

川の東を河東鄕と稱し、西を河西鄕といふ。山峯蜿蜒として郡界を限り、東は中城、湯澤、高石の諸嶺を以て南魚沼郡と境し、南は苗場、小松原及び高倉山嶺の連脈を以て信濃國に接し、西は山伏山雁ヶ嶺等の諸山脈を以て東頸城郡につらなり、北は榎峠を以て刈羽郡に、雪嶺及び十八澤川の溪流を以て北魚沼郡と相隣りする。

郡内は卽ち葉の支脈のごとく、東より信濃川に注ぐは志久見川、中津川、清津川、當間川、羽川、川治川、田川、飛渡川、貝野川、樽澤川とし、西より傾注するものに茗荷澤川、樽田川、淺川原川、取安川、眞人澤川がある。澁海川は東頸城より仙田村の西部を貫流し、刈羽の地域を掠めて、信濃川に入る。皆、澪漑に便し、沿岸綠樹翠を滴れ、風光明媚、水利によりて產出の木材を輸送し、舟楫の上下四時絶えることがない。

沿革 中魚沼郡は明治維新後に創設したる郡である。前には莊園の大邑なるも、その起源を知る能はず、妻有莊、また波多岐莊として、鎌倉時代前後の古史に散見するあるのみである。足利氏末年に於て初めて上杉房能、その臣長尾爲景に逐はれて本郡に來奔の時、史上にその名が出た。長尾記によれば、

長尾信濃守能景府内城に治す、長男太郎房景をして上田城に居らしめ、波多岐莊を併有す。

とあり、郡に存在する古器の銘及び古書に波多岐莊の名明記し、能景の名もまた出てゐる。

蓋し魚沼郡は古來越後七郡の一にして舊史に伊乎乃、または宇乎乃麻と稱し、上古は信濃川流域に屬する沼澤地であつたといふ。

產業 山に倚り水に臨みたる地形なれば、東西より傾斜し、平坦の地も少なからずと雖も、耕地の面積は山林原野の五分の二を越えない。水田六千餘町歩、畑地七千百餘町歩であるが、五穀豐かにして要用に剩り、蠶また風土に適し、木材に富み、淡水產の漁魚多く、越溟南方の寶庫といふも敢て誇稱でない。生產總額は二千百八十餘萬圓に上り、新潟縣四市十六郡中第六位にあり、これを產業別に分ければ次の通りである。

農産	四、〇五六、八三九圓
蠶糸類	六五〇、〇〇三圓
畜産	一四六、二五〇圓
林産	五六七、八七三圓
水産	二八、一二〇圓
工産	五、六〇一、一七〇圓
鑛産	一六二、三八六圓

農業技術の研究及び奬勵をはじめとし農事教育の普及、農事道德の涵養等、農事改良には郡村農會及び産業組合等に於て常に努力を怠らない。養蠶は天明四甲辰年、外丸村に於て從事せしを本郡の嚆矢とする。十日町は機業、殊に麻布織、絹織の盛んな地だ。

區劃 郡内を分ちて二町二十ケ村とし、町村名は左の如し。

町　十日、千手

村　中條、下條、岩澤、眞人、橋、仙田、上野、吉田、貝野、外丸、上郷、芦ケ崎、中深見、下船渡、倉俣、田澤、水澤、六箇、川治、秋成

而して戸口の最も多いのは十日町で、六千三百人を越え、少いのは六箇村の七百餘人である。郡内總戸數は一萬五千六百四十戸、總人口は九萬五千五百人弱である。また郡の面積は六二・五九三方粁にして周圍一四六粁である。面積に於ては十六郡中第七位を占める。

名勝 中深見村にある七釜の瀧は、瀑水が數級に分れ、懸崖を落下する奇觀と壁立の岩名また掛理甚だ神巧にして國内屈指の景勝、また同村の小出鑛泉、上郷村の宮野原鑛泉、秋成村の結束鑛泉も知られる。

十日町

郡の中央、信濃川右岸に臨み、東は山岳を以て南魚沼郡と境する。本縣南部山間の大邑にして人口一萬を算し、明石縮の産を以て名高く、本郡商工業の中心地である。

往昔、南北朝時代は、南朝新田家の所領に屬し、後、上杉氏これに代り、會津領となり、近隣諸村を統べて十日町組と稱した。德川時代には諸侯の交代常ならず、以て明治維新に及び、明治六年新潟管轄となつたのである。

上越北線より岐れたる十日町線通じ、南方飯山鐵道と連絡する。縣道並に國道十號線通じ、東頸城郡松代、三島郡來迎寺及び長野縣飯山へはバスが通ふ。

堀ざかりをなじよして暮す
雪にうもれてまた仕事
花の咲くまで小半年

と十日町小唄にあるやうに、本町名物は雪と一千餘年の歴史を有する織物であらう。古來この地方は縮布の原料たる野生の苧麻を多量に産し、空氣は常に濕潤でよくその取扱に適し、これを晒白するには雪晒しにするなど、少からず自然の恩惠に浴してゐる。また積雪期間も約五ケ月の長きにわたり、その間碌々徒食せねばならぬ農家にとつては副業の尤なるものとして自然の發達を促し、寛文の頃には縞または絣を織り出す方法が發見され劃期的發展を遂げた。文政の末には絹縮

を産し、次で輕快優雅な透綾織を産する等、種々變遷を經て今日に至つた。現に明石、絽織、意匠白生地、御召、御代喜銘仙等が織り出される。町には郡を單位とする織物同業組合の事務所が置かれる

千手町

信濃川を挾んで十日町と相對し、東に田圃あり、西半は丘陵をなす。水口澤、中屋敷、東善寺、上新井、山野田、沖立鶴吉ほか七大字より成り、面積一・〇〇八方里、十日町へバスの便がある。

榮行寺、淨雲寺、長福寺、不動寺等の寺院あり、千手觀音堂は越後第十番の札所である。

古くは千手郷といひ、その驛市を中屋敷と呼んだ。明治維新の際柏崎縣に屬し同二十二年町村制實施にあたつて接續町村の分合行はれ、大正十一年舊千手町村と中野村とを合併して千手村を置き、その後、人口逐年增加し、鐵道省信濃川發電所、六日町區裁判所出張所、六十九銀支店等が設立され、商取引は活潑となり金融狀態良好を極め、商工業は年毎にその規模を擴張した。殊に鐵道省發電所はその設備最も進歩せる近代的且つ國家的工作にして、當地も玆に於て、昭和九年八月遂に町制實施の運びとなつた。

本町は右の如き幾何級數的發展を招來し、商工業殷盛なりと雖も、なほ住民の多くは農業にして、町當局では數年前より部落農區の助成、部落採種組合の助成紫雲英の栽培奬勵、各種試驗副業の奬勵などに努め、商工業及び交通の發達と並行的に、本町は全般的躍進の一途を辿つてゐる。

中條村

本村は相當古くより開けたところで、妻有郷大井田郷と稱し、七百三十餘年には木會義仲の領地であつた。後、新田氏の支領となり、更に大井田氏の領有に歸し、天正年間には、上杉家に屬し、慕政の頃は德川家直領にて、代官所の支配をうけた。かくて町村制實施の際、中條、尾崎、四日市、四日市新田、新庄を以て中條村と稱し今日に至つた。

住民の八割は農業に從事し、米繭の産が多い。また絹織物、竹細工、木製品の産は各々二万圓以上の年産がある。副業としての百合及び紫雲英の栽培は郡内の嚆矢をなした。

學校及び官衙團體としては、飛渡第一飛渡第二、新庄、中條、大井田の五小學校並に郵便局、停車場、巡査駐在所、傳染病院、信川組合三、その他組合四があり、交通の便よく、村は常に活氣に溢れてゐる。

下條村

郡の北端に位し、東方は山脈を以て北魚沼郡と境し、西方は信濃川に臨み、南は中條村、北は岩澤村に隣接する。

地勢は村内東方三分の二は山岳地帶にして漸次西方に低く、平坦なる耕地は村の中央を流れる貝野川兩岸と、信濃川の

流域並に南北の村境を洗ふ楢澤、飛渡兩川の沿岸にある。

生産物の主なるものは、米を主位に、蠶繭、桑葉、蔬菜、苗木等である。産業組合は全村を區域とし、農業倉庫一棟を有し、組合員約五百七十人である。

教育機關としては下條尋常高等小學校及び青年學校がある。

上組、上新田、寺澤新田、村山新田、東下組、下組、中新田等の部落より成り大字上組には村役場及び無集配三等郵便局がある。交通は鐵道及びバスの便ありて良好である。

岩澤村

本村は東西一里十町、南北三十町あり郡東北部の關門にして、信濃川に臨み、川に沿うて國道が貫通する。南に下條村あり、東南は山岳迫り、分水嶺を以て北魚沼郡と堺する。

戸數四百餘、人口二千三百を越え、住民の多くは農蠶業を營み、米、桐材、木炭、繭、醬油の産がある。村民は勤儉精勵、自治體の完備見るべきものあり、殊に田畑の開墾事業は他の範とせられる。

建武元年、新田義貞の臣栗田左近頭が本村地内に築城せしことあり、その後、幾多桑滄の變あつたが、往昔より岩澤村と稱してゐたことには變りがない。明治二十二年町村制實施の時、下條村のうち豊久新田を割き加へて十四部落を以て一村とし今日に至つた。

眞人村

信濃川の西岸に位し、岩澤村と共に本郡の北門を扼するところで、西北二面には山岳を負ひ、刈羽郡及び北魚沼郡と境界を接する。

昔時より獨立の一村にして、町村制施行後も分立併合等のことなく、北魚沼郡界雪峠の傍にある山村である。

面積一・四九八方里にして、産物は米麥、繭及び木炭を主とし、いづれも相當の額に達してゐる。縣道は村内を通り、十日町線越後岩澤驛へは僅かに二十町、交通の便は悪くない。

小學校は眞人尋高（七學級　若栃、北山各尋常（共に二學級）の三校を存し、分教場を二ケ所に置き、教育施設は宜しきを得、青年團、在郷軍人分會等團體と相提携して村教育の充實向上が計られ、成績良好である。大字芋坂の雪峠は戊辰の役の古戰場である。

橋村

眞人村の南に接し、東は信濃川の巨流をのぞみ、東半は地勢平坦にして耕地桑園となるも、西半には丘陵起伏する。仁田、野口、木落、寺ケ崎、長井新田、上村新田を含み、面積〇・七八九方里、南は上野村に、西は仙田村に、東は下條村につゞく。

准后道興回國雜記に、柏崎より出て魚沼郡を横ぎり上州揚原に至る紀行あり、中に本村大字木落の名が見える。長井新田は與治右衛門氏、上村新田は上村藤右

衛門氏の開拓といはる。縣道は村を縱貫し、小千谷町、十日町へはバスが通ひ、交通の便良好である。

産業方面では産米品種の統一を行ひ、販賣を統制して良成績を收めてゐる。更に有畜農業も普及せられ、養豚は殊に盛んである。また紫雲英の栽培は郡下第一の稱がある。その他百合の栽培、藁工品の製産が、近時その産額を頓に增大しつつある。

小學校は橋尋常高等小學校たゞ一校である。農業青年學校を併設する。在郷軍人分會、男女青年團、婦人會等では、進んで村民の指導誘掖に當ると共に、率先銃後の援護に精進努力してゐる。

また村内社寺には諏訪神社、藥師堂、觀音堂がある。

仙田村

郡の西北部にありて千手町の西につゞき、村の西は刈羽郡、南は東頸城郡との境界をなす。宇高倉、霧谷の二部落は桑名藩御預に屬したことあり、その東南は山地である。他の諸部落は悉く德川の直轄地であつた。

東西一里十町、南北三里二十町、面積二・六〇五方里あり、古來村治優秀、模範村として知られ、十二ケ條から成る村訓がある。修養團體にも少年の學友會、青年の青年團、壯年の農友會、戸主ばかりの新年會、老人の行座會等がある。村農會、在郷軍人分會、婦人會の活動も盛大である。

村社新潟海川本神社は祭神建御名方富尊で、境内百二十坪、祭日は八月二十六七の兩日である。相國寺は松林山と號し長安寺六世量室存應和尚の開山、境内千百五十坪に及ぶ。その他木股地藏、桝形城址等がある。

上野村

本村は往昔新田義貞築城の地にして、後、上杉氏の臣上野中務大輔長安これを繼ぎ、白川領に屬した。明治維新後、一時柏崎縣に入り、次で新潟縣管轄に變じ同二十二年、自治制實施と共に上野村と稱し今日に至つた。面積〇・五四方里あり、縣道は村の中央を走り、東頸城郡に通じてゐる。

産業は、山岳地帶は植林よく行はれ、信濃川沿岸には田畑よく拓け、地味肥沃で農産に富む。農家の指導は村農會が主體となり、部落農區を六區に分ち、品種の統一、販賣の統制など頗る好成績を示し、各農區活動も良好である。更に農會では農會時報を發行し、指導機關としてゐる。副業には養豚及び藁製品が多く、副業經營の合理的な研究等も着々進められてゐる。

村内長德寺は郡下第一の名刹にして參詣者が多い。

吉田村

本村は、明治三十五年四月、舊吉田村鎧島村、眞田村の三村を合併して成り、十一部落を含む。舊吉田村は稻葉、山谷

小泉、樽澤の四部落より成り、舊鐙島村は北鐙坂、南鐙坂、高島の三部落、舊眞田村は眞田、鉢中平、中平、名ケ山の四部落より成る。地積二千九百八十町歩、人口約三人を算す。

主要産物は米、大豆、小豆、粟、稗、繭等の農産物である。部落農區は十二に分ち、從來の金肥が殆ど自給肥料に代つたことは本村農業の特記さるべきものである。副業としての竹工品、柿栗等の産が多い。吉田、鐙島、眞田、名山に小學校を置き、各校に青年學校が併設され、兒童及び青年男女の教育狀態は他村に比して向上の域にある。

貝野村

建久年間の記錄によれば、本村以北千手町に至るまでを總稱して貝野鄕と呼んだといふ。明治五年七月、區制施行の際馬場村と共に第九大區小七區に編入せられ、同十二年、區制廢止と共に貝野村と呼ぶに至つた。鄕名から出た名である。往古、姿地内に毛地と呼ぶ一部落あり、今日の孟地であるといふ。嘗て島とも稱し、宮中より姿に至るまでの沿岸一帶の平地に數十町歩の良田があつたが、文久の頃安養寺島を、慶應三年に堀の内島をいづれも洪水のため流失し、往時の面影を存するは僅かに中島あるのみである。面積二方里に方び、人口二千五百人をかぞへる。

産物の主なるものは米、木炭、繭、鯉等で、副業に養蠶が最も盛んである。

教育機關及び官衙としては貝野尋常高等小學校、青年學校、役場、巡査駐在所等がある。

外丸村

本村東西一里二十五町、南北三十町、面積一・一三九方里あり、前方一帶は信濃川流域にのぞみ、背後は峻嶺高峰を負うてゐる。飯山鐵道外丸驛及び鹿渡驛を有し、信濃川流域の山村とはいへど、交通は比較的便利で、西北山中の雁ケ峯峠を經て東頸城郡との間に縣道通じ、バスの便がある。産業方面にも、文化方面にも進歩發達の點著しく、米繭を主産物とし、年生産總額は二百萬圓を突破する豪勢さである。

沿革を按ずるに、往昔、南北朝時代には南朝の忠臣新田氏に屬し、當地城峰の豪族里見氏の麾下にあつた。後、上杉氏の所領となり、明治維新に及んで、小千谷民政局支配柏崎縣に編入され、同六年新潟縣管轄に移り、二十二年自治制を施行して今日に及んだ。

社寺には村社矢放神社、曹洞宗久昌寺同善玖院がある。

上鄕村

本村は、往昔、津張莊大平井鄕と稱し維新前は幕府の直轄地であつた。町村制實施の際は寺田、上鄕、宮野原の三ケ村に分れ、明治三十四年十一月これら三村を合併して上鄕村となつた。國道も縣道もよく開け、交通至便である。

産物は木材、米、繭、下駄等にして、農産物の增産、開田開墾等には當局者が常に留意してゐるが、本村は地勢一般に高く、山林地帶多きため、林野産物の向上策が殊に重視され、製紙の發達に意を注がれてゐる。また最近は家畜の飼育、肥料の自給が奬勵され、この方面にも相當の成績を擧げてゐる。すでに昭和九年農業倉庫も完成し、當局の指導と村民の自覺は産業に劃期的發展を齎した。

小學校は三校あり、各校に青年學校を併置する。官公衙には村役場、郵便局、營林署出張所等あり、また銀行支店も置かれてゐる。

蘆ケ崎村

本村は郡内第一の高原地帶を占め、信濃川水面より八百尺高く、海拔一千三百五十尺である。毎年秋十一月より翌年五月までは降雪期のため、交通は至つて不便といふべく、自轉車が交通機關の最たるものである。面積一・五〇四方里、人口約三千六百人をかぞへる。

德川時代には松平光長の領地たりしところで、寛文三年高田領となり、明治維新後、町村制實施に際し谷内、芦ケ崎、赤澤を以て芦ケ崎村とした。

産物の主なるものは米及び蔬菜にして最近は養蠶、養畜の業も相當發達して來た。昭和七年に更生指定村となり、當時樹立せる計畫は殆ど實行されて最初の目的に近い實績を擧げた。殊に産業道路の開通と青年教育の刷新に見るべき點が多い。教育の重視は、實に、本村の傳統的村是である。ために小學校、青年學校の成績の良好なることは郡下にも有數と稱される。

なほ團體としては産業組合、村農會、養蠶組合、在鄕軍人分會、消防組、青年團、婦人會その他があつて産業の發展、教化の徹底、社會奉仕の實踐にあたつてゐる。

秋成村

郡の南端に位して長野縣と堺し、中津川の急流に沿ひ、地勢高峻、峻崖高峰屹立する。秋成、結束、大赤澤、穴藤分の四大字より成り、面積三・九一七方里に及び、飯山鐵道外丸驛へ一里半、自動車の便を有す。

壽永二年の昔、源氏に追はれた平家の一族が逃れてこの地に住居して以來部落をなすに至つたもので、その後、天和二年及び寶曆七年の二回に亙つて檢地のことあり、昔時は御天領にして金納地であつた。多年にわたる幾變遷を經て後、明治の御一新に至り、同二十二年、自治制を施行した。

米、木材、蔬菜を主なる産物とし、年生産總額は約二十萬圓に上る。

また村内には結束鑛泉、馬龍、猿飛、不動堂等の名勝があり、杖を曳く者の數も多い。

中深見村

東西は一里十町、南北は三十五町の本

村は、背面は苗場山脈の連峯によつて自然の丘陵がつくられ、地は漸次傾斜し、部落の所在は嶮岨相半ばしてゐる。

地勢の關係上、産業の發達は遲々たるものであつたが、村民の一致努力精勵の結果は、近來、面目大いに改まり、殖産上の進歩動もすれば、隣邑を凌駕せんとする形勢を示すに至り、桐材、透綾織の産多く、産業組合、蔬菜組合等の組織あり、相聯携して産業の發達に一層の拍車を加へてゐる。また嘗て納税成績優良村として表彰されたことがある。

天文年間、上杉謙信の所領であつたが後、幾變遷を經て明治維新に至り、新潟縣の管轄となり、同二十二年村制を實施して今日に及んだ。

村内には龍源寺、大龍院の名刹、小出鏻泉、田代の七ツ釜瀧の名勝がある。

下船渡村

土地概して平坦なるも、南には丘陵起伏し、西方一帶は信濃川に臨み、牛津、清津の二川がこの間に介在する。これより北方數里は中之島の稱がある。國道は村の中央を貫通し、大割野區は人家稠密して小市街をなす。郡中屈指の物産の集散地たると共に、東洋著名の發電所ありて活氣を呈す。新潟市へ二十九里、飯山鐵道外丸驛へ一里、十日町、飯山へはバスの便がある。

鎌倉時には城氏と佐々木氏が交々領主となり、その後室町時代には上杉鄰虎、同景勝が相次で領すること二十餘年、爾後變遷を繰返して明治維新に至り、小千谷民政局柏崎縣支配より新潟縣管轄に移つた。大字大割戸は郡内有數の農産物集散地である。

東西一里十一町、南北三十三町、面積〇・八〇四方里あり、村には官公署、銀行支店、産業團體の數が多い。

倉俣村

本村は縣道を以て小出溫泉に通じ、猶清津川沿岸、深見名の名勝七ツ釜に至る里道の關門に當り、飯山鐵道田澤驛へは一里半である。東北は清津川の溪流に沿ひ、中央を釜川が北流し、沿岸の耕地から獲れる米穀は品質佳良を以て聞え、また本村は織物の産地である。

往古の倉俣郷本幹にして、和銅年間の開發なりといふも詳かでない。倉俣城址があるが、城主は不明。明治二十二年、下船渡の一部小出新田を割いて十一部落を合併し倉俣村と稱した。現區域は東西二十七町、南北二里七町、面積四・七一三方里である。

村内小松原山の半腹には七ツ釜の瀧の奇勝がある。直下三十丈ばかり、瀑布數層に分れ級をなして落下する。兩岸は巉岩削れるが如く、苔滑かに松は綠にして風景絶佳、實に縣内屈指の名瀑である。下流は釜川となる。

田澤村

信濃川の東岸に沿ひ、西南は清津川の溪谷にのぞみ、東に當間山及び高津倉山

の嶮嶺を負うて西北に傾斜面を作る。地勢概ね山地なるも、信濃川沿岸に二百餘町歩に亙つて耕地整理されたる田圃連り住民は農業を主とし、莫産、木炭の副業も盛んである。

村内に桂城址あり、清水采女がこれに據つたといはれる。舊幕時代は德川氏直領にして、明治六年六月より新潟縣管轄となり、同十二年に至り二十三部落を合併して田澤村と稱し、自治制自施の際、これを引繼いで今日に至つた。

東西は一里十六町、南北は二里十町、面積二・五七方里あり、交通は縣道が村の中央を貫通して十日町へバスが往復する。また飯山鐵道沿線にして田澤驛を有し、交通至便である。

水澤村

本村の東は六箇村及び南魚沼郡石打村に接し、西は貝野村、吉田村に、南は田澤村に連り、北は川治村に界する。面積二方里、人口六千七百人である。

産業は農業最も盛んにして、農産總額二十五萬圓に達し、そのうち米が第一位を占め、甘藷、蕎麥、大豆等がこれに次ぐ。副業の筆頭は蠶繭である。その他木工品、藁工品、清酒の産も尠くない。産業組合は、最近に至り業績頓に顯著なるものあり、殊に信用部に於ける貯金の增加は著しい。

教育機關としては尋常高等小學校、尋常小學校、分教場二、實業青年學校等があり、就學率、出席率は近郷に見ない好成績を示してゐる。

村内の天然記念物及び名勝としては、猫石、古城址、黑澤鄙蹟原等がある。猫石は隣村石打村に面する當間山の中腹にありて、格恰も猫に似たるがために此の名がある。古城址は馬場の北隅にあり、約一千坪の境域にて隍跡なほ存し、口碑に北大井殿の居城であつたと傳へられてゐる。

六箇村

郡の東端に位して、山嶺を以て東は南魚沼郡鹽澤村に連接する僻地の小村にして、西南は水澤村に隣接する。

昔、建武年間、新田義貞の臣が當地に築城したと傳へられる。後、羽根川形部長尾義景これを織ぎ、以來羽根川郷に屬し、六部落を合して六箇村と稱し、明治維新に至つた。面積一・〇〇九方里にして、有租地八百町歩に餘り、耕地は水田約百五十町歩、畑地約百町歩あり、山林は五百三十町歩弱である。米と繭を主要産物とする。村には曹洞宗祇園庵、二ツ屋池、謙信通路の遺跡たる秋葉山城址等の名所舊蹟がある。

十日町驛へ二里、本村は、往昔より關東へ出づる三國峠と稱する要路に當れるを以て、當時より人馬の往來頗る頻繁を極め、道路大いに開鑿せられた。依つて交通は至便である。

川治村

信濃川の右岸にありて十日町の南に接

壌し、十日町と共に透綾織の名産地として著聞する。東には山嶽連亙して原野山林が多い。川治川は八箇川とも云ひ、羽根川と相並行して信濃川へ入り、この邊を通俗に羽川郷と私稱する。

当本、川治、北新田、高山、八箇、城古の六大字より成り、面積一・二七九方里、十日町に近接するを以て交通の便は甚だ良好である。

刈羽郡

地勢 西北一帯は海に臨み、東は三島郡、南頸城、魚沼の諸郡に境し、西南東は山嶺相連り、自ら一區劃をなし、中央以北の地は、鯖石川、別山川等の流域にして平野多く、土地稍々齊肸、農七商工漁各一の割合である。

地理學上、中下越の西南部に位し、不規則なる矩形をなすを本郡の地勢とす。縱凡そ七里半、横凡そ六里、その面積二十一方里五分である。

土地は有租地千四百五十町歩にして、耕地は田二百八十餘町歩、畑二百四十町歩弱であるが、山林は多く八百九十町歩に近い。産物には前記透綾織と共に米繭がある。

川治尋高（十一學級）、八箇尋常（二學級）の二小學校を有し、青年學校も置く寺院には天台宗大泉寺がある。

沿革 上代の事は記するに由ないがこゝに王朝時代よりの領主沿革、降つて明治維新後、管轄廳沿革を略記すれば、

〔齊明の朝〕 阿部比羅夫

〔文武の朝〕 威奈大村を始として中世以後、平維茂の裔城資長、長茂、共に越後守となる。

〔鎌倉時代〕 右大將源頼朝天下を一統するや越後守安田義賢より元徳二年越後守北條仲時に至る十四世。

〔南北朝時代〕 越後守新田義顯南朝の命により赴任せしより、貞治三年、越後守護上杉憲顯まで六世。

〔足利時代〕 越後守憲榮より上杉景勝まで六世

〔豐臣氏時代〕 堀秀治、同忠俊。

〔德川時代〕 松平忠輝をはじめとし桑名城主越中守定敬に至る十八世。

幕末頃は幕府領並に椎谷藩本管、桑名與板、上之山諸藩の支管及び旗下の士の知行所であつたが、明治維新後柏崎縣及び椎谷縣の二管轄に分れたが、明治六年新潟縣となり今日に至つた。

區劃 明治二十二年町村制實施の時は四ヶ町六十七ヶ村となつたが、同三十五年更に新町村區改正ありて三町二十九ヶ村となり、その後部分的に合併が行はれ、現在は左の三町二十五ヶ村である。

町村 柏崎、石地、高濱

鯨波、高田、上條、野田、鵜川、石黒、高柳、南鯖石、上小國、中里、七日町、千谷澤、武石、横澤、山横澤、中鯖石、北條、田尻、北鯖石、西中通、中通刈羽、二田、内郷、荒濱。

産業 生産總額は二千百八十數萬圓に上り、郡市別の第七位にある。そのうち鯖産額が三分の一以上を占め、農業がこれに次で六百二十餘萬圓に達する。作付反別は開墾または耕地の整理によつて年々増加の傾向を示してゐる。

鯖業生産は石油の採掘精製を以てその最たるものとする。産地は二田、内郷、刈羽、高濱の町村一帯にて、總稱して西山油田といふ。工業生産品としては織物鋼鐵器、漆器、木工品、瓦、玻璃、紙類等その種類少なからざるも、産額は六百二十萬圓にして農産物と殆ど差がない。

商業關係は、往時柏崎港を中樞とし、殆ど勢力を此一ヶ處に集中せし觀があつたが、北越鐵道及び越後鐵道開通以來形成一變し、海運の便と相俟つて縣外諸地方と密接なる取引關係をなすに至つた。而して移出貨物は米、石油、大小豆、織物、果實、鮮魚をその主なるものとし、移入貨物の主たるは外米、肥料、太小麥茶、綿、砂糖等である。

水産は五万三千圓、林産二万八千圓の年産で云ふに足りない。

名所舊蹟 古城址には赤田古城址、刈羽城、寺尾城、勝山城、刈瀬城、長嶺城、北野城、庵入城、細越城、山住城、芋川城、古町城をはじめ、山入城、明見城、新保城、武石城等、總じて五十をかぞへ、町村數の約二倍である。古戰場は鯨波、中通、石地、椎谷、千谷澤の各地にある。

その他社寺名所として柏崎神社、飯桶山香積寺、金砂山閻魔堂、大洲村の極樂寺、豊洲濱、番神岬、下宿浦、小松島、縣社三島神社、茨目の肩賀理松、中鯖石の不動瀧、上小國の大塔塚、横澤の瑞音院及び春日神社、中里の日吉神社、七日町村の古塚、比角の羽森神社、團子山の桃林、西中通の土合拘留孫佛、刈羽村の桃林、二田物部神社、内郷村峠の藥師、青山稻荷神社、椎谷觀音、石地の懸橋寺など有名である。

柏崎町

日本海沿岸に位する本郡の首邑にして長岡市と共に中越の名邑である。日本石油の大製油所あり、新津、長岡とともに石油都市としても名高い。

近世、桑名松平氏が陣屋を置いたところで、その邑六萬石と幕府公領五萬石を兼治した。天保六年には上州館林の浪人生田萬の門弟を糾合して陣屋を襲ひたる騒動あり、その所爲は大鹽平八郎の亂に似てゐる。號して柏崎騒動といふ。明治戊辰の役には、桑名藩主松平定敬が伏見に破れてこの地に走り、會津と連携して東軍に抗したるも敢なく敗けた。後、この地に柏崎縣廳置かれ、更にその後五年にして新潟縣となり、郡役所が設置された。舊柏崎町を中心として、大正十三年には大洲、下宿の兩村を、大正十五年には比角村を、昭和三年枇杷島村を併せ、大柏崎建設は徐々に進められた。

北面には滄溟の日本海を隔てゝ遙かに佐渡と相對し、面積〇・六九方里あり、越後の柏崎として一時は縣廳の所在地にまで殷賑を唱へられた本町も、數回に亘り全町を嘗めつくした火災のため、遂に長岡に擢んでられ、高田に先んぜられ、三條に後れてしまつた。最近、町民熱誠の努力と共に急速發展の緒につき、有名商店等競つて新樣式の改增築に着手し、街衢の面目一新した。

菓子類を筆頭に、工業は斷然物凄き隆盛を見せ、絹及び絹綿織物、清酒、製糸等いづれも十萬乃至數十萬圓の年產あり醬油、味噌、うどん、麻眞田等がこれに次ぐ。また原油の產あり、揮發油、燈油輕油等の產も多い。

行在所址、柏崎港、海水浴場、劒野山團子山桃林、天然水族館等は名勝として有名である。

石地町

郡の北端三島郡界に位し、柏崎町を距る五里、古來北國街道の一驛なりしが、近年鐵道敷設されて以來、交通の中心が移動し、反つて衰微の狀にある。

石地、尾町、大津、大崎、甲田、濱忠等の大字を含み、面積〇・九三三方里に し東西三十町、南北一里二十七町あり、鐵道越後線石地驛を置くと雖も、市街からは一里も離れてゐる。

戊辰の役、五月十五日に柏谷と共に官軍に取られたところで、明治二十四年町制を施行し、同三十四年太田村を合併して今日に至つた。

町には銀行支店、製糸場及び尋常高等小學校二、尋常小學校一があり、米、海產物、生糸の產が多い。

名勝には海水浴場、綱目ノ波、長岩の神跡、弘法大師自彫地藏等あり、社寺には三島石部神社、高善寺、大聖寺ほか一社六ヶ寺がある。

高濱村

背面三方は青山に掩はれ、前面は日本海にのぞんで砂汀相續き、附近海岸は海水浴に適し、觀音崎の勝景がある。越後鐵道開通前は、北國街道筋なりしも、今は寂寥として通行少く、大字椎谷は觀音馬市ありて、各國より馬匹を索き來り、群集來往し、數千頭の賣買あり殷賑繁華を極めたといふけれど、今は馬市はあるが僅かに昔時の名殘りを止めるに過ぎず繁華の夢を戻すよすがもない。附近には西山油田がある。

近世、堀氏の陣屋のあつたところで、明治二十三年宮川町と稱したが、同三十六年これに椎谷、大湊の二村を合併して高濱村と稱した。面積〇・三八方里、越後鐵道西山驛へ一里あり、バスが通ひ、交通の便良好である。

町には警察署、區裁判所出張所、郵便局、高濱圖書館、銀行支店、鄕社宮川神社などがある。

鯨波村

米山北麓の海岸にあつて、郡の西端に

位し、地勢は南に長く、米山の山脚は、海に突出して塔ヶ原等の佳景を生み、砂汀彎曲、海水浴に適し、夏季は浴場が設けられる。海蝕の段丘崖にして、或は岩礁として海中に點在し、稀に見る景勝地である。信越本線鯨波驛あり、なほ柏崎町よりはバスが通ずる。

回國雜記に

柏崎を過ぎるに秋風いと烈しく吹ければ

おしなべて秋風吹けばかしは崎
いかゞ葉もりの神は住むらん

あふみ川かさ島など打過て鯨波といへる濱を行けるに、折節鯨の潮吹きけるを見て

わきてこの浦の名にたつ鯨波
くもる潮を風も吹くなり

云々と出てゐる。名勝には、明治天皇北陸御巡幸の際の御駐蹕址たる御野立所がある。

往時は米山峠の宿場として榮えた。鯨波妙智寺觀音堂は、當國巡禮第四番の札所である。戊辰の亂に、桑名藩兵の官軍を拒んだところだ。面積〇・九五方里、海產物の產が多い。村にはまた郵便局、產業組合、漁業組イ、長昌寺、瀧泉寺などがある。

高田村

郡の西部、鯨波村の東南に位し、信越線柏崎驛より南へ約二十五町、西南に米山の山勢迫り、南端は上條平野に續き、村の中央を鵜川が貫流し、その流域に耕地が拓けてゐる。下方、上方、横山、藤橋、堀、南下ほか四大字より成り、東西一里十五町、南北一里十町、面積一・〇四六方里を有し、明治三十四年、日高、豐田の兩村を合併して出來た村で、村內に黑瀧城址あり、府中の上杉、上條の上杉と並び稱せられたる上杉氏の居城にて天正の末頃廢城となつた。社寺には村社鵜川神社二、無格社二、三諦寺、長泉寺摩尼珠院、滿願寺、龍雲寺等あり、摩尼珠院は越後國七番の札所である。縣道縱橫に貫通し、柏崎町へ一里、バスが通ひ交通至便である。

世帶數六百六十餘、住民の大部分は農業に從事し、五段未滿を耕作するもの百餘戶、一町未滿二百二十戶、二町未滿二百七十戶である。米、園藝物、繭、鷄卵大豆、割木、ボイー、味噌等の產殊に多く、落葉拾集に依る利益も五千圓を突破する。

また米は年產一萬四千餘石で、銀坊主中生が最も多い。藁工品と野菜類は共同販賣され、他は個人販賣である。

高田尋常高等小學校は學級十二、分教場を有す。學校の組織設備の改善充實は近來頓に良好である。一般公民教育としては國民精神の振興、協同精神の徹底等が主眼とされる。家政更生相談所、農產物品評會、方面事業助成會などは本村が有する特殊施設である。また豐村保健の合理化等の社會施設も當を得てゐる。村民は豫算生活を勵行し、時間を嚴守醇風美俗の發揚に努めてゐる。

上條村

高田村の南に隣り、西に米山聳え、鵜川は村の中央を貫流する。佐水、宮窪、上條　山口、古町、ほか五大字より成り面積一・六二二方里、縣道あり、柏崎町へは二里にして達す。

古くは上條谷の中心地にして、上條上杉氏の本領であつた。上杉定實まで當地に居住し、二七四萬石高と傳へられる。北川原の地は家中屋敷にて番城となつてゐたが、百姓一揆の時、城は破却されたといふ。

村内社寺には村社熊神社、同物部神社同熊野神社、無格社一、泉藏院、大光寺普傳院、不動院があり、合性寺は相州藤沢遊行寺末、慶尾寺は越後第八番の札所として有名である。

米の生産年一萬餘石を筆頭に、里芋、馬鈴薯、桑葉、大根、繭、鷄卵、薪を主要産物とする。産業組合では數年前から紘織を保證責任に改め、金融疎通の改善米穀の統制販賣、肥料配給の統制等を行つて居り、目下、貯蓄の奬勵と無駄の廢除に大童である。この他在郷軍人分會、消防組、男女青年團、産組青年聯盟、女工保護組合、尙武會、教育會、婦人會等では有能の士を揃へて活動し、各種施設も宜敷を得てゐる。また昭和七年秋冬の候、所謂匡救土木事業として、農村振興六大土木事業を村直營を以て起工し、上乘の成果を收めて竣工したことは特記すべきことがらである。

野田村

米山の東部に位し、鵜川は本村の東部を掠めて上條村に入る。中部は平坦にして、部落はこゝに蒐る。野田、田屋、宮川新田、木津の四大字を含み、面積一・一九四方里である。村内には村社鵜川神社、覺照寺、願龍寺、稱名寺その他の社寺あり、柏崎町へは二里餘、バスにより交通稍々良好である。

米を主産物とし、産米增收の方法として八部落農區が、共同で採種圃を經營するほか、競作會、堆肥增産奬勵などによつて實績をあげてゐる。養鷄、養兎、養豚は相當盛んにして、約十年前より組合組織のもとに盛大に飼養しつゝあり、殊に鯉は年額一千貫目以上を他に移出するといふ隆盛を示してゐる。柿、栗等は山間に野生のものを共同で採取し、また共同で販賣し、收入をあげてゐる。藁工品としての製繩は相當さかんで、これも組合を設けて確固たる經營である。

昭和八年には四萬圓餘の工費を投じて小學校舍を增築した。青年學校の成績は補習學校時代からその優秀を謳はれたほどで、本村の教育は縣下の誇りである。青年團、婦人會等各種團體は名實共に郡下の範である。村内に政黨色全くなく、圓滿平和な村である。

鵜川村

本村は女谷、市野新田、清水谷、谷川新田、折居の五部落を合併して形成せる

農村にして、四圍山嶽に掩はれ、鵜川は東方黑姫山麓に發し、大字清水谷を經て北に下り、野田村に入る。古くは女谷村及び折居村の二ケ村を併せて單に鵜川と稱してゐた。大字女谷及び市野新田のみは平地にある。

面積二・二六方里、戸數四百九十、人口二千九百をかぞへ、米の産額が最も多く、これに次では副業としての繭及び林産物である。

村内を縣道通じ、柏崎町へ三里半、途中バスの便あり、車馬の往來も頻繁で、交通は比較的便利である。警察は柏崎署管内に屬し、村内には郵便局、圖書館、産業組合、森林組合があり、寺院には淨圓寺、專德寺、大慈庵を有し、小學校は一校、兒童の學業成績及び健康狀態は極めて良好である。

石黑村

郡の南端に位し、東頸城郡との境界をなし、黑姫山、鷲巢山に抱かれたる山村にして、鯖石川の水源地である。明治二十二年、町村制實施以來區劃に何等の變更なく今日に至る。

面積〇・八五一方里。上杉謙信の見張所たりし城山の舊址を有し、こゝからの眺望はすぐれてゐる。柏崎驛よりは六里半、安田驛よりは七里、頸城鐵道浦川原驛よりは五里、いづれも途中よりバスの便がある。

四面高山に掩はれた交通不便の地であるため、從來産業の奬勵發達を幾度か企劃しても牛步遲々として進まざる狀態であつた。しかるに昭和九年、産業改善の大綱決定と同時に全村民の協力を强調して以來、漸次向上の曙光を見、殊に部落農區の活動旺盛にして、採種圃の經營、堆肥の增産、柿及び栗の栽培、鯉の養殖等に顯著な成績を示して來た。全村民の約九割は産業組合に加入し、組合精神の普及徹底せること郡下第一の評がある。

教育は一村一校主義を以て進み。高等科の三年制創始は縣下の嚆矢である。青年學校が併設される。青年團では智德體の三育のほか辯論に重きを置き、女子青年團では進んで畑作に從事し、勤勞奉仕に精勵してゐる。

高柳村

各村は明治三十四年十一月一日、元岡田、岡野町、高尾、漆島、荻ノ島、門出柄ケ原、山中の八ケ村を合して高柳村と稱し、今日に至つたもので、高柳は古くからこの郷の名である。

村は郡の最南端に位し、縣道松代柏崎線に沿ひ、鯖石川村の中央を貫流する、西黑姫山、男山を負ひ、東城山抱き、谷間に介在し、平地は狹少である。柏崎町を距る約一五七粁、北は大字岡田により南鯖石村に接し、西黑姫山脈を分水として北方より順次上條、野田、鵜川、石黑の各村と境し、東は八石山の餘脈により中魚沼郡仙田村に、南は鯖石川を隔てゝその水源地たる東頸城郡松代村、山平村に接する。東西八粁餘、南北最長九・三

軒、面積一三方軒である。

最近示すところの戸數は一千六百餘、人口八千五百餘、その一千五百餘戸は農業による生計者である。

南鯖石村

本村は郡の南方、鯖石郷の中部に位する、面稱二千二百十一町歩餘、中央を鯖石川が貫流する。柏崎町を距る一七・五五粁、安田驛より九、七五粁、北は森近笹崎部落によつて中鯖石村に接し、南部は大澤を境に高柳村に連り、東部は八石山の餘脈を隔てゝ小國郷、魚沼郡仙田村に接し、西部は黒姫山脈によつて上條郷に境する。

本村は明治三十四年十一月一日元森近石曾根、山室、大澤の四ヶ村が合併して南鯖石村と稱し、今日に及んでゐる。縣道は柏崎松代線と石曾根小千谷線との二線あり、前者は安田驛より高柳村を經て東頸城郡松代村及び松ノ山温泉に至り、後者は上越線小千谷驛に達する。

戸數九百餘戸、人口四千八百餘人、小學校の外に公立青年學校南鯖石專修農學校の設けあり、村社一、無格社八、寺院五がある。

上小國村

郡の東南端に位し、東西南の三方は山嶽に圍まれ、中央に僅かに平野を有するのみで、昔の小國郷の一部である。澁海川は村を南北に貫流し、川を挾んで十二部落が點在し、西に八石山の峰巒走り、面積二・三四四方里である。

明治三十四年、增田、森光、結城、法末の舊四ヶ村を合併して上小國村と稱したもので、信越線塚山驛へ二里、縣道四方に通じ、塚山驛及び小千谷村へはバスの便がある。

神社は無格社四社を有し、寺院には長福寺、眞光寺、眞福寺、清照院等あり、眞福寺は地方の名刹として聞え、仁王尊は木喰五行上人の作である。

産業は農業を以て第一となし、商工業がこれに次ぐ、副業としての豚、鶏、兎鯉、蠶の飼育があり、また百合、柿の栽培、莚繩類の製造があり、昭和七年、縣主催の産米改良品評會に於て一等賞を獲得したことがある。

小學校は四校あり、昭和九年には長くも侍從武官の御差遣あつて親しく本村青訓御親閲の光榮に浴した。その後身たる青年學校の成績は勿論優秀である。學校を通じての社會青年教育も徹底したものである。

中里村

上谷內新田、新町、相ノ原、二本柳、法坂、桐澤の六大字より成り、澁海川の東に位し、その東南の山峯は北魚沼郡との境界をなす。

古くは小國郷の一部に含まれてゐた。小國郷とは卽ち本郡東部なる澁海川の中流兩岸に亘る郷域にして、小國谷と呼ばれたところである。昔、この谷に豪族小國氏あり、また大國にもつくり、當國の

名家なりしといふ。

面積〇・八八七方里。信越線塚山驛へ一里半、小千谷町へ二里、いづれも縣道を通じ、バスの便がある。

村農會が中心となり、六大字別に設けられる部落農區を指導して堆肥競作、品評會を行ひ、また部落農區では各別に採種圃を持つてゐる。副業には鶏、兎、鯉の飼養、柿、栗の栽培、莚の製造などが行はれ、養鶏組合、養兎組合等が組織されてゐる。農事智識普及のためには農業講習會や映畫會が時々催ほされる。

産業組合では信用貸付及び日用品購入を主なる事業とし、貸付金回收不能のときは皆無である。最近は貯金の增加が目に立つて著るしい。

青年學校は昭和八年縣から表彰を受けた。青年團は公共事業に奉仕し、農業視察や心身鍛錬に重きを置いてゐる。

七日町村

本村は大字を合併せざる一部落一村の自治區にして、澁海川の東にあり、中里村の北につらなる。古くは小國郷に屬した地域だが。村名七日町の由來は詳かでない。信越線塚山驛へ一里餘、バスが通じてゐる。社寺には諏訪神社、金剛院、寶珠院、養智院等あり、面積は〇・二八二方里に及ぶ。

戸數二百戸に滿たない小村で、耕地は水田が多く、畑地が少い。主要物産は繭と米である。大正八年、水車機を設備して用水を開いてから、産米の增收見るべきものあり、また村農會技術員指導の下に採種圃を經營し、堆肥苗代の競作品評會を開き、更に紫雲英を栽培して自給肥料の實を擧げてゐる。

一方、蔬菜栽培が奬勵されて自給自足の域に達し、最近では更にこれを村外にまで移出せんとしてゐる。また綜合副業組合のもとに、養兎、養鶏が隆盛を極め柿、栗の增殖等も見るべきものがある。家內工業として製紙も行はれる。

産業組合では信用事業に重點を置き、貯金は相當巨額にのぼる。

小學校は一校、七日町尋常小學校と稱する。青年學校は入所率滿點である。青年團、婦人會、女工保護組合、いづれも公共に盡してゐる。

千谷澤村

所謂小國谷または小國郷と稱される地方の最北端に位し、明治二十二年自治制施行され、數ヶ村分合の後、現區域となつたもので、現在、千谷澤、澤新田、下新田の三大字を含み、面積〇・八六方里である。小國郷の入口ともいふべき要路にあたり、三島郡塚山村と接續し、東南より丘陵蜿蜒起伏して村南を走り、北方澁海川に沿うて平地が開けてゐる。信越線塚山驛へ一里、上越線小千谷驛へ二里縣道通じ、バスの便がある。部落はこの縣道に沿うて發達した。

自治行政圓滿に行はれ、村治上政黨の確執なく、質實淳朴、各種事業の進歩改善は著しく、兵役納稅等成績良好なるた

め幾度か表彰を受けてゐる。

千谷澤尋常高等小學校は、分教場一を有し、九學級編成である。青年學校は曾て成績見るべきものあるを以て表彰の榮に浴し、その他修養團、婦人會、男女青年團の活動旺盛である。

主要産物は米、繭、木炭、鷄卵で、この他養豚、養兎による收入も多く、冬季に於ける出稼者が村に持ち歸る金高も莫大である。産業組合は大正六年の創立、組合員三百二十餘名を擁す。

武石村

東は澁海川にのぞみ、西は八石山の連峰を負ふて武石峠あり、北條村に通じてゐる。

舊小國郷に屬し、押切部落と共に獨立の一村であつたが、明治十七年より二十二年まで、地理人情風俗等の關係より横澤、山横澤の兩村と組合を組織したが、同二十二年自治制施行と共に組合を解除し、舊の如く獨立の一村に復した。

戸數百八十餘、人口千百五十を算し、面積〇・四五七方里にして、有租地三百六十餘町歩あり、耕地は田八十五町歩、畑三十二町歩で、山林は二百四十町歩餘である。謂はゞ農山村にして、住民は半農半林で、米の年産は三、四萬圓程度に過ぎない。産業組合の組織がある。

信越線塚山驛より一里十町、バスの便はあるが、冬季積雪の候はそれも杜絶之澁海川の舟揖の便による。

横澤村

郡の東南方に位し、澁海川を挾んで中里村と相對し、土地高坦相半する。明治十八年八月、武石、山横澤の二村と共に組合村を形成したが、同二十二年町村制實施に際し、遠隔不便のため、各村分離し、爾來獨立の一自治區として今日に至つた。

面積〇・四二方里。無格社八幡神社、瑞音院の社寺あり、名勝には山口家庭園がある。富豪山口權三郎氏、金融界の大立物山口誠太郎氏は本村の人である。

米、繭、生糸を主産物とし、供繭組合をはじめ、産業方面の諸施設は模範的といはれる。信越本線塚山驛へは二里にして達し、自動車の便がある。交通は比較的便利である。

人情風俗は淳朴を以て鳴り、毎年紀元節には戸主會を開き、風俗改善その他に就いて協議し、これを實行するため、生活樣式の刷新顯著である。

山横澤村

横澤村の西方に接續し、周圍は八石山の青巒に包圍され、土地高燥である。舊小國郷の内にして、曾ては横澤村の一部であつたが、交通の關係上、獨立の一自活區を形成したもので、村内の小國郷と南鯖石村とを連絡する縣道が通じ、信越線安田驛へ二里半、途中バスの便があつて、交通狀態は惡くない。面積〇・六七方里である。

住民の多くは農林業に從ひ、山岳地帶

なるが故を以て畜牛による産業打開の途を講ぜられ、豫期以上の好結果を得て、先年縣當局から表彰された。しかも畜牛の將來は大いに有望である。養鷄も最近頓に激增し、養鷄組合がある。百合の栽培も相當多く、郡農會の斡旋により主に關西方面に出荷し好評嘖々たるものがある。養兎をなすものもあり、製皮して陸軍省へ納めてゐる。

産米增收に關しては、十數年來、村農會を中心に部落農區を設立し、採種圃を經營したり、苗代、堆肥の競作をしたり品評會を催ほしたり、農民の志氣を鼓舞することにつとめてゐる。

山横津小學校は四學級編成、併設の青年學校は、小國郷七ケ村中第一の優良校といはれる。

中鯖石村

柏崎町の東南方、郡の中央に位する農村にして、東は山嶽に掩はれ、西に向つて緩傾斜をなし、鯖石川右岸は耕地山林相半し、治川の平坦地に聚落がある。所謂鯖石谷の中にありて、與坂、宮平、善根、加納の四部落より成り、大字善根はまた善言にも作り、毛利某氏の要害たりし遺跡がある。

面積〇・八九四方里。周廣院、淫廣寺長福寺、寶泉寺、光賢寺等の寺院あり、八石山中の十二神は名勝として聞える。交通は信越線北條驛へ一里、同安田驛へ一里半、縣道四通し、バスの便がある。

米繭を主要産物とし、殊に米は本縣民の以て立つ生活の根據をなしてゐる。從つて産米の改良增收等に就いては、村農會を中心に當局者の苦心努力の的であり野外堆肥その他の自給肥料を增産して金肥を節し、共同販賣によつて利益を收めてゐる。養蠶は副業の主位を占め、次で繩、炭俵の製造がある。

學校は中鯖石尋常高等小學校一校で、學級數十一あり、職員一同 熱心なる訓導により、兒童の學業成績は優秀にして體育は特に良好である。

北條村

當村は明治三十四年十一月一日川條、北條、山間、廣田、長島の五ケ村の合併によつて生れた村で、南條、本條、北條東條、小島、山間、舊廣田、大廣田、西長島、東長島の十ケ大字二十二區に區劃して現在に至つたのである。

郡の南東部に位し、面積二、八三〇方里、東西二里弱、南北三里餘に亙り、郡内の主要地柏崎町を距る約三里、南に八谷、梢や東に金倉の丘陵聳立、且つ概して小丘陵起伏し、長鳥川の東方より村の中央部を、小支流をあつめて西南方に貫流し、鯖石川に注入してゐるが、その沿岸地は第三紀層及び沖積層にして、田圃の多くはこの流域に開けてゐる。そして南東は山横澤、武石、千谷澤、三島部塚山村に接し、東北は三島郡内中通村に連り、西南は田尻、中鯖石村に接し、西北は北鯖石川に境してゐる。

戸數約一千五百、人口四千二百餘、う

ち農に從ふもの一千百餘戸、工七十餘戸商六十餘戸、生柿及び葡萄の産地として有名である。

縣道柏崎千谷線は、西方北鯖石村、當村大字山潤、西長島を經て東方三島郡塚山村に通じ、柏崎廣田線は田尻村より大字東條、北條小島、東條、舊廣田を經て大廣田に於て廣田關原線に接續し、大字西長島、東長島を經て東北方中通村に至り、柏崎長岡線に聯絡する。また村道は各大小字に通じ、且つ國有鐵道信越線は西南より東北に、村の中央部を縱貫し、南に北條、中央に越後廣田の二驛ありて交通極めて便利である。

田尻村

當村は郡の中央に位してゐる。安田、平井、田尻、鏡里の諸村の合併より成つた自治體で、各村の創始年代等は不明であるが、少なくとも一千又は餘年は經てゐるものと傳へられてゐる。

德川氏の治世に在つては輕井川、佐藤池新田の二ケ字は天領に屬し、茨目、兩田尻、下田尻、上田尻、安田の五ケ字は桑名藩の治下にあり、平井は旗本安藤內藏之助によつて支配された。明治の維新後は各村柏崎縣の管轄となり、同六年柏崎縣を廢して新潟縣を置かるゝや、また新潟縣の所管となり、今日に及んでゐるのである。

各村は東に北條村、西に柏崎町、南に中鯖石村、高田村、上條村、北に北鯖石村に接續し、東西五〇一八米、南北五四五四米の流域を有する、戸數約一千戸、人口五千四百、農業に就くもの實に八百五十餘戸、商業を營むもの八十戸を占めてゐる。主要なる農産物には米、甘藷、馬鈴薯、柿などである。

當村産業團體には田尻製糸會社、昭和信用組合、鯖石産業組合、山忠製糸工場鳥越信用組合などがある。

北鯖石村

當村の創始年代などは不明であるが、豐臣氏時代を經て後ち上杉氏の所領となり、德川氏の治世に在つては新田畑は元領に屬し、田塚は旗本安藤內藏之助の支配するところ、長濱、藤井、中田、畔屋興三、上大新田は桑名越後中將の治下に在つて中田、興三、畔屋、上大新田は畔屋鄕として鯖石川の東に位し、長濱、新田畑、田塚、藤井は鯖石川の西に在つて共に鏡鄕と呼んだ。明治元年柏崎縣所管となり、後ち柏崎縣の廢止と共に新潟縣所管となり、同二十三年四月町村制實施に際し、畔屋鄕を旭村とし、鏡鄕を藤井村と改稱した。同二十四年旭、藤井の兩村が合併して今の北鯖石村を生んだのである。

村は郡の中央に位し、東は中通、北條の兩村、西は柏崎、南は田尻村、北は西中通村に隣接してゐる。地勢は東は山を繞せども村の中央を鯖石川曲折後流し、その流域內にあり、土壤沖積し、平野を形勢してゐる。しかも耕地は水利の便によく、農耕の成績は頗るよい。

戸數は五百九十餘戸、人口三千五百餘人をかぞへ、地主農が三〇餘、自作農が二〇餘、自小作農二八〇餘、小作農一八〇餘戸で、農業を營むものは實に五〇〇餘戸であり。そして主要物産は米であるが、年に一萬二千五百餘石を産する。

小學校の外に農業補習學校があり、また青年訓練所があり、その成績は頗る良好である。

西中通に

本村は郡の最兩端に位置し、東北は中通、刈羽、荒濱の三村に接し、西は荒濱村の一部と柏崎町に連り、南は北鯖石村に境し、鯖石川は南北に全村の中央を貫通し、地味豐饒にして耕地が多い。

明治四年の廢藩置縣後柏崎縣に屬し、同六年柏崎縣の廢止となるに及んで、新潟縣に合せられ、同二十二年町村制施行の時、日吉、槇原の二ケ村と成り、同二十四年兩村を合併して西中通村と改稱して今日に至つたのである。

現在面積は一、三一九町歩餘、その戸數は九百餘戸、人口五千餘人を有し、農を以て生計の本位となしてゐる。生産物の主とするものは米で、副業としての養鷄は殊に旺んである。

中通村

本村は東西二百二〇町、南北一里二五町を有し、戸數約九百、人口五千餘人、その殆んど農を本業となしてゐる。

本村は明治三十四年十一月元井村、曾地村、東城村、油田村の四ケ村を合併して中通村と稱し、現在に至つてゐる。全村を、矢田、元井、曾地、花田、曾地新田、飯塚、赤田町方、赤田北方、小黑須五十土、成澤、黑川、油田の十三大字に分け、役場を大字曾地に置く。

本村名所の主なるものは御野立所、赤田城址、吉井白塚、曾地古城などで、その名を知られてゐる、謂はゆる曾地峠の險は古くから有名である。

刈羽に

本村は刈羽、割町新田、上高町、下高町、正明寺ほか九大字より成り、荒濱川の東に接し、別山川に跨つた村である。義經記に「三十三里のかりわ濱と曰へるは荒濱より石地までの沙汀を指す」とあり、國邑志には「刈羽村は郡名の基づくところにして、方俗刈和とも書し古來の名邑たり」と出て居り、また治亂記を見るに、

天文十八年五月本庄美作寺刈羽の城へ押寄一日一夜にして攻略し皆撫切にぞしたりける。

と載つてゐる。越後刈羽驛あり、交通も便利である。

別山川に跨る平和な村で、交通は至便にて、村は醇風になびいてそよとの波もたゝない。

米と繭を第一の産物とするが、最近副業方面に力を致し、養鷄、養豚が多く、大抵の家には五六十羽の鷄が餌をあさつ

てゐる。高畑方面には桃の栽培が多く、長野方面のものと較べて外觀は悪いが、味は較べものにならないほど上等である大正三年頃から桃の加工品が出てゐる。野菜は西中通方面に多い。また西瓜、落花生の名產がある。

二田村

當二田村は、古への二田の里の地域内にあつて、三島郡多太郷に屬し、天和檜地の頃は原田保、長橋庄などに屬してゐたのである。

明治四年柏崎縣に、後ち同六年新潟縣に合したもので、町村制の施行に際しては町村分合行はれ、その結果長谷村、二田村、長原村、妙法寺村の四ヶ村が合併したが、同三十二年長谷村を廢し、二田村に合し、同三十四年十一月二田、長原妙法寺の三ヶ村を合し、坂田、二田、黒部、鬼王、長嶺、後谷、和田、新保、五日市、井岡、内方、大坪、北野、妙法寺の十四ヶ字を以て、今の二田村を組織したのである。

當村は郡の東北部に位し、東經百三十八度四十分、北緯三十七度三十分のところにあつて、面積は一七八九・二〇〇方米、東西四四七三米、南北四〇〇米、戸數九百餘戸、人口五千餘を有する農村である。

内郷村

面積二二、六二四方粁、世帯數八百餘戸、人口四千百餘をかぞへ、うち農家戸數として自作農一一七、自作兼小作農二九四、小作農二〇四、合計六一五を示す當内郷村は、郡の最北端に位置を占め、東北は三島郡宮本村及び西越村に境し、西は石地町、高濱町に接し、南は二田村に連り、別山川は南北に全村の中央を貫流し、地は豐饒ではあるが、山間部が多くして耕地は比較的に少ない。

本村は舊幕時代は與板伊井氏、椎谷堀氏の所領及び幕府直轄の三分に分れ、十一ヶ村に區分されてゐたが、明治四年叢藩置縣と共に柏崎縣に屬し、同六年柏崎縣廢されてからは新潟縣に管せられ、同二十二年市町村制實施にあたり、中川及び別山の二ヶ村に合併され、同三十四年兩村を併合して内郷村と改稱、今日に至つてゐる。

荒濱村

東に沙丘を負ひ、西北は海岸に臨んで位置する。田園豐かなりとは云ひ難きも三千百餘の村民は漁獵に從事し、また製網、操舟の業に勵み、經濟的に裕福な村で、富家が多い。

面積〇・五一方里。耕地は田畑合せて六十二町歩に滿たず、記すべきほどのことはない。しかし山林は約五百町歩にのぼる。越後線に沿ひ、村内に荒濱驛を置いて交通は便利だ。また村には法華寺、聖德寺等の寺院があり、政治家牧口義矩牧口義方を生んだところだ。

東頸城郡

概說　東南は中魚沼郡及び長野縣下水内郡に界し、西北は中頸城・刈羽の二郡に續き、山脈概ね南より北に走り・中央鼻毛小豆の山嶺を以て自ら地勢を兩斷し、東を松之山郡といひ、西を山五十公郷といふ。郡中峻嶺高丘なしと雖もまた殆んど平地なく、殊に東南の境界近くは峻嶮を極める山岳は菱ケ嶽を以て群中第一の高山となす。

河川の主なるものは保倉川、潟海川、小黒川、飯田川、鯖石川である。保倉川は菱ケ嶽の東麓及び大島村大字菖蒲の山中より發源し、郡の中間を北流し、保倉村に至り、左折西奔して中頸城郡に入る小黒川はその源を菱ケ嶽の西麓に發し、北流して下保倉村に於て保倉川に合流する潟海川は浦田村に發し、奴奈川に於て左折して東に流れ、天水川・東川等をあつめて中魚沼郡に注ぐ。また飯田川は牧村に發源して中頸城郡に入り、鯖石川は山平村に發して刈羽郡に入る。以上の諸川あるも、常に水量少く、舟揖の利がない從つて水害もまた稀だ。

田圃は山腹または谿谷の間に散在し、雙眸の間、百畝の田なく、村落またその間に隱見する。

面積二七・八方里、戸數九千七百五十にして人口は約五萬六千人である。東蒲原郡を除けば、市郡中の最少戸口の地である。

沿革　大寶二年三月越中の四郡を割いて越後國に併せたもので、舊事紀には久比岐につくり、延喜式以降に頸城と書してある。和名抄には沼川、都宇、栗原枚倉、厚木、高津、物部、五公、夷守、左味等の郷名が出てゐる。

明治維新前は、幕府領にして、川浦代東所百四十ヶ村、高田藩領三十三ヶ村、桑名藩領一ヶ村であつた。明治元年、川浦民政局管轄となり、同四年柏崎縣に入り、大小區制時代は、頸城郡の内松之山郡、山五十公郷百三十八ヶ村を以て第六大區と稱した。明治六年柏崎縣廢止と共に新潟縣に入り、同年秋、頸城郡第八大區のうち三十四ヶ村及び刈羽郡のうち嶺村を加へ、村數百六十八ヶ村を以て第十一大區と稱した。

しかしこれまでは、現在の東、中、西の三頸城郡を一緒にして頸城郡と呼んでゐた時代で明治十二年五月に至り、頸城が三郡に分立する時、第十一大區を以て東頸城郡となし、郡衙は安塚村に置かれた。明治廿一年の自治制施行に際し中頸城郡のうち上牧、府殿、宇津俣、倉下、原、下昆子、上昆子、下湯子、東松之木荒井の十ヶ村を本郡に、また本郡のうち大蒲生田村を中頸城郡に編入された。その後幾度か村の分置廢合行はれて現在の十四ヶ村となつた。

安塚、下保倉、保倉、旭、山平、松代、松

之山、浦田、奴奈川、大島、菱里、小黒、牧、神見

の諸村が即ちそれである。

産業　産業は農を以て第一とし、生産總額の八割弱は農業生産品によつて占められ、米は年産十萬四千石に及ぶ。今各産業別にその生産額を示せば

農産	三、〇八四、二四八圓
蠶糸類	九五、〇〇〇圓
畜産	六一、五三七圓
林産	二九一、五三〇圓
水産	四、七四一圓
工産	五三五、〇一二圓
鑛産	九〇、九一九圓

となり、總額は四百十六萬圓である。而してこれが一戸當りは約四百三十圓、一人當りは七十四圓である。

名所舊蹟　松之山村の管領塚及び鏡ヶ池、安塚村の直峯城、松代村の松代城及び犬伏城、奴奈村の室野城松之山村の橋詰城等あり、松苧神社の樫、蟲川の大杉、顯聖寺の二代杉、網山の大杉、諏訪社の大杉、蒲田の枝垂櫻、花立の松、塚本の松、見通しの杉、十二番橋等は、名樹として著はれてゐる。

安塚村

保倉川の左岸に位し、北には越後山脈が連亘し、霧ヶ岳、唐野山がある。村内概ね高燥、保倉川の二支流が走り、本村北方に於て合流する。高田市の東六里、十日町の西七里にあたる山間の一小邑である。安塚、上方、下方、石橋、牧野、松崎ほか十六大字より成り、面積二・九八四方里に及ぶ。

安塚直峯城は風間氏の舊居にて、風間信濃守といふ越後武士で、その名は太平記にも見える管内横澄には貝介の化石が出ると傳へられる。明治二十二年町村制實施、同三十四年安塚、月影、中川、中保倉の四ケ村を合併して安塚村と稱したもと郡役所々在地である。

頸城鐵道浦川驛より一里餘、自動車の便がある。

米、繭を主産物とし、村には土木派遣所、警察署、區裁判所出張所、郵便局、村役場等の官公署の外、安塚銀行、安塚自動車會社、頸城織物會社などあり、商工業も旺んである。

また學校には村立安塚高女、縣立安塚農學校、安塚、中川、月影、中保倉各小學校等あり、村立圖書館の施設及び男女青年團、婦人會、在鄉軍人分會等の活動と相俟つて、教育の實績は大いに見るべきものがある。

賞泉寺は曹洞宗の名刹として有名だ。

下保倉村

安塚村の北につらなり、四圍に山嶽をめぐらし、中央を保倉川が貫流して西に下り、その沿岸に平地がある。顯聖寺、下柿野、大栃山、東俣、杉坪、櫻島、岩室、印内、山印内新田、飯室ほか十四大字を含み、面積一・三五四方里である。

花崎の東一里にして、顯聖寺は曹洞宗の古刹にて、今も地名にも殘つてゐる。

明治三十四年下保倉末廣の二村を合併成した村で、村内に頸城鐵道浦川原驛及び下保倉驛、飯室驛等あり、本郡の關門にあたり、交通至便である。高田市より五里、直江津町より三里半、いづれもバスの便があり、また十日町、柿崎、信濃坂へもバスで連絡する。

縣穀物檢査出張所、郵便局、産業組合郡農業倉庫等あり、銀行支店、保倉電氣會社、龜谷酒造會社等も存し、社寺には村社劍神社無格社二〇、圓重寺、休止院鞍馬寺、日光寺、顯聖寺、放覺寺ほか六ケ寺をかぞへ、八坂神社、劍神社、顯聖寺、圓重寺、日光寺、鞍馬寺、唐野山、荒城は名勝としても知らる。

米、薪炭、用材を生産物とする。

小學校に末廣尋常(三學級)、下保倉尋常高等(九學級)の二校あり、他に黄葉學院を有し、曩に　今上陛下御大典記念事業として二校舎を改築せるほか、植樹造林、納税組合設立等をなし、納税に就いては名古屋税務監督局より表彰を受けてゐる。なほ各種團體及び組合には男女青年團、禁酒會、農民座、郡農業倉庫、信購販組合、女工保護組合、酒造研究會等がある。

保倉村

安塚村の東につらなり、越後山脈に隷屬する丘岡蜿蜒し、南方信濃國境に水源を發したる保倉川は村内を貫流し字大平に於て方向を西に轉じて安塚村に流入する。河に並行して縣道通じ、太平、上達下達、岡の諸部落は、縣道に沿ふて聚落をなし、またこの縣道には頸城鐵道浦川原驛へのバスが通つてゐる。直江津と十日町の丁度眞ン中にあたる。

面積二・〇三方里を占め、有租地約九百九十町歩に上るも、耕地は田二百町歩畑百九十餘町歩に過ぎず、山林は五百八十餘町歩である。二千有餘の住民は農産の業に從事し、米、繭は本村の主要物産である。

村には郵便局、圖書館、信用組合などが置かれ、寺院には大安寺、了慧寺、觀音寺、城鎭寺があり、いづれも曹洞宗に屬する。

旭村

郡の最北端に位し、北部に山岳を負ふて原野山林多く、鯖石川は源をこゝに發する、稱して鷲ノ巣山と呼び、刈羽郡との境界にあたる。

村内を柏崎に至る通路走り、頸城鐵道浦川原驛へ二里半、途中よりバスの便がある。本村は謂はゞ分水嶺上の村だ。昔は妻有庄の北偏であつた。

面積一・二九四方里。有租地九百九十餘町歩にして、田二百餘町歩、畑百七十六町歩、山林六百町歩餘を有し、住民の生業は農耕または山林の業で、多くはこれを兼業し、米、繭を主産物とする。

戸數二百九十餘、人口は千七百五十三をかぞへる。村内には郵便局、圖書館、産業組合などあり、寺院に眞宗京德寺、同照源寺、曹洞宗竹林寺がある。なほ本

村大字は田麥、坂山、嶺の三にして、村役場は田麥に置く。

山平村

本村は郡の北端に位し、刈羽郡との境をなし、田野倉、蒲平、名平、儀明、田代、仙納、小池、筋平の八部落より成る山村にして、平地の見るべきものがない舊松之山郷に屬した地で、鯖石川の一水源地にして、川は北へ向つて流れる。

六百有餘の戸數と、三千八百を越える人口を有し、面積一・三一四方里にして有租地約九百町歩あり、田は三百三十餘町歩、畑は二百四十六町歩、山林は約三百町歩である。

米と繭を主産物とし、林産も少なからず、住民は純朴にして勤勉、質實勤儉の精神に富む。頸城鐵道浦川原驛へ四里、バスの便がある。

小學校は北山尋常(二學級)、蒲生尋常高等(六學級)の二校を有し、圖書館の施設もあり、寺院には曹洞宗松泉寺が有名である。

松代村

東西一里十七町、南北二里、面積三・二八方里あれど、平地は僅かに全面積の二分に過ぎず、土壌は肥瘦相半し、耕作の努力は容易ならざるものがある。

所謂妻有郷往來といふことあり、即ち安塚大島より蒲生、松代を經て犬伏に至り、藥師峠を踰え、中魚沼郡へ達する往來である。本村は即ちその中間に位し、大字小荒戸の油井は、明治初年の頃、噴湧盛んなりしが、近年含油は漸く遠くなつた。自治制發布後暫らくは松代村ほか六ケ村組合を作つてゐたが、明治三十四年町村合併して一自治區となつた。民情素朴にして、風俗醇良、勤儉の念殊に旺盛である。且つ村政に從事する者は、いづれも勤續多年に及び、よく民情に通じ百般の施設機宜に適し、自治の成績大いに擧つてゐる。

縣道四方に通じ、十日町浦川原間、松之山鯖石間のバスの往來あり、また村内には區裁判所出張所、警部補派出所、郵便局、圖書館、松代銀行、松代購販組合、松代繭絲販利組合等あり、神社は無格社二社、寺院には廣德寺、長命寺、少林寺がある。

松之山村

郡中著名の大村にして、丘陵起伏し平野少く、道路四通するも地勢上傾斜が多い。しかも交通は頻繁で、物貨の集散地である。

松之山とは舊郷名である。松之山家とも云ひ、頸城魚沼の間に一別區をなし、澁海川の源頭であつた。昔は松山六十六ケ村の諺あり、また謠曲に松山鏡あり、松の山に母に別れし少女亡き母を慕ひてその形見の鏡を取出しては己が姿の映るを見て母上をなつかしがりて暮し、母は地獄にありたれど娘の弔によつて極樂往生するといふ筋である。村は明治三十四年三ケ村二十八字を合併せるもので、面

積三・八八六方里、東西二里二十町、南北二里である長唄に

直江津のあまの子が七つか八つ目鰻まで、うむや綱苧のつな手とは戀の心をこめ山の、當季浮氣で逢ふ縁も何に糸魚川いと魚の、もつれもつるゝ草生津の、あぶら漆と交りて、末松山の白布の縮みは肌のどこやらが、見へすく國の風流を、うつし太鼓や笛の音も、引いてうたふや子獅の曲

とうたはれる地で、鏡ケ池、管領塚、松之山溫泉の名勝あり、松之山溫泉の開湯は古く　後村上天皇の御代といふ。古來風俗醇朴にして敢て俗化せず、四方より來遊するものが多い。勤業、兵事、納税教育等こと〴〵く優良なるを以て曩に表彰せられたる郡の模範村である。頸城鐵道浦川原驛及び中魚沼郡芦ケ崎村へはバスの便がある。また村内には區裁判所出張所、郵便局二、松代銀行支店、産業組合農業倉庫、郡染物組合等あり、お寺には觀音寺、正法寺、陽廣寺、松陰寺等の名刹が多い。

浦田村

信越國境天水山の北麓にある一部落にして三一坂峠を中心として山岳多く、平地は北面に向つて開けてゐる。即ち澁海川の源の地にして、その奥の天水山は越信の分水嶺をなし、四面峯巒に圍繞され中間溪流の沿岸に僅かに平地がある。しかし灌漑水利の便はよく、田畝よく整ひ米産地としては郡中の雄と稱せられる。なほ本村は冬季半歳の間、積雪深きため農事に從ふこと能はず、この間に於て少壯の徒は遠く他府縣に出稼ぎし、相當勞銀を蓄積して歸郷するのが常だ。爲に愛郷の念殊に深く、勤業、兵事、教育、納税の成績悉く優良にして郡内の模範村と評される。

明治二十二年自治制實施の際、隣接黒倉村と合併して現區域となつた。大字は浦田黒倉の二、面積一・七二一方里にして、戸數五百を有し、農業盛んにして米豆類、芋類、大根、百合根等を主産物とし、副業には養蠶、養鶏がある。村農會の農事改良運動は他村に比し著るしきものあり、村立樹苗養成所のごときは本村獨特の施設で、共同作業所の設備も最新式で評判がよい。

室野へ一里、それより十日町へ五里、頸城鐵道浦川原驛へ四里、バスが通つてゐる。村社松苧神社、眞宗大嚴寺、岩見堂の奇巖等の社寺名勝がある。

奴奈川村

郡の中部にあり、村内山岳連亘し、土地一般に高峻であるが、耕地に乏しからず、水田は三百五十町歩弱、畑百九十餘町歩を有し、古くは松之山郷に屬し、今は室野、福島、峠、木和田原新田を併せて一自治區とし、面積一・三二四方里である。農山村ともいふべき村で、住民は農耕並に山林の業に從ひ、耕地は前記の通り、山林は五百町歩を占める。

戸數は五百二十戸、人口は二千六百七

十餘を算し、米、繭、林産物の産多く、住民は概して質朴勤勉にして精神作興等見るべき成績を收め、自治は圓滑に行はれてゐる。

縣道は村を東西に走り、十日町及び頸城鐵道浦川原驛へバスの便がある。また村内には室野郵便局、奴奈川信用組合、洞泉寺等がある。

大島村

地形狹長なる山村にして、南に聳ゆるを菱ケ岳と稱し、保倉川は村内を縱貫して北に流れる。

安塚村の東一里餘、妻有郷に通ずる山路にあたる。保倉川の水源は、大字大島の南なる菱ケ岳に發し、故にこの遶一帶を保倉谷とも稱す。

仁上、大島、棚岡、中野、葛蒲、牛ケ鼻の六部落を以て一村を形成し、戸數五百八十餘、人口三千五百を算し、廣袤東西一里、南北三里にして、面積二・一二七方里である。耕地は水田五百町歩、畑地三百町歩あり、山林は千百町歩弱の廣きに上る。産物は米を以て第一となし、農業經營には常に進歩的改善が加へられ成績良好である。頸城鐵道浦川原驛へ二里半、バスの便がある。

村には郵便局及び郵便取扱所、青年團圖書館、銀行支店、郡牛馬商組合等があり、寺院四ケ寺を有す。

菱里村

郡の南部に位し、信越國境に峻立する菱ケ岳の山陰にして、中山峯の西麓にあたる。地勢概して丘岡多く、保倉川は南方山中に源を發し、北流する。

舊須川、眞荻平、船倉、二本木の諸村を合同し、菱ケ嶽の里なる意味で菱村と稱し今日に至つた。大字に信濃阪、上船倉、下船倉、二本木、高澤、樽田、圓平坊、眞荻平、須川等あり、面積二・三一三方里、頸城鐵道浦川原驛へ十三粁半にて達し、バスが通つてゐる。

水田五百八十餘町歩、畑地三百五十町歩耕地を有し、米、大豆、木材、薪炭等を主たる産物とし、また有名な須川膏藥の製造地である。石油は天和年間より湧出し、往古、草生水の名を以て知られ、元文元年の頃は一升二文で求められたと云ふ、今は昔の語り草だ。

村役場、郵便局、村農會、在郷軍人分會、男女青年團、婦人會、教育會等あり小學校は豐坂、須川、船倉、眞荻平の四尋常校と、菱里高等小學校の五校を有し學業成績は優秀である。村立圖書館の施設もある。寺院に願敎寺、妙玄寺の二を有し、願敎寺は須川にあり、後鳥羽天皇の勅願所なりといひ、親鸞聖人自作の木像及び頂骨を寺寶とする。

小黑村

保倉川の南岸に位し、川を隔てゝ安塚と相對する。村南の藥師嶽は海拔六百六十一メートル、中央部の長倉山は六百十メートル、本村はかく山嶽に掩はれてゐる山村にして、小黑、切越、戸澤、芹田

大原、朴ノ木、菅沼、行野、和田の諸部落は、これら山嶽の西方に連り、面積は一・〇三九三方里あり、戸數四百七十、人口三千人弱をかぞへる。

耕地は、田三百二十餘町歩、畑百七十町歩弱にして、山林は三百四十町歩を越える。頸城鐵道浦川原驛へ二里、バスの便がある。

村内社寺は村社菱神社、眞宗稱念寺、同能念寺、同敎願寺、同光圓寺、同專敎寺あり、庶民の信仰多い。また村には郵便局、小黑圖書館、産業組合等あり、小學校は和田、沼木、行野の三校を有し、和田校は高等科を併置する。

牧村

郡の最西南部を占め、西は中頸城郡と山岳を以て接し、南に分水嶺ありて長野縣下水内郡と相連る。飯田川は本村に起つて北流し、部落はその沿岸にあり、本村には頸城油がある。

大字小川をはじめ、棚廣、棚廣新田、櫻瀧、田島、宇津俣、上牧、府殿、下湯谷、倉下、高谷、功光、今清水、泉、原上、日比子、下日比子、東松ノ木、荒井岡川、梶谷、山口、宮口、岩神、高尾の大字を含み、面積三・一〇七方里、高田市へ四里半、途中自動車の便がある。

村には郵便局、圖書館、銀行支店ありて各種團體はいづれも活動活潑にして日本未曾有の非常を深く認識して努力精進してゐる。また寺院には正善寺、福樂寺、明願寺、一念寺、西念寺があり、全部眞宗に屬する。

沖見村

西は中頸城郡上杉村、南は本郡牧村に隣接し、地勢高低相半する。郡の最西部にあたり、明治三十二年現地區を以て町村制を布き、大正七年本縣模範村に指定され、特に納税成績の優良なること縣下に冠たるものがある。

神谷、大月、川井澤、池船、七森、吉坪、片町、平山、平方、坪山等の大字を含み、面積〇・八七九方里にして、有租地七百六十町歩餘、水田三百三十五町歩畑地百三十町歩弱である。縣道山口浦川原停車場線が東西に通じ、同驛へ二里、山口の自動車通路まで一里である。

戸數約二百九十、人口は千九百有餘をかぞへ、沖見尋常高等小學校は七學級編成、村立御慶事記念沖見圖書館もあり、また寺院は通願寺、林鳳寺の二を有し、共に眞宗の古刹である。

中頸城郡

北は日本海に面し、東は刈羽郡及び東頸城郡に、東南は長野縣下水内郡に、南は同上水内郡に、西は同北安曇郡及び本縣西頸城郡に接續し、荒川水原の平野にして、いはゆる上越後の中心にあたる。郡の西南部に妙高山がそびえ、その餘勢

は北に走つて海に盡きる。信越國境にもまた山峰峙ち、その間に平野を抱き、荒川が北に向つて流れる。海岸は平滑で、良錨地がない。

荒川平野は地味肥沃にして、越後屈指の米産地である。またこの地方は頸城油田に屬し、石油の産が多い。生産總額は約二千八百六十萬圓で、これを産業別に見ると左の通りである。

農産	一二、四八六、〇五一圓
蠶糸業	四六八、四三六圓
畜産	三二〇、〇五三圓
林産	七六二、三六三圓
水産	九四、七〇三圓
工産	一四、四五一、七三五圓
鑛産	四九、四九八圓

鐵道信越本線は、信濃より來り、荒川に沿ふて直江津に至り、海岸を東北に進み、北陸本線は西方海岸に沿ふて來り、直江津を終點とする。頸城鐵道線は信越線の黒井驛より起つて東頸城郡に入る。交通は概して便利である。

古、國府の所在地にして、上杉氏、長尾氏またこゝに鎭し、德川幕府の初期に至るまで、北越の首府であつた。曾ては頸城一郡であつたが、明治十三年五月これを東、中、西の三郡にわけ、同四十四年に至り、中頸城郡の中より高田市が獨立して今日に及んだ。

柿崎町

本町は郡の東北端にあり、刈羽郡柏崎町と本郡直江津町との中間に位し、各五里を隔てる。西北一帶は日本海に面し、佐渡島を遠く望む。古來、北陸街道の要衝にして、現在鐵道信越線柿崎驛あり、縣道新潟富山線は町の中央を横斷し、自動車の發達と共に交通の要位を占め物資の集散、社交生活の中心地となり今日の町勢を示すに至つた。戸數千二百二十餘人口約六千五百をかぞへる。

明治三十四年、舊犀濱村及び下黒川村のうち大字馬正面を合併し、更に同四十一年舊七ヶ村を合せ、新に柿崎村を設置したるものにして、昭和九年一月一日に至り町制を實施した。

町には小學校四、町役場、停車場、郵便局、警察署、區裁判所出張所、信用組合、會社等あり、神社は村社二社の無格社十二社、寺院は十四ヶ寺を有し、明治天皇行在所址、木崎山城址、馬正面桃林御清水觀音、澤福寺等の名勝舊蹟がある

新井町

本町は郡の南部に位し、頸南地方の中心都邑にして、北日本の靈峯妙高山の麓にあり、頸城平野の遙々として開けた山紫水明の地である。市街を貫通する北國街道は、今、國道第十一號線に屬し、町の中央を横切つて柿崎町に去り、同地方交通の幹線をなしてゐる。

地勢は、東方信越國境に松倉、里倉、關田等の峯巒が聳立し、滝江川は辻屋橋下で片見川に合し、新井驛の東を流れ、和田村に於て關川に合流する。その源は茶臼嶽と神奈山で、俗に呑江と稱し清列

拘すべきものがある。

村誌によれば、本町は貞治五年より慶長二年まで上杉家の支配を受け、天和元年以後は幕府の直轄地であつた。明治維新後は柏崎縣に編入せられ、更に新潟縣の所管となり、明治二十五年、新井村は新井町と改稱、同三十四年に小川雲、大出雲の二ヶ村を合せ、同四十年に至り更に參賀村を加へて現新井村となつた。按ずるに、本町は、往昔、北國より江戸に往還する唯一の街道で、信越の門戸を扼して商權を掌握し、最近は文化の向上と産業の進歩に加ふるに町民の勤儉力行によつて頓にその面目を一新した。

産業は別に誇るに足るものはないが、煙草、米、石材、蔬菜、清酒、薪炭、果實、藁工品は主なる産物である。名勝としては加茂神社、經塚山、小出電坂、白山神社、陣場、鬼小島館址、新井別院、菅原神社等がある。

直江津町

本町は頸城平野につらなり、日本海にのぞみ、古來水陸交通の要津にして、頸城三郡産物の集散地で、信濃全國の米鹽肥料、海産物供給の要地である。

直江津アよいとこ
港を見やれ
出船、入船、泊り船

と謠はれるごとく、北陸二大港の一として知られ、信越線、北陸線の交叉點にあたり、またおけさの國佐渡小木港へ海路僅かに三時間餘の位置を占める。關川河口には港灣が修築され、裏日本の要津、商業地として躍進してゐる。

以上の如く、天然の良港と近代的な商業都市としての本町は、また歴史的宗教的な舊蹟のかず〳〵が旅人に懐舊追慕の念を起さしめ、佐渡への遊覽客はこの地に足を止めるものが多い。

永保三年、源義家は東征の途次、碧を春日山に築き、しばらく當地に留まつたと傳へられる。保元平治の頃は源頼政、城資長、木曾義仲等の所領となり、足利の世には上杉憲顯の嗣憲將が守護となり後、堀氏が城を構へた。德川時代に至つて城は廢止され、慶長十二年堀秀治が新に地を直江津の北東にトしてこゝに移つた。明治維新後は、鐵道の開通、海運の發達と共に今日の町勢を顯現した。

生産物は甚だ少く、從來、米穀及び海産物の中繼取引が盛んにして、近年は石炭、セメント、木材、その他商品の販賣に努力し、信越窒素肥料會社が設立されてから町には一層生新の氣が漲つた。

名蹟を列記すれば、大國主命が東北御統治の時の遺跡をはじめ、居多神社、岩殿窟、國分寺、濱の善光寺、春山城址、竹の内草庵等がある。

上米山村

本村は谷根、小杉、吉尾の三大字より成り、面積一・六一七方里、米山の北西麓、青海川の上流に位し、東は米山の山彙を以て刈羽郡と境する。

戸數約百八十、人口千餘人をかぞへ産

物の第一は木炭にして、米、繭もまた尠くない。有租地千町歩、耕地は水田九十餘町歩、畑地三十餘町歩で、山林は八百六十町歩を越える。

村内に米山水電會社あり、鐵道信越線の沿線にして、鯨波驛、青海川驛へはいづれも一里、バスの便あり、交通は極めて便利である。

ぬしのためなら米山さまへ
はだし參りも　厭やせぬ
頸城見なさめ　米山三里
峠越えれば　かしわ崎

の米山は本村地内に跨り、その他村内には龜割坂等傳說の地が多い。

米山村

本村は北陸線中の一驛にして、潟町村を去ること七哩、半東南に米山山脈を負ひ、その山道入口にあたつてゐる。地勢西方に傾斜して山勢は日本海にせまり、海岸線は屈曲に富み、奇巖景勝の地が多い。柏崎の東北にあたり、郡の北西隅を占める。鉢崎、大平、小萱、大清水ほか四大字を含み、廣袤東西三里二十町、南北一里、面積一・七六二方里である。

行こか參らんしよか米山の藥師
一つア身のため　主のため

の米山甚句で名高い米山藥師は本村にあり、寺は刈羽郡との境に跨る米山の山頂に位置し、山は消火山にして、海岸に近く圓錐狀に屹立し、海拔三千二百二十一尺、五箇の支脈はほゞ外輪山たるの形跡を存するが、その活動せしは有史以前の遠い時代に屬し、今は噴火當時の狀況を想像するにも足りない。本尊藥師如來は泰澄の作、源義家の守本尊であつた。冬季は山麓の米山寺に安置し、毎年四月八日にこれを山頂の堂宇に移すを常とし、地方人士の登山參詣するものが多い。登路の半に女人堂あり、往時は婦女はこゝより内に入ることを禁ぜられた。山腹にある七曜ノ池は、屢々相重つて常に水を湛へ、旱魃には雨乞ひの祈禱があげられる習慣がある。また村内の大泉寺は大清水觀音として名高く、觀音堂は國寶に指定されてゐる。

米、繭、麥、木材、木炭、魚類を以て主要產物とする。

本村は德川時代には榊原氏の領であつたが、明治維新後柏崎縣に屬し、次で新潟縣に編入、明治二十二年町村制實施の際、鉢崎、米山の二村となつたのを、同三十四年合併して今日に至つた。

潟町村

直江津町の東北二里、日本海に面し、土地平坦、樹林が多い。東方には藤の名所朝日池がある。

信越本線潟町驛あり、原ノ町、泉谷へバスが通じる。海岸に沿ふて北陸街道走り、直江津、柿崎へもまたバスの便がある。潟町、潟田、潟守新田ほか二十大字を含み、部落は多く、海濱砂丘に布置する。柿崎より本村を經て黑井までの間、四里ばかりを犀ノ濱と稱し、往古、親鸞聖人はこの海濱にて雪中苦行をしたと傳

へられる。

さむくとも袖につゝまん西の風
彌陀の國より吹くとおもへば

主なる產物には米、海產物がある。縣穀物檢査所、高田區裁判所出張所、郵便局村役場の官公衙、銀行支店、潟町運送會社等を有し、產業組合には潟町村信販購利組合、潟町協信社の二あり、漁業組合も組織されてゐる。產業の開發は村當局の常に留意努力しつゝあるところで、村民も一致協力してゐる。

社寺は村社神明宮、惠光寺、圓藏寺、養性寺、養寶寺、照專寺ほか九ケ寺を有し、長峰城址、丸山公園あり、長峰城址は潟町驛の東北二十町、犀ケ池と阪田池の中間なる丘陵上にあり、元和の昔、牧野右馬允の築きしものといふ。

八千浦村

西北面は日本海にのぞみ、地形は細長く、下荒濱、黑井、石橋新田、上荒濱、海光寺濱、夷濱、夷濱新田、西ケ窪濱の八部落を以て成り、面積〇・二六二方里各部落は悉く海濱に散在する。大字黑井は荒川河口右岸にあり、直江津港と相對し、またこゝには信越本黑井驛あり、頸城鐵道の分岐點をなす。柿崎及び直江津へはバスの便がある。

黑井濱より米山の下に至るまで六里ばかりは海岸直線をなし、汀に沿ふて砂丘がある。故にその内陸は卑濕低窪にして往時は一大沼澤を成してゐたものと考へられる。夷濱は、その名稱よりして、古代浮囚などを置かれた所であらう。道興准后の歌に

行末に道なおもへば長濱の
眞砂の旅のうき數にして

とあり、砂濱行旅に惱む狀、想ふだに餘りある。

海岸沿線なるも漁業は振はず、村民の大部分は農業に從事してゐるが、水田も多くはない。副業としては養鷄、西瓜栽培が一部に行はれる。小作に出る者や直江津邊に職を求めて生活の糧とするものが多い。曾ては郡下屈指の養蠶地として知られたが、今は振はない。

大潟村

郡の北部に位し、百間町新田、下柳町新田、大谷内新田、柳町新田、寺田新田ほか五十部落より成り、殆ど新田ばかりである。面積一・三四七方里にして、この附近八千浦村黑井より米山の下に至るまで六里の間、海岸は一直線をなし、汀に沿ふて砂丘あり、その東南一帶の地は二條の低濕地にして、保倉川がその中間を流れる。

現地域の三分の一が上杉定憲と長尾爲景との古戰場である。信越線黑井驛より浦川原に至る頸城鐵道が村の南を貫通し百間町、北四谷の停留場がある。

地勢一般に平坦、耕地よく拓けて、農業が盛んである。村民は研究心に富み、米の產額は年を追つて增加し、村農會が中心となつて部落農區の活動よく行はれる。副業は養鷄並に柿栗の栽培が多い。

堆肥の產は郡下第一といはれ、紫雲英の栽培は年々四十町歩以上に及んでゐる。

產業組合は約六百名の組合員を有し、肥料の粉碎配合等に動力を用ひ、利用部事業は隆盛である。

小學校は三校をかぞへ、中央校には高等の代りに乙種農學校を設け、農業、養蠶を敎育し、女子部の設けもあり、近鄕よりの入學者も多い。

明治村

東に越後山脈の丘岡あり、北部及び西部は低平なる耕地にして、字增田附近はむしろ濕潤といつた方がいゝ位である。南は保倉川を以て保倉村に、西は大潟村と境し、二十部落を含み、面積一・一五七方里あり、字花崎は、寛正六年、堯惠法師紀行に、花笠と見ゆる所、

螢 澤も聞えぬ秋の雨に
しほぞきぬる花笠の里

の歌がある。頸城鐵道明治村停留場より信越線黑井驛へ約二里、バスの便り、交通狀態は惡くない。

產米增收は縣下第一の稱あり、反當り收穫二石八斗餘の成績を示し、統制販賣を行ひ、時價相場聽取のためラヂオを据付けてゐる。また全村を十五部落農區に分ち、各區別に水田部、裏作部、副業部、畜業部、家禽部、藁工品部、社會部を置き、部落によつては特に蔬菜部を設け、完全な組織と統制のもとに實果を收めてゐる。產業組合では利用購買に於ては特に縣下屈指の活動を見せてゐる。

敎育に於ては思想統一、國民精神の作興に全力を集注し、消費節約に基く生活改善も徹底し、男子青年團には消費組合の組織がある。小學校は明治尋高、修齊修進兩尋常の三校がある。また村營の職業紹介所を有し、名古屋方面からの申込が常に輻輳してゐる。

旭村

本村は大字梶、大瀧新田、神田町新田長澤新田ほか十五部落を併せて成り、面積〇・八六五方里、大字町田は村の東南端に位し、その西は一面の沼澤にして、現水面は凡そ八十町、旭池、鵜池の二池にわかれる。

治亂記に、爲景佐渡落の時「藏人景忠は猶も、米山田尻、町田の人數を催し紛骨を盡し、賽夜の軍陣もなし」とあるはこの地である。

信越線潟町驛へ一里餘、縣道縱橫に通じ、潟町、高田、柿崎へバスが通ふ。

村內は見渡すかぎりの平地で、水田が多く、農業が盛んである。數年前、五百町歩餘の耕地整理と百餘町歩の用水池築造が完成し、產業上に一新生面を開き、爾來副業も隆盛になつた。

下黑川村

郡の西北隅、吉川の東岸に位置し、角取、阿彌陀瀨、下小野、柳ケ崎、高寺ほか十三部落を含み、面積〇・九三四方里である。川田、小野は米山山麓中にあり西部及南部は平地にして、黑岩村及び源

村に水源を發したる黑川及び吉川の二流は、村內を灌漑し、大字角取附近に於て一となり、黑川と稱し、柿崎を經て日本海に注ぐ。

舊庄名黑川庄とは鉢崎、柿崎等も廣く含んだもので、今の下黑川村は、柿崎驛の南、靑海川のあたりを指す。黑川とは靑海川の別名である。

德川時代は高田藩榊原領下に屬したが明治維新となり廢藩置縣の令により柏崎縣に所屬、後、更に新潟縣行政區域となつた。明治六年第七大區に編入され、中頸城郡に屬した。同二十二年には角取ほか十八ケ字を以て下黑川村を組織し、三十四年廢置分合の令により大字馬正面を柿崎町に併せ、十八ケ大字となり以來今日に及んだ。

小學校は一校、靑年學校では縣より表彰されること二回、女子靑年團では服裝を統一し 男子靑年團は村の中堅となつて銃後に活躍してゐる。

村農會では種子の頒布、藪作、養鷄の奬勵をなし、また上越酒造研究會を組織して技術員を養成し、優良技術者は農閑期五十圓から百圓の給料をとるといふ。

吉川村

本村は郡の北西部に位置し、吉川は村の中央を流れ、灌漑の便良好である。土地は一般に低平にして豐沃なるため農作物に適す。四隣は黑川村、角取村、旭村源村等に接し、地積大凡二千六百町歩に上る。

米產多く、郡內第一の產額を有し、副業としては椎茸の栽培及び柿の生產が頗る盛んである。最近はまた養兎事業も發達し、將來を期待されてゐる。信用組合は曾て二組合を有したが、現在はこれを合併し、全村を區域とする一組合が新に設立され、經營の堅實なること郡內屈指といはれてゐる。村農會では柿、椎茸の統制販賣に努力してゐる。

小學校は五校あり、この他吉川農林學校ありて女子部をも併置し、農家の子弟の敎育に當り、農業靑年學校も同校を中心とする敎育が行はれてゐる。

源村

郡の東北部に位し、東は鷲巢山、兜巾山の連峯を以て刈羽郡鵜川村に境する。全村山地多く、吉川の水源は東方山岳地に發し、西に下り、屈折して西北に轉じ吉川村に入る。山直海、岩澤、大賀、山中、米山、尾神ほか六大字より成り、面積一・七三八方里である。

明治三十四年町村合併の事あり、大正六年村是を設定された。昔は長峰の城下町たりし地である。信越線潟驛へ三里半途中吉川村泉谷よりバスの便がある。

全面のの約八割が山岳によつて占められるため耕地は僅か二割に滿たず、農業は集約的に行はれ、增收計畫實績は郡下第一等の成績を示してゐる。柿、栗、養兎、養鷄、養豚も盛んにして、柿は品質良好、富有柿として有名で、統制販賣により京都、名古屋、大阪方面に出荷し、

蕎兎は兎皮加工までしてゐる。竹細工、藁工品、木炭の產も少くない。

黑川村

本村は郡の北方、米山山脈の西南に位置し、東南北の三方は山丘にかこまれ、西部のみが僅かに平地に惠まれてゐる。交通は從來不便であつたが、近年、バスが開通し、柿崎まで二里の間、車馬の往來頻繁を極めるに至つた。黑川は本村唯一の水路にして、水田の多くはその沿岸に擴つてゐる。面積〇・七方里あり、戶數五百四十、人口四千五百を數へる。

明治維新前は高田藩榊原領に屬したところで、廢藩置縣の際は柏崎縣に編入せられ、後、新潟縣となつた。明治二十二年町村制實施の時、猿毛、上中山、米山寺、松留、水野、下牧、平澤、芋島、下灰庭新田、岩野、高畑、岩手、城腰を以て組織された。

產業は殆ど農業にして、農區を五區に分ち、採種圃の經營、堆肥の增產、產米の增收、養蠶、果實栽培の普及等が計られ、いづれも近時優秀なる成績を擧げてゐる。

教育は一村一校主義により、曾て獨立せる三校を廢して一本村二分教場とし、青年學校は昭和九年度在閣の際、表彰を受けた優良校である。また婦人會、修養團、青年團などありて修養會、講習會等を開いて智識の向上と國民精神の作興を圖ると共に、勤勞奉仕、社會奉仕に活動してゐる。

黑岩村

米山々塊のうちなる尾神嶽の西方斜面にあたる一小山邑にして、黑岩、狸平、東横山の三部落より成り、面積一・〇九五方里である。東北山地より起る黑川は大字黑岩を貫流して黑川村に入る。東方は刈羽郡に境する。

戶數二百有餘、人口千二百を越え、住民の多くは林業或は農業に從事し、產物は林產關係のものが多く、特に木炭は本村主要產物の第一である。米、繭の產も尠くない。黑岩村信購販組合、狸平森林組合がある。また寺院には曹洞宗觀音寺同東光寺、眞宗石仙寺を有し、村民は宗教的信仰の念に厚く、風俗醇良、質實勤勞を愛する風がある。

鐵道信越線柏崎驛へは約二里を有し、途中黑川村より乘合自動車通じ、交通比較的便利である。また村內には縣道が走つてゐる。

和田村

郡の中央より稍や西寄りに位し、荒川の沿岸を占める農村である。地勢一般に平坦にして、信越線の便及び道路よく發達して交通は至便である。

區制時代には小六區に屬し九番組を組織した。即ち舊二十六ケ村を一區域となし、後、これを二分して戶長役場を設置し、明治二十二年村制實施の際、自治區を四分して下板倉村、國明村、大倉村、大和村の四ケ村としたが、同三十四年に

至り町村廢置分合のことあり、この四ケ村を併合統一して現和田村を組織した。戶數千有餘、人口八千六百を越える大村で、面積〇・八六方里である。

主要生產物は米の四十餘萬圓を筆頭に蔬菜類、麻眞田、飲食物、藁工品、竹製品、大豆等である。

名所舊蹟としては　明治天皇御駐驛碑あり、明治十一年の秋　明治天皇北陸御巡行の際、當村石澤字二ノ宮に御小休あらせられた聖蹟である。

鳥坂村

新井町の南に接續し、關川の西岸に位する。中央に鳥坂山が聳立し、姫川原、中宿の二字はその北麓にある。西には舟岡山の丘陵横たはり、東部に片貝川あり北に向つて貫流する。除戶、上堀之內の二部落は鳥坂山の背後にある。西に高所山の山岳を負ひ、除戶は長野縣との境をなし、飯山街道の一小驛站である。

全村五大字より成り、面積〇・五三六方里、村內城山は三百四十八米突、高所山は五百二十八米突、新井町より長野縣飯山町に通ずる街道筋に當る。

高田區裁判所出張所、鳥坂郵便局、村役場、中央電氣鳥坂發電所のほか、上堀之內尋常(二學級)、姫川原尋高(七學級)の二小學校あり、社寺には村社八幡宮、菓成寺、正念寺、證念寺、誓願寺等を有し、村勢活氣に溢れてゐる。

鳥坂城址は、その形狀鷄冠に似たるを特色とする。往昔、勇婦板額がその宗家の嫡子城資成を擁して據守せる城址なりとの傳說あるも、魚沼郡にも北蒲原郡にも鳥坂なる地あり、板額の籠つたのはどこの鳥坂か瞭かでない。

信越線新井驛へ約一里、バスの便を有し、交通は惡くない。

原通村

郡の中央、新井町の南部に位置して關川の左岸にあり、西に高所山、花房山を負ひ、地勢概ね高燥である。小原新田、大原新田、北田屋、坂下、寺尾、今府ほか十五部落を合して成り、面積〇・八二六方里に及び、信越本線新井驛より二里縣道通じ、バスの便がある。

水田二百數十町步、畑、山林いづれも二百餘町步を有する農村で、昭和八年には經濟更生村に指定され、翌十年から實行に着手し、今や計畫の大半は遂行された。米の增收、採種圃の經營、堆肥の增產などにヘビーをかけ、また紫雲英栽培に於ては品評會で二回入賞し、米も縣主催の產米改良協會聯合品評會に於て入賞するなど、成績は縣下屈指である。その他煙草の栽培、養鷄、養蠶も行はれ、蔬菜、葡萄の產もある。

小學校は二校あり、一は高等科が併置される。

名香山村

本縣の南端に位し、長野縣と境する本村は、上越の名峰妙高山の西麓に當り、原野山林多く、中央には　川が溪谷を作

つて北に流れてゐる。田口は關山と共に信越線に於ける雪の難所にして、毎年旅客の惱むところである。

スキー地赤倉・妙高山、關川は何れも本村の管内に屬し、大字田口は信越本線の一驛にして池の平溫泉も近くにある。元龜三年十月、武田上杉兩氏相爭の地で或は妙高山古名越の中山と云ひ、中山を名香山と書し、これを音讀してミヤウカウと唱へ、佛典に見ゆる妙高に附會し、山頂に佛宇を置いたものであらうと云はれる。面積二・〇六二方里である。

村内に久邇宮家御別邸ありて毎年御來山の榮に浴し、更に大正十二年關東大震災の時は　皇后陛下が當地に御避難遊ばされた地である。海拔八百メートルの地に湧出する赤倉溫泉・妙高溫泉スキー場等あり、風致閑雅、盛夏なほ輕寒を覺え絕好の避暑地である　されば別邸、旅館軒を並べて夏時避暑客を以て賑ひ、村民は主としてこれら遊覽客を中心として生活をなし、生産的な産業は少い。

都會人との接觸多きためか、教育普及の程度は驚くべきほど高く、小學校・青年學校の成績實に良好である。

矢代村

本村は郡の中央より稍ゝ水南に位し、四隣は新井町、鳥坂村・中郷村に取圍まれ、一部は西頸城郡と接壤する。自治行政區劃は菅沼、東志、西菅沼新田、窪松原、上中、西福田新田、三本木新田、西野谷新田、西野谷、兩善寺、岡澤、志村等にわかれ、役場は大字菅沼に置く。戸數七百弱、人口四千三百を越える。

生産年總額は約四十萬圓に達し、米の三十萬圓弱が最も多く、林野産物の五萬圓、蠶繭二萬數千圓がこれに次ぎ、その他食用農産物、園藝農産物も尠くない。

官公農學校及び諸團體としては　役場・村農會、在郷軍人分會、男女青年團、圖書館、尙武會、消防組、婦人會、産業組合、養蠶組合、教育會、青年學校、矢代尋常高等小學校等がある。

經濟狀態は良好、農村振興土木事業その他村營各種事業の成績もよい。

中郷村

郡の中央やゝ南寄りに位する妙高山麓の地にして、新井町・鳥坂村、關山村・矢代村、原通村の町村に隣接し、東は丘陵を負ひ、西は矢代川に沿ひ、南方は原野山林多く、藤澤、板橋附近に耕地がある。義經記に、

出羽の國に聞ゆるせんとう（山盜　の大將に由利太郎と申すもの、越後の國に名を得たる頸城の郷の住人藤澤の入道と申すもの二人かたらひ信濃國へ越して其の勢七十人つれ、云々

とあるは大字藤澤の住人である。字二本木は北越軍記に、織田の謀將森長可と上杉景勝の相爭つた地である。

村には訪日ツエツペリン號に水素ガスを供給した日本曹達二本木工場がある。また信越線二本木驛を有す。

二本木、松崎、板橋新田、市屋、坂本

新田、藤澤、江口新田、片貝、福崎新田西四ツ屋新田、稻荷山新田、宮の原、岡川、八斗蒔等の部落より成り、面積一・四八六方里である。比較的山岳が多く、從前は米は自給程度であつたが、數年前から增收計畫が實施され、今日ではすでに移出するまでに至つた。しかし曾て副業の王座を占めた養蠶は漸次衰へて、煙草の栽培がこれに代らんとしてゐる。大正七年、陸軍省主體の曹達會社が設立され、村民は工場の人夫となつて農閑期を過すものが多い。

關山村

縣の南端に位し、上越國境の名峰妙高山の東北麓一帶の原野山林地帶を占める本村は、土地概ね高燥なれど、東部にはやゝ火山灰質土壤の耕地あり、關山・大谷、桶海、坂口新田等の大字より成り、村内を縣道通じ、部落は概ねその沿線に聚る。また信越本線關山驛を有し、驛前より關溫泉、燕溫泉へ・七月より九月まで、乘合自動車が往復する。信越線田口關山といへば雪の名所で知られる。

源平盛衰記に、越後と信濃の境なる關の山とあるは、この邊より關川柏原までの山路を廣く指したものである。北越軍記には關之山と載つてゐる。明治二十三年四月自治制施行、同三十四年十一月原通村の一部桶海、大谷の各大字を合併して今日に至つた。東西五里、南北三里、面積六・一五二方里に及ぶ。

關溫泉は鹽類泉で、關山驛の西南七キロにあり、冬季はスキー客で滿員になり弘法大師の發見と傳へられる。燕溫泉は硫黃泉で、關溫泉より二粁隔たり、こゝより妙高山頂まで八粁、明治六年、關山村の人、岡本勝太郎氏の發見といひ、山間素朴なる溫泉鄕にて、冬季はスキーの好適地となる。關山神社は毎年七月を例祭とし、大いに殷賑を呈する。料理飲食店七軒、藝妓八名あり、旅館は十數軒をかぞへ、宿泊料は一圓五十錢から二圓五十錢程度である。

なほ村には高田區裁判所出張所、關山陸軍廠舍、高田營林署關山保護擔當區、穀物檢査所出張所、郵便局、青年會圖書館等あり、寺院には慈雲寺・淨嚴寺、寶海寺、開稱寺、興善寺、眞海寺がある。

杉之澤村

本縣の最南端に位し、長野縣と國境を接する本村は、四圍を戸隱連峯、妙高、黑姫の諸高山にかこまれ、原野山林多く村の中央に笹ケ峰牧場がある。關川上流の地域にして部落はその沿岸にあつまり面積六・一五六に及ぶ大村であるが、人口は僅かに千三百數十名をかぞへるに過ぎない。關山驛より一里ばかり山奥へ入つた村で・交通は便利といふことが出來ない。しかし飲食料理店や藝妓置屋もあり、山村ながら文化も娯樂も一通りは揃つてゐる。

笹ケ峰牧場は妙高山麓なる廣大羣延の地にして、清澗あり、夏季のキャンプに適する。苗名瀧は關川の水源をなし、高

さ凡そ十八丈、幅一丈餘、附近一帶は白砂雪を欺き、稀に見る勝地である。

斐太村

南葉山の東麓にあたり、西半は山地、東半は頸城平野の平坦なる沃地である。東は矢代川を挾んで和田村と境し、東南に新井町がある。

籠町、五日市、上四ツ屋、谷内林新田ほか二十大字より成り、面積二・一三五方里を有す。大字中に飛田及び飛田新田あり、國音の相通ずるところより斐太の村名が起つたものであらうといはれる。村内斐太の森に斐太神社あり、また大字籠町に屬する鮫井（一名鮫尾）は天正七年上杉景虎敗死の地である。

斐太、西郷兩尋常高等小學校あり、前者は八學級、後者は七學級に編成され、學業成績良好である。また私立青年團圖書館がある。寺院は唯念寺、常圓寺、勝福寺、慶尼王寺、本澄寺ほか九ケ寺あり慶尼王寺が曹洞宗に屬するほかは、全部眞宗である。

信越線新井驛、脇野田驛へは共に一里

金谷村

本村は郡の西部に位置して斐太村、和田村、春日村、桑取村、高田市等により四隣を接し、東部は高田市に面するため交通の便良好であるが、他の三方は山岳に掩はれるため不便である。戸數九百九十餘、人口六千五百をかぞへる。

藩政代時には神原領に屬してゐたが、明治維新後、北大崎村及び下郷村の二に分れ、同三十三年十月、この二ケ村を併合統一して現在の金谷村となつた。享保十五年、村内に東本願寺掛所を置かれしことあり、本願寺第十七世眞如上人が開基である。寛保三年に至り、神原侯が當城主として入御間もなく高田別院となつた。今も大字大貫にあり、村民の信仰をあつめてゐる。

村は下記の二十二大字に分れる。即ち門前、朝日、小瀧、下馬場、黒田、地頭方、灰塚、青木、上中田、下中田、鹽荷谷、京田、向橋、儀明、五湯谷、後谷、大貫、飯瀧寺、下正善寺、宇津尼、上網子、中ノ俣がそれである。

産物の主なるものは米、薪炭、大根、里芋、漬菜、馬鈴薯、鷄卵、繭、藁工品等である。

尋常高等小學校三校、尋常小學校一校を有し、青年學校は三校あり、神社は三十二社、寺院十四ケ寺をかぞへる。

春日村

郡の西端、直津町の東にあり、北方は日本海に面し、他は高田市、有田村、金谷村、谷濱村、新道村等と相交はり、荒川の東岸に位する要驛地で、地勢概して平坦、交通の便は極めてよく、鐵道信越本線春日山驛、北陸本線郷津驛を設けてゐる。藤新田、土橋、塚田新田、藤巻ほか二十一大字より成り、面積一・六〇四方里に及ぶ。

村のほゞ中央部に有名なる上杉謙信、

同景勝等の春日山城址がある。中世、越後文化の中心地として、その大都邑を誇つたものであつたが、堀氏によつてこの文化は福島の平野城下にうつされ、間もなく高田が松平忠輝の居城として築かれるに至り、この城址はたゞ舊蹟としてその名殘を止めるに過ぎない。大字愛宕には愛宕横現の舊址あり、大字小場小丸山には眞宗の高祖見眞大師の遺跡ありと傳へる。春日山は一名鉢ケ峰と稱し、上杉氏府城のあとで、規模雄大、まことに要害の地にして往時の壯圖を偲ばしむるものがある。山腹には縣社春日神社ありて謙信公を祀る。また村には五知國分寺があり、天台宗寺院にして、天平年間、僧行基が聖武天皇の勅を奉じて草創せる古刹、大日、多寶、寶生、藥師、阿彌陀の五如來を安置し、本尊大日如來は國寶に指定されてゐる。

谷濱村

西は西頸城郡に境し、東は春日山を負ふて直江津町に隣り、南は日本海にのぞみ、海岸線は單調であるが、遠淺なる故海水浴に適する。地勢高燥にして山勢は海濱に迫つてゐる。

もと長濱といつたところで、海岸中、越の長濱と呼ばれるところは、親不知と共に難所と稱せられ、昔、加賀前田氏の通行の時は、村々の壯丁五十人が出て海の渚に立塞がり、波の寄せ來るを防ぐを例とした。その壯丁を杖衝といつた。最も景越に富み、四海波の奇は人の賞するところ、東遊記に

又名立の次に長濱といふ濱あり
たそがれにゆきゝの人の跡絶へて
道はかどらぬ越のながはま

などいへる古歌もありと聞けり、誠に此あたりは都遠くよろづ心細き土地なりき

とあるはこの地である。有間川、長原、丹原、鍋ケ浦、吉浦、上宇山、下宇山分ほか十五大字より成り、面積一・八八一方里に及ぶ。北陸本線に沿ひ、谷濱驛を有し交通の便はよい。

郷社阿比多神社、村社日吉神社、無格社二、曹洞宗悅翁寺、同長昌寺、同洞泉寺、同龍興寺、眞宗西榮寺、同流泉寺等の社寺がある。

桑取村

西は山岳を以て西頸城郡と堺し、有馬山の山谷にあたり、南に南葉山、重倉山の高峰がそびえ、大淵、横畑、皆口、西谷口、北谷、土口、增澤、東吉尾、西吉尾等の大字より成り、諸部落は概ね有馬川の沿岸にある。面積二・二八九方里あり、田百四十町歩、畑百町歩、山林五百數十町歩で、米、繭の産が多い。北國太平記に

景勝あやめも知らぬ暗き山路を忍び通り、善光寺後鍬取といふところを廻りて五更の頃北城彌五郎が陣に押寄せ

云々とあり、鍬取は卽ち今の桑取のことである。北陸線谷濱驛へ二里、縣道は通ずるも交通はあまり便利でない。

神社は無格社のみ三社、寺院には東林寺、龍雲寺、林光寺、靈雲寺あり、いづれも曹洞宗に屬する。

大鹿村

高田市を去ること南へ五里餘、南北に長く、東西に稍〻狹き地形をつくる本村は、いはゆる有名なる大鹿煙草の産地である。煙草に次では米が多く、副業では木炭製造が主位を占めてゐる。村更生のための諸計畫は、村民一致協力してこれが達成を期し、堆肥增産その他の生産關係方面に於ても、生活改善、風俗改善等の方面に於ても、頗る良好なる成績を見せてゐる。

諸團體には自制館、村農會、尙武會、在鄕軍人分會、消防組、青年團、養蠶組合、戸主會、火災豫防組合、犯罪豫防組合、煙草耕作組合、衞生組合、麥作組合等があり、學校は一村一校主義を以て臨み、農業青年學校は男女共に成績良好、出席率も百パーセントにして、曾て度々表彰をうけたことがある。村社一、無格社四、蓬龍寺等の社寺がある。

豐葦村

本村は信越國境に近き山村にして、大鹿村より長野縣飯山町に通ずる一路はこゝを通過する。また信越線關山驛へ二里新井町へは三里半、途中バスの便あり、交通の便は惡くない。

土路川の水源をなすところで、袴岳、萬坂峠、班尾山、毛無山等にかこまれ、村の東南部に沼澤地あり、豐葦の名は或ひはこの沼澤に因んで起つたものであらうとも云はれる。

土路、樽本の二大字より成り、村役場は土路に置く。面積一・五六六方里を有し、有租地四百八十町歩を越える。米繭を主産物とし、千餘の村民は殆ど全部が農耕に從ひ、耕地は水田七十五町歩、畑地百十五町歩である。豐葦村信用組合は經營の基礎頗る堅實である。

寺院に眞宗淨光寺、同眞宗寺あり、また村內には私立の樽本青年團圖書館を持つてゐる。

上鄕村

本村は關川の上流、郡の東南隅に位置し、四隣は大鹿村、關山村、原通村、水原村、泉村、平丸村等の諸村に圍繞せられ、松倉山の山麓たるをもつて地勢概して山岳、荒川の東岸に幾分の平地を有してゐる。飯山街道は村を南北に通じ、猿橋より信越線新井驛へバスが通じ、交通は頗る良好である。戸數四百餘、人口二千五百を越える。

主産物は米、大豆、小豆、繭、煙草等で、その他藁工品、木炭等の副業的産物がある。堆肥增産のためには堆肥競技會を毎年一回宛擧行してゐる。

官公署諸團體としては村役場、郵便局、村農會、在鄕軍人分會、男女青年團、青年學校、小學校等があり、青年學校の出所率は百パーセントに近く、數回にわたつて表彰を受け、縣下有數の優良校として知られる。

水上村

新井町の東方に在り吉木、北條、西條上新保 川上、光明寺新田、吉木新田の七部落を併せた村で、關川を隔てゝ新井町に對し、東は板倉村につらなる。地勢南方は山地にして北方に傾斜し漸次平坦である。

面積〇・五九五方里。新井町との間にバスの便あり、交通至便である。

耕地は水田多くして畑地少く、主要産物は米である。金肥節約、肥料の自給自足を計畫し、紫雲英作付反別は百二十町歩に及んでゐる。

村內に八十餘町歩の原野あり、大正八九年頃よりこれが開墾に着手し、今やその半分を開墾した。副業は藁工品、養兎養蠶が多く、最近は葡萄の栽培も盛んになつて來た。

小學校は一校にして、青年學校が併設される。女子教育に於ては、明治四十一年婦德修養の目的を以て佛敎婦人會が組織され、現在は二百數十名、四十歳前後の婦人を會員に持つてゐる。該婦人會は曾て縣下隨一を謳はれたことがある。

なほ村內社寺には村社日吉神社、慶樂寺、西岸寺、勝德寺、宗顯寺、善性寺、長泉寺、專念寺、德專寺等がある。

板倉村

本村は四十一箇の部落を合併したる大村にして、荒川の東岸に位し、黑倉、松倉の兩連山は屹立し、その餘脈は村の中央部にまで及ぶ。北部は頸城平野の平坦なる沃地にして耕圃よく拓けてゐる。面積三・一八二方里を古む。

針村は本村の主邑で、北國治亂記に天文中荒川針村の名が見える。針村の南なる大字山部には箕冠城址がある。天和元年以後、幕府の領にして、寛保元年まで六十年間は高田御豫所の支配を受け、同年榊原氏の高田に轉封されるや翌二年幕府は川浦に代官所を置いて、當地を支配した。

信越線新井驛より針村へ一里半、別所へ二里 いづれもバスの便がある。しかし和田村に通ずる縣道沿線の地が交通至便なだけで、山岳地帶は未だ道路開けず人馬の往來に不便を感じてゐる。

泉村

關川の東岸に位し、その支流たる濁川の流域を占め、下濁川、上濁川、卷淵、和屋、中横山、木成、大具、大下、上馬場、小局、東菅沼の十一部落を併せて成り、面積〇・八一方里である。猿橋村の北なる一溪を取卷く地で、全村山岳連亙し、平地の見るべきものはない。從つて耕地は水田百八十町歩、畑地百六十町歩に過ぎず、山林は三百八十數町歩にのぼる。産物は米、繭のほかに林産物のあることを見逃すことは出來ない。

信越線新井驛へは一里 にて達するを得、途中からバスが通ひ、交通の便は些して惡くない。寺院には專了寺、開稱寺

養性寺等あり、いづれも眞宗に屬する古刹である。

因に村内戸數は三百二十五にして人口は二千餘である。

平丸村

本村は郡の東南部に位して松倉山の西麓にあり、地勢、東は松倉山の麓たるを以て山岳多く、南北また丘陵に充たされて、僅かに西部上郷村の方面に平地を有するに過ぎない。本村の名を現はせる平丸川は村内唯一の水路である。隣接町村は上郷村、泉村、水原村、豐葦村、長野縣下水内郡太田村、同外樣村等にして、下平丸、上平丸の二大字より成り、面積一・〇六八方里である。

信越線新井驛へ三里半、途中バスの便ありと雖も、交通至便とはいひ難い。東南には長野縣に入る縣道がある。

村に小規模なる炭坑あり、また米、繭等の農產物がある。副業の麥帽子製造は本村の特產物で、その他莫座、莫製品、木炭等がある。村農會では醬油の自家醸造の指導奬勵をはじめ、生活改善と消費節約のため種々の方策を講じてゐる。

寺野村

信越の國境なる黑倉山の西北麓に位する村で、地勢高燥を極める。久々野、猿供養寺、東山寺、大池新田、機織の五大字を含み、面積一・一〇二方里である。村内猿供養寺は寶冠の東南山中にあり、俗に山寺ともいひ、古刹である。元享釋書に、越後守紀躬高三島郡乙寺に猿猴寫經供養の事を錄せるは、この山寺の緣起を彼處へ錯亂せるものといふ。また大池勝景地は、頸城平野を一眸の中に修め、眞景絶佳である。

信越線新井驛より二里十六町、自動車の便がある。

戸數約三百八十、人口二千三百を數へ住民は農林の業に從ひ、寺野村信購販組合その他各種團體の活躍旺んにして、寺院に眞宗願恩寺あり、小學校は寺野尋常高等小學校一校、七學級編成である。

水原村

郡の西南隅なる信越國境の一山村にして、西北は耕地、南は山林地である。東方佛ケ峰より西方小濁に達する細長い村で、西北にはヨシ八池がある。

上小澤、大濁、小濁、坪山の四部落を併せて成り、面積一・三一方里にして、戸數三百三十餘、人口二千二百三十をかぞへる。

有租地は六百三十餘町歩あり、耕地は水田二百十五町歩、畑地二百二十五町歩にして、山林原林百七十八町歩に及び、米を以て村内第一の產物となす。水原村信用組合は、設立以來常に良好な成績を以て發展し來つた。

信越線新井驛へ三里半、途中よりバスが通じてゐる。交通は稍〻良といふ狀態である。寺院に圓光寺、了願寺、善妙寺の三あり、共に眞宗に屬す。小學校は高等科を併置し七學級編成である。

菅原村

郡の中央稍〻南部に位し、明治十年以降油井大いに起り、爾後益々盛んになつたところで、尤も二百年前、すでに臭水を採り鹽油に供したといふ歷史もある。東は櫛池村に、西は三郷村に、北は高士村につゞき、南は別所川を以て板倉村に連つてゐる。東南は山を負ひ、稍〻西北方に傾斜をつくつて耕地拓け、上江、坊ケ池、櫛池川、別所川、廉平川等は灌漑の便良好である。

交通は三煙線、西柿崎線、飯田線、乙石澤線、本線、乙樋越線、今曾樋線、大石線等の諸道路あるを以て至便である。自動車の便にも惠まれる。

戸數五百有餘人、口約三千を擁し、純然たる農村にして、その生產物も、米、麥、甘藷、大根等の農產物を主とし、鷄卵、竹材、葭、萱、杉皮などの農家副業物がこれに次ぐ。

官公署團體としては、村役場、信用組合、地主會、消防組、青武會、在郷軍人分會、男女青年團、幼年團、村農會、村是實行組合などあり、小學校は菅原尋常高等小學校一校のみ、青年學校には女子部の設けがある。

社寺としては菅原神社、稻荷社、諏訪社、鶴覺寺、西藤寺、明道寺、大德寺、願淨寺、高願寺、青泉寺、專福寺、無量寺、淨通寺、了願寺、妙土寺などが擧げられる。

高士村

郡の東方に位し、頸城平野の一部を占め、村内概ね耕地にして、水田六百五十町歩、畑地四百三十餘町歩を有し、米の產出が多い。村には廣大なる葡萄園ありて岩鼻葡萄園と稱し、村の南方、高田驛より三里の地にあたり、第三紀丘陵を利用して二十餘町歩に三百五十種、七萬餘株を栽培し、高田名物葡萄酒醸造の原料とされる。

古くは高津庄武士郷と稱したが、自治制施行の際高士村と名づけられた。本高田、松塚、妙賀、油田、森田、十二之木ほか十六大字より成り、面積〇・五九三方里である。信越線高田驛へは約三里、バスの便がある。

村には區裁判所出張所、郵便局、信購組合等あり、寺院は曹洞宗最光寺、同藥師院、眞宗淨福寺、同正法寺、同勝樂寺、同明照寺、同隆滿寺、同蓮光寺等が擧げられる。

櫛池村

郡の東南隅に位する山村にして、西は菅原村に接し、東は東頸城郡と交はり、南は長野縣に界する。

棚田、北野、梨平、赤池、青柳、鴛澤、上中條、鈴倉、寺之脇、東戸野、水草等の十二部落より成り、面積一・五〇四方里、櫛池川は本村に源を發し、西北流して荒川に入る。高田市へ三里、縣道通じて途中よりバスの便がある。

地勢東南に高く、西北に低く、石油の

産あり、產物中の第一となす。しかし住民の大部分は農業に從事する。最近、各種農產物の增產を計つて結果よく、殊に生產費低下のための堆肥增產は頗る好成績を示し、金肥も使用されてはゐるが、個人購買は禁じられ、產業組合を通じて一手に廉價に仕入れてゐる。副業には藁工品と木炭があり、木炭は年產五萬石に及び、本村の特產物である。

里五十公野村

本村は郡の中央新井町より東北方に位置し、西南は高士村に接し、信越國境に水源を發したる飯田川はその境界を北に向つて流れる。東南は東頸城郡と接壤する。地勢は概ね平坦である。高田市に通ずる縣道に沿ひ、大字下中にて他の縣道と十字に交叉し、高田市へ二里半、バスの便あり、交通狀態良好である。

近世、山五十公、里五十公の二鄕に分れてゐた。大字川浦は古來名邑にて、德川幕府は陣屋をこゝに置き、代官を派して公領五萬石を支配せしめた。大字法花寺は國分尼寺の遺址にあらずやと傳へられる。殊に法花寺の地名の殘つてゐるのは、國分尼寺または京の法華寺の何れかに關係してゐたに由るとの說もある。

生產物の主なるものは米、木材、刄物類、履物等である。また村には小學校、男女青年團、在鄕軍人分會、產業組合あり、成績良好である。

學校は櫛池尋常高等小學校（九學級）、青柳尋常小學校（三學級）があり、青年學校も設けられ、補習敎育の成績大いに見るべきものあり、殊に青年學校の入學率と出席率は良好である。

警察は高田署、郵便は飯田局管內で、村にはまた頸城電氣會社がある。

上杉村

東は丘陵連亘して東頸城郡と境し、西は頸城平野に接續し、土地平坦である。今保、所山田、岡田、島倉、北代、下新保、大、下田島、三村新田、浮島、桑曾根、佛澤、山高津、井ノ口等十四大字より成り、面積一・〇二方里あり、高田驛へ三里半、バスが通つてゐる。

大字所山田の五十公山に五十公神社あり、物部五十公氏の廟がある。また岡田の鳳卷神社は地方庶民の崇敬あつく

さく花に神も心やなごむらん
春日のどけき鳳卷の森

と泉久澄の歌にあり、天曆二年の創始と傳へられる。この他寺院には阿彌陀寺、延壽寺、蓮淨寺、長樂寺、入光寺、常光寺、覺願寺、本善寺、禪長院、欣淨寺、正覺寺、長圓寺、領勝寺等あり、禪長院が曹洞宗であるほかは、全部眞宗に屬してゐる。なほ本村主要產物は米を第一とし、副業に養蠶が行はれる。

美守村

保倉村の南につゞき、土地低平にして沼澤地が多く、直江津、高田の兩驛へ何れも二里半、縣道通じ、バスの便あり、交通は幾分良好である。

美守はヒタノモリと訓じ、夷守卽ちヒナモリの誤つて傳へられたものといふ。大字本鄕は夷守の本據であつた。

錦村、柳林、上廣田、岡木、米子、廣井、下廣田、本鄕、冲柳、越柳、神田、塔之輪、山屋新田、末野、末野新田、猿俱新田などの部落より成り、面積〇・七五五方里に及ぶ。

戶數四百六十戶弱、人口は三千人を越え、耕地は田四百七十餘町步、畑百三十餘町步を有し、村民は殆ど農耕に從事して生計の資としてゐる。產業組合は四種兼營である。

寺院には眞宗玄宗寺、同光覺寺、同西勝寺、天台宗慈圓寺、日蓮宗法德寺、同蓮華寺ほか五ケ寺がある。

諏訪村

頸城平野の中心を占める本村は、舊くは夷守鄕に屬したところで、諏訪はまだ諏方につくつた。面積〇・八二四方里、田七百餘町步、畑百十町步を有す。

郡の西北方に位し、東は美守村、西は有田村につゞき、南は津有村、西南は里五十公野村に接し、北は保倉村に連つてゐる。地勢概して平坦、村の中央を飯田川が流れ、耕地多く、農業盛んである。自治行政區劃は上眞砂、北田中、杉野袋、飯塚、鶴町東原、荻野、下掘之內、南新保、高森、橫曾根、橫曾根古新田、北新保、米岡、中眞砂、川端、東中島、上千原、下眞砂、福橋の二十ケ字にして、村役場は眞砂に置く。

產業は米の生產を以てその主なるものとするが、その他藁工品、果實等の農家副產物も多い。小學校は二校、神社十八社、寺院十三ケ寺を有す。

保倉村

郡の中央に位し、保倉川の流域にして土地平坦、美守村の北につゞく。駒林、上名柄、下百々、小泉長岡新田、長岡ほか十三大字より成り、面積〇・八一五方里である。

飯田川右岸地方にして、保倉川は東頸城郡菱ケ嶽に源を發するも、本郡に入れば、地勢低平なるを以てその北岸に沼澤を多く見る。村名は東頸城郡にある保倉谷より出たと說く者がある。

直江津驛へ約一里二十町、高田驛へ二里十五町、共にバスの便がある。

耕地多く、農業盛んにして、村農會の活動よろしきを得て、近年、生產は著るしき發達を遂げ、殊に採種、柿の栽培、竹細工等に力が入れられる。

村にはまた村役場、在鄕軍人分會、男女青年團、消防組、上吉野小泉各尋常高等小學校、青年學校、水利組合がある。

有田村

荒川の右岸に位して直江津町の東に接し、大字春田新田は保倉川、荒川二水の合流地にして、西に一橋を隔てゝ直江津驛に通ずる。また春田新田には應化橋址あり、淨瑠璃本に逢岐橋といへる所で、所謂安壽津志王物語に關する古跡である

春田新田の北には福島城址あり、堀左衛門督忠俊、徳川忠輝等の居城であつたが慶長十九年、福島の地に水災多きため高田に築城され、福島は廢墟となつた。

安江、小猿屋、小猿屋新田、三田、三田新田、三ノ橋、三ツ橋、福田、三屋、上源八、松村、佐内、春田新田、壁屋新田の大字より成り、面積〇・六〇七方里に及ぶ。

戸數約七百、人口四千二百を算し、直江津町に隣接するため、交通の便よく、住民は農を以て主業となし、田五百六十餘町歩、畑九十餘町歩を有す。

三郷村

荒川の東岸にあり、北は津有村、西は高田市に接し、南北に荒川の支流を有し土地比較的平坦である。

元の物部郷の地で、天野原新田、本長者原新田、新長者原、長尾新田、藪野、本長者原、今池、下四ツ屋、西松野木、東稲塚、下稲塚等の部落より成り、全村すべて耕地、面積〇・三二七方里にして高田市へ縣道通じ、交通の便開ける。即ち縣道梨平高田線　新井柿崎線のほか、稲增上稲田線、支藤寺高田線、西松野木戸野田線等あり、その他多數の里道により物貨の集散に大なる利便を興へてゐる。

都の中央なる沃野を占め、菅原村、和田村、板倉村、高士村、新道村にかこまれ、村内を十一農區に分つてゐる。松野木部落農區はその施設及び實績に於て縣下の模範と稱され、各方面より表彰を受けしこと數回にわたり、他府縣より見學に來る者も非常に多い。この部落は實行機關を畑作部、養豚部、副業部、婦人部社會部にわかち、各部が競爭的に事業の向上と充實に勵んでゐる。産物の主なるものは米穀、蔬菜、果實、藁工品などである。

津有村

本村元高津郷の地にして、高田市の東に接する農村である。四ケ所、戸野目古新田、門田、市野江、桐原、本道、下野田、戸野目、藤塚、下新町、池、熊塚、上富川、熊留新田のほか二十四部落を併せて成り、面積一・一七九方里あり、戸數千二十、人口六千三百弱をかぞへる。住民の多くは農業に從ひ、重要産物は米で、その年産數十萬圓にのぼる。耕地は水田千二百五十町歩、畑地約九十町歩で全村殆ど水田である。

村には池島郵便局、通俗圖書館あり、高田市に接するが故に交通至便である。また村内寺院には願立寺、源長寺、西方寺、流源寺、明安寺、法福寺、淨願寺、西養寺、淨雲寺、淨林寺、本覺坊、蓮休寺、臨行寺、本淨寺、眞宗寺、淨音寺があり、全部眞宗に屬する。

新道村

高田市の北方、荒川の右岸に位する一村で、東は津有村に境し、民家の多くは荒川の沿岸に散在し、大字稲田は高田市に接し、街衢をなせる部分は同市に屬し

その他田家の部分は本村に含まれる。上稲田、桶場、子安、子安新田、鴨島ほか十四大字より成り、面積〇・一二方里、北越雜記に

慶長十七年高田築城の折今池、樋場、鴨島、上稲田、上島等いふ村里の地を幅三十五間堀割りて新川とす。

とあり、新川はアラカハと呼び、後、荒川に作つた。川上にては關川といふ。高田市に接續するため交通は便利である。

村には縣穀物檢査所出張所、稲田郵便局、第百三十九銀行支店、新道南部信用組合、富岡信販購　組合、高田農業倉庫などあり、社寺には村社諏訪神社、安證寺、願宗寺、慈圓寺、大日寺、智願寺、長泉寺がある。

西頸城郡

位置・地勢　西頸城郡は越後の最西端に位し、東中頸城郡、西は富山縣下新川郡、南は長野縣北安曇郡と境し、北は日本海に面してゐる。

東西十二里十六町、南北六里二十八町面積八十二方里にして、本縣全面積の約十一分の一を占める。

東南西の三方は殆ど山岳を以て掩はれ獨り北方のみ日本海に臨み、且つ地勢南方より北方に向つて次第に傾斜せるを以て、河川は自ら北流して日本海に注ぐ。しかも山勢高峻にして、海濱との距離短きが故に、河川は大概短くして急流をなし、早川の如きその最も著るしきものである。隨つて河川流域と雖も大平野なく僅かに姫川河口糸魚川附近に少許の平野を存するのみである。

名勝舊蹟　郡内の名勝舊蹟のことは、各町村にも縣勢に於ても記述しあれば、玆には單に便宜上その名稱だけを擧げよう。

（一）親不知、子不知、駒返、橋立金山不動瀧、黒姫山、月不見池、中山公園、駒ケ岳、鉢ケ岳、燒山

（二）堺川、布川、青海川、姫川、田海川、大和川、海川、早川、能生川、名立川

（三）蓮華溫泉、梶山湯、平岩湯、橋口溫泉、笠倉溫泉、蒲原湯

（四）不動山城、勝山城、根小屋城、清崎城、金山城　德合城

（五）鬼伏城、市振關、虫川番所

（六）奴奈川神社、江野神社、佐多神社青海神社、白山神社、丸田神社

（七）寄遺寺、靈源寺、千手院、水保觀音堂、雲台寺、西性寺、日光寺、名立寺

（八）明治天皇北陸御巡幸遺跡

（九）磯部村夫妻松、蓮華山高山植物

農業　本郡水稲の種類は百數十に上るが、愛國及び白坊主が最も多い。山間地では早坊主、龜の尾などがある。陸稲は明治三十三四年頃からの栽培で大正三年頃より急激に栽培反別の增加を見た。柿は本郡の氣候風土に適するが、販賣用に供せられるものは尠く、自家用の城をい

くらも出てゐない。梅は非常に多く、葡萄もます〳〵増殖の一路を辿つてゐる。農家副業に菅笠、畳表、和紙、麻布の製造があり、養蠶も多い。

林業　林野面積は郡全面積の八割六分を占め、これら林野より年々生産する林産物の額は平均三十萬圓内外を算し、移出十萬圓内外に達す。殊に木炭の産は最も多く、大正九年には郡木炭同業組合も組織された。蠶箔、桑籠、笊等の竹製品も少くない。

水産業　漁獲の主なるものは鯛、鮪、烏賊、鰹、鮪、鰯等で、遠海漁業の開拓に關しては、郡水産組合が夙にこれを奬勵してゐる。能生、間脇、中濱など良漁港に惠まれ、魚族の蕃殖保護のごときも良好である。

工業　工業の主なるものは清酒、醤油絹織物、染物、車輛製造、瓦、肥料、製茶等である。根知村附近の綿織物や、小瀧村、今井村、能生谷村、名立村等の麻織物も有名である。家内工業としては木竹工品、藁工品である。

鑛業　小瀧村の金、銀、銅、鉛、水鉛石炭、青海村の石灰、金、銀、銅、鉛、亞鉛、砂金、今井村の金、銀、銅、石炭能生谷、名立兩村の石油、海岸地方の砂鐵の如きはその尤なるものである。

商業　德川時代に於ける本郡と他郡との主なる商取引は信州との通商及び海運による他地方との商業であつたが、微々たるを免れなかつた。交通通信機關の發達した今日と雖も、縣の西邊、僻地なるため、また良港に乏しきが故に、商業は不振狀態にある。

人情・風俗　山間部落の住民は人情概ね樸直であるが、敏捷を缺き、且つ各自割據的の氣風が強い。隨つて一般に祖先を崇み、神佛を敬ふの念厚きも、社交的ではない。

國道筋の部落住民は概して浮華の點は免れない。近時教育の普及と各種交通機關の完備とは、上下各階級に大なる刺戟を與へて、舊來の頑習は打破せられた。根知谷邊の山村にては、老若男女共に帶を力めて強くしめる風俗あり、これ往古は帶の締め方の強さを以て越後ものと識別されたる遺風なりといふ。

本郡は本願寺派淨土眞宗の感化力驚くべく強大なるがためか、概して宗教的迷信は少いやうで、思想一般に諦觀的で、反抗心に乏しいのは喜ぶべきであるが、卑屈に失するの嫌ひあるは憂ふべきことである。

名立町

糸魚川町の東六里八町、名立河口にあり、延喜式には鵜石と水門との中間にありと出てゐる。後に山を負ひ、前に海を抱き、住民は農漁業に從するものが多いが、古來著名なる工匠を出して居り、現在も大工の多きことは他町村にその比を見ず、また養蠶を奬勵するあり、商業も漸次發達して近傍部落の需要を滿たしてゐる。即ち本町は初め農漁業地として起り、中頃、加賀侯參勤交替の節の宿驛と

して非常の發達を遂げたが、明治維新後次第に衰境に入り、石油により少しは芽生えやうとしてまた乏しくなり、鐵道開通後一層の打擊をうけ、目下開墾漁業及び養蠶により町勢の發達を圖つてゐる。名物にはタリタ落雁、味噌煎餅、黑海苔あり、大己貴命が當國を經營し給ひし時鳥帽子武といふもの、大字大瀧に潛伏して服せず、當地に陣してこれを征し給ふ時に獻貢米を納れ謝罪したといふ傳說がある。

社寺舊蹟では江野神社、日前神社、諏訪神社、淨福寺、王光寺、名立寺、宗齡寺、武内宿禰舊蹟、長者ヶ原、明治天皇御駐蹕地等が知られる。名立寺は明治十一年九月二十五日、明治天皇御行在所として、また德川時代には加賀侯參勤の途次の旅舍とし著名である。

能生町

能生川注口と櫃現山の間にあり、糸魚川町の東三里十町、糸魚川町に次ぐ郡内の名邑で、南に物産豐かな能生谷を控へてゐる。櫃現山の西には小泊といふ良灣があり、漁業の利に富んでゐる。

小泊、能生の二大字より成り、戸數七百五十餘、人口三千八百五十人である。町役場は大字能生に置き、その他能生警察署、糸魚川區裁判所出張所、能生築港事務所、縣立能生水産學校、能生尋常高等小學校、能生漁業組合、小泊漁業組合、鄉社白山神社、大泉寺、金剛院がある。鄉社白山神社が遠く王朝時代より著名なことは、遺跡並に寶物什器等によつて明かで、海岸櫃現山といふ磯山に鎭座し、泰澄大師作の聖觀音の木像（國寶）をつたへ。社領五十石を有した地方の名祠である。祭禮は毎月四月二十四、二十五日の兩日に行はれ、小泊まで神輿の巡幸するを常である。境内の櫻に釣れる小鐘は潮路の鐘と稱し、潮の滿ち來らんとする時は人觸れずして響き渡ること、一里四方なりといふ。

本町發達の經路は判明しないが、中古慶長以後に現在の市街をなし、主に海産物によつて生計を營んで來た。商業頗る活潑で、毎年一月二十日、二十四日、八月十日、十三日を以て市場を開き、非常の賑ひをなす。特産として鯛の地曳がもつとも盛んである。

糸魚川町

本町は姫川河口の東に在り、直江津の西四十一里、新潟市を距ること四十二里二十四町である。北陸線の一驛で、郡の中央にあたり、郡の首邑である。

戸數千八百、人口九千八百を越え、水産物、木産、繭、米穀類、蔬菜、清酒を主産物とし、名物に柚餅子がある。

町には町役場、郵便局、警察署、稅務署、區裁判所、小學校、縣立中學校、縣立高等女學校、在鄉軍人分會、男女青年團、婦人會、銀行會社多數、鄉社天津神社、村社水前神社ほか七社、善導寺、正覺寺、圓照寺ほか九ケ寺がある。

世の中はいかにありけんいとひ川

いとひし身さへ行方知られず
と兼載が歌ひ、竹外も

糸魚川水糸魚躍　知汝吟骸埋停河
從比繡簾銀燭衣　聽歌不聽越猫歌

と吟じた。糸魚川の名稱の起源は不明であるが、或は弘法大師が管に糸を卷きて川に投ぜしに忽ち魚となりしにより名づくと云ひ、或はこの地に兩軍挑み合ひしを以て挑み川と稱せしより起つたともいはれる。詩人は厥川と書く。

城址は龜岡城または清崎城といふ。初め上杉氏の臣、丸田伊豆守がこゝに居り天正七年江州の浪士荻田主馬が謙信公より當城を賜はり一萬石を領した。慶長三年堀秀治が春日山城主となつて當城を管理し、その後高田城主松平忠輝の臣松臣信勝が當城主として二萬石を賜はつた。次で溝口宜成の在藩時代、高田城主酒井家次の支配を經、天正二年松平忠昌の臣荻田主馬の子隼人がこの城に入つて一萬四千石を食むだ。延寶九年の越後騒動の際、主馬は八丈島に流され、貞享二年城廓を破毀した。然るに享保二年松平直之は糸魚川一萬石の領主となり、陣屋を置いて支配し、以て明治維新に及んだ。

青海町

縣社青海神社のあるところで、青海首はその開發者といはれる。田海の鎮來口は奴奈川媛の神蹟にして、蟹ケ懐と稱する洞穴は上古人民穴居の跡なりと云ひ傳へる。後世に至るに及んで、池の平、船庭、本土等の各所に村落をなしたが、人智の開くるに隨つて、平坦の地を均し、漸次現今のところに移轉したといふ。昭和三年十月、町制を施行した。面積三方里、戸數千四百餘、人口約七千人をかぞへる。

主要産物は石灰原石、硝石灰、生石灰硫酸アンモニア、石灰窒素、炭化石灰、酸性白土、木炭、木材、薪材、酒醤油類である。

町内には町役場、青海・田海各尋常高等小學校、橋立尋常小學校、實業青年學校三校、郵便局、糸魚川警察署青海駐在所、聯合青年團、婦人會、在郷軍人分會教育會、電氣化學會社工場、青海合同運送會社、青海軌道商會、青海製材會社、青海石灰製造會社、その他銀行會社多く神社は縣社青海神社、村社山添神社ほか十一社、寺院は清願寺、西蓮寺ほか七ケ寺である。また、勝山城址、鎮來口等の書蹟がある。

白鳥山の麓、青海川の上流に金鑛あり上杉氏の採掘せしといふ。

名立村

東西一里、南北五里の長大なる山村にして名立川流域に延亘する。東は中頸城郡と隣接し、南には頸城アルプスの高峰が連立する。森、大蒼、谷口、車路、體畑、杉野瀬、田野上、折居、丸田、池田ほか十大字より成るが、諸部落は皆名立川にのぞんで散在する。戸數五百六十餘人口三千六百を越え、面積三・八〇一方里に及ぶ。

明治二十三年町村制施行、同三十四年上名立、下名立の二村を合併して名立村と稱し今日に至つた。郡内に同名の名立町がある。大字東蟹山及び瀬戸に油田がある。北陸本線名立驛より一里、バスの便を有す。

名勝に巖橋の藤あり、花季の賑ひはまた格別である。神社は無格社二社のみ、寺院には岩昌寺、昌禪寺、善興寺、宗龍寺、名立寺、德常寺、明源のほか十ケ寺をかぞへる。

磯部村

石立町と能生町の中間に介在し、日本海に面する村で、明治三十四年十二月、四ケ所、川崎の與二ケ村を合併して磯部村となつたもので、越後雜誌に、

其地域最も狹く白波常に軒場を洗ひ斷崖は屋梁を壓しまさに崩れんとす

とあるは、この地の狀況を叙したもので昔は領主より幕府へ進獻の眞鱈は、皆この濱を本場と稱したといふ。

筒石、德合、仙納、空熊新田、百川、藤崎大洞の部落を含み、面積一・二五四方里、戸數は六百五十である。北陸本線筒石驛を村内に置き、名立町及び能生町へはバスが通ひ、交通の便惡くない。

村には藤崎齋藤家の夫婦松、筒石の千束島の名勝あり、村社水島磯部神社、同白山神社、無格社二、雲龍寺、應滿寺、長澤寺、寶昌寺の社寺を有す。

能生谷村

能生谷とは妙高山の北なる火打山に發源し長さ六里に及ぶ能生川の溪谷をいひ能生谷の奥、火打山の下には棚口温泉がある。

東西十二里、南北五里の廣大なる山村にして、大澤、鷲尾、大道寺、大王、柱道、指壁ほか二十大字より成り、能生町の南に接し、面積七・九七一方里である

大字鵜石は能生川の西岸に、棚口は能生谷の南端にそびゆる火打山麓にあり、諸部落はみな能生川の溪谷にあつまり、他は高峰峻崖屹立の地である。

戸數千四百餘、人口八千二百を算し、米繭及び林産物に富み、村には郵便局、通俗文庫、銀行支店、産業組合などあり北陸本線能生驛へ二里半、縣道通じバスの便がある。また神社は村社神明神社、同金山神社、同熊野大神宮、同大神社ほか無格社二社あり、寺院は吉祥寺ほか十一ケ寺をかぞへる。

木浦村

本村は木浦、鬼舞の二大字より成り、能生町の西南に接して海濱に位置し、大字木浦は能生谷川河口の西岸にして、東岸の能生町と相對してゐる。北越軍記に

大正十三年、秀吉城中へ出馬と聞き、景勝は名達木浦鬼伏へかかり、上方道二十里を二日に推して、堕水城の本丸田伊豆守が居城厥川に着給ふ。

と載せ、或る說に、木浦は昔浦木とも云つたといふ。

面積〇・八八二方里あり、漁業が多く

農耕及び養蠶による産物も少くない。木浦信購組合、鬼舞漁業組合、濱木濱漁業組合があり産業の發展を圖ると共に村民の福祉の增進につとめてゐる。

村内寺院には西弘寺、西性寺、西安寺正願寺長福寺、東陽寺、海岸寺等がある。

浦本村

本村は三方を山岳で掩はれ、西北面のみが開いも日本海にのぞんでゐる。山嶺は海濱に迫れるを以て部落はみな北陸道沿線に位置してゐる。中濱、間脇、中宿鬼鬼四大字より成り、面積〇・八一三方里、早里の河口の東の中宿より鬼伏に至る海濱一帶を管内とし、北國太平記に、

景勝天正十年越中へ發向名邊浦本に押出し鬼伏へ驅て親不知子不知を妻手に見て山路を傳ふ

と、當地のことが出てゐる。北陸本線梶屋敷線へは僅か三キロにして、自動車の便あり、交通狀態比較的良好である。

戸數四百十、人口二千六百を算し、農耕或は漁業に從事するもの多く、本村漁業組合は夙にその基礎の堅實なるを以て聞える。なほ村内には村立御成婚記念圖書館、禪雄寺などがある。

下早川村

東南に頸城連峰を望み、山岳地帶にして、上早川村と共に早川の溪谷に沿ひ、北部に平地がある。日光寺、田屋、道明ほか十五大字を併せて成り、面積一・六七七方里、早川は大和川の東に並行し、長さ六里、源を兩飾山、燒山に發し、梶屋敷、中宿の間に至り海に入る。

本村はもと上早川村と共に早川谷と呼ばれたところで、大字井手には月不見池がある。これは梶屋敷驛より南へ一里、碧潭巖間に澄んで奇泉絶妙の勝地である

田四百五十町歩、畑二百町歩餘を有し この地方の段丘米田の開發は、附近の景觀に特異性を帶びさせるに充分である。米の年産は十數萬圓にのぼる

村には郵便局、銀行支店、信用組合、水道利用組合、農業倉庫等あり、神社は一、寺院は十二をかぞへる。

上早川村

頸城の峻峰たる火打山及び燒山連峰の山麓にあり、村内至るところ嶮岳峻壁多く、早川はその間を深狹なる溪谷をつくりつゝ北流する。土鹽、越、宮平、中野中林、坪野、猿倉、吹原、砂場、北山、角田、大平、土倉、中川原新田等の部落をあつめ、面積五・一七方里、戸數八百七十餘、人口四千四百餘である。

大字宮平に佐多神社あり、その山を鉢峰といふ、佐多神社は出雲の佐陀社と同じで、當地方が相當古くから出雲文化の流れに浴したことを物語る有力な資料である。

出雲本線線梶屋敷驛へ三里半、途中からバスの便がある。村内笹倉溫泉は單純泉で、享保年間、文左衛門なるものが宗林寺に安置する藥師如來の靈告によつて發見したと傳へられ、地は早川の上流遠

く燒山の雄姿を眺め、一方遙かに日本海の碧波を望んで風光絶佳である。

大和川村

本村は早川と海川の間の海濱を占め、大和川、田伏、竹ケ花、厚田、梶屋敷の五大字より成り、面積〇・三二方里、大字梶屋敷は早川の河口西岸にあり、北陸道の小驛として街衢をなす。

古くは久比岐國造の一族に大和直ありその人々の居たところを傳へ

漕舟のさほの山邊は遠けれど
名に流れたる大和川かな

と詠まれたところだ。戸數五百三十、人口三千三百を有し、水田二百餘町歩あり米作多きも、住民の大半は漁業に從事し漁業組合は三をかぞへる。

北陸本線梶屋敷驛を有して交通の便よく、村には郵便局、大和川圖書館、銀行支店、産業組合等あり、社寺には鄕社奴奈川神社、村社立壁神社、敎念寺、大雲寺、誓願寺、萬德寺、禪林、明通寺等がある。

西海村

北は海川の河口より南は信越國境の燒山、天狗原山の山麓に至るまでの廣大な地域を占むる本村は、村内山岳重疊し、一條の海川が貫流するのみである。平牛羽生、成澤、眞光寺、田中、川島、道平ほか六大字を含み、面積四・三二一方里あり、戸數六百二十、人口三千九百をかぞへる。

西海川の山中を改號して西海でといひ往昔の西海谷の地で、西濱七谷の一である。糸魚川に近い方面は交通の便に惠まれるが、他は山間なるため交通不便の狀態をまぬかれない。

有租地千六百五十町歩に近く、耕地は僅かに二百五十町歩に過ぎない。從つて米麥の産も大村の割合には少く、山林業の方面で稍々愁眉を開いてゐる。なほ村内社寺は無格社二社、雲台寺、唯蓮寺、願成寺、耕文寺、西光寺、專德寺、通託寺滿長寺等である。

大野村

姫川の東岸にあり、根知谷口の根知村と相並んで糸魚川町の南に接する本村は戸數二百二十餘、人口千四百五十にして面積〇・五六百方里を占め、北陸線糸魚川驛まで八キロの間バスが通ひ、交通の便惡くない。

いはゆる根知谷とは、姫川の東岸に亘る山谷一帶の總稱で、兩飾大網峠を以て千國小谷と相限る。舊藩政の頃にはこゝに番所を置いて四隣を支配した。即ち本村は根知村と共に根知谷の一部を占めてゐるのである。

有租地四百八十町歩餘にして、耕地は田百七十數町歩、畑七十町歩弱あり、山林は二百二十餘町歩である。住民の多くは農耕養蠶の業に從ひ、副業的に山林關係の仕事に携はるものが多い。米の年産七萬圓餘。大野村信販購利組合の組織あり産業經濟の發展は着々として實果を收

めてゐる。

根知村

本村は郡の南部、長野縣と接する山間部を占め、南は長野縣北安曇郡小谷村、東は西海村、北は西海村及び大野村とに接し、西は姫川を隔てゝ今井、小瀧に對する。西海村及び北小谷村と境するあたり約ケ嶽、鬼ケ岡山、鍋嶽、雨飾山などの山岳重疊し、こゝに源を發して西北に本村を貫流する根知川の流域一帯は、本村の重要耕地をなすも、流域が狹少であり、且つ水源が淺いため夏期河水涸渇することしば〳〵で、從つて灌漑にあまり便しない。

本村は町村制實施にあたり上根知村、中根知村、下根知村の三ケ村に區劃されたが、明治三十四年十一月一日この三ケ村が合併して今の根知村を生み出したのである。廣袤東西一一・六粁、南北六・九粁、面積五〇八〇〇〇アールを占め、名譽職村長一、助役一、區長二二、學務委員九、土木委員三、傳染病豫防委員九林野委員三、有給吏員收入役一、書記七によつて村行政が圓滑に運轉されてゐる

戸數は七百六十餘、人口四千餘で、農業に從ふものは五百五十餘戸をかぞへる。交通は縣道糸魚川松本線に糸魚山小谷線、それに上町屋糸魚川線があつて、頗る便である。

なほ本村の名勝舊蹟としては雨飾山登山、梶川溫泉新湯、姫川スキー場、根小屋城址、山に番所などがある。

小瀧村

本村は雲倉岳の東麓にして郡の西南端に位置し、小瀧、山之坊、大所の三部落を含み、戸數三百七十、人口二千百四十を算し、主要農産物は米、大豆、小豆、栗、稗、蕎麥、生柿、蜂蜜、麻織物、漆器、木炭、材木、藺等である。

大字小瀧の開發年度は不詳なれど、文化六年には神原氏の領地となり、以來明治維新の改革に至つた。大字大所の開發年代も詳かでないが、織田氏の部將富山城主佐々成政の臣山岸豐後守がその開祖なりといはれ、「正保四年亥天」「山岸豐後守塔」の石碑が殘つてゐる。

村内には村役場(大字小瀧)、小瀧、山之坊各小學校、農業青年學校、信用組合在郷軍人分會、敎育會、男女青年團、婦人會、少年團、村社諏訪神社ほか無格社二社、願正寺等あり、電氣化學會社の發電所も村内にある。

人々はこれを大屋樣と呼んでゐる。天和檢地には他へ轉じて戸數の中へ入らず古檢の書類更に存せず、たゞ口碑に傳ふるのみである。

大字川本は尻掛村といつた。小字に上新田あり、該地は寛治元年戊戌中本郡下澤村横川某の開發なりといふ。

今井村

今井は小瀧村と共に姫川西岸の通路として發達したとこで、大字須澤は明治二十年町村制實施後の村名にして舊二ケ潮

を合せたものである。須澤開發の年代は詳かならざるも、可なり古きことは田海西蓮寺の川越名號の傳說がこれを證明する、即ち親鸞上人が越後遷島の途次、須澤の渡しに來り、川越夫に與へられしものといふ。當時、本田、新田の二村なりしが寶曆九卯年の滿水のため、新田の居村五十戸餘を流し、遂れて本田の居村に加はり現今の位置をなした。その土地は姫川の流砂と西風とによつて出來た洲の譯である。

大字岩木の開祖も誰であるかは詳かでないが、當時その中央を大屋坪と稱し、これは五郎作なる大壺のこゝに住居せしが故なりと傳へ、今なほその墓を存してゐる。

歌外波村

本村は舊歌村と外波村の二村を併せたもので、親不知の東にあたり、黑岩、駒返しなどあり、同馬岩の名も今に存す。戸數百八十餘、人口千百に近く、硯石の特產あり、また海藻の化石を挾存し、俗に外波石と呼ばれてゐる。聖德太子假名傳に越後國瀟原郡の浦にて詠まる

萬代と波は立ちきて洗へども
かはらぬものは水茎のあと

の一首あり、今も村内に歌濱といふところあり、瀟原郡は間違ひにて、頸城郡宇田濱は古くは寒原郡といつたから、その錯誤ならんと說かれる。

寒原は親不知の舊名である。大日本地名辭書をひくと、

名書云虛衰記に越後書中の境界寒原といふと、太子傳には神原東鑑には瀟原に作る、云々

と出てゐる。

市振村

郡の西端に位し、富山縣下新川郡と境川を隔てゝ相對する。落政時代には市振の驛と稱してこゝに關門あり、今は北陸本線の一線となつてゐる。歌外村波との間に親不知の難所あり、一朝出水に際會すれば、通行甚だ困難を極めたところで堀川百首に

舟もなく岩浪高き堺川
水增りなば水も通はじ

の歌がある。親不知の嶮は竹ケ花と先ケ鼻の間にあり、越後路の難をかこつ者の常に語つた歷史的の難所で、下層部はラディオラクヤ硅石及び粘板岩からなり、上層部は粘板岩である。今は國道や鐵道も通じてはゐるが、冬季は常に惱まされる交通路として有名である。村には北陸線市振驛がある。

面積〇・九一六方里、戸數百七十餘、人口千に滿たざる小村で、耕地も少い。

上路村

親不知の上、蓮華山脈の壺頭にある一小村落にして、西は富山縣に接する。往昔、山蛭が住んで山谷を上下し、人々を訛かしたといふ上路山蛭の舊蹟地で、今も山蛭の洞といふものあり、謠曲山蛭には

稍波立つ汐越の安宅の松の夕煙、消へぬ憂き身の罪を切る彌陀の劍の砥石山露路うながす三越路の國の末なる里問へばいとゞ都は遠ざかる、境川にも着きにけり、境川にも着きにけり、御急ぎ候程に是ははや越後越中の境川に御着きにて候、暫く是に御駕候ひて猶々道の樣態をも御尋ねあらうずるにて候げにや常に廻る西方の淨土は十萬億土とかや、是又彌陀來迎の直路なれば上路の山とやらんに參り候べし

と謠はれ、今、村内に山姥神社が祀られてゐる。北陸線市振驛へ一里六町。村面積は〇・八〇五方里である。

岩船郡

地理　東北は山形縣に界し、南は北蒲原郡に接し、西は日本海に面し、東西七里三十町餘、南北十二里二町餘、面積七十三方里九二である。岩船港より西北二十五浬にある粟崎は本郡に屬する。

郡の約六分の五は殆ど山地にして、殘餘僅かに平地を見るに過ぎない。荒川下流沿岸、門前川沿岸、小揚川下流以西に於ける三面川左岸及び岩船潟一帶の地が即ち僅かな平地である。

名の有る山岳には以東ケ岳、朝日岳、泥俣山、光兎山、鷲巣山(二子山)、小柴山があり、名のある河川には荒川、三面川、石川、葡萄川、勝木川、大川あり、三面川が最も流程長く十里である。

沿革　日本書紀に「大化四年磐舟の柵を治め以て蝦夷に備ふ遂に信濃の民を選み始めて柵戸を置く」とあり、これが磐舟の文字の史上に見ゆる初めである。又文武天皇の條に「二年越後國をして石船の柵を修理ぜしめ、四年越後佐渡二國をして石船の柵を修營せしむ」と見える。

莊園の盛んなる頃、本郡の大部は小泉莊と稱した。東鑑に、文治の頃は中御門氏の知行に屬したことが載つてゐる。

延喜式和名抄に、或は磐船、或は石船につくり、伊波布稱と註し、中世、改めて瀨波郡といつた。

名寄に「荒川は飼附村のセバの渡より平林を過ぎ」とあり、飼附は今の保内村貝附で、關谷の峽口にあたり、溪身峽窄して最もその名に相應しく、瀨波郡といふもこの峽名より轉じたものであらうといはれる。

上杉輝虎時代には、數人の部將駐在して本郡を統治し、爾來、村上氏、堀氏、本多氏、松平氏、榊原氏、松平氏、間部氏、内藤氏の諸侯が相ついで領有した。德川幕政の間は、數藩の所領錯雜し、以て明治に至つた。明治四年、村上縣となり、同年これを廢して、新潟縣に合併された。

區劃・戸口・交通　越後國の北隅を占め、行政上全郡を區劃して次の四町二十ケ村とする。

町　岩船、瀨波、村上、村上本

村　關谷、保内、金屋、女川、平林、神納、西神納、山邊里、館腰、三面、高根、粟澤、豊野町、黒川俣、八幡、大川谷、中俣、下海府、上海府、粟島浦

總戸數は一萬四千四百戸に近く、人口は八萬七千人をかぞへる。戸口の最も多いのは村上町で、關谷村がこれに次ぎ、以下平林村、神納村、岩船町、保内村の順序で、最も少いのは粟島浦村を除けば中俣村である。

鐵道は省線羽越本線及び米坂西線の便がある。また港灣の主なるものに岩船、瀨波、荒川、脇川、相尾、粟島浦等があり、概して海岸地帶は交通機關に富むが山岳方面に至つて不便である。

生產額　生產は多い方でない、年總額約九百七十萬圓にして、一戸當り六百七十餘圓、一人當り百十餘圓である。重要なもののみを各別にあげると左の通りである。

農產	四、四三三、〇五八圓
工產	一、八二五、四三七圓
林產	一、一七六、四二四圓
蠶糸類	一、〇八五、〇六三圓

岩船町

本町の名稱は、產土神岩船神社に由來したもので、その建置もまた產土神の天岩船に乘りて天降り給へる頃なるべく、縣下にありても最も古き歷史を有する鄕土であり、岩船なる郡名も、これに基因せるものとされてゐる。

幕政當時は上杉侯の家屋本社、越前、出羽等の所領より村上、周防、堀、本田、松平、榊原、本田、間部、内藤の諸侯の領地だつたが、明治維新後新潟に屬し、同二十二年、町村制が實施されて今日に及んでゐる。

町は郡の西南に位置し、西方は一帶に海に面し、東は西神納村、南は平林村、北は瀨波町に連り、西北一里二町、東西十七町三十間、面積大凡そ一方里を算へる。大字岩船、三日市、八日市の三部落に分れ、町役場を大字岩船に置き、全町の中央に立つて、本町市街の北部浦田耕地の間を貫流して岩船港にそゝぐ三條石川と稱する小河は、源を神納村桃川山に發し、往時は現今の浦田耕地の大部分たる琵琶潟と稱する湖沼に注いだもので、この琵琶潟は元和當時、堀領主岩船七港兩村の野方を開發せしめ、田地となさしめた記錄に徵するも、この頃の琵琶潟は既に河瀨が自然河川と變じて海に注いだものゝやうに考へられる。

戸數は八百餘戸、人口四千六百餘人、二百二十餘戸の漁業、二百戸の產業、百餘戸の工業、九十餘戸の農業の順で、住民は生計を立てゝゐる。

瀨波町

本町は郡の中央西北部に位置を占め、東は村上町、南は岩船町、神納村、北東は猿澤村、北は上海府村に連接し、南西北は日本海に臨み、總面積〇・五一六方里に跨つてゐる。

本町の紀元はいづれの頃か、詳かでな

い、延喜和名抄に

前略中正改めて瀬波郡と言ふ、其の時代明かならず、本荘氏系圖に秩父行長建長七年（北條時頼執權時代）越後國阿加北地頭職となり、武藏國秩父郡より越後瀬波郡小泉荘本荘に下向し此の地に城を築き居り本荘氏を稱す

とある。以て當時すでに瀬波郡と稱してゐたことが分る。

幕政の末、全町村上藩領に屬し、明治四年七月廢藩置縣となり、同年十一月村上縣を廢して大小區制を布き、本町は第二十五大區小九區に屬した。同十二年初めて岩船郡役所を置き、當時より役場を大字瀬波に置き、爾來自治制を布き、同二十二年四月以來大字瀬波、濱新田、松山、十渡、羽下ヶ瀬の五大字を以て瀬波町と稱して今日に及んでゐる。

現在戸數四百三十餘、人口四百餘、町會議員一二、家屋稅調査委員五、方面委員五、學務委員六、區長七あり、產業機關に瀬波町農會、瀬波養蠶實行組合、羽下ヶ瀬養蠶實行組合、瀬波漁業協同組合などがある。

また官公衙學校には瀬波町役場、瀬波郵便局、瀬波駐在所、瀬波尋常高等小學校、新潟縣水產試驗場三面川第一及第二鮭人工孵化場等がある。

村上町

本町は郡の中央部に位し、三面川の左岸河口を距る二十町のところに在り、東は遠く鷲の巢の雄峰を望み、西は渺茫たる日本海に近く、謂ゆる山紫水明の勝地で、戸數約二千戸、人口一萬五百餘人、郡內唯一の都會である。

町はもと舊藩地にして享保六年內藤豐前守式信の封ぜられてより以來、父子累世相繼ぎ、明治二年に至つたが、この間百四十九年下越の雄藩として重きをなしてゐた。廢藩置縣後は郡の樞要地として政治、經濟、教育、交通及び各種產業の中心をなしたが、大正十三年八月羽越線開設以來、東北並に關西地方との聯絡成ると共に各地方との交通ます〳〵頻繁を加へ、重工業の發達著しく、羽越線中の主要驛として一層その名を知らるゝに至つた。

縣立村上中學校、縣立村上高等女學校あり、村上警察署、村上郵便局、村上區裁判所、村上稅務署、村上町役場その他會社、工場、新聞社、種々の團體などの設けがある。

本町の特產物として最も有名なるは茶と漆器で、現在に於ける茶園總反別は附近の瀬波町を合せ約百三十町歩にして、その製產高は一ヶ年實に十數萬圓に上つてゐる。また本町の漆器は高尙優美、且つ堅牢にして實用に適するところから、近時頻りと聲價を增し、最近一ヶ年の產額は約十萬圓に達する。

縣社に西奈彌羽黑神社、無格社一圓、寺院三二をかぞへる。

村上本町

工と產との極めて旺んな當町は、東經

一三九度三〇、北緯三八度一〇のところに在り、東に山邊里村、西南北に村上町に隣接し、東西一・一八粁、南北一・三二粁、面積一三三平方粁を占めてゐる。そして現在の戸數は六百六十餘、人口二千八百、工を首位に商、農業に從事してゐる。

當町は舊村上藩主內藤家の家屋七百三十五戸の居住したところで、明治維新後漸次變遷し、以て今日に至つたもので、この他部落の創始は不明であるが、二ノ町（舊稱二ノ丸）より新町に通ずる舊城門（下渡門）の址より古代土器の幾多の破片又は石斧のやうなものゝ掘り出されたるより考へると、アイヌ種族の住したことが追思される。

縣立中學校、縣立高等女學校、村上本町青年學校をはじめ官衙には村上區裁判所、村上營林署、村上土木派遣所、村上稅務署、蠶業取締所、村上本町役場、岩船郡農會等がある。

縣社藤基神社は村上藩祖を祀つたもので、古松古杉鬱蒼として境內蕭尙喈い、崇嚴、自ら襟を正さしめるものがある。また臥手山は舊城址にして、一に城山と稱する。頂上に秋葉神社、舞鶴城址碑があり、四邊の眺望絕佳、登臨の遊客者極めて多い。

當時の北方下渡山麓を流るゝ三面川は水量豐かにして魚族の繁殖に適する。秋冬の鮭魚、春夏の候の鱒鮎が殊に多いので有名である。

關谷村

當村は東西五里、南北三里、面積一一・二方里を有し、戸數千餘戸、人口六千百餘人で、七百餘戸の農を第一位に、七十餘戸の商業、五十餘戸の工業などを主として生計を立てゝゐる。

當村は關谷村と稱し、大字下關に村役場を置く。明治三十四年舊關村、七ヶ谷九ヶ谷の三ヶ村の合併より成り、舊關村に屬するもの一二、七ヶ谷に屬するもの七、九谷に屬するもの九、計二十八ヶ大字より成る。

村長はじめ吏員は一二名、村會議員は一八名、學務委員は八名、區長二十五名方面委員五名をかぞへる。

官公署には下關郵便局　村上區裁判所下關出張所、村上營林署關谷擔當區官舍下關巡査部長派出所、下關巡査駐在所、下川口巡査駐在所、その他に團體、銀行及び會社等の設けがある。

保內村

本村は荒川の左岸にあり、南に山岳を負ひ、北方は平地にして概ね水田桑地である。關谷の峽谷にあたり、俗に瀬波嵐といつて、毎朝峽口より風吹き出で、午刻に至つては止む。村は羽ケ榎　佐々木切田、坂田、山口、藤澤ほか七大字より成り、面積一・三〇二方里、羽越線坂町驛あり、縣道四方に通じ、關谷村より羽前今泉町へバスの便がある。

元祿年中の舊記に、上保內、下保內の二區ありしといふも、一說にはこれは瀬

波の保内であらうといはれる。幕政の末坂町功田は水原支配所領、下鍛冶屋ほか四部落は若松藩領、他は天領であつた。後年、切田、坂町、山口、羽ケ榎、藤澤佐々木を中保内村、他を上保内村と稱したが、合して今の保内村となつた。

荒島字南山の下に村社出羽神社あり、社傳によれば、大同元年の創立にして、從來荒川神社と稱し、式内社であつた。村内飼附川、花立、佐々木は古戦場である。

主なる物産は木炭、木材、茶、生糸等で茶は玉露、煎茶、番茶、共品質良好である。曾て大正十一年本村豫約開墾耕地整理組合に於ては國有林拂下を受け、拔根機を使用して約三十六町歩餘の開田開畑を完成したことは特筆に價する。

金屋村

荒川の南岸に位し、西神納村と共にその河口を扼してゐる。全村概ね平坦にして、金屋、中倉、鳥屋、荒屋、荒川線新田ほか七大字より成り、面積〇・八八四方里である。

大字金屋は、近世保内郷のうちで、幕府が一橋家の食邑を定めた時、ここに一萬石の陣屋を置き、史治をなしたところである。當時新光寺、南新保、中倉、渡邊三新田は水原支配所領、他は天領であつた。往年渡邊三新田中野、名割、新光寺、南新保の五大字を南保内村と稱し、金屋、鳥屋、荒屋、中倉、荒川線新田を金屋村と稱し、大津及び海老江は獨立村であつた。以上四ケ村を合して今の金屋村となり、役場は大字金屋に置く。

村には郵便局、三德圖書館、漁業組合等あり、神社は村社八幡宮のほか無格二を有し、寺院には大雄寺、本法寺、延命寺等がある。羽越線坂町驛へ一里弱、バスの便がある。

村内主産物は茶、鮭、鱒、生糸である。

昭和七年以來耕地整理事業を施行して來たが、その後一時小作人對地主の對立があつて支障を來たし、稍々遅延はしたが、圓滿なる解決と共に再び施工せられ産米増加及び生産方法の改善に與へた影響は頗る大きい。また村内三ケ所に於て開田事業が行はれ、荒川米の産地としての將來はます〳〵明朗な光りに輝きわたつてゐる。また自給肥料の奬勵につとめて成績よく、副業として養蠶、養鶏、養豚等が多く、耕作用牛馬も飼育される。産業の振興開發の諸計畫並にその實行に關しては村農會が中心となり、これに村内十六農區が參加活動して、顯著な成績を示してゐることは特筆に價する。

女川村

荒川の右岸に位し、東は山岳を以て羽前小國郷と境する。地勢概ね高峻にして湯澤、瀧原、上野山、小見、小見前、高田等の七字は荒川沿岸に他の十字は女川流域にある。面積七・二九五方里、村名女川は湯澤西北なる女川谷より取つた。

羽越線坂町驛へ二里半、交通便利といひ難いが縣道が通じてゐる。

幕政の頃は、村上藩及び若松藩に分領されてゐたところで、往年、荒川沿岸湯澤より桂までの八大字を川北村と稱し、他を女川村と稱した。後、合して現女川村となつた。

村内蛇喰に浄土宗の古刹弘長寺あり、本尊阿彌陀如來は、毘首羯摩天の作で、頼朝が鎌倉にゐた當時の持佛であつた。また湯澤には松岳寺があり、垂水左衛門尉の館址もある。湯澤温泉は痛風、リウマチス、皮膚病、胃弱、月經不調、糖尿病等に特効がある。鷹瀬温泉は一名雲母温泉と稱し、便秘、胃病、中風、神經痛脚氣、子宮病に効がある。また大字中東には千尋の瀧あり、高さ五十丈、その下流は女川である。

本村耕地整理組合に於ては、大正十年カークリット火藤拔根機を使用して山林原野を開墾し、開拓事業に一つの特色を發揮し好成績を收めた。

平林村

南は荒川を以て金屋保内の兩村と相對し、西北は平野にして鹽屋濱と隣りし、東に朴坂要害に丘陵が連互する。面積一・五二六方里を有し、戸數八百四十、人口五千三百餘をかぞへる。

大字平林は色部氏の舊邑であつたといふ、北越軍記に、平林内藏助といふ人あり、色部氏の一族といはれる。また小内岩は往昔の渡津である。里謡に

新保長松　谷の穴よ
入日見よとて　豐谷まで走る

と高唱されし程、鬱茂せる松林丘裡にあり、德川幕府の末頃は若松、村上、水原の三藩に分領されてゐた。往年、牛屋以西五大字は鹽谷村と呼び、他を平林村と稱した。

村社荒川神社は小岩内字川端にあり、大同四年九月の創立といふ。寺院には大智院、圓福寺、高泉寺、法德寺、應庵寺千眼寺、行德院、醫王院、不知庵がある。また村内には色部修理亮の館址、戊辰の亂の古戦場等の舊蹟もある。

本村は總て十六字より成り、米、茶、繭の産地として知られ、特に荒川米の名を以て呼ばれる米は、本村の特産で、品質の優良なるを誇りとしてゐる。羽越沿線の地にして、國道通過し、交通は比較的便利である。小學校は三校を有す。

神納村

東方は大平山の丘陵連互し、西は平坦にして西神納村及び岩船町に續く。有明松澤、岩野澤、山田、飯岡、桃川、河内小出、殿岡ほか八大字を含み、面積三・三四一方里、羽越線岩船町へ半里、バスが通ひ、交通の便良好である。

神納は加納の訛りである。小泉庄加納田より出で分化して加納庄といひ、今は神納と西神納の二村となつた。岩船諸上寺の說には、この寺昔感應寺と號し、庄號はこの感應より轉訛したといふ。幕政の末頃は若松、村上の二藩で分領した。

名寄に「有明村ありて光淨寺に愛たき清水出づ風景絶佳」とあるは大字有明の

ことで、夫木集爲實の歌に

浪の色に有明の浪の末見えて
潮瀾も白くのこる月かげ

とあり、更に古歌にも

有明の里の清水のみわたる
水底にきよき秋の夜の月

と詠まれてゐる。式内村社桃川神社は、桃川字住吉にあり、仁安二年の修理遷宮といふ。七甲山には式内湊神社あり、往昔、琵琶潟はこの邊にまで水を湛へてゐたと傳へ、七湊の地名もそれより起つたその他神社に八王子神社、八幡宮、八坂神社あり、名勝舊蹟に七甲山、姫塚、山王山、大瀑布がある。

西神納村

昔の加納庄の一部にして、四方たゞ水田を以て圍まれる。神納村と隣りし、荒川の北岸に位し、金屋村と共に河口を扼してゐる。西北に海岸丘陵を負ふのほか概ね平坦にして、牧の目、新飯田、小口川、高御堂、大塚、潟端、今宿、九日市南田中の大字を含み、面積〇・四〇九方里である。

幕政時代は水原支配所、村上藩、天領等に分屬してゐた。

米のほか物産として數ふべきものなく耕地は田五百十數町歩に上るが、畑は僅か十町にも滿たない。西神納信購販利組合、同農業倉庫がある。

寺院には曹洞宗福嚴寺、眞言宗密藏院がある。

羽越線の地で、村内に停車場はないが岩船驛に近く、且つ村内を國道が走り、交通は至便である。

自治方面は至極圓滿にして政黨的色彩に淡く、教育もまた充實し、學校の諸設備公共團體の諸事業に見るべきものが多い。衛生狀態も良好で、衛生に關する迷信のごときは全然見られず、農村ではあるが村民一般の衛生知識の向上は驚くべきものがある。

山邊里村

村上町の東にして、三面川と門前川の中間に在る。

岩船の波打際に出でゝ見よ
きたみの境何國なるらん

の作者傑堂能勝和尚は耕雲寺の開基である。近年失欠せしも、附近の當國第一と稱される杉の良材を以て採修した。また山邊里の光德寺は雲ノ上佐一郎菩提のために建立したもの、同じく山邊里の村社船魂十二所神社も雲ノ上佐一郎の勸請に係るといふ。右のほか鑑窓寺、常榮庵、金源寺の寺院がある。

產物は木炭、木材、茶、生糸、織物を主とし、殊に絹織物に新機軸を出したところで、山邊里織の名は有名である。

西興屋ほか十七大字より成り、面積は四・五八三方里を占める。舊幕時代には全村村上藩の采配を受け、門前谷村、山邊里村の二に分れてゐたのを、後年、合して今の山邊里村となつたのである。大字山邊里は佐伯鄕の佐伯里にて、その遺稱である。大字上相川及び下相川は、元

は一に相川と稱し、また鮎川に作つた。北越軍記に「鮎川攝津守は本莊が一族にて云々」と當地の豪族を叙してゐる。

村には郵便取扱所、造林森林組合などあり、村上町に近接し交通至便である。

舘腰村

三面川の左岸、山邊里村の北に接し、東部羽前國境には鷹ケ巢 鷲ケ巢などの高山が屹立し、長津川は村の中央を西北に貫流して三面川に入る。大場澤、古渡路、十川、小川、下新保、笹平、釜杭、小揚、柳生戸の九箇、大字は概ね西方沿岸平地に聚落する。面積は三・六二方里に及ぶ。

昔、鮎川氏の館が大場澤にあり、その近傍を館の腰と云つたところから、後世稱して村名となした。幕政の末、全村村上藩領にして、獨り釜杭は米津藩に屬した。明治維新後長津、館腰の二村を合せ今日に至つた。

村社諏訪神社は、十川字高屋敷にあり初め八幡神社と稱した、源頼義が奥州征討の歸途弊帛を捧げ、矢一千を納めた、これ社寶として今も保存される。村社雷神社は大場澤字城の下にあり、源義綱が山城國賀茂神社の分靈を招請したものといふ。また普濟寺は鮎川信濃守清長の建立である。

村の主要產物は木炭、生糸、漆液等で耕地は田四百三十町歩、畑百七十數町歩がある。村上驛へ一里半、縣道通じ、バスの便を有す。

三面村

本村は三面川流域の山岳地にして、東は羽越の國境を劃、三面谷は三面川の源西にして方四、五里の山谷をいふ。布部新屋、堀野、上中島、石住、中新保、石栗新田、岩萠、堂太、三面、千縄、猿田の十川部落は、概ね西方の平地または三面川の沿岸に散在する。面積は二三・三八八方里に及ぶ大村である。

三面川はまた野寺川といひ、その鮭漁は、近世村上城主の掟によつて盛大を致し、謂はゆる種川の法をとつてゐる。字新屋の東なる鷲ケ巢山は標高一二五〇メートル、三面川の發源地三面谷の山家は平氏殘黨の落所なりと傳へられる。幕政の末には、米澤藩領、村上藩領の二に分れてゐた。

村社鷲麻神社は曾て鷲ケ巢大權現と呼ばれ、至德二年（南朝の元中二年）當村城ケ平の城主市川氏が鷲ケ巢山頂より合祀したものである。布部には同城址がある。また白瀧、大洞窟等の名勝及び龍音寺、妙童寺、龍泉寺等の寺院あり、大洞窟は布部より北方約五里の山中に在り、數十人を入れるに足る廣さで、昔猩々小僧と稱する山賊が住居し、近鄕を荒したが、劍客福見小三太のためにこゝに殺されたといふ口碑が傳へられる。

木炭、生糸、漆液を主なる物產とし、村内には郵便局、森林組合、漁業組合があり、村上町へ三里、交通は餘り便利でない。

高根村

本村は鹽野町村の東に隣接し、高根川一帶の原野山林地を占める。高根川は北方大鳥屋岳に源を發し、本村中央部を貫通し西南隅に於て三面川に入る。この合流三角地域に平地あり、部落が聚まつてゐる。なほ本村が村營を以て原野二百町歩を開墾したるは世に紹介すべき價値がある。

舊幕時代には全村米澤藩に屬した。明治二十二年町村制實施の際、岩澤村及び高根村の二村が生れ、同三十四年十月これを合併して現今の高根村となつた。

中原桑園は面積約二十町歩、その廣大郡内に比なしといはれる。高根全山は第三期の砂岩及び凝灰岩の累層にして、これに黄金及び黄鐵鑛の含むを見、その厚さ十餘尺に達する箇所ありと雖も含金量は豐富でない。村の主産物は木炭、牛乳生絲、漆、米等で、黒川信購組合、岩澤信購組合、薦川森林組合、關口森林組合等が組織されてゐる。

村内社寺には村社諏訪神社、曹洞宗徳藏庵、同龍山寺、同醫泉寺、同關泉寺日蓮宗本門寺などあり、名勝眞津の瀧は日倉山中にあり、高さ五十丈、下流は高根川となる。また鈴瀧、樽谷、本門寺の舊蹟等の名所あり、交通は村上驛まで三里の間バスが通つてゐる。

猿澤村

村上町の北方に位し、西に葡萄山系に屬する三額山、虚空藏山連走して東に傾斜し、三面川の支流が村内に溪谷をつくつてゐる。猿澤、川端、檜原、板屋越ほか五大字より成り、面積一・六二五方里往昔は北陸道の一驛であつた。村上驛より三里餘、國道通じ、バスの便もある。

古くは猿澤村及び鵜渡路村の二村に分れてゐた。舊幕時代の末には米澤藩の支配に屬した。宮の下字上山に雲ノ上佐一郎の靈を祀るといふ村社川内神社あり、俗間一の宮と稱し、崇敬祈願多く、

川口樣よく聽き分けて
二度と飼まぬ　サ、一度

と村上甚句にも謠はれる。檜原字屋敷添には村社伊須流岐比古神社あり、虚空藏山には虚空藏堂あり、天正年中僧行基が一刀三拜して彫刻した虚空藏菩薩を山上巖窟に安置する。下中島の觀月、板屋越の瀑布は名勝として知られ、福立山の城本莊繁長の館等の舊跡もある。宮の下の小川橋は郡下第一の長橋で、遠くより望めば長い虹のやうで、

場所だ場所だよ　宮の下場所だ
新潟勝りの橋かゝる

と俚謠にあり、大字猿澤は昔は驛場にして大部落であつた。

いやな猿澤村計り長ふて
主と寢る夜の短かさよ

と里人に消えやすい悦びを嘆かせたところだ。村の主産物は米、木炭、茶、牛乳生絲、漆液等で、村にはまた村上區裁判所出張所、郵便局、産業組合、漁業組合などがある。

鹽野町

葡萄山系中に蟠居せる一村にして、中央の分水嶺によつて地形自ら二分され、南須戸川流域に鹽野町、小須戸の部落あり、北方葡萄川流域に葡萄、中小屋の部落がある。北陸街道が村を南北に通じ、村上町へ四里、バスが通つてゐる。この道が黒川俣村へ入る山道を葡萄峠といひ鹽野町は曾ての小驛である。七大字より成り、面積三・九六九方里だ。

幕末には、全村米澤藩領であつた。義經記に「あらかは、岩船と云ふ所につきて、すとうのみちは、ゆきしろ水に、山河まさりて、かなふまじ」とあるすとうは村内大須戸小須戸をいふのである。鹽野町は、近世、米澤藩主上杉氏が陣屋を置き、公領一萬三千石の田邑を支配したところである。葡萄山中に式内漆山神社あり、源義家が征奥の戰勝を當社に祈願し、凱旋の際、矢を以て殿屋を葺きたることあり、故に矢葺明神の名がある。また村社白山神社、無格社一、觀行院、龍門寺、行福寺、松光寺、常林寺等の社寺がある。

村内主要物産は米、木炭、生糸、漆液等である。

黒川俣村

本村の世帶數は三百五十餘戸、人口約一千人をかぞへる。その全世帶數のうちの三百三十戸が農に從事してゐるといふ農村で、商工業等は微々として振はない

本村は郡の北端に在り東南は中俣村、高根村に接し、西は鹽野町村、下海府村北は八幡村、大川谷村に連り、東西二里南北一里三十餘町、面積六千餘町歩を擁してゐる。

四方山岳に圍まれ、從つて平坦地少なく、南方に向つて自然に傾斜し、海拔四〇米より一〇〇米の間に存し、南に鰲山吉祥岳、東に陣ケ峰が聳えてゐる。また河川には著名なるものなく、たゞ大毎地内鰲山より發する大毎川、濁川、北中阿南澤より發する北中川と合して勝木川の上流となり、八幡村寢屋港に注ぐ。

八幡村

當村三方山にして、北面の一門が海に開き、寒風に積雪の量多く、年々植林の雪害夥しく、春の融雪がまた遲いため、農耕上に支障を生じ、秋は早冷により結實の不良を致してゐる。

冬季間の交通は深雪と吹雪とのために杜絶することが往々ある。小學校では冬期派出教場を設くるは勿論のこと、暑中休業の期間一週間を、特に冬期に廻して休業するといふ狀態で、積雪最高一二尺最低が二尺である。

當村は東に黒川俣村、西に日本海、南に下海府村、北に大川谷村に接續し、東西一里三十町、南北一里十町を占め、戸數三百五十餘、人口二千百餘人、農業に從事するもの最も多く、次は漁業、第三は樵を示してゐる。

小學校の外に村立八幡青年學校、八幡

村立圖書館がある。なほ官公署に、村役場郵便局、駐在所、村上區裁判所八幡出張所、勝木停車場がある。

大川谷村

當大川谷村の雪は、高田地方ほどではないが、それでも冬期三ケ月間は雪に何も彼もが閉される。地は東西一里十五町南北一里二十二町、外周六里十六町を有し、東は中俣村に接し、西は日本海に臨み、南は八幡、黒川俣の二村につらなり北は山形縣念珠關村に隣接してゐる。

當村は江戸幕府時代に於て村上藩と庄内藩の中間に介在して、御領若くは天領と稱せられた幕府の所領であつた。そして米澤の委任支配に屬し、鹽野町代官の命をうけたものであつた。明治維新後、村上藩に歸し、同四年廢藩の結果、村上縣に屬し、同九年新潟縣の管轄となつて今日に至つたのである。

大字は府屋、岩崎、中濱、堀ノ内、大谷澤、温出、杉平、遅郷、若石、塔ノ下、荒川口、朴平の十二に分れ、戸數約六百戸、人口四百餘人をかぞへる。

官衙公署には府屋警察署、大川谷郵便局、大川谷村役場、新潟縣立鮭卵孵化場があり、團體には村農會、在郷軍人分會青年團、國防婦人會、信用組合、教育會養蠶實行組合、職工組合、漁業組合、苗木組合、綜合副業組合、販賣利用組合などがあり、その他種々の會社並に工場の設立がある。

中俣村

本郡の地勢は凹凸甚だしく、山岳に富み、平野少なく、東は大鳥鑛山の餘脈に連り小俣、中俣の二川何れも源をこゝに發し、蜿蜒西流して大川谷村に至り、やがて日本海に注ぐ。

地は縣の最北隅に位し、東北は山形縣東田川郡及び西田川郡とに接し、西南は黒川俣村、西は大川谷村に接續する。東西は四里、南北は一里二十二町、面積五・八三一方里、戸數二百二十、人口一千七百餘人、農を唯一の生業となす純農村である。

隣村大川谷村より本村大字小俣、大代雷を經て山形縣福榮村に通ずる縣道及び大川谷村より大字中俣に至る間の縣道は車馬の往來に便し、小俣より山形縣念珠關村及び中俣を經て黒川俣村に通ずる村道は急なる峠を控へ、且つ道が狹く、人馬を通ずるに過ぎない。

下海府村

當下海府村は郡の北部に位置し、新潟市の東北約一〇四粁、村上町北方約二・八粁の地點に在る。東は黒川俣村、東南は鹽野町村、西南は上海府村、東北は八幡村に隣接し、西方一帶は日本海に面しまた東方一帶は山岳を負ひ、東西一里十八町、南北三里十八町、面積約五方里を有する。

當村は西南より東北に亘つて狹長な地勢を呈し、大字濱新保、桑川、笹川、板貝、今川、脇川、寒川、越澤、芦谷の九

部落より成つてゐる。今、羽越線開通して交通至便となり、沿岸を通ずる道路は府屋瀬波線として縣道に編入され、近時救農事業によつて年々改修せられつゝはあるが、岩石海岸に迫り、工事頗る困難を極める。一方海上の航海自由にして、海運に便すること著大なるものがある。

戸數四百三十餘戸・人口二千三百、うち農に從ふもの二三四戸、水産業は五一戸、工は三一戸、商は二四戸を示してゐる。そして農産に於ては何といつても米と麥で、米は一、八〇〇石、麥は一五〇石、林産としては木炭の二六四、〇〇〇貫、用材の二四、〇〇〇石、工産にあつては刄物類で年産八〇〇圓等の成績を擧げてゐる。

産業團體には農會、青年團、漁業組合などが設けられてゐる。

粟島浦村

本村は對岸岩船港を去ること、西北二十五浬で、岩船からは内浦まで、漁用を主とする定期航路が開けてゐる。全くの一孤島で、幕末の頃までは米澤藩に屬してゐた。

粟島は一名粟生島といひ、海府浦よりもつとも接近して見え、遠望すると櫛形をなすので、櫛島ともいふ。

島の西岸の景觀は、天下の一奇觀である。屹立せる島や立岩の礁上に群棲せる白鷺の大群が殊に壯觀である。またこの附近には鷗や鵜が群棲する絶海の孤島で船も近づけないあたりで、飛沫くだける岩床を蔽つて、亂れ飛ぶ海鳥の群の美しさは、讃ふべき言葉に窮する。

島の名物に麥打ちがある。老若男女十數人が圍陣をつくつて、莚の上におかれた莖付きの大麥の穗先を、約二メートルの棒切れで打つのである。麥打ちは七月の末に、數日に亘り朝の三時頃から六時頃まで行はれる、賑やかなゆかしいこの島獨特のシーンである。ここの人口八百三十餘名、そのうち女が四十名多いのも島らしく、またかうした行事にいそ〳〵と働く女のさまがめざましい。この島には醫者も居なければ、駐在所もなく、昭和の諒闇も知らずに大正十六年の元旦を祝つたといふ眞の平和境である。

島は竹の名産地で、年々一萬數千圓の内地移出がある。その他魚介類、乾鮑、生鮑、乾海苔、海草類の産多く、殊に、鮑は美味である。村には鮑を主とする名物粟島料理があり、素朴な味はひは獨得の風味をもつて人をそゝる。

上海府村

往古より海府浦と稱して日本海に臨める北陸道の一驛にして、義經記に「いはひが崎にかゝりてオチムツカサルねんじわの關へ通る」とあり、いはひが崎は今の岩崎、オチムツカサルは海府浦であらうといはれる。

瀬波の海岸、三面川の注ぐ所岩ケ崎より北は山形縣境鼠ケ關に至る延長十餘里の海岸一帶の景勝地の海府浦と稱し、本村及び下海府村がその中に含まれ、山色

水光絶佳の地である。

村は柏尾、間島、吉浦、早川、馬下、野方、大月、岩ケ崎より成り、面積三・二七七方里にして、羽越線越後早川驛及び間島驛を有し、交通の便よく、村には郵便局、信用組合、漁業組合あり、社寺には村社八幡神社、無格社一、永徳寺、潜龍寺、早川寺、柏樹寺、雲冲寺、ほか一箇寺等がある。

海岸の大洞門は長さ五十米、支洞五及び鍾乳石あり、地藏洞は酸化鐵華の鍾乳石で、石筍がある。幕末の頃、村上、米澤の兩藩に分領されてゐた。口碑に源義經奥州潜行の際、この地に達し前途嶮難のため、馬を下り舟によつて進んだと傳へ、今、馬下の地名が殘つてゐる。また附近に君還り岩あり、嶮難のため踵を回らしたに因り名づけたといふ。

本村は海岸漁村であるから、本來の業務は水産だが、それでも所々に田畑があり、この耕田は殆ど女護ケ島の仕事の如く悉く婦女子によつて耕やされ、しかもそれが婦女子の本業ではなく副業で、水田六十數町歩、畑九十町歩が婦女子の副業として耕作されることは、本郡には他に例がない。本業は何かといへば、矢張り水産——海藻採種である。

佐渡郡

自然的景觀　北は大佐渡、南は小佐渡

中の國中　米どころ

簡單ではあるが、佐渡の地形を彷彿たらしめる格好な名句である。この島は、東西五一キロ、南北一〇二キロ、周圍凡そ二一一キロ、面積八九六方粁で、大佐渡なる北の地塁と小佐渡なる南の地塁から成立つてをり、その中間に、國中と呼ぶ平野を挾んでゐる。南北の地塁は何れも臺地狀に擴がり、よく見るとこの臺地は一段二段三段五段と階段を作つて海に落ちてゐる。

佐渡の自然的景觀の特徴は、この段丘地形を措いては求められない。大佐渡にも小佐渡にも、その周緣には大棧敷を幾重にもかさねたやうな、比較的新しい段丘が、實に見事に展開して、その海岸あたりは怒濤岩に激し、畫にも文にも盡し難い絶景を藏してゐる。

だが、この段丘は或は米田、或は牧場として利用され、かなり著るしい統制をうけてゐる島の經濟を發見する。

戸口・區劃　孤島の佐渡は、帆船交通の時代から既に自給自足の經濟を確立した。本籍人口は年に約六百乃至一千人づつ增加するに拘らず、現住人口の總和に大した變化のないのが佐渡の現狀である大正十二年には一一二、一六七人、同十四年一〇六、六三八人、昭和五年一〇六、二六二人、同十年一〇九、三五一人、これが佐渡の現住人口だ。これは明かに、

經濟的意義のある人口統制が行はれてゐることを物語るものである。

而して全島の面積八五七方粁二四、これを五町二十ケ村に區劃する。

町村　相川、澤根、河原田、小木、兩津

二見、八幡、二宮、金澤、吉井、新穂、畑野、眞野、西三川、羽茂、赤泊、松ケ崎、岩首、水津、河崎、加茂、內海府、外海府、高千、金泉

產業・經濟　佐渡の總生產額千五百九十萬圓のうち六百七十餘萬圓が農產物であるから、殆ど二分の一に近く農業に依賴してゐるわけだ。これに較べると水產は百三十餘萬圓で、農業の四分の一にも滿たない。環海の孤島に水產業の振はないことも面白い現象だ。金鑛山で德川三百年の壽命を繋いだといふ相川は、現在總產出高は農產の二分の一には達するが昔の面影はない。鑛山文明の末路も哀れだ。

これに反し海洋的風土と暖流の關係で島は比較的暖い。年每の乾燥には水の缺乏に苦しめられる佐渡人でありながら、特殊の用水路をつくつて、段丘上に水を引き、米、麥、甘藷、いづれも成績がよい。南部地方では枇杷、無花果もよく育ち、蜜柑の出來ることも北國としては珍らしい。柿、葡萄も產する。蔬菜の供給地は眞野灣頭の八幡村と、兩津灣頭の河崎村である。佐渡牛は年三、四百頭づつ繁殖し、越後で使役する牛の大半は佐渡牛で、小形であるが從順でよく働く。

流人の島　流人の文學と金山の文明、絶海の孤島の段丘を舞臺として生れた佐渡の人文上には、幾多のロマンチックな物語が殘されてゐる。荒海に隔てられたこの島は、古來對岸越後より直接に文化の輸入を見ること少く、神鄕年間遠流の地と定められて以來流人相つぎ、しかも流人と稱せられるものは當時の新人であつて、時の世に容れられなかつた者も多い。島の人々は當然それらの人々によつて指導された。それは島人の人情風俗を始め、その言語に至るまで、對岸越後とは全く異なり、むしろ關西方面に似てゐることは、島を訪れたものの誰も肯くところである。

まことに佐渡の地は、承久二年御傷はしくも、順德上皇の遷幸を始めとし、日蓮上人、日資中納言資朝、小倉大納言、冷泉院大納言爲相、觀世元淸等の配流されたところで、それらの人々の感化は種種な方面に現はれ、特に日蓮による宗敎の感化は著しく、また、現世による佐渡の謠曲は今日なほ盛んであるなど、その一端を窺ふことができる。そしてこれらの流人の由緒深い遺跡は、島の隅々に至るまで分布し、景勝と重ねて近代人の旅情をそゝる多くのものがある。

相川町

兩津町より六里、島內の首邑にして、佐渡支廳の所在地である。島の西海岸に位し、古より人口に膾炙せる佐渡金山を背景として發達した鑛山町で、金鑛は本町の東北なる北澤川の溪間にある。海岸

は外海府につらなり、春日崎・富崎の奇勝があり、小倉大納言實起公墓、鎭目市左衛門惟明墓、圓山溟北墓、佐渡奉行所跡、その他舊蹟も多い。

面積一・一一二方里。本島の關門たる兩津港へ自動車の便あり、また澤根港へ二里、その他沿海線縣道通過し、各地に交通の便良好である。

佐渡の名が普く知られたのは金を產出したからである。慶長六年始めて金鑛の露出を發見したと傳へられ、爾來德川三百有餘年間、幕府唯一の寶庫として佐渡は天領であつた。一時は年產金銀六千貫或はその二倍もが相川から小木港へ、それが寺泊に着き、信濃を經て江戸へ運ばれた。相川はこの金銀の偉力で著しい發展を遂げ、最盛期は元和から寛永の頃で一時は人口十萬を算へたといふ。今では既に昔の俤を止めないが、佐渡の金山は誰知らぬ者なく有名である。この鑛山華やかなりし頃の相川に忘れらぬものに相川音頭がある。

かすむ相川　夕陽に染めて
浪のあやなる　春日崎

哀話と華さから生れ、地獄の底に日の目も見ずに金掘りに疲れた流人達の、坑から坑への唄は、エキゾチックな響きさへ持つてゐる。

佐渡支廳をはじめ諸官衙の所在地で、今も昔と同樣佐渡の中心都邑として榮えてゐる。町に名物無名異燒の產あり、玉石の細工ものも多い。

澤根町

奇岩と荒波の外浦を南西に向つて行けば二見の漁港に出で、眞野灣に入る。海水の灣入すること四浬、濶さ約三浬半、灣の中央は水深二〇尋に達する。本灣唯一の良港たる澤根港は、兩津灣の夷港に對し、大佐渡北面の水陸兩路の門戸にあたり、相川町の前衛をなし、背後に大位渡の山岳を受け、東は展けて國中平野に連る。五大字を含み、面積〇・六七四方里である。

町の西方に隆起する鶴子山は、文祿年間、上杉氏がこゝに銀を採つたところである。澤根の白山城は、本間黨の一族の居たところ、北越軍記に「天正十七年澤限刑部廣綱を佐渡六人衆の一とす」とあり、五十里、相川等は皆この澤根氏の知行地であつた。

港は水深く、帆船汽船の出入頗る多く小木を經て直江津との航路がひらけてゐる。陸路も、相川へ一里十二町、兩津へ五里、河原田にも近く、共に縣道通じ、自動車の便がある。

この町の名產は銅器で、その紫斑銅の高雅まことに掬すべきものあり、他に類品なく、世界的に名聲を博してゐる。新佐渡十景の一なる櫻の名所もあり、佐渡に遊ぶ者また必ず本町を訪れる。

河原田町

眞野灣の奥なる本町は澤根町の東に接し、背後に廣濶なる國中平野を控へ、遙かに金北山の雄姿を仰ぎ見る位置を占

め、丁字形の小市街に展開し、國中平野の物資の集散地にして、また交通の衝にあたつてゐる。

舊北佐渡殿の城下町にして、江戸幕府は慶長六年これを收めて金山奉行をこゝに置いた。嘉吉年間、觀世世阿彌流罪となり、玄孫元忠は天文年中當地に猿樂を催ほしたことがある。

本町は政治教育金融等の中心地として將來ます〳〵發展すべき立場にあり、相川・兩津幹線の中心をなし、商工業頓に繁榮し、郡の教育產業の重要機關の多くはこゝにあつまり、やがては佐渡第一の都會となるであらう。

產業は工業が盛んで、酒、味噌、醬油の釀造及び水產加工品が多く、その他では米、木炭がある。主なる會社には佐渡電燈、佐渡合同自動車、佐渡產業などあり、銀行支店も所在する。

教育機關としては縣立高等女學校、小學校、幼稚園、圖書館があり、青年學校の成績の優秀なことは、郡下でも五指のうちに算へられる。

越の松原、妙經寺の勝地古蹟のほか、鄕社諏訪神社、光福寺、常念寺、善宗寺專念寺、普賢寺、龍鳳寺の社寺がある。

小木町

郡の西南端にあり、南は海に面し、その中間に城山の小岬ありて灣を兩分し、內灣、外灣とする。浪靜穩にして碇船に便である。

往時、和船交通時代には佐渡隨一の良港として殷盛を極めた土地で、今は往時の面影はないが、なほ地方の一中心にして對岸直江津と三十五浬間に定期航路を開いてゐる。

近傍の風景賞すべく、四圍翠巒、竹林奇島の美あり、順德上皇の御史、蹟城山公園、隆起海濱、箭島、經島、御所櫻、蓮華峯寺、安隆寺等を有し、殊に箭島經島の美しさ、宿根木、深浦の奇、竹林や椿の茂み、大佐渡の海岸美と全く景趣を異にし、南國に遊ぶがごとき感あり、名勝地に指定されてゐる。この國の詩人丸岡南陵は

此邊好馬頭　荻浦推第一　東西南北舟
斯內碇泊必　昨日千帆入　今日千帆出

と詠じたが、近國無比の天然の良港として殷盛を極めた小木港爛熟期の情調であり、また小木風景の簡潔な素描である。

東西二里、南北一里、面積一・七二七方里に及び、最近、定期航路の出入頻繁となつたために、昔日の繁榮を招來する日も近い將來であらう。

住民は漁業に從事するものもあるが、大體が商工業者で、工業も手工業が多く新潟縣竹製品の首位佐渡笊の約七割はここでつくられる。漁業は魚場に惠まれ乍ら、漁撈も加工も振はない。農業は水田の開拓に乏しく、三百餘町歩の畑作の集約的經營が圖られ、園藝方面に頭角を現はして來た。

兩津町

本町は湊、夷の兩町を併せて成り、面

稿〇・〇四方里、兩町は加茂湖の吐口に架せる兩津橋によつて結ばれる。由來新潟港の繫船場として發展せるこの町は、殊に冬季避難港として近海これに及ぶものなく、佐渡の表玄關としてます〳〵繁榮の途上にあり、昭和二年の大火は町の大半を烏有に歸せしめたが、今は倍舊の復興振りを示してゐる。

新潟より汽船で三時間半を要し、內務省指定港灣にして、佐渡の關門たる地位を占め、通信交通產業の中心地である。島內各地への縣道の起點にも當る。實に「來いと云ふ人あれ島は涼しげ也」と紅葉が吟じた日本海の萊蓬島佐渡ケ島の玄關、それが兩津である。

產業は水產業と工業がその大部を占めて七十餘萬圓に達してゐるが、遊覽客の來遊による收益は、本島の咽喉に位するだけに大きなものがある。町には劇場、映畫館、其他の娛樂機關も備はり、兩津築港事務所、兩津警察署、縣殖物檢査所支所、縣立兩津治療院、相川區裁判所出張所、專賣局派出所、郵便局、圖書館、銀行支店、各種團體多數がある。

しかし本町を語る上に忘れられざるものは勝景の地加茂湖である。二十五景の筆頭に位し、南國風景そのまゝの明朗な景趣、雄大なる風景は心憎いまでに强い魅力を持つてゐる。その他金北山、海府の景觀、兩津橋、村雨の松、鐃岡公園、妙法寺鄕社諏訪神社などがある。

一見村

澤根町の西に連り、大佐渡の西端に位の、眞野灣口を扼してゐる。北に大佐渡山脈の末端丘陵を負ひ、海岸線は單調を缺き、殊に西濱は長手崎の岬角を占め、白島その他の諸島が點在する。二見灣は一に眞野の入江といひ、また戀が浦とも呼ぶ。澤根町に接して各所へ自動車の便あり、大字二見から山形縣酒田港への航路もある。

橋、大浦、高瀨、稻鯨、米鄕、二見の部落を含み、面積〇・七〇九方里、產業は農を以て第一とし、水產これに次ぐ、他は微々たるものである。團體には二見村信購販組合、大浦漁業組合、二見漁業組合のほか米鄕、高瀨、橋、稻鯨にもそれ〴〵業漁組合が組織されてゐる。

社寺に村社三宮神社、同尾平神社、鄕社二見神社、安養寺、定福寺、龍吟寺などあり、相川より西方海岸傳ひの縣道に橋の正福寺、辨天岩、二股岩、順德上皇御手植八房の梅、月さゝずの池及び、里人稱して伊勢二見に優るといふ二見の夕照等の名稱あり、この邊一帶を西濱海岸と稱する。なほ二見の龍吟寺には國寶金明聖觀音が安置される。

八幡村

東南は眞野村に、西北は河原田町につづき、眞野灣にのぞみ、國中平野を灌漑せる國府、石田の二川は、村を貫通して眞野灣に注ぐ。土地坦々として豐沃、蔬菜の產が多い。河原田町につらなる海岸一帶は「雪の高濱」と稱し、白砂青松相

續く景勝の地である。

八幡、八幡新町、八幡町の三大字より成り、面積〇・二六二方里にして、戶數三百六十五、人口千八百餘をかぞへ、村內鎭座の八幡宮に鄕社と村社の二社あり諸州の例より推すに所謂府中八幡であらうといはれる。古跡考に、順德院がこの里にて

啼けば聞く聞けば都の戀しきに
この里すぎよ山ほとゝぎす

と歌詠み給ふと說き、續風土記に、八幡里に順德院の御宮跡があるといつてゐるが確かなことは詳かでない。村にはなほ曹洞宗に屬する寶藏寺あり、名勝としては越の松原、八幡御所跡があげられる。

兩津町へ四里、縣道通じ、石田、國府の二川によつて舟揖の便もあり、水陸共に交通の便良好である。

二宮村

大佐渡の西南部たる金北山連峰の東南麓に蜒亘し、眞野灣に迫り、國中平野の平坦なる沃地を占め、中央に石田川が流れてゐる。石田、中原、上長木、下長木ほか七大字より成り、面積一・八三六方里、相川町へ二里半、兩津町へ三里半、いづれもバスの便がある。

佐渡志によれば、二宮は順德院第二皇女忠子姫を崇むる所なりといひ、今、皇女の御墓所は二宮神社の背後にある。日蓮上人に由緣深き妙照寺及び實相寺もこの附近にあり、妙照寺は文永九年上人が塚原よりこゝに移され、同十一年三月まで配居の地である。當地上人の監守たりし近藤伊豫守淸久の族、日靜なる者、深く上人に歸依しこの寺を開いたといふ。大字石田なる本福城址は、その跡に今縣立佐渡中學校が建てられ、金北山と眞野灣との景勝を恣にしてゐる。この他社寺には鄕社二宮神社、村社金北山神社、同高濱神社、同羽黑神社、同中原神社、同若宮神社、同諏訪神社、圓滿坊、玉泉寺西光寺、照覺寺、常信寺、靑柳寺、妙經寺ほか六ヶ寺あり、順德帝第二皇女の御歌に

またも見む賤がいほ機おりはしの
おりな忘れそ山吹のさと

とあり、めぐる歷史の哀傷がこめられてゐる。佐渡觀光の客のこの地に足を止めざるはない。

村は明治三十四年野田、二宮の二村を合併したもので、產業は農耕が最も盛んで、總生產額五十萬圓のうち二分の一餘は農產物が占め、農產物では米がその大部分だ。これに次では工產、林產があり漁業は少い。

金澤村

本村は千種、平淸水、泉、中興、新保貝塚等の部落より成り、金北山麓の平野に位し、その溝洫を新保川と稱し、國府川に入る。河原田町を經て相川町に至る縣道と、吉井加茂兩村を經て兩津町に至る縣道とが通じ、交通至便で、產物には米、麥、繭が多く、面積は二・八〇一方里に及ぶ。

村内泉には順德院の黒木御所と傳ふる廢墟あり、一說には古墳といはれる。續風土記には「和泉村に上皇の御料地ありて、御幸の假宮もありたり、云々」と出てゐる。大字中興は應永十四年の文書にすでにその名見え、爾來北佐渡の大邑であつた。同地に發見される石器時代の遺跡も多い。思ふに海水の國中地方を貫流せし時代には、當地が人類生活上最適の地であつたのだらう。

村には縣農事試驗場佐渡分場、縣穀物檢査所出張所、郵便局、組合立佐渡高等女學校、村立圖書館、郡農會事務所などあり、神社郷社八幡宮二社、村社中興神社二社、同白山神社、同熊野神社等あり寺院は觀正寺、願正寺ほか十八ケ寺をかぞへる。名勝舊蹟には黒木御所、千種の里、明治記念堂、往古の國造大荒直治所址がある。

吉井村

本村は舊幕時代には藍原大和守の管領するところで、當時は吉井本郷、舟津、中島、間場、横谷、水渡田、三瀨川、細屋、青龍寺、安養寺、立野、上横山、下横山、潟端、青木、石花を吉井十六郷と稱した。

明治九年の地租改正、同十二年の郡區改正の際に小部落を合併して十五ケ村となり、同二十二年自治制施行の時、町村の合併があつて吉井、秋津、長江の三村に區分された。同三十四年この三村を合併して吉井村と稱し、大和、吉井本郷、安養寺、立野、吉井、三瀨川、水渡田、旭、潟端、下横山、上横山、秋津、長江の十三大字を置く。

本村は佐渡の中央より稍や東部に位し東は鴨湖（越の湖ともいふ）を隔てゝ兩津村に對し、西は金澤村に接し、南は新穗村に隣り、東北は加茂村に、北の一部は高千村に境する。東西凡そ一里、南北凡そ三里、その面積一、九一六方里にわたつてゐる。

本村の形は略ぼ方形に北方柄をつけたやうな觀をなし、金北山分水嶺より漸次南に傾斜し、村相は極めてよく、中部と南部とは平坦地にして水田多く、宅地は吉井を除いて他は概ね散在する。

縣道新潟相川線は村の中部を、東北より西南に貫通し、中央に於て横宿線と丁字形に交はり、里道また縱横に通ずるところから、車馬の往來には些の不便がない。また東部湖岸の地は、舟楫の便甚だよい。

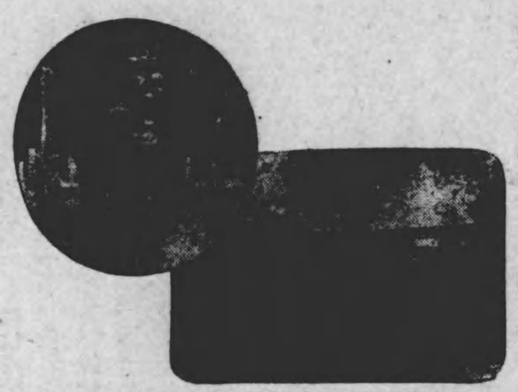
戸數一千餘戸、人口約五千人、農業に從事するもの、全戸數の八割餘を占めてゐる。

新穗村

新穗村は郡內町村中面積第一位を占めてゐる。東西約三里、南北約二里；面積約五方里をかぞへ、北は加茂湖及び吉井村に、西北は金澤村に、西南は畑野村、東は河崎村、南は小佐渡山脈を距てゝ岩首村に接續してゐる。

東南は一帶山脈連り山岳重疊し、國見

山は海拔二、〇三二尺、村第一の高山である。村內の一部は丘陵起伏するところあるが、併し中央は平坦にして大野、新穗の二川は村の略ぼ中央を貫流し、地味肥沃、水利の便多く田圃また開けてゐる。



戸數は一千四百八十餘戸で、そのうち農を本業とするものは一千六十餘戸に及んでゐる。人口は七千餘人。

明治三十四年十一月一日町村分合實施に際し新穗村（七ケ大字）、大野村（二ケ大字）、長畝、舟下、皆川、澤上、田野澤、正明寺を併合し、現在十五ケ大字により新保村の成立を見たのである。この十五大字中、大野は和名抄の所載が床郡大野郷にて、その起源は最も古く、德川幕府の直轄するところとなつてからは、佐渡一國二百六十ケ村を大野、夷、羽田小木の四組に分つたが、大野組は四十九ケ町村を算し、本村は概ね大野郷に屬してゐたものである。

名所舊蹟としては日光神社、牛尾神社根本寺、清水寺、神宮寺の鐘、瀧饒庵、湯の澤鱗泉などが知られてゐる。

畑野村

眞野村と新穗村の中間に介在し、南に經塚山、飯豐山蓮峰の翠巒を負ひ、北部は國中平野の耕田穣々として開け、部落は縣道に沿ふて散在する。兩津港より三里半自動車の便がある。

明治三十四年十一月、町村の廢置分合に際し、畑方、畑本郷、寺田、安國、河內、後山、宮浦、三宮、大久保、畝田、小倉、猿八、長谷、栗野江、坊ケ浦、目黒町の十六字を合併し、今日の畑野村を組織した。面積三・三二九方里、戸數千四百餘、人口七千四百を越え、村民は質朴にして進取の氣象に富む。

產業は、農業その大部分を占め、產額も五十萬圓に近く、これに次では工產、林產、畜產の順である。最近は副業が奬勵されるので、副業關係の工產物及び林產物が多くなりつゝある。產業組合はよく利用され、成績良好である。小學校は三校、青年學校は一校である。

神社十八社、寺院二十四ケ寺を算し、舊蹟には順德帝第一皇女の墓所たる一宮御墓所、同じく第三皇女の墓所たる三宮御墓所をはじめ、文覺上人の遺跡、星降の梅、日蓮上人敍寃の遺蹟、國寶觀世音憲盛法印の墓等がある。

眞野村

本村には石器時代の遺跡及び古墳の散在せるありて、その開發の甚だ古きを思

はしめる。大化新制後、雜太國府及び雜多郡衙を置かれ、豐臣氏が治府を鶴子に移せしまで實に九百六十餘年間、一國の首府なりしと共に、また實に文化の中心地であつた。天正十三年には國分寺が建立せられ、その後妙宣寺、世尊寺、太運寺等の他村より移り來れる等併せて信仰

上の中心地でもあつた。順德上皇が當地に遷幸し、御在島二十二年に及び、本村の御遺跡の多いのは、こゝに守護所が置かれたからである。治府が相川に移されてからも、越後に至る公道たる小木、赤泊に通ずるの故を以て戸口却つて增加するの結果を生んだ。名所舊蹟も縣社眞野宮、石抱の梅、石眞野山火葬塚、堂所御所址、戀ケ浦、佐渡國分寺跡、阿佛坊妙宣寺、日野資朝卿墓、阿新隱れ松、雜太城址、世尊寺等頗る多く、戀ケ浦は、順德上皇が

いざさらば磯うつ浪に言問はん
おきのかたには何事かある

と、御鳥羽上皇の隱岐の行在所を偲ばせ給ふたところである。

佐渡の西部に位し、所謂國中の一部を占め、郡の最大川たる國府川は村の北端を流れる。地形南北に長く東西に短く、面積二・九六方里である。

生產金額は六十數萬圓に上るが、工產と農產でその八割を占め、主なるものは米、木炭、竹材、竹工品で、植林は郡內第一の模範村である。近年、紫雲英の栽培が多く、自給肥料の徹底が叫ばれてゐる。信用組合は八百餘名の組合員を有し農業倉庫を兼營する。

西三川村

小佐渡の西北部海岸に瀕し、東南に小佐渡山脈の末端なる大日岳起り、村內に丘陵起伏すれども高峻でない。海濱約三里にわたり、岬角參差し、奇巖あり、白砂に小波の奏でるあり、變化に富む景勝の地である。

昔より砂金の產地として、宇治拾遺その他の記錄に傳へられる。現時、西三川大小、大倉谷、田切須、小泊、椿尾、龜脇、村山等の部落より成り　面積二・〇九二方里にして、村數五百三十、人口三千百をかぞへる。

產物は農產物にして、林產これに次ぎ以下水產、工產、鑛產の順である。村には郵便局を有し、產業組合、土工森林組合、漁業組合もある。

社寺には鄕社小布施神社、村山白山媛神社、同白山神社、同諏訪神社、同氣比神社、同白山神社、醫王寺、圓照寺、香傳坊、智光坊、如意輪寺があり、名勝としては椿尾鵜懸、西三川の雄瀑、笹川の順德上皇第三皇子彥成親王の御墳墓など

が廣く知られてゐる。

小木港より三里半、自動車の便あり、交通は惡くない。

羽茂村

全戸數約一千戸、その八割は農耕によつて生業となしてゐる當村は、郡の南端に位置し、東は赤泊村に境し、西は小木町及び西三川村に接し、北は眞野村、南は一帶海に面してゐる。東西凡そ一里、南北凡そ二里、面積は二方里六分餘に及んでゐる。

地勢は北より南に傾斜し、東南北の三面は村菅山、鞍骨山脈を以て圍繞し、いづれも分水嶺を以て境し、殆んど藥研形をなし、羽茂川その中央を貫流して北から南に流れ大石灣に注ぐ。

當村はもと一鄕十一ケ村に分れてゐたが、明治九年、同十七年、同二十三年の數回の變遷によつて分合をなし、更に同三十四年の新潟縣町村分合の時、羽茂本鄕村、大橋村、千手村の三ケ村を併合し羽茂村と改稱し、現在に至つてゐるが、その大字は羽茂本鄕、飯岡、上山田、大橋、大石、三瀨、大崎、瀧平の八部落に分れてゐる。

小學校の外に青年學校、農學校、圖書館の設けがあり、育英のことにはなかなか熱心である。

當村の名勝舊跡としては五十猛命を祀る國弊小社度津神社をはじめ妹背山、鄕社菅原神社、村社草刈神社、新倉山弘仁寺、天澤山大蓮寺、羽茂城址、義民善兵衞の墓、羽茂川の鮎などが算へられる。

赤泊村

本島南海岸に沿ひ、越佐間の最も接近せる地點にして、對岸寺泊へ三十一浬、晴天の日は髣髴として望見し得られる。後方に前佐渡山脈を負ひ、山間に耕地あり、簡味豐饒、海濱にのぞんで部落は點在し、住民は概ね農耕漁撈に從事してゐる。佐渡雜志に、

小木、赤泊兩港よりは越後の今町、柏崎、出崎、雲寺泊、新潟へは、夏季日々の渡船あり、冬は出雲崎、寺泊へのみ渡海す、大下りの暴風には赤泊北方松ケ崎へ向け驅返る、走泊の澗には四方風當らず、只淺くして狹きため小船のみ集る

とある。村內禪長寺毘沙門堂は永仁六年大納言爲兼卿が流されて七年の間寓居したところである。

當地方は本島でも可なり早く開けた地で、本村は十二字を以て組織され、上述の如く海と山に挾まれた風光絕佳の地にして、東西二里三町、南北三里十町、面積三・四一二方里に及び、戶數千、人口約六千、村民の志操堅實なる平穩な土地である。明治二十二年町村制實施の際は羽茂村區域の三ケ村を離して川茂村と稱し、同三十四年十一月眞浦、赤泊ほか三ケ村を合併して今日に至つた。

住民は農七、商三の割合となり、主なる產物としては米、繩、竹材等があげられる。最近は美術籠の製作が隆盛で、本村の名產物となつて來た。

小學校は一校にし分教場四あり、青年學校が併設される。

松ケ崎村

多田、丸山、河内、松ケ崎の四部落より成り、松ケ崎は前佐渡海岸の中心にあたり、西蒲原郡角田郷と相望み、約十八浬、越後との最短距離にある。松ケ崎の本嶺一頭山は、前佐渡山脈の第一峰にして、義經記に見ゆる松陰が浦は、松崎が浦を誤つたものである。

位置は前濱の東部にあたり、東南は海に沿ひ、西北は山脈を以て掩はれ、男神女神の二山が聳え、山勢直に海にせまつてゐる。河内川は源をこの山間に發して南流する。平坦の地少なく、村内到るところ森林が繁茂してゐる。面積一・〇一二方里、戸數三百三十、人口千七百七十を算し、佐渡の首邑相川を去ること八里餘、越後寺泊に至る二十浬、新潟港に凡そ三十九浬、海陸交通機關備はり、便利である。

住民の約半數は農に從事し、約三割は水産業に、他は工業、商業を營み、産額も農産が主位で、水産、工産、林産の順をなし、副業では藁工品、竹細工、養鷄養蠶が多い。小學校は一校、青年學校が併置される。名蹟には日蓮上人の御着岸所たる本行寺をはじめ、當地開發の祖を祀る男神山及び女神山、多田城址、經田などがある。

岩首村

本村は小佐渡山脈なる飯豐山の東麓に抱懷される僻村にして、東は海洋にのぞみ、豐岡、岩首の他の部落は概ね沿海の一線上に點綴し、村民の大方は漁撈を事とする。この邊はいはゆる前佐渡にして、姫崎（水津）、澤崎（三崎）に至る一帶の高嶺を青にするが故に、前濱と呼び前佐渡の稱が起つた。大略一頭山脈を前佐渡とし、金北山の大佐渡に對する意味である。

豐岡、岩首、東鵜島、柿野浦、立間、赤玉、鮑浦等の大字より成り、面積一・二〇四方里に及ぶ。曾て明治四十二年、納税成績本郡中の第一位を占め、三十年來完納の故を以て表彰された。

前佐渡の海岸より多く竹木を伐出して越後に移出し、竹を主とし、大良材はなくたゞ稀に榧の巨幹を出すことがある。

また海濱より採る石は、赤玉と稱する血色の大塊で、庭園に安置して雅致に富み、赤玉濱をこの石の本場とする。延喜式大嘗祭供神雜物の中に「佐渡鰒宮四合別納一斤」とあり、また大膳式平野祭給料の中に「佐渡鰒十四斤」とあり、今も當國名産の一で、本村を本場とする。

岩首の養老瀧、豐岡の辨財天、立間の臼杵岩などの名所舊蹟あり、神社寺院の數も多い。

水津村

岩首村の北東につらなり、目布施、東立島、東强清水、野浦、片野尾、水津の六大字より成り、大字水津は椎泊の東で

前佐渡山脈の東北端に位する。附近に姫崎燈臺あり、燈臺下には高さ六十餘尺に達する龍王と呼ぶ一岩石が屹立する。姫崎燈臺は、岬上水面を距る一三六呎に點火し、光達距離十海里、夷灣の南角に位置せるを以て、東方新潟より進航する船舶はこれを望んで港灣に入泊する。

戸數約二百五十、人口千五百有餘を擁し、面積は一・〇七二方里である。耕地少なけれども農業は本村第一の産業にして、林産及水産がこれに次ぐ。産業團體には水津村産業組合、野浦施業森林組合村漁　組合、その他が組織され、産業經濟の發展に竭すところが多い。兩津町へは縣道通じ、海路定期發動汽船の往復もあり、交通狀態良好、また郵便局の設けもある。

社寺には村社白山神社、同野浦大神宮觀音寺、地藏院、誓願寺、萬福寺、慶藏院、淨願寺がある。海濱東浦は、岩石の奇怪、綠の深壁、水色の透徹、顧色混然として融和し、一幅の繪畫を見るがごとく、景勝地として名高い。

河崎村

海波靜穩なる兩津灣の南岸に沿ひ、背後は飯豐連峰にて水津村と村界を劃し、西南は新穂村につゞき、西は吉井村と清麗鏡のごとき加茂湖を擁し、その岬角先端は兩津町に隣接する。

河崎、大川、羽二生、兩尾、椎泊、下久知、久知川内、城腰、住吉、原黒、吾潟等の部落を含み、大字椎泊の山中には柯樹繁茂し、その實を椎子といひ、兒童がこれを好んで炊食するのも當地異風景の一つである。字久知は和名抄に賀茂郡動知と知されたところである。全村の面積二・九〇三方里、戸數千を越え、人口五千百人を擁し、兩津町に近く交通の便良好である。

生産年總額は三十數萬圓にのぼり、内農産物が二十八萬圓を占め、米だけで既に二十數萬圓の産額がある。その他では林産及び工産に稍々見るべきものあり、他は微々たるものである。村には郵便局姫崎燈臺、河崎圖書館、河崎村信販購利組合、加茂湖漁業組合聯合會、吾潟漁業組合などがあり、社寺も多く、神社は郷社白山神社、同八幡宮、村社磯部神社、同住吉神社、同兩尾神社、同八幡若宮神社、同水尾神社のほか無格社一社あり、寺院は願誓寺、晃照寺、來迎寺、和光院のほか十五ケ寺をかぞへ、長安寺は天長八年に開基されたる古刹にして、梵鐘は異國より渡來せるもので、本尊阿彌陀如來と共に國寶に指定されてゐる。また運慶の作に係る金剛力士の像がある。

加茂村

本村は梅津、加茂歌代、白瀬ほか十三箇大字を併せて成り、面積五・四九一方里にして、戸數千有餘、人口約五千八百人である。

舊加茂郡の郡名の起つたところで、和名には賀茂郡賀茂郷と記される。大字海津の眞法院に若梅といふ異種あり、順德

院御手植の老木である。木喰五行上人の遺跡たる木喰堂も村内にあり、郷社羽黒神社は寳龜元年の創建にて、往古二十ケ村の總産土神であつた。この神社寺院は頗る多い。

海に沿ふて縣道が通過し、兩津町に近く、交通は便利である。村内を金北、五月雨、羽黒、金剛、檀特、高塚、歌見、刀根の諸峰相連つて蜿亙し、高千村及び外海府村との分界をなし、東方は海洋に面してゐる。

産物は天與の魚介に惠まれ、海産物豐富にして、近時、これが加工行はれて産額の增加を來し、山岳地方に於ては木炭の製造あり、農産として米、麥のほか、蔬菜、果實の産漸次增加を見てゐる。物資の搬出には沿海を通過する縣道を利用し、兩津驛も近く、便利である。

小學校は三校に分れる。青年學校は農閑期が利用され、昭和八年から女子部が設けられた。

内海府村

北小浦、鷲崎、黒姫、虫崎、見立の五部落より成り、面積一・七八七方里、西方外海府村との境に笠取山、大頭山が聳えてゐる。鷲崎は郡の最北端あたり、漁船の碇泊に適し、虫崎は奇巖奇勝を以て知られる。

内海府とは本來外海府に對し、彈崎より羽黒海岸までの總稱にして、鷲崎は外海府との交堺をなしてゐる。こゝは指定名勝地で、奇巖の碧波に映ずるところ、斷崖の直に水にのぞむところ、その間に砂濱を求めて營む漁家もあり、眺めの飽くを覺えず、繪にも筆にも盡し難い景勝である。

村には縣道が通つて交通の便あり、彈崎燈臺、郵便局、産業組合、漁業組合を有し、寺院には眞言宗觀音寺、同藥師寺曹洞宗西光寺等がある。

外海府村

大佐渡の西北端に位し、内海府村と背接し、大佐渡山脈の山勢は直に海に沒し波濤岩にくだけて壯觀を呈する。佐渡事略に

此國西北の海に附たる方を外海府と云ふ、海中に岩多く赤松など根ざして島臺と云ふ、樣の者幾所もあり、大なる岩や不思議なる窟など種々にて始には目を驚かすも後には厭ふ心地す、都で唐繪の山水を見る心地す云々

と出て居り、近時、海岸の景勝を賞するもの、夏時來遊する者が多い。この邊一帶は指定名勝地で、相川を去る北九里は海金剛の名あり、海の宏大と山の雄姿と樹木の風致と岩石洞窟の奇觀とは、日本三景も及ばざるべく、最も男性的なる天然の大公園として、造化の偉力は、文人墨客の嘆賞措かざるところがある。また大野龜、三ツ龜の勝地あり、潮滿つれば島となり、退けば砂嘴が現はれて陸續きになるといふ。

村は岩谷口、願、北鵜島、眞更川ほか

五大字を含み、面積三・九八七方里あり相川へ約十里、兩津へ九里、海岸に沿ふて縣道が走つてゐる。産業は農業が最も盛んで、林業水産業がこれに次ぐ。

高千村

北は外海府村に接し、東南は金光山に蔽はれ、村内に山岳重疊して平地の見るべきものなく、北立島、石名、小野見、北田野浦、高千、入川、北川内、石花、後尾、北片邊、南片邊の十一部落は概ね西北面の海岸沿線上に點綴し、面積五・四一三方里にして、戸數八百八十餘、人口五千有餘をかぞへる。

もと高木、千本の二浦に分れてゐたのを、近年になつて合併したもので、大字石名の東南には檀特山あり、字石花は外海府に屬した古村にして、北佐渡殿の幕下石花將監といふものが、外海府の領主であつたといふ。

生産は一ケ年約四十萬圓に達し、内二分の一近くは農産が占め、これに次で鑛産十五萬圓、林産五萬圓がある。耕地は田が約四百町歩、畑が約八十七町歩である。交通は海濱に縣道が通じてゐるだけで、便利とはいひ難い。

村には郵便局二、高千圖書館、高千信購販利組合、南片邊森林組合、村漁業組合等あり、社寺として村社八幡神社、同御禮知神社、正福寺、藥泉寺、地藏寺、水上坊が擧げられ、名勝に金北山及び海府の勝がある。

金泉村

郡の西部にありて東は金北山脈を以て金澤村、二宮村を限り、西は日本海に臨み、南は相川町、北は高千村に連る。東西の延長三里、高峯嶮崖あり、大字戸地北狄に發電所を有し、大字姫津は海洋に突出せる岬角により港灣となる。

もと雜太郡に屬し、幕府時代は達者、小川、姫津、北狄、戸中、戸地の現大字はそれ〴〵獨立して一村をなし、各々名主が置かれた。明治九年相川ほか四ケ村組合となり、同三十三年町村合併の際、下相川を相川町に分割し、更に戸地戸、中兩村を合併して今の金泉村となつた。面積三方里である。兩津港より海路發動汽船、陸路自動車の便がある。

大佐渡の西海岸を外浦といひ、本村は奇嶽と荒波の景に富む外浦の中央に位し陸からは、米、木炭、木材を、海からは鰒、鰕、鯛、鯖、鮑、若布、荒布を、即ち山海の幸に惠まれた村である。

社寺多く、村社熊野神社、同羽黒神社同金北山神社、同戸宮神社、同白山神社極樂寺、多聞院、萬福寺、胎藏寺などあり、また名勝としては小川塗笠山、達者鑛山、濡佛、北狄生拔觀音、祭主塚、戸地の白瀧、戸中平根化石などが夙に著はれてゐる。

市部

三條市八幡小路
鄉社 八幡宮

本宮は、仁和元年三月十五日、京都石清水八幡宮を勸請して鎭め給ふたもの、當市、古くは大槻の庄といつた所から、大槻神社と稱し、本住民の崇敬篤く城主より社領を賜はること數回に及んでゐる。明治五年村社に列し、大正九年鄉社に昇格、今日に及んでゐる。祭神は譽田別尊外七柱で、古來武の神として領主の尊崇極めて篤かつた。菅原神社、春日神社、稻荷神社、嚴島神社、金刀比羅神社の攝末社がある。

境内は三千五百六十餘坪、本殿をはじめ幣殿、拜殿建ち並んで莊嚴を極めてゐる。寶物として中山大納言筆の八幡宮額熱田八劍の一信國作の五尺一寸の太刀、直徑一尺二寸文明三年作の鰐口、華山筆の繪馬額などが秘藏されてゐる。毎年五月十五日を大祭日として神輿渡御の式があり、その他入退兵の祈願祭、入學祈願祭を執行する。

社司は茂崎圀彥氏で、總代に廣川長八、內山勇吉、源川萬吉、高橋茂貢諸氏現任中である。茂崎社司は三條中學を經て國學院大學に學んで卒業、目下三條商工學校に教鞭を執りつゝある。

八幡宮全景

長岡市觀光院町
長岡實科高等女學校

本校は、明治四十五年四月の創立といふ古き歷史を有し、本科一部、二部とし一部は四ケ年、二部は二ケ年としてゐる尙その外別に、專攻科を設置し、專攻科は一ケ年となつてゐる。

現在職員は二十九名で、生徒數は五三六名を數え、創立以來卒業者を送り出すこと二、四二六名に上つてゐる。

本校の教育方針宜しきを得、逐年入學者の數增加し、爲に新に校舍增築の計畫中で、既に着々その準備を進めてゐる。

校長 山田武雄

多年辯護士として法曹界に令名を馳せた氏は、また曩に市會議員として、市政の刷新にも功績頗る顯著なものを殘してゐる。

溫厚なる紳士で、人情味豐かなる氏は

高邁なる識見と、豊富なる手腕力量をもつて本校長に就任以來、その卓拔なる手腕と時流を拔く識見は、國策の線に沿つて健全なる國民精神を培養しまた學校經營の業績頓に上つてゐる。氏の圓滿高潔なる人格は、市教育界その他一般よりの信望絶大なるものである。

高田市西城町二丁目
高田高等裁縫女學校

本校は眞の日本的婦道に立つて理想的女子教育を普及徹底せしむる目的を以て創立され、敷地二千坪、校舍三百五十餘坪あり、位置は高田市内に於ける最も健康的な地帶を占めてゐる。實業學校令に據るもので、第一本科修業年限四ケ年、第二本科修業年限二ケ年、專攻科及び專修科各修業年限一ケ年にして、本校卒業生が官公立女子高等專門學校へ入學の場合は公立高等女學校卒業と同等の資格を與へられ、小學校へ就職の場合、本科正教員は教育、音樂、地歴、理科だけの檢定で免許狀を得られ、裁縫科專科正教員の場合は教育の檢定だけで免許される特點がある。學資は至極低廉である。

聖旨を奉體し、人格陶冶を圖り、特に公明温雅貞淑の婦德を養ふを以て教育の第一方針となし、職員は校長をはじめ、いづれも愛と熱とに燃ゆる人格者ばかりである。創立は明治四十一年。現在生徒數は第一本科二百餘名、專攻科四十餘名專修科三十名である。昭和十三年度より商業、農業科を加設し、農村女子には農業教育を、町家の婦女には商業的教育を施すことになつた。

校長
中村精三

氏は、明治十五年十二月の出生にして中村錄助氏の長男、嚴父は新潟師範を出て、東頸城郡内に教鞭を執り、父子揃つての教育功勞者である。氏は高田師範の出身である。東頸城郡松之山村浦田口小學校に前後二十七年間勤續し、次で安塚實科女學校に榮轉、四ケ年の後、昭和十年本校々長に

正門と齋藤校長

本校は文部大臣認可の甲種職業學校で明治三十八年十二

慕望され今日に至つた。名教育家として令聲普く、讀書を愛し、神社佛閣詣でを趣味としてゐる。五男五女を有し、長男俊男氏は新潟醫科大學に研究中、長女貞子さんは新潟女醫を出て開業隆盛を呈してゐる。

長岡市東神田町
長岡高等家政女學校

月一日の創立、初め齋藤女學校と稱したが、後改稱また改稱、今の名に定まつたもので一、華を去り實に就け。二、温良貞淑を旨とすべし。三、敦崇淳潔の習慣を養成せよ。四、自治の精神を養へ。五勤勞を厭ふことなかれの五ケ條を校訓となし、校主はじめ職員一同はこの校是に

校内の一部と校舍

副ふべく孜々營々努力しつゝある。

修業年限は本科四ケ年、專修科二ケ年專攻科を一ケ年となし、定員四百名、八學級に分けてゐる。

本校設立者は齋藤由松氏で、創立以來の苦心努力は眞に言語に絶するものであり、現に校長としてすべて采配を振つてゐる。

長岡市坂ノ上町
長岡市役所

當市役所は、驛から直路四三〇メートル、坂ノ上町二丁目十字路角にあり、大正十一年の建築にかゝり、屋上にはサイレン塔があつて、日々市民に正午を告げてゐる。

抑も本市は、明治維新の兵燹にかゝつて全市焦土と化したが、しかもその荒廢の中から人士の養成に奮起し、「食へぬが故に學校を建てる」といふ意氣を以て全力を産業に集中し、行商の長岡として慘苦奮鬪すること二十ケ年を閲して、漸く商戰の基礎を築いたもので、たま〳〵明治二十一年石油事業の勃興に遭遇して同三十年より四十年に至る石油全盛時代を通じて、本市の産業は一躍して全國に認めらるゝに至つたのである。

今や本市は表裏日本の連絡線たる上越線も全通し、日滿兩國都を繋ぐ最捷路線の咽喉部を扼し、裏日本の中心都市として今後の發展を期待せられてゐる。

長岡市櫻町
櫻町幼稚園（カトリク教會）

櫻町幼稚園は、カトリク教會の經營にかゝれるもので、昭和五年の四月に創設された。その保育課目は遊戯、唱歌、手技、觀察、談話などで、保育年限を三ケ年となし、創立未だ日は淺いが、世の父兄の希望に副ふところ大なるものがあり逐年に榮えを增して今日の隆昌を示してゐる。

現在の兒童數は男女合計三十五名で、これを二組に分ち、保姆二名が擔當の任に就いてゐる。

當教會の主任司祭兼園長はホンナツケル氏であるが、昭和十二年十二月、前教會主任の後を襲うて秋田縣下より赴任したもので、非常なる親日家、渡日以來十幾年間を、只管に傳道布教に從事し來つ

たもので、信徒間に極めて信望が高い。

長岡市東坂ノ上町一丁目 大正記念長岡市立 互尊文庫

常館は野本恭八郎氏が　大正天皇御即位の記念として創設費及び維持資金十三萬圓を寄附して大正四年十月十一日之が經營の申請を長岡市を經て提出し、五年六月十四日縣知事より認可され、七年六月八日開館し、昭和十年二月十一日文部省の選奬を受けた。館名は野本氏の所說の獨尊郎互尊の德に因めるものである。敷地一、四七一坪、建物一〇九坪、本館は二階建にて、特別、普通、婦人、兒童及び新聞の各閱覽室を始め、貴賓室、休憩室、事務室、宿直室等あり、書庫は三階建二十四坪である。基本財產極めて豐富、館員は館長關威雄氏の下に、司書南雲精二氏、書記吉田義近氏、荒井三次郎氏、雇一人、出納手三人、使丁二人が精勤してゐる。藏書數は六二、四九六冊に上つてゐるが、毎年二、三五〇圓づつ購入して追加してゐる。また一般優秀雜誌數十種、代表新聞二十餘種を備へつけてゐて、一日五百數十人當りの、閱覽數である。

館內閱覽は無料であつて、館外携出閱覽は料金年額五十錢、移動圖書館閱覽は月額二十錢である、公共團體には無料貸出を行つてゐるが、これ等のすべてが好評を博してゐる。

講習會、讀者懇談會、講演會、兒童お話會、美術家作品展覽會等の催しがあるし、讀者相談を營んで研學講究の便に資してゐる。

寄附者 野本恭八郎

氏は長岡市觀光院町の人である。互尊翁と稱す。

『我人獨尊、皆互尊』即ち千數萬學を兼備したる大道至敎を唱道し本體は獨尊であり、活動は互尊であり、獨尊はまた互尊であると說破してゐる。

大正天皇御即位の大禮に際し、皇運の隆昌を賀し奉り、至誠を以て三大活資、即ち皇室、大明、富嚴の三大活恩に答えその實效を期せんことを誓ひ、斯敎の心身發現を策勵すべき進修、考究の書齋として、大正記念互尊文庫の創建を立案企畫するに至つた。長岡市は野本氏の寄附金十三萬圓を受けて、市立圖書館互尊會文庫を設立經營の件を市會の全致を以て認諾し、つひに今日の開館經營を見るに至つた。野本氏は人爵を捨てゝ天爵に生

きるの明哲賢士であつた。昭和十一年十二月四日を以て永眠、昇天せられた。

財團法人 日本互尊社

當社は社會敎化事業の財團法人にして、長岡市觀光院町甲九七五番地に設立せられ、野本氏の唱道に係れる『我人獨尊、皆互尊』獨尊卽互尊の大道至敎を、廣く日本及び所謂日本卽ち日本大世界に宣揚して、大いに社會を指導するを以て目的としてゐる昭和九年野本氏は十萬四千圓を寄附してその目的達成に資するところがあつた。卽ち十萬圓を以て永代基金とし、四千圓を以て經常費に充て、さらに不動產十萬圓を以て基本財產としてゐる。

高田市 財團法人中頸城郡病院 高田病院

明治七年五月、舊高田藩醫藤林玄仙、金子良意はこの地方に病院を創立するの必要あるを唱導し、遂に地方の有志を勸かし其の同意を得て新潟縣廳に設立を要請し、新潟病院の名を以て設立され、岩永養齋を院長となし、同八年一月十二日藤林玄仙の邸宅を以て病院となし、始めて高田病院を創設したものである。

創立當初は患者を診療すると共に、更にまた醫學生の養成に盡瘁するところがあつた。

同年、岩永醫長に代つて副醫長福島豐策氏醫長に就任、病舍を新築した。翌九年、縣廳の囑託に依つて管內醫術開業試驗を本院內に於て施行、直ちに醫師を免許した。同十年新潟病院副當直醫武者春道氏醫長となり、當院附屬產婆看護婦養成所の基礎を作り、同十一年高田町醫事會を創立して、武者院長その會長となる。同十二年醫學生の養成を廢止し、次で同十五年中頸城病院と改名、爾來井上平造氏、木村武十郎氏等相襲いで院長となつた。同二十七年眼科を置き、產婦人科を置き、鈴木豐治氏、吉澤正雄氏、華岡青洋氏、仁田秀治郎氏、山內習氏等院長に就任、同四月耳鼻咽喉科を新設し、四十四年佐久間泰治氏院長となる。大正三年中頸城郡依託患者診斷所囑託となり、同八年澁川通氏、相澤愿氏、風間美顯氏等院長となり、十四年創立五十周年記念に一萬八千三百圓の工費を以て病舍一棟を新築した。昭和二年澤野哲三氏院長に、中本完二氏その後を襲ひ、昭和六年創立五十七年財團法人に組織を變更して今日に至つてゐる。

當病院の敷地面積は四千三百坪にして

建物總坪千七百坪に及び、患者收容員數二百五十名、醫師十四名の內博士七名に及び、事務員十人、看護婦四十人、藥局四人。生徒五十名（產婆看護婦生徒）あり、內科、外科、耳鼻咽喉科、婦人科小兒科、皮膚科、レントゲン科、その他綜合病院としてレントゲン設備ラヂユウム療法、ブナトリユーム、日光々線室、その他の設備等至れり盡せりの完全振りで縣下に於ける有數の大病院として、嘖々たる聲名を馳せ、逐年發展繁昌しつゝある。

三條市

三條市長　栗山英資

氏はなか〳〵の人望家、曾ては町制當時の町會議員、町長等に推され、市制實施にあたつては、眞に月覺ましき活動貢獻をなし、市會議員に擧げられ、現在市長として當市今後へと挺身努力を敢てなしてゐるが、氏の高潔なる、公明正大なる、たゞ期して待つべしである。

三條市概觀

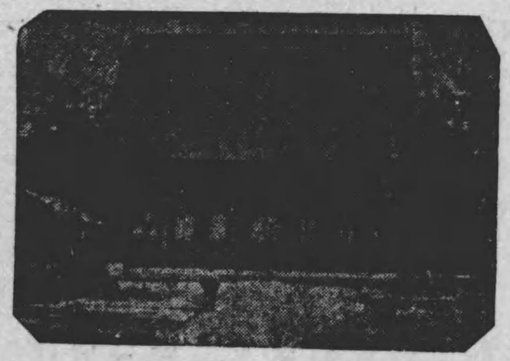
當市は信濃、五十嵐の二川を控へて水運の便によく加ふるに十字の鐵路を利し、縣下商業の中心地をなし、三條商人の名は遠く近江商人と東西相呼應し、業界を風靡したものだつたが、昭和二年市制が敷かれてからは、いよ〳〵工業の一大飛躍を見、商業の三條は今や工業の三條として面目を一新した。

とりわけ金工、染織及び足袋は三條の三大工業として、本邦の斯業界に於て嶄然覇をなしてゐる。殊に輓近縣立の金工及び染織の二大試驗場が設置されて以來逐年生產品は改良發達を見、いよ〳〵天下に雄飛し、ます〳〵本邦の斯業界に一大光彩を放つてゐる。

三條市大町

眞宗大谷派　本願寺三條別院

當山は元祿三年の創建で、阿彌陀如來を本尊とする。大谷派東本願寺十六世の一如上人を開山となしてゐるが、その勸機は貞享年間、信越兩國の末寺が驗授を饒し三十餘ケ寺の轉派をなした從つて宗意安心取締の必要上から掛所として創立されたものだといひ傳へられてゐた。



本堂

この由緒ある當山も、文政及び明治十三年の火災のために全燒し、數ある寶物も全部烏有に歸してしまつた。現在の本堂は明治三十九年六月二十五日の竣工にかゝり、十八間四面の廣大なもの、行在所は鈴木大將閣下の肝煎によつて再建したもので、四間四面と註せられ、境內は一町二反歩の地坪を占めてゐる。

同十一年　明治天皇北陸御巡幸の砌り親しく鳳輦を註めさせ、御假泊所にあてさせ給ふた。九月二十一日　明治大帝御註輦記念式を執行し、また十一月三日より八日までを、宗祖聖人の報恩講引上會等を行事となしてゐる。

檀家は頸城三郡を除く三市十三郡に亙つて末寺五百二十ケ寺、門徒約六萬人を算へてゐる。小丸善雄師が現在輪番として奔走貢獻してゐる。

三條市西本成寺

法華宗　總本山　本成寺

當山の開祖を日印上人とする。上人は文永元年越後國三島郡寺泊に生れた人で同八年宗祖日蓮聖人佐渡遠流の途、寺泊の地に一夜を明かしたが、その夜の夢に摩訶止觀第一卷を踏むと見て、目が醒めた。と、傍に少童が臥せつてゐた。宗祖後の日印上人で、長じて同郡石瀨村の天台宗靑龍寺の智觀法橋に師事し、研修群を抜き、夙に聲譽遠近に振ふところがあつた。

本成寺本堂

その三十一歲の時、笈を錄倉に負ひ、ます〳〵研鑽に努め、遂に舊宗をすてゝ法華宗に轉じ、故國に歸つて蒲原郡大藻莊薄曾村（今の本成村）に一字を造營し所願に副ひ靑蓮寺と稱したが、これ實にはこれを異となし即ち摩訶一宮の號を授けたこの少童こそ永仁二年のことである。幾くもなくして領主完明、上人の敎化に法して大旦那となり、嗣子長久、境內地伽藍寺領若干を寄せたが、爾來法幢をこゝに樹て、法基をこゝに鎭め、大に法皷を遠近に轟かし化益四方に洽ねく、群庶の潤に感くこと恰も水の低きに就くが如くで、今や末寺全國に及び、その數四百數十寺に上つてゐる。

境內三萬坪、本堂、客殿、書院、庫裡二重堂、鐘樓、千佛堂、守護祭堂、眞骨堂、山門、太鼓門、黑門、寶藏倉庫及び塔頭十ケ院が儼然として聳えてゐる。寶物に日蓮聖人、日朗、日印上人の各本尊大覺大僧正細字法華經、御編旨、御令旨御宸筆（後小松天皇）などを藏してゐる。なほ四月二十日より祠堂法會（三日間）、千部法會（これは七日間であるが、五ケ年目毎に行ふ）、六月二十一日陣師法會、十一月十二、十三日宗祖御會式を執行する

現管長は横山日雪師、總代服部乙吉、加藤又次郎、內山勇吉の諸氏現任中である。

北蒲原郡

中條町

村社 熊野若宮神社

若宮神社

饒速日命、事解男命、速玉男命の三柱を祭神とする當社は、その由緒はなはだ深く創建は寛永十八年七月十八日である明治三十四年二月二十六日に至りて同六年村社となる。境内地五反歩、社殿三十四坪にして毎年九月四、五、六の三日間が例祭日にて、その日は一千三百名の氏子の參詣にて頗る殷賑を極める。總代に野澤守一氏、丹吳健一氏の兩氏が當る。

神職 吉田尾雄

今、當社の神職として奉仕する氏は温柔にして敦厚なる資性を有し、清廉高潔なる人格者である明治三十四年二月二十八日の出生にて、その謹厳なる風姿は氏子一同が悉く敬慕するところである。

因に當社初代神職は吉田吉長氏と稱する人にて、當代匡雄氏は實に十三代目。

中條町

縣立中條農學校

明治四十三年四月開校し、同四十四年四月二十四日校舎落成式を擧行せしにより、同日を以て創立記念日となす本校はすでに二十數年の歴史を有し、その間大正十一年三月二十一日縣に移管して現稱の縣立中條農學校と改め、その條件として北蒲原郡より寄宿舎一棟、理科實驗室一室、中條町より七百坪の敷地を寄附せられ、昭和に至つ、三年四月女子部を加設、と共に四萬貳百九圓を中條町より、四千貳百圓は金塚、築地、乙、黒川の四ケ村より寄附せられた。同四年五月女子部校舎落成式を擧行、翌年創立二十周年記念式を擧行した

その校舎

修業年限は男女共に三年にして、現在の在校生徒數は男子一八五、女子一一四今や中村校長の下に十數名の職員一致協力して、專心農村中堅人物の養成に邁進してゐる。卒業者はすでに一千二百餘を出し、各地に於て活躍中、校名ますます上るばかりである。

校長 中村壹三

本校初代の校長として鞏瘁せるは小林次二郎氏、二代丸山忠次郎氏にしてその二氏の後を受け、今一身を挺して鞅掌しつゝあるは正六位高等官四等待遇の中村壹三氏である。

氏は明治二十一年の出生にて、神奈川縣横濱の人、幼時より頭腦明敏を以て聞え、秀才の名高く、學業成績すこぶる優秀、北海道帝國大學農學部農藝化學科出身である。氏は天性温良にして清廉高潔なる人格の持主、日蓮宗の歸依者、生徒よりは慈父の如く慕はれ、職員間及び一般庶民からは多大の信望を寄せられ、彼の人ならばの評が高い。

南濱村

南濱村役場

本村は海岸の一村落ではあるが、近來漁業は至つて振はず、住民の多くは農を本業となし、傍ら桑及び養豚、養鶏を營んでゐる。尤も一時石油發動機船を使用して盛んに漁撈に從事したこともあつたが、大概は失敗に歸し、鮭、鱒建網漁業は、他村人の經營するところとなり、僅かに餘暇に刺網、手操網、地曳網に從事するに過ぎない。

明治二十二年町村制施行せられ、その八月、金田保三氏初代村長に推され、爾後南半之助、有田孫太郎、吉田義孝、南三次郎、此村六蔵、南義二郎の諸氏を經て、現村長吉田正一氏に及んでゐる。

本村役場は初め金田吉一郎氏の宅を借りたるも、後に順慶寺の奥座敷を買收してこれに移り、大正四年火災のために焼失、それより金田忠太郎氏の宅に移り、同十年現在の役場を新築し、同年十月移轉、以て今日に至つてゐる。

村長 吉田正一

先考義孝氏

氏の生家はなかなかの舊家で、古くは水口家に出入し、また代々庄屋を勤めたほどの名ある家柄であつた。父君義孝氏は事業家で、

夙に當地方に名をたゝへられてゐた。

氏は明治二十二年一月の生れ、傳統の名門の血統を繼いで早くも村内公共のことに進出、一身を挺して活躍貢献する甚大なるものがあり、從つて人望は年と共に大を加へ、前村長の滿期退職となるや村民の輿望を一身に擔ふて村長に就任、爾來營々活動奔走、正しく強く、明るき村たらしむべく、双手に力瘤を入れてゐる。趣味はスポーツである

乙村 乙村役場

當乙村に乙村外五ケ村の戸長役場を置かれたのは明治十七年のことで、次で同二十二年町村制の實施さるゝに及んで乙村外五ケ村を乙村、地本村外十一ケ村を横田村と改稱し、降つて同三十四年十一月の町村合併を行はるゝに及んで兩村を合併、現在の乙村を生み出した。

現在役場吏員は三十八名あつて村全般のことに對處し、乙村農會、乙村養蠶實行組合、乙村信用購買販賣組合、その他桃崎濱、荒井濱、胎内川等の各漁業組合など、何れも旺盛せる活躍を以て所期の目的に向つて進んでゐる。

なほ職業の上から見た本村は、農を第一に、水産、産業、工業などの順序に分けることが出來る。現村長は井上東太郎氏で、合併以來實に十八代目である。

村長 井上東太郎

井上家は豐臣家の殘黨、三百年來の舊家であり、古くは二刀流の指南役を勤め、また代々庄屋の家柄である。先代才藏氏は村自治に功績を遺してゐる。

當主は明治二十年一月五日、その長男に生れ、新發田中學校卒業後、北越醸造株式會社に入り、遂に社長に昇進して十餘年間在任、三年前に退職して自ら醤油醸造業を營んでゐる。今、二期目の村長であるの外、村會議員、消防組頭、養蠶實行組合長等を兼ねて職務、曾ては役場廳舍の新築並に學校の改築等には特に多大の功勞を謳はれてゐる。

内助の譽れ高きみね子夫人との間に、長男保君、次男實君、三男隆君の外に三女子がある。

新發田町馬場町 町立新發田圖書館

新發田町の出身なる坪川洹平氏は、昭和三年五月御大典を記念し、本館を建設して新發田町に寄附したのである。同年十月三日竣工し、同四年一月一日愛國婦人會本縣支部主事原常一郎氏の兼任館長を始め職員の任命があつた。町教育會より圖書五千四百三十九冊、次にまた新發田尋常高等小學校同窓會より三百五十一冊の寄贈あり、また開館記念圖書購入のことあり、同年四月十四日開館式を擧げ同十五日より公開して閲覧を開始したの

である。

昭和七年、鐵筋コンクリート三階建書庫を增築し、閲覧室の擴張改造等のことがあり、八年外裝を改めて今の美觀を呈するに至つた。坪川氏は毎年三千圓内外の館費を寄附支辨することを繼續してゐる。昭和九年二月十一日文部省より賞與せられた。今や閲覧人員は一年間五萬五千七百餘人に達してゐる。

現在の館長は佐藤久吉氏であつて、職員を督勵して精勤してゐる。

南濱村太郎代濱 太郎代濱郵便局

當郵便局は昭和五年四月六日に開局されたもので、開局當初は郵便取扱所であつたが、同十一年七月十一日三等局に昇格して今日に及んでゐる。

當郵便局に於ける最近の事務の狀況を見るに、郵便取扱數は一ケ月一八〇件、内外電信取扱數は同二〇件、航空郵便取扱數は同一件であり、なほ各種の保險年金加入成績等は極めて良好を示してゐる以て今後の當郵便局を卜知するに難くはない。

現局長は南善藏氏であり、その配下に事務員たちは縣命の努力をなしてゐる。

局長 南善藏

南家は七代を累ねた舊家で、代々長を本業となして今日に至つてゐる。

氏は先代善吉氏の長男で、明治二十五年十月二十六日を以て、この世に呱々の聲をあげた人である。

幼少時より才、群に勝れまた稀に見る手腕とは遂に氏が今日の存在を重からしめたもので、青年團副團長、區長などに推されて功勞を讃へられてゐる。現在は更に青年團長に選ばれて、村青年の指導扶掖に任じ、また銃後會副會長を兼ねて銃後の護りに意義あらしむべく努力をつづけてゐる。

令閨との間に長男善作、次男善之助の兩君あり、共に局の事務員として遞信報國に鋭意貢献しつゝある。

赤谷村上赤谷 赤谷郵便局

當局は明治五年七月一日開局されたる三等集配局にして、開局當時より集配事務を取扱つて來た。而して初のは郵便取扱所であつたが、明治十九年昇格して赤谷郵便局となり、同三十二年十一月より内外爲替事務を開始し、翌三十三年二月には小包その他特殊郵便物の取扱ひをはじめ、降つて昭和十二年十二月より内外電信並に電話事務を開始した。

現在郵便取扱數は一ケ月六百五十通に上り、内外電信一ケ月十二通、航空郵便一ケ月十五通をかぞへ、各種保險年金の加入成績は頗る良好である。從業員八名

現局長井上金三郎氏は、明治二十年九

月二十八日の出生、先代莊吉氏の養子にして井上家十五代目に當り、村會議員四期目を現任し、從七位勳八等に叙されてゐる。

菅谷村菅谷
菅谷郵便局

當局は初代局長齋藤善右衛門氏が明治七年十二月に創立するところ、菅谷村一圓を區域とし同時に集配事務を開始したる特別三等郵便局である。局の舍屋は建坪三十坪にて施設一切は十分に整備せられてゐる。明治三十年五月一日に通常爲替を、三十二年四月一日には電報爲替を、昭和五年二月一日には電信事務を開始して今日に及んでゐる。今や郵便取扱數は九萬二千八百二十四箇に達してゐる。昭和七年度より執務成績優秀にして數回にわたつて表彰を受けた。事務員三人、集配手三人、電信手一人、遞送手一人、保險係一人の全局員は武者局長の下に一致協力して精勵しつゝある。

菅谷郵便局

局長 武者一郎

氏は初代當局長齋藤善右衛門氏以來四代目を襲いで局長として現任し精勵中である。武者一郎氏は縣立加茂農林學校を卒業し、青年團副團長を兼任してゐる。その人望高大にして全村の推奬敬仰して措かざるところである。昭和十一年、拔群の優良成績により、個人として東京遞信局保險課長より表彰せられた。

葛塚町太田古屋
太田古屋 信用販賣購買利用組合

當組合は保證責任にして北蒲原郡葛塚町太田古屋にある。明治四十二年に創立せられ、太田古屋、上古屋、則清新田の各字にわたつて取扱區域とし、組合員三三四人、出資金一口一〇圓、出資總額一一、五八〇圓、貸付總額三九、五〇九圓貯金四七、四〇五圓、購買價額一萬五千圓、販賣價額一萬圓である。財産は資産七一、三一六圓、負債四七、四六二圓、差引純財産二三、八五三圓である。中央金庫出資金四口、四百圓、縣信用組合聯合會出資四口、千二百圓、新聯合會出資一口、五百圓である。損益は利益四、二二四圓、損失二、九八〇圓、差引純益一、二四三圓、その處分は七二四圓、準備金

四五三圓、配當金六六圓、繰越金に充當した。理事長は江老名忠太郎氏である。

組合理事長 江老名忠太郎

江老名家は祖父氏の代に創立せられて代々農を以て業としてゐる。先代辰三郎氏は町會議員學區議員に任ぜられて貢献するところが多かつた。

當主忠太郎氏はその男として明治二十年五月に生れ、新發田歩兵聯隊にて兵役に勤務した。その後、町會議員に擧げられて活躍し、今は太田古屋信用販賣購買利用組合理事長に任ぜられて盡瘁貢献してゐる。

氏は政友會の最も熱心なる黨員として一方の重鎭である。資性は剛毅にして磊落、寛容にして謙讓である。人格秀絶して識見高邁、全町民のことごとく悅服雄敬するところである。淨土宗を奉じてその信仰がすこぶる篤い。氏の統制指揮によつて太田古屋産業組合も、逐年發展をとげて優秀なる成績を保持しつゝある。

南濱村
南濱村信用販賣購買組合

當組合は保證責任にして、昭和十一年に創立せられ今はその第三年度を經過中である。昭和十二年すなはち第二年度現在の報告によると、組合員一〇八人、出資口數一三四口、出資總額二、六八〇圓、中央金庫出資金一口、一〇〇圓、聯合會出資金一口、三〇〇圓、購買販賣利用聯合會出資金一口、五〇〇圓であつて、資産は一二、八八〇圓、負債九、九六九圓差引二、九一一圓が純財産である。損益計算は、利益金九二五圓、損失金は七一九圓、差引二〇五圓、この純益金の處分については六〇圓は準備金、一〇〇圓は特別積立金、四五圓餘は役職員退職給與金とした。購買事業については合計一〇三五四圓を算してゐる。

役員は組合長理事神田藤三郎氏、理事五十嵐惣三郎氏、此村六之助氏、監事は島田榮三郎氏、神田貫吉氏、此村清隆氏である。

組合長 神田藤三郎

神田家は祖父氏の代に創立せられたのであるが、代代農業、漁業をかねいとなんで精勵し、勤儉力行してよく財をなし裕福なる資産家として敬仰せられてゐる。

當主藤三郎氏は先代藤平氏の二男として明治二十四年九月二十一日に生れた。さきには村會議員に在任して功勞があつた。さらに推されて助役の任に就き村治に寄與するところはなはだ多大であつたまた農會長をかねて努力貢献大いにつとめる所があつた。いまや區長、産業組合長、南濱養蠶實行組合長に任ぜられ學務委員を兼務してゐて、盡瘁しつゝある。その功勞すこぶる顯著なるものがある。

氏は意志强固にして堅忍不拔、しかも情誼にあつく義俠心に富み、男盛りの働き盛りとて、實地體驗に基き盛んに活躍して村治上に寄與するところ甚大なるのみならず、困窮不遇の人々を慰藉激勵し

救助支持して再起獨歩せしめること少からず、一方の指導者としての權威を尊敬せられつゝある人材である。今後の躍進のめざましきは期して待つべきものがある。それを村民は翹望して措かないのである。

川東村板山
板山信用販賣購買組合

當組合は川東村大字板山を區域とし、組合員百餘名を算し、設立以來常に良好なる成績を示して今日に至り、近く出資增額の計畫もあるなど、業績見るべきもの頗る多く、木炭倉庫を有し、特色ある活動を展開してゐる。

最近に於ける事業概況を見るに

貸付總額	二〇・〇〇〇圓
貯金	二四・〇〇〇圓
購買價額	一八・二〇七圓
販賣價額	二六・二四七圓

の數字を示してゐる。主唱發起功勞者は佐藤豊次郎氏である。

組合長 石井正平

氏は、明治十八年十二月二十日の岳降にして、石井佐平氏の養子である。夙に信用組合理事、同監事、村會議員三期、區長等の要職を歷任して夙々たる事績をのこし、當組合長に就任してよりすでに十數年を閲し、組合切つての偉大なる功勞者である。政友會系の人物にて、責性溫厚篤實である。

家族は七人あり、長男佐平氏（大正元年生）、二男（大正四年生）、三男（大正十五年生）は共に頭腦明晰にして秀才の聞えがある。

因に石井家は村内有數の舊家として知られ、しかもなか〳〵の人望家で、養父氏は村會議員、信用組合理事等に任じて貢献した人である。

加治村關妻
關妻士地利用組合

共同苗代地を設地し、これを組合員に利用せしめるを目的となし、明治四十四年五月十八日創立になる當組合は、實に全國に於ける苗代組合の嚆矢である。設立當時は組合員十三名、出資口數三十二口の微々たる小組合であつたが、爾來組合員一致の團結を以て伸展を目指して努力邁進し、その進行は隣保團結の精神を發揮して相互に融和し、春風洋々として組合員一同ます〳〵奮勵を續け、遂に現在の隆盛に至りしものである。

その組織は有限責任にして、出資一口は百圓、組合長の下に理事二名、監事一名を置き、現組合長は猿子善吉氏、理事は川崎與三郎、猿子吉藏の兩氏、監事は川崎定吉氏で、設立許可を得るに献身的盡瘁をなせるは齋藤善太郎氏で、今もその功をたゝへられ、且つ一般から感謝せられてゐる。

組合長 猿子善吉

現組合長として努力盡瘁する氏は亦、當組合發起設立の功勞者でもあり、當組合の現在の隆盛に至るまでの盡力は實に涙なしでは見られず、尙ほ夙に自治にも關與し當村助役として村勢伸展上に多大の貢献をなし、また農會副會長、區長、信用組合長、經濟更生委員その他村諸般の公職を歷任し、現任するは消防組頭、六期目の村會議員、學務委員、歷任する區長等の要責にて、自治に産業にと印せる功勞は地方自治史上稀に見る多大なるもので表彰も枚擧に遑がない。

因に當家は代々村勢伸展上に功を效せる家柄にして、先々代氏は村長、村會議員として、自治制施行直後の亂雜なる村政を解決し當村現在の隆盛に至りし先驅をつけし功勞者であつた。

先代吉兵衛氏、また當村收入役として專ら村經濟の事に携はり、努力貢献をなした。當主は明治十六年三月十一日の出生にして先代の長男である。天性溫厚にして篤實なる人格者であり、三十五歳の折、不幸にも令閨と死別し、以來獨身を以て現在に至る。

令息五人あり、長男吉左衛門氏はいま二十五歳にて役場兵事課に勤務中にて、外四人の令息みな現役軍人にして、稀に見る名譽の一家である。

築地村
築地信用販賣購買利用組合

本組合は大正三年五月一日設立總會を開いて、名稱を有限責任築地信用組合となし、本村大字下高田、築地、築地新、山王の四大字を組合區域とし、事務所を下高田の浮田長須計氏宅に置き、同年九月三十日設立認可を受けたのである。同五年十一月、大字中村濱、笘口濱、高畑宮瀬の四大字を加へ、次で同七年一月大字高橋、中倉、堀口の三大字を加入せしめ、同十一年一月これを全村に擴充し、翌年有限責任築地信用利用組合と改稱、昭和二年五月農業倉庫、作業場を新築し有限責任築地信用販賣利用組合と改稱、同八年一月保證責任築地信用販賣利用組合と組織を變更し、宮瀬支庫及び高畑作業場を買收してこれを第二作業場となし以て今日に及んでゐる。

本組合の出資一口の金額は十圓であるが、本村全戸數八百三十七戸のうち、八百二十戸の加入者を見せてゐる。以て本組合の隆昌振りを察知することが出來るなほ本組合には牛三十五頭、豚三十頭、羊二十一頭を飼育し、これ等を品種改良のため、進んで農村へ貸付けをなしつゝある。

曾て同六年九月十五日産業組合本縣支會長から、成績優良の故を以て表彰されたことがあるほどで、本組合今後の發展は知るべきである。

組合長　浮須猪三郎

氏は、明治十九年五月十六日の出生、永らく村自治に關與、曩に村長に在任すること一ケ年また農會長に推されて農耕方面に裨益する甚大なるものがあつた。今、本組合の組合長に任じてゐるが、利益等を度外視し只管組合法を遵守して邁進してゐる。

氏は溫厚にして摯實剛健、また業務に熱心なる態度と人格とは、組合員は勿論のこと、組合員外の人たちからまで推賞嘆美されてゐる。

川東村石喜

川東信用購買販賣利用組合

創立以來約三十年、常に鋭々たる發展の一路を辿り來りし當組合は、組合員七百八十餘名を算し、出資一口の金額二十圓にして總口數九百二十有餘、保證責任組織にて保證金總額は一萬八千四百餘圓に達してゐる。組合精神の普及徹底せること郡内に冠絶し、一致團結により事業成績は年毎に向上を呈し、事業量もまた級數的增加を示してゐる。現時、貯金總額は三十七萬六千餘圓に達し、また昭和十二年度中一ケ年間の貸出總額は十四萬五千餘圓にして、その償還高も十五萬六千餘圓に上った。肥料その他の購買品賣却高は十一萬一千餘圓をかぞへる。

次に生産米の情況を見るに、その入庫數量は一ケ年約一萬九千俵、販賣數量は一萬五千餘俵にして、逐年その數量の增加を見つゝあるは、組合員の組合利用の增進を示すものであり、組合の發展は論を俟たざるところである。

組合長理事は宮野眞三郎氏、理事は本間百在門、宮村鶴吉、澁谷市郎兵衛、須藤六之丞の四氏、監事は田卷清治、齋藤貞、秦茂藏の三氏である。

金塚村

金塚信用販賣購買組合

當組合は大正二年に創立せられて今や第二十六年度經過中である。組合員の出資は一口十圓にて千百八口、出資拂込總額は一萬千八十圓に達してゐる。準備金は七千八百六十二圓、借入金は五萬四千四十四圓、餘裕金たる預金は十二萬九千七百十圓、貸出金は八百九十三件、十九萬六千九百二十六圓、最近年度現在に於ける利益金は二萬八千九百八十九圓、損失は二萬七千七百五十一圓、差引剩餘は九百三十七圓である。預金利率は二分二厘乃至三分九厘、貸付利率は六分乃至八分四厘、貯金は四分乃至四分五厘を保持し、特に家庭藥次第にその賞上を增加しつゝある。そのうち二百四十三圓は準備金、五百五十四圓は配當金（出資一口に付五分）九十圓は特別積立金、五十圓は慰勞金として處分した。

役員は、專務理事瀧澤四郎右衛門氏、理事は白勢正員氏、宮下銀六氏、松田政武氏、星野豐次氏、藤間伊兵衛氏であつて、從業員一同一心協力して精勵し優秀なる成績を保有しつゝある、當業界模範の組合である。

組合專務理事　瀧澤四郎右衛門

氏の家はその創始はなはだ古くして今日にいたるまでに八代を重ねたる舊家である。代々農を以て業としてゐて、資産亦たすこぶる裕福を以て遠近に著聞してゐる。先代政太郎氏は助役、村會議員等に歷任して貢獻したる偉大なる功勞者である。

當主四郎右衛門氏はその男として明治十九年九月に生れた。先きには村會議員にあげられ、消防組小頭、區長を歷任し特に信用組合役員に選任せられて貢獻するところすくなからず、今や金塚村信用組合專務理事として連續七箇年間勤續して盡瘁し、その功勞顯著にして萬人の敬仰するところである。また農會代議員をも兼任して寄與しつゝある。

氏はまた政友會の黨員として有數の權威者であるが黨臭を脫して公正を私せず見上げたる正理公義の義人である。曹洞宗を奉じて信仰するところきはめてあついものがある。夫人は菅谷村の出身、國防、愛國の兩婦人會々員として熱心に活躍してゐる。長男正司氏二十八歲は神奈川縣警察官勤務中、なほその他に四男一女がある。一家はつねに圓滿和合のうちに繁昌しつゝある。

新發田町東町

新發田瓦斯株式會社

電話一〇三番

當會社は昭和七年五月二十五日に創立されたもので、株主總數百六十九名、株總數六千株、その資本金三十萬圓也である。瓦斯供給區域を當新發田町及び猿橋村一圓にわたり、副生物は新發田を中心とせる市場一般に向けられてゐる。一ケ年に於ける供給瓦斯量は五〇〇、〇〇〇立方米、瓦斯コークスは四五〇瓦、コールタールは四〇竏を算へてゐる。

最近當會社の損益計算を見るに

收入	
瓦斯賣上代金	一三・九三五・一五〇
副生物代金	六・三二七・五三〇
雜收入	一・〇一〇・六八〇
會計	三二六・三六三
	二・五九九・七二三

支出	
諸經費	五・七七八・〇三六
供給費	六四二・五八〇
製造費	九・一五三・五四〇
計量器補償償却	五〇〇・〇〇〇
減價償却	一・五〇〇・〇〇〇
當期利益金	四・〇二五・五六七
會計	二一・五九九・七二三

を呈してゐる、そして當期利益金と前期繰越金とを合して四千二百三十五圓四十七錢八厘の利益をあげてゐる。

現社長は佐藤太郎吉氏で重役十一名、相談役一名、社員職工共十一名あり、工場を本郡五十公野村に設け、長岡及び三條の兩市に關係會社を置いて事業の躍進を期してゐる。

因に佐藤社長は目下出征中につき、重役中野孫四郎氏の長男勝衛氏が全責任を以て社業の衝に當つてゐる。氏は中央大學出身の果斷に富んだ發剌たる努力家で

ある。

新發田町三ノ丸

縣會議員 **井伊誠一**

社會大衆黨に屬して、無産大衆の爲に資本家との間に介在して兩者の圓滑を圖るべく、獻身的努力をなし、大衆の人望を一身に擔つて尙も活躍を續けてゐる氏は明治二十五年十月一日の岳降である。

氏は幼時より頭腦明敏にして秀才の聞え高く、また俠氣ある少年と知られ、長ずるや、東京帝國大學法學部に入りて專心法律の研鑽をなし、卒業して後、辯護士試驗に合格して現地に開業、それと共に法律の眞實味は生活の安定、社會秩序の安寧にあるが故に、大衆に一身を捧げて盡すを決心したといふ。

今や縣會議員二期目、並に町會議員の要實に在り、縣社會大衆黨の重鎭として縣下政界の中堅として尙も活躍中にて、その縣會に堂々論ずる正義の辯論は縣民の等しく感嘆し、稀に見る材幹と稱するところにて、また辯護士として大衆の爲に活躍するところ多大である。その人格は溫厚圓滿、一面果斷にして剛柔兩面を備へたる高潔の人格者なるが爲に、衆望ます〳〵高く、一擧一動は縣の自治、産業經濟を支配するもの故、縣民注目の的にて、愈々期待を强められ、氏また現時の緊迫せる時局に際しての社會大衆黨の使命を堅く握り占め、愈々大衆のために奔走活躍をなしてゐる。

家庭は春風和樂の家として知られ、二男四女の令息令孃あり、ツキ子夫人は淑德の譽れ高く、賢夫人を以て知られる。

神山村天神堂

縣會議員 元村長 白龍醸造元 **白井秀吉**

白井家はその創立すこぶる古く今日にいたるまで星霜を閱すること五百年に及び、代々庄屋をつとめて令名高く、資産亦た積んで莫大をなした。當白井家は天保年間に新潟市の本家より分家獨立して當地に定住したるものである。代々農を以て業としてゐたが、祖父の代より酒醸造の業を創めて好評を博し、先代之を繼いで改善向上につとめ、名吟醸『白龍』號を賣り出すや、斷然市場を壓倒して聲價最も壯大を極めるに至つた。

當主秀吉氏は明治二十年の出生にして父祖の業を繼承し精勵大いにつとめ、全村一致の大信望の下に推擧されて村長の任に就き、盡瘁恪勤すること多年にわたり、貢獻はなはだ顯著であつた。今や縣會議員に任ぜられて縣政界に活躍し、また全國酒造組合評議員、および北蒲原郡酒造組合會長を兼任して、最善をつくして盡瘁しつゝある。芳醇『白龍』については年を逐うてその風味と雅趣とに意匠工夫をこらし、色香味に銘吟醸たる品格を備へ、中央一流の間に伍して優るとも劣らず、市場に於ける名聲いよいよ盛大を加へ、その販路自ら擴大され、造酒年額千五百石を突破するの盛況を持續しつつあるのである。最近に於ては特に新潟

市及びその附近、東京市及び關東一圓に於いて賣上が急進激增しつゝある。

夫人久利子さんは明治二十二年の出生ですこぶる勤勉、殊に貞淑の譽高く慈悲の人として敬慕せられ、長男敏夫氏三十歳は村松中學校を卒業し嚴父を輔佐して家業に勵み、次男哲夫君二十三歳は慶應義塾大學に在學中、長女キクエ孃十七歳は新潟高等女學校在學中、三男道夫君と次女カツエ孃とは共に小學校に修業中。

中條町中町

中條町長 **丹吳健吉**

電話中條八番

當家は、町内屈指の德望家である。先代長松氏は、第二代目町長に推擧され、町村施行後幾許もない町政を掌理して發展の基礎を築いた功勞者である。

氏はその男として明治十八年四月十八日に呱々の聲をあげた。同四十年、日本大學法科を卒業し、直に南滿洲鐵道會社經營の撫順炭礦に入り、勤續七ケ年の後北海礦業に轉じ、大正九年、退社した。在勤中は手腕家を以て遇され、先輩同僚の信任厚く、芳名社内に嘖々たるものがあつた。

その後、中條町に歸り、助役三期をつとめてから名譽町長に擧げられて今日に至り、現にその任にあるほか、町會議員事務委員を兼ね、町のため社會のため盡瘁してゐる。また昭和四年以來三井生命保險會社代理店を經營され、業績頓に顯著を極めてゐる。責性溫厚、烏鷺の鬪ひに趣味あり、且つ立憲政友會に屬する當地方の重鎭である。夫人は淑德の譽れ高き人、令息は今次支那事變に出征し目覺しき働きをしてゐる。

中條町概觀

本町は明治三十四年、舊中條町、柴橋村、本條村の一町二ケ村を合併したるものにして、東は黑川村、南は金塚村、北は乙村、西は築地村に接し、二方里の面積を有する。現住戶數凡そ千七百五十にして、人口は一萬人を越える。町内には町役場、警察署、區裁判所出張所、中條驛、町農會中條煙草販賣所、營林署中條搬當區、穀物檢査所出張所等の官公署あり、交通至便を極め、小學校三校、青年學校一校のほか、縣立中條農學校があり、教育程度は一般に高い。

中條町

中條町助役 農會長 **佐藤傳一郎**

佐藤家は創始以來相傳へて今日まで十五代を重ねた舊家にして、代々農を以て業とし素封の家となつた。先代傳左衛門氏は蠶絲業の研究家としてあらはれ、町會議員に在任して多年にわたつて活躍貢獻するところが多かつた。

當主傳一郎氏は先代の男として明治七年の出生である。夙に村治上に活躍する

とすとぶる熱心にして信望を博すること多大であつたト先きには二期間町長の任に就いて貢献したるを始め、商工會長縣蠶種檢査員、北蒲原郡蠶種同業組合副會長等を歴任して功勞多く、今は助役、農會長、町會議員、學務委員に推擧され區長、養蠶實行組合長を兼務なし、眞摯全力を傾けて盡瘁しつゝある。

氏は温厚にして崇高なる人格者であり政友會の黨員として熱心なる鄕土の重鎭である。その趣味は書畫の鑑賞である。曹洞宗を奉じて信仰があつい。

分田村上福岡

分田村長
養蠶實行組合長
塚野幸五郎

塚野家は安倍貞任の子孫にして當地に定住して以來すでに相當の年數を經過し、名主庄屋を勤めたる舊家にして、代々農を以て業とし、巨大なる富力を擁せる名門である。また日枝神社の神官として世襲し來り今日に及んでゐる。

當主幸五郎氏は明治三年に生れ、小學校を卒業してより家業に勵み、日枝神社の社官を奉職した。その信望極めてあつく青年會長、養蠶實行組合長の任に在つて功勞はなはだ多大である。さらに擧げられて村長の任につき、連續二期に及んで盡瘁貢献すこぶる顯著である。

氏の資性は温厚にして篤實、寛容にして清濁併せ呑み、謙遜にして和光同塵にかくる。しかして情誼にあつく涙にもろく、則ち義俠の心に富み、然諾を重んじ窮窮を救ひ、衰憊を勵まし、孤寡を慰めて及ばざることがない。村民を擧げてますます信賴と感謝とを寄せ、尊敬と親慕をかけて深厚なるものがある。

氏はその趣味は書畫、骨董、盆栽にわたつてはなはだ深く、すでに玄人の壘を摩するに至つてゐる。長男は神戸市役所の公園課に勤務して令名が高い。一家はつねに神明の大前に奉ずること敬虔にして、平安至樂の光明に滿ち溢れてゐる。

京ケ瀬村駒林

京ケ瀬村長
大橋儀右衛門

今から凡そ三百年前に創家され當大橋家は村内切つての大舊家として著はれてゐる。代々鄕士のために寄與盡力するところ多く、名望あり、地方稀に見る德望の家である。

當主大橋儀右衛門氏は、新潟中學校を拔群の成績を以て卒業した。青年時代より人望普く、謹直實正なる性格と明敏なる頭腦とは、衆人の仰いで且つ羨望の的であつた。家督を嗣いで後は、家業に熱心に精勵努力し、傍ら推されて村内各種公、名譽職に歴任して功勞多く、現時村長の重職に推されるほか、新江用水普用水利組合會議員、南部耕地整理組合會議員を兼ね、また三十有餘年來村會議員として活躍今日に及んでゐる元老である。

現下非常時局に際會して氏の活動はますゝ顯著を加へ、國民精神總動員の徹底は殊によく行はれ、銃後援護の施設は整ひ、勤勞奉仕等は實に圓滑に運ばれてゐる。而してこれらはいづれも氏の敏腕と人格との然らしむるものであり、本村の發展と非常時克服の大任は、氏によつて徹底的に遂行されてゐるのである。

笹岡村金谷

笹岡村長
消防組頭
信用組合監事
荒木義雄

荒木家は本家より分家獨立してから今日まで七代をかさねてゐる舊家である。先代啓次氏は村長、村會議員に任ぜられてはなはだ久しきにわたり貢献するところすこぶる多大であつた。曾ては特に東久邇宮殿下より直々御下問を賜はり三十分間にわたつて奉答するの光榮に浴したことがあつた。師團長等陸軍の高官名將に交遊多く、殊に元政友會代議士高橋光衛氏とは膠漆の交が結ばれてゐた。

當主義雄氏はその次男として明治二十四年四月十日に生れたが、長男の永逝の後を承けて家督を相續した。早稻田大學に學び、歸鄕してより村會議員に任ぜられ、郡制廢止にいたるまで郡會議員を多年にわたり勤續して功あり、また農會代議員も兼任した。今は村長に擧げられて連續三期におよんで在任し、消防組頭を兼任して極力盡瘁し、貢献するところはなはだ顯著なるものがある。また政友會縣支部の書記に任ぜられて熱誠以て黨務につくすところ少からず當地方の重鎭を以て目されてゐる。

氏は滿洲事變に關して盡瘁奮勵して功あり、賞杯を賜はつた。多年消防の事に盡力し經濟更生に寄與し、また自治上に功勞少からず、或は賞杯を授けられ、或は刀劍を賜られ、本年春、町村制發布五十周年記念として、その功を表彰せられ置時計を賜つた。その他受賞、被表彰は多數にして枚擧の煩に堪へ得ない。

長男靖二郎氏二十六歳は新發田中學校を卒業してから家業に從ひ、嚴父を輔佐して精勵しつゝある。將來の雄飛を約束されたる鳳雛を以て待たれてゐる。

長浦村長場

長浦村長
農會長
耕地整理組合長
長塲誠

長場家は源氏の系統を承けて久しく筑前の國に住したことがあり、その後當地に轉住して、三百餘年以前からの系圖を傳へてゐる。代々庄屋を勤めたる豪農にして、資産を增大し來り、今や素封家として遠近に著聞してゐる。

曾祖父十守氏は明治戊辰の大變革に際して飛躍また活躍、大いに勤王の事に奉じて功勞があつた。祖父佐太郎氏はその男にして、帝國議會開設初期時代に代議

士に選ばれ國民黨の重鎭として議政壇上に活躍し、國政協賛の功績は多大であつた。先代尙太郎氏はその男にして、村長の任に在つて多年敏腕を揮ひ、その功績きはめて顯著にして名村長と謳はれた。

當主誠氏は尙太郎氏の長男にして、明治二十九年十二月五日に生れ、慶應義塾を卒業した。多年にわたりて村長の任に在りて功績多く、農會長、青年會長、村耕地整理組合長、縣耕地整理評議員、賀慶耕地整理組合長を兼務し、また新潟縣副産物輸出會社創立委員として奔走中である。氏は嚴正中立にして公明正大を操守し、一意專念全村の福祉のために盡瘁してゐる。村民の信望は絶大にして、つねに感謝稱讃して措かざるところである。

ノブ子夫人は保田村齋藤家より出でて、すこぶる貞節の人。內助につとめて令名高く、一家はつねに和平圓滿のうちに繁榮しつゝある。氏はまた青年會長として日本主義の徹底を期し、多大なる德育の實を擧げた。

長浦村土地會 長浦村助役 池田與司

當池田家は、長浦村屈指の舊家にして、先代榮作氏は永らく村會議員の任にありて、村治の圓滿なる運行に多大の寄與をなせる功勞者であつた。

當主はその長男にして、出生は明治三十一年六月、幼時より明るき性格の人として、人に好感を與へた圓滿なる人格者である。縣立加茂農學校卒業後、家に在りては家業に精勵し、その後軍籍に入りては陸軍歩兵少尉に任ぜられ、歸郷後在郷軍人分會長に推されて現任中。また自治に關與しては、二十八歳の折すでに村會に推擧を受けて歷任する事、實に四期に及び、また村助役の重責にも在りて村民の福祉增進のために、村勢伸展のために、獻身的努力盡瘁をなしつゝあり産業方面に於ても農會幹事、耕地整理組合會議員の任にある。すでに多大なる功を奏せしが、その將來に益々期待を寄せられてゐる。

尙ほ夫人は淑德の譽れ高く、國防婦人會長浦支部評議員として、奔走活躍してゐる。

木崎村鳥屋 木崎村長 産業組合長 小林達三

小林家はその創始はなはだ古き舊家にして代々農を以て業とし素封家を以て著聞してゐる。當主達三氏は明治十四年の出生にして家業にいそしんでゐたが、公共の事に奔走周旋することすこぶる熱心にして、多年にわたりて村會議員の任に在りて活躍しその功勞多大

なるものがあつた。今は村長の重職に在つて、村農會長、産業組合長をも兼務し全力を傾注して盡瘁しつゝあり、その德望は全村を蓋うて洽きものがある。

長男小左衛門氏は陸軍歩兵大尉に任ぜられ、木崎村村長の任に在つて敏腕を以て奮勵活躍中。支那事變に應召出征して奮戰中に名譽の戰死を遂げたのである。次男は新發田歩兵第十六聯隊に、三男は滿洲國にて軍務に精勵しつゝあつて、一家より三人の軍人を出だしたる名譽の家として當家は稱讃敬仰せられつゝある。

松ケ崎濱村 松ケ崎濱村長 勳七等 平岩喜代太

氏は先代三郎平氏の三男として、明治十八年十月二十日、商家に生れたものでもと歩兵軍曹、勳七等の勇士、現在は乾物雜貨商を手廣く營み、一村の信望極めて厚い。

氏は村役場書記を振り出しに助役に擧げられ、村長の忠實たる輔佐者として重責を果すところあり、信望いよ〳〵厚きを加へて、今や村長に就任、白紙を以て一村に見えてゐるが、公正重々たるの一歩々々は、村民をしてその堵に安んずるを得しめてゐる。

菅谷村下寺內 菅谷村長 宮下亮治

宮下家は、分家してより既に十三代の家系を傳へる當村屈指の舊家にして、また由緒深き名門の家柄である。累代村開拓に功多くして、先代丈次郎氏は村會議員その外村內すべての公職を勤め、遂に村長に推擧を受けて獻身的盡瘁をなし、村政上に多大の功勞を印し衆望を自ら高めて二期を歷任せる偉大なる自治の功勞者である。

當主亮治氏はその長男として、明治十八年二月一日岳降せる天性高潔淸廉の人格者にて、自治の卓拔なる手腕家である夙に尊父の衣鉢を襲ぎて自治公共の事に竭し、村會議員、學務委員、敎育會長等をつとめて多大の貢獻をなし、尙ほ現任する村長の要責は多年に亘るものにて、青年團長たる青年指導の任は約十ケ年、また産業方面の重任たる信用組合長に歷任するは七ケ年にて、菅谷村現在の隆盛に至りしは實に氏の努力貢獻に依るといふも過言ならず、特に學校建築、産業方面、宗敎に多大の功勞あり、今や菅谷を一身に背負つて益々村勢伸展のために努力中にて、銃後農村にとつて氏の如き人物こそ打つてつけの手腕家と稱され、村民より囑目され敬慕の的となつてゐる。氏はまた明敏なる頭腦を有する村幹にして出身は新發田中學である。

長男惣右衛門氏は、明朗闊達なる資性を有して俊敏の氣性に富み、當年二十五歳である。次男勉氏は慈惠醫大二年に在學中の秀才である。

紫雲寺村

紫雲寺村長 勳八等 **間藤康作**

八面玲瓏の人格者たる氏は、堅實な手腕家でもある。明治十七年八月三十一日を以て生をこの世に享け、日露戰爭に出征し、赫々不滅の武勳を樹てたる皇國の勇士にして、勳八等に叙されるの光榮を有した。凱旋後、家業に精進すると共に國防婦人會分會長等に推され、村内各方面に献策裨益するところ頗る多い。

現時村長の要職にあり、自治の圓滑なる運轉を圖り、村民に自治思想を普及徹底せしめ、また産業の開發に努力し、經濟の充實、教育の振興なども事績大いに見るべきものがある。郡内切っての名村長との定評あり、村民の信頼あつく、村長のほか養蠶實行組合聯合會長並に銃後會長を兼任し、東亜の平和のため聖戰を進めてゐる現下非常時に、銃後を護つて遺憾なく、令名いよ〳〵高きを加へてゐる。誠に氏は紫雲寺村の至寶であり、當地方有數の材幹である。今後の功績はますます顯著となるであらうとは、一般の觀るところである。

金塚村

金塚村長 **白勢正員**

氏は、縣下でも有數な資産家、白勢長計家から分家した負けじ魂の持主、すべてに几帳面ながつちり家で、太つ腹でもある。口も八丁なら手も八丁のなか〳〵の手腕家、しかもその統制の才に至っては、正に千軍萬馬を御するの將帥にも比すべきであらう。

村民一致の推薦によつて村長の要職に就任して以來、すでに永年にわたつてゐる。是を是とし、非を非とする白紙主義の公平無私、村長としての職分は村勢の伸展向上、村民福祉の增進にありとなしこれ等を妨ぐる惡弊あれば、直ちに根こそぎに芟除して、跡を絶つことに躊躇しない。從つて村治大に擧り、住民何れもその堵に安んじて村長の德をたゝへ、その功績を稱して止まない。氏がその職に忠實なる反面は、この一事によつても知り得べく他は推して察することが出來る。

氏は今、老境に在りとはいへ、「人生は動けるだけは動くべきものぞ」を信條となし、悠々閑日月を貪らず、村長の要職に就きながら、實に本家當主の東京に在つて勉學中を、その後見役として家政一切に眼を通しつゝあるといふ、精力旺盛壯者を凌ぐの活躍振りには、儒者もために起つといふことである。由來新潟縣の人はよく働き、さうしてよく富を成すといはれてゐるが、氏の如きは全くその代表的人物である。

且に出でゝは村治を見、夕に歸りてはこの家政につくす、八面六臂の氏の働きこそは、これから世に出でんとする青年村政に與る中堅的人々のよき鑑みとなし

て大に學び、これを實地に行ふべきことではあるまいか。かゝる名村長を生み出した事は本村の幸福、本郡の誇りでありまた本縣の名譽でもある。

今や非常時下にあり、國家のためにも自重自愛、その息りなからんことを、切に祈つて止まない。

築地村築地

築地村長 全國米商組合聯合會副會長 **近寅一郎**

電話中條四五番

近家はその創始はなはだ古き舊家にして、代々精勵を重ねて豪農素封の家として著聞してゐる先代磯吉氏は敬神の念極めて篤く、崇佛の心甚だ深いものがあつて、社寺への献納金は莫大の額に上つてゐる。當主寅一郎氏はその長男として明治十六年十一月三十日に生れ、早稻田大學商科を卒業した。爾來家業に勵み公共の事に熱心に奔走し、政治産業等に於ける功勞は顯然として群を拔くに至つた。名門の出身にして俊敏の商學士たり。人格識見と手腕力量とは全村民のことごとく氏に對して信頼と尊敬とを寄せて德望絶大なるものがある。氏は現に村長の任にあり、全國米穀商組合聯合會副會長、大日本米穀會幹事、新潟縣米商組合聯合會長、同産米改良協會聯合會副會長、同商業組合協會副會長、北越後米改良協會副會長、中條鄕米肥商業組合長等を兼任して盡瘁しつゝある。また新發田稅務署所管内相續稅審査委員、同所得調査委員にも任ぜられてゐて、更にまた下越乘合自動車株式會社取締役社長たる外に、新發田倉庫株式會社取締役、新潟運送舟株式會社監査役、廻船問屋倉庫株式會社監査役として實業界に躍進しつゝある。

氏は政友會の黨員として重きを爲し、代議士として國政壇上に活躍する日も遠くはなからう。當地方の指導的權威者である。ユミ子夫人は貞節の譽高く長男磯夫氏二十八歳は日本大學工學部出身の秀才にして、一家は至幸至福である。

黑川村

黑川村長 從七位 勳六等 **伊藤太郎兵衛**

伊藤家はその創立以來數多の星霜を閲し、世代を重ねたる舊家にして、代々勤儉篤農を以て貨殖致富につとめ、累積築成の巨富は莫大の額に上り、當家は五左衛門と稱し夙に遠近にわたり富豪として著聞したる名門である。今日に於ても毎年收納の小作米は二千俵以上に達するといふ。

當主太郎兵衛氏は明治十一年の出生にして、新潟中學校を卒業し、一年志願兵出身の陸軍歩兵中尉である。村會議員にあげられて盡瘁すること二期にわたつて功勞あり、學務委員に任ぜられて貢献することを多年にわたり、すこぶる功績が多

大であつた。いまや村長に推されて在任し全村の休戚を雙肩に擔つて、鋭意經營樞機に缺來して、着々優秀なる治績を示してゐる。二十數年來、黒川信川組合長として奮勵し該組合をして今日の繁榮を招來せしめたのである。また農政協會長に任ぜられて農政諸般の事項にわたつて寄與するところがはなはだ顯著である。

氏は溫厚の長者にして、さすがに名門の品格自ら輝き出で、威德並び行はれて萬その光裕に立つて悅服せずにはゐないのである。高遠なる大理想を持し、堅實精緻なる具體策を有し、彼此相裨補助長して、適正明確なる措置を講じてあやまらず、全村の福祉は以て確立保持せられて安全和平たり得るのである。氏は曹洞禪に參じて機根すこぶる冴えわたり、悟道味得は深甚であつて、甘露の法雨全家に溢流してゐる。

養嗣子廣太郎氏は三十歲にして、陸軍主計少尉に任ぜられ正八位に敍せられてゐる。父子共に優秀なる將校として名譽の武門である。一家はつねに至幸至福、安泰圓滿にして和合輝和してゐる。

葛塚町嘉山

町會議員 學務委員 消防部頭

上田六三

當上田家は代を累ねること九代目に及んでゐる。始祖以來、代々農を主業となして今日至つたもので、先代正次氏は、疾くから家業に精を出し、家礎をして一層確立堅固ならしめた。他面また村治に關與し、町會議員として、學務委員として將た區長その他の名、公職に擧げられて滅私率公の誠を效し、今にたゝへられる業績、甚だ高きものがある。

六三氏はその長男、明治三十七月八月一日生れの、正しくこれからの人物、眞に兼望をあつめて町會議員に推され、現に町政に與りつゝあるの外、學務委員、消防部頭、六ヶ村水利組合、兩村水害豫防組合副組合長などを兼ねて、縱横に活躍奔走、その業績を累ねつゝある。

黨籍を立憲政友會に置き、同黨當地方の擴張に力をそゝいでゐる。趣味は寫眞にレコードであるが、寫眞に至つては既に玄人の域に達してゐる。

夫人はリマさん、內治の功に最も努めた譽れ高き賢婦人である。長女のあき子嬢は今、東京市和洋女子專門學校に在學研修に勵んでゐる。

中條町並槻

町會議員 並槻區長

羽田忠右衛門

羽田家はその創立はなはだ古く代々農を以て業とし、庄屋をつめ

めたる名門である。先代忠五郎氏は村制時代當地の村會議員として活躍し、功勞はなはだ多大であつたが、日露戰役に出征して奮戰し、二百三高地にて名譽の戰死を遂げた。

當主忠右衛門氏はその男として明治三十四年七月十日に生る。父の遺志をついで村會議員となり、また土地利用組合長に任ぜられて努力し、それぞれ功績があつたが、いまは町會議員に任ぜられ、農會代議員、農區長、區長等を兼務して、寄與貢獻するところきはめて顯著である。

氏は政友會に屬し有數の賞員として推稱せられ黨務については甚だ忠實をつくしてゐる。

當家は一家のして入營して軍務に服したるもの三人を算し感謝狀を授けられたる名譽輝ける武門である。

安田村草水

村會議員 農會區長

田中早苗

當家は、草水隨一の舊家として聞え、始祖以來代々庄屋を勤めた名ある家柄、先代豐太郎氏は村會議員、區長、學務委員、各調査員等を歷任した當村自治の功勞者で、その功績頗る顯著なものがあつた。

當主はその男で、明治十四年十月二十二日の岳降である。聰明にして沈毅の氏は、夙に石材組合の創立者として令名高く、現に組合長の重職の外、村會議員、農會區長として村民の信望絕大なるものである。また農には信用組合評議員、消防組頭、學務委員等の公、名譽職を歷任し、產業に、育英に力を盡し、消防組の改善、發展に就いては功績偉大なるものがあり、その統制手腕卓拔なるものがあつた。

溫厚にして篤實、圓滿なる人格者の氏は、當村の重鎭としてその存在益々重きを加へてゐる。氏は信仰心篤く、曹洞宗に深く歸依し、家庭はまた頗る圓滿で、春風洋々たるものがある。

京ヶ瀨村城

村會議員 寶命丸本舗社長

關川宗德

當家は今から四代前に創家されたものにして、先代宗德氏は、村會議員の要職にあること二十有餘年の長きに及び、村治に盡せる功績は一々枚擧に遑あらず、自治功勞者として表彰さるゝと共に、木杯一個を贈られ、一代の面目を施したが昭和十年十月、多幸なりし生涯の幕を落した。誠に得難き人物であり、村民のこれを惜しむこと多大であつた。

當主は先代の長男にして、明治二十九年十一月三日の岳降である。合名會社寶命丸本舗代表社員として寶命丸の製造販賣に恪勵し、その名天下に知られると共に、第一徵兵保險株式會社代理店を經營し、地方稀に見る活動家として令名が高い。村會議員並に區長たることといづれも

二期、現にその職にあるほか、水害豫防組合會議員として活躍貢献するところが多い。政黨は政友會である。

夫人チヨさんは國防婦人會城支部長に任じて銃後の後援に寧日なく、長男闊氏は新發田中學校を卒業せる俊英にして、劍道初段の達人である。

笹岡村笹岡

郵便局長 正七位勳七等 **小林豐次郎**

小林家は笹岡屈指の舊家と稱される家柄にして、三代前までは當地に於て劍道師範をなせる名門である。家業として今、醬油釀造業を營み、頗るの盛業を極めてゐる。先代石之助氏は家業に勵むと共に公共事業に意を用ひ、殊に郵便局を創設せる當地方通信界の恩人である。

當主豐次郎はその長男にして、生れは明治十一年三月十一日、剛毅磊落なる資性を有し、且つ英邁を以て聞え、その一面青雲骨董・小鳥・盆栽に趣味を有して溫厚、稀に見る清廉高潔の人格者と稱せられる。青年時より家業に精進して、愈愈家運の興隆をはかり、殊に、その產する「小豐」は高き聲望あり、今や斯業界の重鎭として小林の名を知らぬ者はない。氏はまたその家業に精勵すると共に自治公共に意を注ぎ、現在笹岡區長として盡瘁中、尙ほ尊父の志を嗣いで郵便局長の任にあり、各方面に貢献するその功勞すこぶる多大である。曾ては日露戰役に參戰して赫々たる武勳を樹立、正七位勳七等に叙され、表彰も數度に及んでゐる。

家庭は圓滿、十人の家族ありて春風洋洋たる觀あり、信仰は眞宗に歸依してゐる。

金塚村城塚

金塚郵便局長 **兼田作次郎**

兼田家はその由緒すこぶる久しき舊家にして、代々農を以て業としてゐた。勤儉を以て築積達成したる資產が莫大に上る素封家として遠近に著聞してゐる。先代豐治氏は明治八年に生れた。夙にあげられて區長の任に就き盡瘁貢献するところはなはだ多大であつた。今や當主に家督をゆづつて逍遙自適してゐるがすこぶる壯健である。

當主作次郎は、その長男にして明治三十年の出生である。中條農學校を卒業してより家業に精勵してゐたが、昭和五年金塚郵便局取扱所を創設してその所長に任ぜられた。七年昇格して金塚三等郵便局となり、今やその初代局長として公務に鞅掌しつゝあるのである。

氏はその資性は溫良恭順にして謹嚴、禮讓にあつく堅忍熱誠の人である。よく責任をつくして本務を果し、統率よろしきを得て執務成績きはめて優秀である。禪宗を奉じて位伯があつい。

夫人は貞淑にして內助につとめ、國防

婦人會員として活躍はなはだ熱心である。長男利左衛門君十一歲と次男とがある。一家はつねに圓滿和合のうちに繁榮をかさねてゐる。

岡方村平林

村會議員 元村長 農會總代 **品田幸政**

品田家は當村隨一の舊家とうたはれてゐて、代々農をはげみ資產を築成增大してきた素封家である。先代は町村制發布後の初代村會議員として選ばれて以來、努力活躍して寄與するところ多大であつた。

當主幸政氏はその男として明治二十八年十一月十九日に生る。さきには村長、助役に歷任して功勞あり、二十四歲にして特に收入役に任ぜられて四期十六年間勤續し、名收入役とうたはれた。いまは村會議員に任ぜられて盡瘁中であつて、農會總代を始め耕地整理組合會議員、新發田區戮江用水普通水利組合會議員、新發田區戮判所金銪債務調停委員等を兼任してゐて寄與貢献するところはは、なはだ顯著である。

氏は勤勉節儉を勵行し率先その範を示してこれが普及につとめてゐる。また海外移民を奬勵し、すでに村長在職時代に三百五十人を滿洲等へ入植移任させたがさらに一層これが實行の促進につとめてゐる。不偏不黨を以てその本領とし高處大局から洞察達觀せる氏の名論卓說は、時弊を指摘し一世を警世するのが常である。國勢調査員としての功により表彰され、また在鄕軍人分會に對する功により會長鈴木莊六大將より功勞章を授けられた。氏は雄辯にしてその性明朗、至誠一貫よく人を動かして正義を全うしてゐる。全村の信望絕大なる所以である。今後の雄飛は期して待つべきである。

長浦村上堀田

村會議員 區長 農會代議員 **石栗祐七**

石栗家はその創始がきはめて古く、世代をかさねること七代にして今日におよんでゐる。代々農を以て業としたる舊家にして、勤儉力行の篤農者として知られてゐる。先代勘平氏は多年にわたり區長をつとめて功勞があり、さらに村會議員を四期間勤續して村自治上に於ける功勞すこぶる多大であつたが、昭和八年全村痛惜哀悼のうちに永眠したのである。

當主祐七氏は勘平氏の長男として明治二十三年二月に生れた。亡父の遺志をついで自治產業のために奔走活躍すること久しく、その功勞はなはだ甚大である。

則ち推されて村會議員に當選して在任し土木委員に選ばれ、區長に勤續三期間におよび、新江用水普通水利組合會議員、村農會代議員を兼務して盡瘁してゐる。その貢献すこぶる顯著であつて村民の信望絶大なものがある。

氏は民政黨に屬してその最も熱心なる黨員であつて、當地方の重鎮として敬服せらるゝところである。その資性は誠實にして勤勉、熱烈にして眞剣、公理正義に基き、全村永遠の福祉を念として、一切の私情を抛擲してかへりみず、精力的活躍を以て奮進し、至誠至眞を以て事に處しあらゆる人を動かさずればやまず、必成を期して勇躍するところ、あらゆる障害をも潰滅して目的を達成す。熱と誠の人として全村民の信頼敬仰するところである。淨土宗を信じて敬虔眞摯をきはめてゐる。

佐々木村

村會議員 能七位 **野本靜治**

謹厳の中に温雅な風格を有し、郷黨の敬慕あつき氏は、明治十二年十一月の出生である。厳父次平氏は村會議員その他の要職に就き、村のため献身的に盡力した功勞者として有名である。氏は夙に早稲田大學に學び、日露戦爭に從軍して動功あり、その後、新發田中學校に十三ケ年間、加茂農林學校に三ケ年間、新發田女學校に十ケ年間等、縣中中等教育界に活躍して聲望あり、名教育家と謳はれ、その德を慕ふものは今も非常に多い。教育界を引退後は、悠々自適の日を送りしが、先年村會議員に選出され、村政に參與貢献されてゐる。

長男は明治四十三年生れにて新發田中學校の出身、現時南滿鐵道會社に勤務中、二男は大正二年生れ、東京帝大出身の俊才、今次支那事變に應召し、中支方面に活躍中である。また三男は大正三年の出生にして目下東京高等商船學校に勉學中である。執れも頭腦明晰秀才肌の人物にして將來の大成を期待されてゐる。

中浦村大傳

村會議員 勳八等 **山崎昌二**

當家は溝口藩に仕へた武家より出たる家柄にして當主を以て七代目とする舊家である。

先代繁一氏は明治戊辰の役に從軍せし人にて昌二氏はその男、生れは明治十六年一月七日でなる。幼時より頭腦明敏にて才畫の聞え高く、長じて後は育英界に身を投じ多年奉職した。亦日露の戦役に際しては勇躍出征して各地に轉戦、常に一命を投げ出して活躍し、遂に赫々たる武勳を樹立し勳八等に叙され、白色桐葉章を賜つた。

現在は專ら自治公共の事に關與、村會議員、消防部頭の責に在り、献身的な勞を執りてその寄與また尠なくない。

家庭は圓滿、長男武夫氏は俊敏の氣性

に富む才幹にて、新發田農業學校出身、二男英夫君は同校在學中にして、尚ほ長女さんは女子工藝學校卒業の才媛である。

本田村岡屋敷

村會議員 **齋藤政太郎**

齋藤家は代々農を以て業とし、精農家として謳はれてゐる。當主の政太郎氏は先代刀次郎氏の二男として明治二十八年十二月十六日に生れた。いまや村會議員に當選してその任に在り、また區長に選任されてそれぞれ盡瘁しつつあり、その貢献いちじるしきものがある。氏は精進主義の人にして研學修養につとめて多年にわたり、二十日間斷食修行を成就したことさへある。數年の精神運動作興と、養兎事業の普及奬勵を以つて宿年の持論として熱心に奔走しつゝある。昭和五年人命救助の功により縣より表彰せられた。曹洞宗を奉じてその信仰が極めてあつい。家族六人つねに圓滿和合である。氏は地主として令名あり所有地は相當の廣大なる面積に上つてゐる。

松浦村上中山

村會議員 區長 學務委員 **赤澤根次**

赤澤家は創立以來今日まで四代を重ね代々農を以て業としてゐる。當主根次氏は先代彌藏氏の男として、明治二十五年八月三十一日に生れた。先代彌藏氏は區長に就任して多年にわたりその功勞が多かつた。當主根次氏は大正九年收入役に就任して精勵し、昭和九年に退職した。その後は引きつゞいて村政界に活躍し、今や村會議員に任ぜられ、學務委員、區長、信用組合理事および、村會惣代を兼ねて、全力を傾注して盡瘁しつゝある。

氏はその資性温厚にして篤實、謹厳にして端正であるが、その一面はすこぶる明朗にして磊落であるといふ、寛容にしてよく人を容れ人望高大である。曹洞宗を奉じてその信仰はなはだあつい。夫人たみさんは貞節勤勉にて內助につとめ、長男淳二氏二十五歳は加茂農林學校を卒業し今は家業に從つて厳父を輔佐してゐる。なほ二子があつて、家門は平安和樂のうちに繁榮しつゝある。

五十公村江口

村會議員 **遠藤光雄**

今や村會議員の任にありて議員中の白眉と稱され、青年間の信望を一身に擔つて村勢伸展のために、村政の圓滿なる運行の爲に一身を捧げて活躍努力をつゞけて、村諸般の上に多大の功を印し、いよいよ才能ある村幹と呼ばれて一擧一動を

嘱目され、その將來は、村を背負つて立つべき人物として期待されてゐる。氏は明治四十三年四月五日の出生である。

當遠藤家は、もと村戸長として村政開拓に功を效せる家柄にして、詳かならざるも相當の家歴ある舊家として知られ、家業とするは農業である。

なほ光雄氏は、はやくより家業に精勵して、家運の隆盛につとめ、勤勞愛鄕の青年篤農家として普く知れてゐる。

赤谷村

村會議員 信用組合長 **杉原莊司**

杉原家は十二代の家系を連綿と傳へる當村屈指の舊家である代々公共の事に功多く先代廣太郎氏は村會議員、區長その外を永らく勤めて村勢伸展の功勞者であつた。

當主はその男として明治二十年九月二十八日に夙々の聲を擧げ、溫厚にして剛毅なる剛柔の兩面を備へる人格者である今や當村産業の中心たる信合組合の組合長の要責にあり、兼ねて村會議員二期目の任にあり、その盡瘁寄與する功勞すこぶる多大にして、最も缺くべからざる重要人物として村民敬慕の的になつてゐる曾ては消防部頭、農會長、區會議員、區長等を永らくつとめて效を奏せし事がある。

家庭は極めて圓滿にして三女がある。氏はまた植木に趣味を有してゐる。

聖籠村道賀新田

村會議員 置賜製造業 **水戸部猪八郎**

當家の家業とする置種製造業は村會議員、學務委員として功を奏し自治功勞者と讃はれた先考垣之助氏の創めしものにて、當主、尊父の衣鉢を襲ひて益々家運の隆盛に努め、今や大倉製絲場と特約をむすび、佐渡國二ツ見村に分場を設け愈々盛業を極めて、各共進會にて二等三等と賞を受けてゐる。

氏はまた家業に精勵すると共に公共方面にも意を用ひて村會議員 乾繭組合理事、蒲原置種業組合副組合長の要責に在り、曾ては加治川水害豫防組合議員、信用組合理事をつとめし事あり、その多年に亘る功勞は實に多大にして村民一同感謝してゐるところである。

長男氏は父君を輔佐して家業に精勵し愈々盛業への途上にあり、次男氏はまた京都置種學校に修學中である。

南濱村

村會議員 **伊藤又之助**

當家は代々篤農家を以て稱されし家柄にして、累代農事改良改善に努力寄與するところ多く、開祖以來當主を以て七代

目とする。先代又七氏は村會議員並びに區長に任じ、誠心誠意、一身を忘れて村のため、部落のために盡した自治界發達の恩人である。

氏は先代の長男として明治二十一年五月七日を以て生を當地に享けた。夙に祖業を繼いで父祖同樣篤農家と呼ばれ、傍ら眷望を擔つて方面委員たること約三ケ年、貧窮民より慈父の如く仰慕され、公平無私の態度は普く鄕民の賞讃して已まざるところであつた。その後、選ばれて村會議員となり、現にその要職にあるほか、村農會代議員、加治川普通水利組合會議員を兼任し、いよ〳〵公共のために犧牲的精神を發揮してゐる。誠に氏の如きは村の大恩人であり、地方農業發展改發の大功勞者といふべきであらう。しかも宗教心に富み、至信心樂の境地に悠々の日を送るといふ。凡人の得て眞似し得ざるところである。家庭は圓滿、和氣靄々として繁榮の道を進み、氏の業績不滅にして村民の忘れ得ぬ處である。

龜代村

村會議員 勳八等 **堀常吉**

氏は明治十七年十月に生れて、先代末太郎氏の養子となり家督を相續した。日露戰役に出征して第三軍に屬し、各地に轉戰して武勳を樹て、勳八等を賜はつた。今や村會議員にあげられて全力を傾注して盡瘁し、また養蠶實行組合議員を兼務して寄與貢献するところ多大なるものがあつて、全村の信望を博して絶大である。

氏はその資性きはめて溫良にして柔和謙遜にして禮讓に篤い。しかも義俠に富み情誼が强い。氏はすなはち全村の福祉を念として己を捨てゝ公共に奉じ、活躍奔走大いにつとめ、村政界の一方の重鎭を以て目されてゐる。眞宗大谷派を信奉してはなはだ熱心である。一家はつねに和樂安泰にして繁榮してゐる。

川東村大友

村會議員 **小野三治郎**

溫厚にして篤實、質朴剛健の氏は、また精農家として著聞し常家十二代目の當主である。氏は先考故三九郎氏の男で、本年六十二歳、その自治的手腕は農に區長として區政の向上に素晴らしき業績を殘して、衆庶の信頼を博した。

現時推されて村政の中樞に參與する氏は、永年の豐富なる體驗と、熱誠燃ゆるが如き愛鄕心をもつて村會に臨み、常に村勢發展に獻身的に盡瘁してゐる。

氏の長男武三氏（三十九歳）は、當村の中堅人物で、熱心に家業に精勵し、そ

の夫人との間に愛兒(二歳)をもうけて頗る圓滿である。

菅谷村下松川

村會議員
在郷軍人分會長
正八位

武者孫介

武者家はその祖先が加治山城主の家老をつとめてゐたが、主家の沒落により當地に定住して農に入りたるものにして、連綿として相傳へて今日まで七百餘年間を閲してゐて、今に至るも輒國作の名刀を寶藏してゐる。代々農を業とし營々勵んで巨富を擁してゐる。

當主彌介氏は明治十九年に生れ、新發田中學校を卒業し、陸軍歩兵少尉に任ぜられてゐる。今は在郷軍人分會長の榮職に在りて、村會議員、學務委員を兼務し壺率しつゝあり、また菅谷自動車株式會社長として活躍してゐる。

氏は不偏不黨にして嚴正中立の人であつて、その資性は溫厚篤實である。長男氏は明治大學に在學中にて、次男君は新發田中學校に在學中、なほ令孃三人がある。一家つねに和合圓滿である。

加治村草荷

村會議員
勳七等

植木勇吉

明治三十七年の日露戰役に際し、勇躍從軍して常に各戰線の第一線に於て活躍勇戰し、遂に輔々たる功を樹立し、それと共に名譽の負傷を受け、勳七等に叙されたる氏は、先考安次郎氏の養嗣子にて、當年五十六歳である。

氏は幼時より學業成績優秀にして、才童の譽高く、また獨力獨行の氣性を有する才幹にて、高等小學校を卒へるや家業を輔佐しつゝ獨學を以て勉學をつゞけ、遂に小學校教員檢定試驗に合格し、二十五歳の折、聚蘭村小學校に奉職せしを振り出しに、各地の小學校に二十有餘年間奉職、紫雲寺村米子小學校を最後に、退職後は專ら自治公共の事に關與し、村內各公職を歷任、現在は村會議員二期目の任にあり、兼ねて經濟更生委員農區長として自治、產業の伸展に意を用ひ、尙も努力に努力を重ねて多大の寄與をなしてゐる。

因に當家はその家歷詳かならざるも、相當の舊家にして、家業は代々農を營み來たつた。

長男喜衞氏は俊敏の氣性に富む材幹にして、いま二十九歳、家業に從事して父君を輔佐してゐる。

紫雲寺村

村會議員
學務委員

伊東直次

當家は舊幕時代には庄屋の役をつとめたる家柄にして、始祖以來約九代をかぞ

へる名門である。先代俊太郎氏は戶長役場時代には戶長を、自治施行後は村長に擧げられたる德望家である。

氏はその男、明治六年一月八日の出生である。夙に豪邁善察界の人となり、警部補として勤續二十一ヶ年に及び、功績頗る顯著なるものがあつた。退職後、鄕里に錦を飾り、推されて紫雲寺村助役たりしことあり、後、村會議員に當選、現にその職にあるほか、學務委員の要職を兼ね、村治に壺率してゐる。資性溫厚にして人格高く、書畫に趣味を有し、その鑑識眼は相當高い。

長男は小學校教員に任じ、次男は北海道住友鑛山に勤務する。

金塚村相馬

村會議員
信用組合理事

松田政武

松田家は當村屈指の舊家にしてまた名門の家柄である。先々代與造氏は村會議員、區長等の公職を二十年以上もつとめ村勢伸展のために一身を挺して活躍努力し、多大の貢獻を村治の上に印せる自治功勞者であつた家業は代々農を營め、先代彌五郎氏は溫厚の人と聞えた。

當主政武氏はその長男として生を享け、天性篤實圓滿の人格者にして、人に接するに溫和を以てし、衆望すこぶる高き德望家である。夙に自治に關與して村會議員として村治上に效を奏し、現任中であり、兼ねて區長の責に在ること十數年の永きに亘るもの、また產業方面に於て努力する信用組合の理事も十數年の永きに及ぶ。曾ては消防部頭、農會代議員調査委員、軍人分會長等村內各方面にわたつて壺瘁せし事あり、その多年缺常して效せる功勞は、燦然として輝いてゐる。表彰も枚擧に遑なく、村內屈指の自治功勞者にして、當村に缺くべからざる人物と稱され、愈々村民敬慕の的となつてゐる。また政友會に屬し、金塚村の重鎭として重きをなしてゐる。

長男政晴氏も父君の衣鉢を襲いで夙に自治に關與、曾て農會幹事として努力し現在は在鄕軍人分會長として銃後の護りに活躍奔走しつゝあり、その將來に多大の望を囑されてゐる。

松塚村藤塚濱

村會議員
酒造業

小林政太郎

先々代より酒造業を家業として創業せる當家は、今や『ふじの井正宗』を八百石も醸造なし、當地方屈指の酒造家として聞えてゐる。新發田町の知名人士からは勿論、秩父宮殿下よりも御買上の光榮に浴してゐる。その主なる販路は新潟縣下一圓に及び、新發田聯隊、所澤飛行隊等にも納入して聲望を博し、全國品評會優等賞を二回までも授與され、六縣品評會優等賞は數回に及んでゐる。中條町に支店あり、從業員は十五名にて、全員一致

和氣藹々のうちに益々努力業績の發展に努め、愈々伸展の途上を辿りつゝある。

經營者として專心家運の隆盛に精勵する氏は亦、自治公共方面にも功多く、いま村會議員の任にあるが、歴任する事すでに四期の永きに及び、その多年盡瘁する貢献たるや實に村史に記錄さるべき多大なるものあり、明治二十八年六月七日の出生なれば、今後に益々期待を持たれ、その一擧一動は強く嘱目されてゐる。

因に現在の家業たる醸造業は三代前よりであるが、家歴は相當古く、村屈指の家柄である。先代政太郎氏は家勢を興隆せしめし人にて、また村會議員を歴任せる自治功勞者でもあつた。

築地村高橋　中倉州一

村會議員
緬羊組合長
陸軍歩兵中尉

中倉家は創立よりこのかた七代をかさねて今日におよんでゐる舊家であつて、代々醫を業としてゐたが、

數年前より酒造業をいとなんでゐる。

主洲一氏は先代第一郎氏の男として明治三十年四月十三日に生れ、新發田中學校を卒業した。いまは村會議員に任ぜられ在郷軍人會會長および、信用組合幹事、築地緬羊組合長を愛任して全力を傾けて盡瘁してゐた。

多年にわたり氏の功績は拔群にして、昭和八年四月在郷軍人會に對する多年の功により總裁閑院宮載仁親王殿下より有功章を授けられ、また功勞章をも授けられた。同十二年二月陸軍大臣杉山元氏より銀盃を授けられた。同年九月、緬羊事業の功によつて農林大臣有馬頼寧氏より銀盃を授けられた。

氏は溫厚にして謹嚴、愛國崇祖の志は人に秀れてゐる。すなはち一言一行は盡忠報國の赤誠の流溢せるものに非るはない。その人格は崇高にしてその情誼は懇篤である。全村民の深く敬慕し悅服する所以である。今や召され陸軍歩兵中尉として支那事變に出征して某方面に奮戰中である。村民ことごとくその武運長久を祈つてゐる。

氏は曹洞宗を報じてその信仰きはめてあつく、れい子夫人は貞節を以て令聞たかく、四子を擁してその養育に力め留守宅を守つてゐる。まことに武人の妻として萬人より敬仰せられるところである。

黑川村皷岡　高橋勘兵衛

村會議員
學務委員

當家は遠く享保年間よりの舊家にして先代久治平氏は日露の役に逸早く應召し、勇躍して出陣各地に奮戰し、拔群の功績を立てたが、遂に負傷した名譽の戰士で、軍曹に昇進した。

當主勘兵衛氏は、明治三十四年七月二十三日久治平の長男として生る。長じて新潟縣立加茂農林學校を卒業す。産業組合理事として十二年間勤續したる後、現在は村會議員、學務委員、部落農區長の要職にある。

資性質實剛健にして、剛毅果斷、德義心に富み、その豐富なる體驗と、明敏なる透察、穩健妥當なる判斷とを兼ね備へて、常に負ふところの使命を全うしつゝある。氏は報德精神に則つて部落農區の更正指導等に率先し、萬全を期しつゝ努力してゐる。村民は氏のその努力を多とし、氏の將來に多大の嘱望を抱いてゐる。

氏は政友會に籍を列ね、言々聽衆の肺腑をを刺す底の雄辯家である。曹洞宗を奉じて信仰心深く、不動不拔の信念を持つてゐる。

名家出の才媛であり、賢夫人の譽高き靜江夫人は容姿端麗にして性溫雅である三男二女あり、長男政隆君、次男史朗君三男正幸君、長女七々子孃、次女章子孃にして一家は眞に圓滿そのものである。

岡方村長戸呂　小林良三

郵便局長

小林省吾氏の後を承けて當岡方郵便局二代目局長として、當地方通信網發展のために努力しつゝある氏は、明治三十年十二月七日出生の、資性すこぶる清廉溫厚にして篤實なる人格の持主である。その一面剛毅果斷にして、剛柔兩面を具備する謹嚴なる風格は村民の人望を一身に集め、推されて村農會總代に就任、産業伸展のために盡瘁中にて、銃後の護に奔走しては尙武會評議員の任にあり、消防組第七部頭として村警備の任にも當り、その各方面に獻身的盡力をなす功勞は實に多大にして、今やその一擧一動は期待を以て嘱目され、當村に缺くべからざる人物の一人として、愈々村民敬慕の的となつてゐる。

岡方村高森新田　佐藤幸吉

村會議員

二十五歳當時

佐藤家は創立以來今日までに代を重ねて五代である代々農を以て業とし精農家の譽が高い。前には擧げられて新江用水普通水利組合會議員に任ぜられて活躍し

て功あり、今や村會議員に選ばれて現任中である。氏は裸一貫の奮闘者であつて無産者を代表する政黨たる社會大衆黨の熱心なる黨員として盛に活躍中である。氏はまた區長に任ぜられて連續四年目に在職中である。支那事變出征將士の遺家族に對する慰問を徹底せしめること、當村は經濟更生指定村なるを以て可及的迅速に負債を整理すべきこと等の主張を堅持して、極力奮闘中である。淨土眞宗を奉じて信仰があつい。

川東村石喜

川東郵便局長　**本間金三郎**

明朗闊達なる氏は、先代政次郎氏の養嗣子として迎へられたもので、本年五十六歳分家以來、三代目を以てかぞへられてゐる。

實實剛健を旨とする氏は、新潟通信練習生養成所を卒業後、永年郵便事務に缺掌せる有能練達の才幹である。

當局は明治七年に開局し、當時は郵便取扱所として事務を掌り、昭和十二年七月三等郵便局に昇格したものである。氏は三代目の局長として就任以來、鋭意通信事務に盡瘁してその業績また燦然たるものがある。

家庭は養父政次郎氏頼る健在であり、また內助の功多き令閨との間に子寶に恵まれて九人の大家族なるも、常に和氣靄々として笑聲門に溢れ、附近の羨望をうけてゐる。

圓滿なる人格者として衆の信望絶大なるものがあり、禪宗に深く歸依してゐる。

川東村板山

村會議員　**佐藤三右衛門**

佐藤家はその創立よりこのかた今日までに星霜を閲すること二百五十年に餘りたる舊家であつて、代々長を以て衆としてゐる。

當主三右衛門氏は先代八十二氏の長男として、明治三十五年に生れ、加茂農林學校を卒業した。さきには區長に選ばれてその任に就き奔走して功があり、信用組合監事に任ぜられて寄與するところが多かつた。いまは村會議員に當選してその任に就き、全力を傾けて最善をつくし盡瘁貢献しつゝある。

氏はその資性はきはめて溫厚にして堅實、事に處して熱烈眞剣、しかも高遠なる理想を抱いて雄志鬱勃として抑へがたきものがある。よく新古の典籍に眼をさらして天下の大勢を察知し、專門技能の研究工夫に資しつゝ徐ろに他日に備へつゝある。圓滿にして玲瓏たる人格、高邁卓出の識見、圓轉滑脱の權略才幹は、全村の絶大なる信望を博してゐる。不偏不黨の嚴正中立にして八方美人の長所を發揮し忠實勤勉なる周旋奔走は、村治百般に對する貢献を顯著ならしめてゐる。曹洞宗を奉じて信仰はなはだあつく、氏は

その前途なほ春秋に富んでゐる。今後の活躍は明して待つべきものがある。

夫人は米倉村の出身でつとに貞節をうたはれてゐる。愛國および國防の兩婦人會の會員として重きをなしてゐる。長男三彌君十三歳およびその外に二男三女がある。一家はつねに圓滿和合のうちに繁榮してゐる。

葛塚町

町會議員 區長　**菅井謹藏**

菅井家は創立以來今日にいたるまで六代をかさねたる舊家にして、代々農業を以て主業としてゐる。先代藤松氏は町會議員、區長等の公職に任ぜられて、多年にわたり貢献し、その功勞はなはだ多大であつた。

當主の謹藏氏は藤松氏の男、明治二十八年九月三日に生れた。嚴父の志をついで自治産業のために熱心に奔走し、いまは町會議員に當選してその任に在り、區長、信用組合信用評定員等を兼任して盡瘁し、全力をかたむけて活躍してゐる。氏は政友會の最も忠實なる黨員として推稱されてゐる。圓藝に堪能にしてその造詣すこぶる深いものがある。

安田村渡場

村會議員　**鈎卷新一郎**

渡場部落に於ける最舊家たる當家はまた、代々村內の公、名譽職をつとめて村勢伸展上に尠なからざる功を效せる家柄でもある。先代新太郎氏は溫厚にして篤實なる資性を有せる人格者にて、永年に亘り村會議員、區長をつとめて村治上に貢献をなせる自治功勞者であつた。

當主新一郎氏はその男として、明治三十年十二月十五日生を享けた。勤勞愛鄕の篤農家にして俊敏の氣性に富み、自治に堪して手腕ある村幹である。曾て消防小頭、軍人分會班長等をつとめて多大の效を奏し、その秀でたる手腕は自ら衆望を高めて村會議員に推挽を受けて現任中衆ねて消防部頭、軍人評議員、區長、土木委員等村各般の公職に在りて献身的努力をなしてゐる。

因に兵役は陸軍衛生上等兵である。

京ケ瀬村駒林

村會議員　**芋川正治**

芋川家は、當村に於ける大富家であり曾ては戶長などを勤めた名ある家柄として知られてゐる。先代の作次氏は村會議員、學務委員に歷任、村治の上に多大の功勞を遺して、昭和十二年九月この世を去られた。

當主は明治三十三年一月、その三男に生れ、夙に公共方面に參與し、現在は三期目の村會議員であるの外、京ケ瀬信用購買販賣組合監事、新江用水普通水利組合議員、駒林消防組頭、上阿賀販賣利用組合理事、水原乾繭組合理事等の數々を衆ねて、それ〴〵盡瘁功勞を高めてゐる趣味は蘭の栽培。

夫人キンさんは內助の譽れ高き人、國防婦人會評議員を現任、銃後に立つて活

調奔走してゐる。

笹岡村

村會議員 新田加造

明朗闊達にして識判たる氣慨を有し、才能と識見を具備する紳士と稱せられる氏は新田家六代目として、明治三十八年五月の出生である。

新田家は分家以來六代の家歴を有する家柄にして、代々農を家業となし、父君は村會議員を永らく勤めて村政の中堅として活躍努力をつゞけ、村諸般の上に多大の寄與をなせる功勞者であつた。

當主はその衣鉢を襲いで夙に自治に關與し、學務委員として教育方面に效を奏し、現任するは村會議員、消防部頭にて村自治に、村警備に功すくなくない。氏はまた明朗なる性格を以て極めて多趣味である。その趣味とするは犬、寫眞、盆栽、陶器の蒐集等にわたり、特にその愛犬振りは稀に見るものにして、現在當家にあるは英國産、獨逸産の名犬の他數匹の優秀犬である。氏は寢食を忘れて研究と訓練に沒頭し、その名は全國愛犬家中に知らぬものなく、飼育中のそれら名犬數匹は奈良、四國、大阪等より買ひ求めしものにて、全國に二匹と求め難き優秀なるもの、亦その飼育方法は他の愛犬家の及ぶところでなく、愛犬家の機關紙にも幾度かその方法を發表せる程の識者である。

また寫眞に於ては「クローム・コンタックス」機（時價壹千貳百圓）を所有しその技術は斯界驚異の的にて、特に移動物體の撮影に於てその優秀なる技術現はれ、當地方に並ぶものなき技術家である。なほ氏は彼の人命救助四度に及ぶ名犬タマ公の碑を建立の際、率先して寄附をなし、その後も數回に亘つて援助をなしたるが、それを以て見ても氏の愛犬振りは察知出來る。その名犬タマ公の碑は全國數ヶ所に及ぶ。

岡方村長戸呂

村會議員 元村長 小林豊作

小林家は、岡方屈指の舊家にして、また名門の家柄である。明治二十九年十一月二十七日生の氏を以て十代目とする。

氏は明敏なる頭腦を有し、且つ博大の識見と、力量と、才能を具備し、幼時には學業成績優秀にして神童と稱され、縣立加茂農學校を卒へて後は、專ら家業たる農にいそしみ、亦夙に村治に意を注ぎ自治に進出するや、その豐富なる識見力量、才腕は忽ちにして村政諸般上に多大の功を效し、村民唯々驚異を以て迎へ人望高まり、遂に村長に推挽を受けた。

氏はその任に就くや、村内諸政の改革に乘り出して村政の圓滿なる運行をはかり、産業を伸展せしめ、交通をひらき、教育をひろめ、實にその事績枚擧に遑なく、人望ます〳〵高まり、歴任三期の永きに及んだ。その間教育會長として專ら

育英界に盡瘁寄與をなし、現在は四期目の村會議員、青年團長、消防組頭として益々村民の爲に努力活躍を續け、産業方面に於ては信用組合理事、組合長、村農會評議員、耕地整理組合副組合長、新井郷川組合會議員、同常役委員、その外の要責にあり、銃後後援に活躍しては尚武會長となるなど、實に村内の重要責はみな氏一人が兼ね、これを以て見ても氏の如何に手腕家であるか、人望家であるかゞ察知し得られる。今や岡方村を一身に背負つて益々盡瘁をつゞけてゐるが、氏の如き人物こそ最も現時の時局に際し村政を處理するに適當なる材幹と稱すべく、愈〻令名高まり、近隣に知らぬ者がない。氏は、當村民政黨の重鎭にして、趣味は旅行に寫眞である。

家庭また頗る圓滿で和樂に富み、内助の功多大にして、貞淑の譽れいや高き夫人もまた國防婦人會班長の任にあり夫君と共に銃後の護りに奔走、活躍をつゞけてゐる。

長浦村長場

村會議員 牛乳搾取業 阿部武

今や三期目の村會議員の任にありて、一身を挺して村治の圓滿なる運行に、村勢伸展に努力貢献なしつゝある氏は、明治二十八年九月二十一日の出生にして、天性すこぶる温厚、人に接して好感を與へる圓滿なる人格者である幼時より智慮衆に勝れたる材幹にして、長じて後は家業に精勵すると共に、夙に自治公共の事に竭し、推されて區長を三期、區會議員四期、新井用水組合會議員等を歴任し、鞅掌寄與なせし事がある。

現在は村會議員の外に信用組合理事、長場堰用水組合會議員、大沼排水組合議員、耕地整理組合會議員等の重責にあり、その自治に、産業に、各方面への多年に亘る活躍盡瘁は多大なる功を奏して一々枚擧の繁に堪えず、各方面よりの表彰も數次に及んでゐる。その功は圓滿なる人格と相俟つて村民等しく仰慕するところ、その一擧一動は村民の福祉增進を左右する事とて、益々期待を以て囑目されてゐる。また當村は經濟更生指定村にて、縣より技術官來村して活動中なるがその、趣旨に贊同する氏の貢献また多大である。

因に當家は村切つての舊家にして、當主を以て八代目とする家柄、先代氏は村内各公職を歴任せる村勢發展の功勞者である。いま牛乳搾取業を營み、なか〳〵の盛業とである。家庭は圓滿にして、淑德の譽れ高き夫人は國防婦人會長場分會評議員として、銃後の護りに奔走活躍してゐる。

中浦村下飯塚

村會議員 産業組合理事 鈴木甚十郎

鈴木家はその創立よりこのかた世代を

重ねること、十一代星霜を閲すること三百餘年にして今日に及ぶ舊家であつて、當家こそ鈴木同族の宗家としてその總元締である。代々農を以て業とし代々篤農の譽が高い。先代甚十郎氏は村會議員に選任せられてから多年にわたつて勤續盡瘁し、自治産業等村政諸般の上に顯著なる功績を重ね、村會よりその功を表彰せられて銀盃を賞呈せられた。

當主は先代の長男として明治十二年一月三日に生れ、先代の名を襲いで家督を相續した。村會議員に擧げられて先代の遺志を繼承し、また産業組合理事を兼任して、それぞれ最善を傾倒して使命の達成に努力して貢献するところきはめて多大である。農事研究の作振と、産業組合精神の普及徹底とをその持論として、つねにこれが實行實現を念願として活動して怠らず、著々としてその效果をあげつゝあるのである。

氏はその資性淡泊にして酒脫、しかも誠實にして熱心、堅忍不拔意力に秀でた人、その思想は穩健にして中庸を外さゞるの達士である。曹洞宗を奉じてその信仰あつく、家族は八人をかぞへてつねに圓滿和合のうちに繁榮してゐる。

松浦村荒川

村會議員 五十嵐千代次

氏は明治二十一年十一月五日に生れ、先代久太郎氏の養子となつて家督相續をした農を以て業とし精勤してゐる。先には區の代議員及び消防組員として功勞があつた。今は會議員の任にあつて活躍中である。

養女シヅエさんは新潟田高等女學校を卒業した才媛である。婿養子の榮氏は今北支那事變に出征中にして、溫厚しかも明敏なる資性を有し、村民の信望ある人材である。

聖籠村

村會議員 長谷川喜一郎

長谷川家は、聖籠村屈指の舊家にして代々村開拓に功多く、先代寅三氏は人格高潔にして當村村長に、村民一致の推戴を受け、一身を挺して村勢伸展のために努力盡瘁、多大なる貢献をなし、村史の上に偉大な足跡を印せる功勞者であつた。內治の功勞に依り勳八等を賜り、その外また表彰を受くる數回、村民の範として仰がれた。

當主はその男、當家七代目にして明治十四年の出生である。天性すこぶる醇厚にして潔白、また明朗闊達なる一面を有し、その溫容圓滿なる風格は村民の等しく敬慕するところである。氏はまた才能と識見を備へる當代稀に見る材器にして夙に村治への進出を懇請され、民政黨に屬して出馬、さすが長谷川寅三氏の血を享けるだけに、その活躍は到底凡人の及ぶところではなく、村政各般の上に多大

の效を奏してゐる。

現在は四期目の村會議員たるの外教育に關與しては學務委員の任にあり、産業では蠶絲調査員、蠶業實行組合副組合長等の要責に在り、また加治川水害豫防組合議員として功すくなからず、殊に蠶絲調査員は一村一名のものにて、その努力は村民一同の感謝するところ、今や村政の中堅に在りて益々活躍しつゝあり、その功績は淸廉溫厚なる人格と相俟つて愈々高めつゝある。

岡方村大瀨柳

村會議員 木村惣三郎

木村家は創立古く、今日まで六代を重ねてゐる。當主惣三郎氏はさきには區長に任ぜられて四箇年勤續し、いまは村會議員に當選して、その任に在り、また岡方村信用組合信用評定委員、新江用水普通水利組合會議員連續三期、岡方村耕地整理組合評議員七箇年勤續、負債整理組合長を兼任盡瘁してゐる。

氏は剛毅にして果斷、明敏にして精確しかも寛容にして懇篤である。實行力に富み、理想はきはめて高遠である。全村民の信望を博すること大である。日蓮宗を奉ずることきはめて敬虔その信仰は熱烈眞劍である。

岡方村大久保

村會議員 高橋勝三郎

高橋家は創立以來今日まで六代をかさねたる舊家にして、代々農を以て業とし篤農を以てあらはれる。氏は明治十一年十二月七日に生れて、先代善七氏の長男として六代目を繼いでゐる。

氏はつとに公共世務のために活躍することはたはだ熱心にして、さきには土木委員、村農會總代、區長、新井鄕川水害豫防組合會議員、家屋稅調査委員、第一第二岡勢調査委員等を歷任して功績が多く、いまは村會議員に勤續して三期に及び、また耕地整理組合會議員、新江用水普通水利組合會議員、岡方村教育會評議員等に任ぜられて盡瘁してゐる。

氏は政友會の最も有力なる黨員として活躍し、淨土宗を奉じて信仰があつい。

南濱村

村會議員 此村良太郎

北村家は創立以來代を重ねて今日に至り六代目である。代々農を以て業としてゐる當主良太郎氏は先代文吉氏の長男として明治二十七年一月二日に生れた。村治財政上に活躍すること久しきにわたつてすこぶる熱心にして、今や村會議員、區長、信用組合評議員、消防組師等に任ぜられて、折角盡瘁しつゝあつて、その功勞は顯著である。曹洞宗を信仰することがあつい。氏は極めて德氣に篤く、質實敦厚なる人格者として信望がある。

川東村上岡田

村會議員 羽賀傳助

當家は代々農を以て家業とし、先代金藏氏は、村會議員・區長等の要職を歷任した當村自治の功勞者として、その功績顯著なるものがある。

當主はその男で、明治十三年一月五日の岳降氏を以て分家以來實に七代目となす。資性溫厚篤實にして人望高く、夙に村治に意を注ぎ、これに貢獻寄與する處甚大なるものがある。農に區長の公職を十年勤め、獻身的に區政の向上に盡瘁した農會代議員を四ケ年、國勢調査員等の名、公職を歷任し、その識見才腕は好評嘖々たりで、現時推されて村會議員として、村政の中樞に缺拿し、夙夜これに率勵し、その業績顯著なるものがある。

氏は曾て土地賃貸價格調査員を勤めたことあるが、その功に依つて長野稅務局より表彰された。

氏の男傳之助氏（三十四歲）は農區長を勤め、當村中堅人物として、將來を嘱望されてゐる。外に米太郎氏、三令孫を加へ、一家は益々繁榮し、至幸至福を極めて和氣靄々たるものがある。

龜代村

村會議員 勘八等 度邊理吉

渡邊家は創立以來今日まで五代をかさねたる舊家にて、代々農を以て業とし、旁ら漁を營んでゐる。氏は先代の休藏氏長男として明治十七年十月二十日に生れた。日露戰役に出征して武勳をたて白色桐葉章を賜つた。さきにはあげられて漁業組合幹事の任につき、奔走周旋大いにはげみ貢獻するところはなはだ多大であつた。今や擧げられて村會議員の任に在り、一身を挺して公務につくし使命の達成のため全力を傾けて傾注してゐる。

氏は政友會の最も熱心にして、また最も有力なる黨員であつて、當地方に於ける重鎭を以て目されてゐる。その資性は剛毅にして豪放、しかも磊落にして酒脫高邁なる識見はよく時勢を透察し、該博にして實際的なる學識は時勢に剴切であつて、玉成渾熟の人格はいよいよよく洗錬されて風韻を發し、人情に明るく情誼にあつく義俠に富める氏は、その德望あまねくして全村の信賴をかけられてゐる曹洞宗を奉じてその信仰があつく、意志力ますます盛にして練磨を加へられてゐる。今後の氏の活躍と功績とはめざましきものがあるだらうと、刮目して期待せられてゐる。

川東村上羽津

村會議員 上羽津區長 信用組合監事 秦茂藏

秦家は、その創立がきはめて古く、村内に分家が六軒ある。代々農を業とした る素封家である。先代隆松氏は村會議員

に當選すること連續三期、誠意誠心をもつて盡瘁し、また區長、農會代議員等を歷任して、それぞれ貢獻するところが多大であつた。

當主茂藏氏は、隆松氏の長男として、明治二十四年に出生した。嚴父の志を繼いで公共のために活躍することすこぶる熱心にして、さきには在鄉軍人分會評議員をはじめ消防組小頭、農會代議員、同評議員、青年會長等を歷任して功勞すくなからず、いまは農區長の任に在り、信用組合監事をかねて寄與するところあり久しきにわたつて村會議員、區長に重任勤續して盡瘁することきはめて熱誠である。國勢調査に關して功勞あり、內閣より賞狀を授けられ、川東村より賞品壹個（鐵瓶）を授與せられた。

氏は、その資性明朗にして洒脫、謹直にして端正、誠實にして勤勉である。禪宗を奉じて、その信仰がきはめてあつい。長男七藏君十九歲のほかに五男二女がある。一家はつねに和樂圓滿のうちに繁榮してゐる。

岡方村十二新田

村會議員 高橋治郎

氏は明治二十三年二月の出生にして、農事に精勵して令名が高い。氏は先に消防組頭、區長等を歷任して功勞少からず、また家屋稅調査委員にあげられて熱心に勉勵し、今や村會議員に重選して二期目に在任して活躍し、土木委員にあげられ、また村農會評議員に任ぜられて盡瘁するところ多大である。さらに氏は耕地整理組合代議員、新井鄉用水普通水利組合代議員等を兼任して奔走すること誠實を極め一村の絕大なる信望を博してゐる。不偏不黨にして嚴正中立を操守し公明大なる立場にあつて村政に貢獻すること顯著である。氏はまた佛敎を奉じて信仰がはなはだ篤い。一家はつねに和樂平安にして至幸の光明に輝きわたつてゐる。

加治村高山寺

村會議員 松田岩松

民政黨系にして、區長を九ケ年間の永きに亘つて歷任し、區民の福祉增進のために盡瘁をなし多大の寄與をなせる氏は、その外水利組合・信用組合等にも關與して努力せる事もあり、現在は村會議員として專ら村勢の伸展、村治の圓滿なる運行に意を用ひ、村民の福祉を村會に論じて獻身的活躍をつゞけ、

兼任するは經濟更生委員なるが、この任に在りてもまた盡力功勞尠からず、村治各方面に重きをなしてゐる。

當松田家は分家してより既に二百年を閲する舊家にして、代々農を家業となし先代森三郎氏は家業に勵みて篤農家の聞え高かりし人にて、自治に與つては區長を多年歴任し、區民の感謝と信頼を一身に集め、また村會議員として效を奏し、その名を謳はれた。

當主はその長男として明治十五年三月十日出生せる、天性篤實温良なる德望高き人格者である。温和を以て人に接し、圓滿なる人格と稱され、その清廉なる人格は功勞と相俟つて村民の等しく敬慕するところにして、村政の元老格とし意々期待をもたれてゐる。經濟更生委員として努力し、表彰を受けた事がある。

家族は八人にして、常に和樂を極め、長男三衛君はいま二十三歳の好青年にして、家業たる農に勵むこと頗る熱心、學を農學校に修めた。次男末吉君は商業學校三年に在學中である。

紫雲寺村米子

村會議員　石井象太郎

石井家はすでに七代の家系を傳承する舊家にして代々村開拓に功多く、先代彦藏氏は村會議員區長等の要職を歷任して效を奏せる功勞者であつた。

當主はその男、明治九年七月二十一日の出生である。温厚にして篤實なる資性を有し、家業たる農に精進して篤農家の聞え高く、自治公共の事に竭せば、消防第一部頭を二十一年の永きに亘りて歴任役場に入りては收入役より助役にと多年つとめ、村會議員の任を歴任すること三期に及んで現任中、兼ねて養蠶實行組合米子支部長の任にあり、實に寄與せる功勞燦たるものあり、表彰も枚擧の遑なく責を歴任して效を奏せる功勞者である。

當主はその長男、明治二十一年三月二十一日の出生である。温厚にして篤實なる資性を有し、家業たる農に精進して篤農家の聞え高く、自治公共の事に竭せば、消防第一部頭を二十一年の永きに亘りて歴任役場に入りては收入役より助役にと多年つとめ、村會議員の任を歴任すること三期に及んで現任中、兼ねて養蠶實行組合米子支部長の任にあり、實に寄與せる功勞燦たるものあり、表彰も枚擧の遑なく今や村政の元老として益々村治の上に重きをなしてゐる。

長男清吉氏は、加茂農林學校の出身、青森縣廳に奉職して勤務中、次男政男氏は滿鐵に奉職してゐる。

金塚村大野

村會議員　須貝與一

現在村會に樞要なる位置を占め、議員中の白眉と謳はれ、村勢伸展の爲に献身的の勞を執つて、村政諸般の上に多大の效を奏してゐる。

氏は兼ねて學務委員の任にもあり、その村教育の爲に盡瘁する貢献もまた尠からぬものがある。曾ては區長として區民の爲に盡し、消防部頭として村警備の任に當り、信用組合理事として、産業伸展の上に寄與をなせし事あり、多年に亘るその盡力功績は、村民一同驚きの眼を見張り、感謝するところにて、いまだ明治三十六年十月生れの三十六歳なれば、その將來は益々嘱目され、一擧一動村民注

目の中にある。

當須貝家は、大野部落屈指の舊家にして須貝姓の本家と稱せられる。先代廣吉氏は資性穩健にして淵遠なる人格者である人望すこぶる高く、遂に推されて區長の任に就き、一身を挺して區民の福祉增進に、區内の圓滿和合に貢献せる自治功勞者である。當主はその長男にして夙に篤農家の聞え高く、家運を興隆せしめ勤勞受汗の人、天性明朗にして淵達、俊敏の氣性に富む村幹である。

家族は十一人にしてすこぶる圓滿和樂を極め、長男廣衛君(十八歳)は農林學校在學中である。

築地村

村會議員　農會長　浮田長太郎

氏は温厚なる人格者として、信望極めて高いものがある。明治十七年、長次氏の男、當家三代目として出生した。父君は村役場收入役に在ること三期、村會議員、郡會議員、産業組合理事、農會長等に歴任、著大なる功績を遺して七十歳を以て長逝した。

當主はその後を繼いで、公共方面にも携出した。現に村會議員であるの外、産業組合理事、農會長などを兼ねて鋭意努力し、以て民衆の心に副はんことを念となしてゐる。

長男長一郎氏は加茂農林學校の出身、滿洲守備隊に現役を了へて後、北支事變に出征したが、名譽の負傷のために後送新發田聯隊附屬病院に入院加療中であつたが、全快歸郷してゐる。

黒川村持倉

村會議員　水澤千代美

水澤家は約二百年前の開祖に係り、當主を以て十二代目とする當村屈指の舊家である。先代權藏氏は自治方面に卓越せる手腕を有する村幹にして郡會議員として多年郡政の圓滿なる運行のために努力活躍をつゞけ、多大の功を效せるの外、村内各名譽職を歴任、區長の任を歴任すること三十年の永きに及ぶ即ち當區をして今日あらしめた恩人にして偉大なる自治功勞者である。

當主は、その次男にして明治二十三年五月二十五日の出生である。穩健着實なる資性を有して衆望すこぶる高く、今や村會議員、農區長、信用組合評定員、選擧肅正委員等の自治、産業各方面の重責にありて、農村の更生を目指して自力更生を旨とし、村民の先頭に立つて活躍盡瘁をなしつゝあり、その貢献極めて多大曾ては區長を二期もつとめし事がある。

また氏は幼時より明敏なる頭腦の人と聞えたが、長じて獨學し、檢定試驗に合格して二十三年間の永きに亘り教員を奉職し、兒童よりは慈父の如くに慕はれて兒童教育のために努めた青英界の功勞者である。人望は功勞と人格と相俟つて益々

高く、愈々その動きを期待されてゐる。

家庭は圓滿にして三男三女あり、ヨシ子夫人は淑德の譽れ高く、春風和樂の家として知られる。

葛塚町

町會議員 勳七等功七級 **中川敬藏**

氏は富吉氏の男である。明治十三年の二月二日、この世に生を享けた人で、今は書籍商を營業とし、商況ます〳〵隆昌を致してゐるが、曾ては三十七八年の役に出征した歩兵曹長でありまた、赫々たる勳功によつて勳七等に叙し、且つ功七級を賜はつてゐる。

氏の性格は何處までも竹を割つたやうな軍人肌で、これを自己の營業の上にも社交の上にも通じて、未だかへたことがない。この氣つ風がまた人氣を呼んで、信頼の度極めて高きものがある。夫に在郷軍人分會長、消防組頭、村役場助役等を歴任して、その功勞至大なるものがあつた。殊に二ケ年間の助役時代に於ける精勵恪勤と、村長輔佐役とは一層村民に「この人ある哉」の念を增さしめるに至つたのである。

氏は今、町會議員であり、學務委員であるが、町會議員としては實に連續四期目、町會に於ける元老を以て自ら任じてゐる。當年五十九歳なれど腕には年をとらせず人生は五十からを念頭にます〳〵邁進、大に成すところあらんとして活躍これ努めてゐる。

京ヶ瀬村深堀

村會議員 **佐藤益四郎**

赤心奉公を旨とし、眞摯誠實をモットーとして、國民精神の作興に寄與するところ多き氏は、また本村切つての自治功勞者であり、烈々たる意氣の人である。明治二十七年十二月を以て健かな呱々の

一聲をあげし、村會議員に任ずること現在を以て三期目とするほか、深堀消防組頭、農區長等の重責を帶び、村民の信望を一身にあつめて颯爽たるものあり、正に本村の指導者たるに足る人材である。政友會に屬し、當地方屈指の闘將との定評がある。

熱と力と意志の人だ。その一言一句は宛も火を吐くが如く、鄕土を愛し、村を愛し、國を愛するの情は、譬へんとして譬へるに物なきを奈何せんである。稀有の村幹と稱揚すべきであらう。

因に當家は約三百年を經る舊家にして先代益次氏は村會議員を四期間つとめたる人格者、且つ人望家なるも、昭和八年惜しくも他界された。氏はその次男にあたる。

笹岡村大室

村會議員 **太田富一**

太田家は當村に於ける屈指の舊家にして代々農を以て業とし勤儉精勵を重ねて巨富を造成し素封家として遠近に著聞してゐる。當家は數多き太田同族の宗家である。

當主の富一氏は先代良作氏の長男にして、新發田中學を卒業す、さきには長岡銀行水原支店に奉職し、精勵して優秀なる成績を擧げた。また村會議員に選ばれてその任に活躍し、信用組合に入りて理事を經て專務理事となつて敏腕を揮ひ、いまは村會議員に當選してその任に在り全力を傾けて盡瘁してゐて、その貢献はなはだ顯著である。

氏は不偏不黨にして嚴正中立である。その責性は溫厚にして篤實、全村の人望はきはめて高大である。禪宗を奉じてその信仰はなはだ懇篤である。夫人は安田村の出身にして貞節をうたはれ、長男は光衛君と呼び小學校修業中であり、なほ令嬢が二人ある。一家はつねに和合圓滿のうちに繁榮してゐる。

岡方村大迎

村會議員 軍人分會長 勳八等 **後藤德平**

大正七・八年のシベリヤ事變に際して陸軍歩兵上等兵として勇躍出征、駐屯一ケ年にして、燦たる軍功あり、勳八等に叙され、瑞寶章を賜つた氏は、明治三十二年三月二十五日先代德三氏の長男として生を享けた。

剛毅果斷なる責性を有し、事に當りて眞摯なる材幹、後藤家七代目にして尊父早逝の爲に夙に家を嗣ぎて、家運の隆盛に意を用ひて努力、家業は農なるが現在その傍ら富士生命保險株式會社代理店を營み、成績見るべきものがある。才能あり、力量ある才幹として衆望すこぶる高く、はやくより自治公共の事に竭して三期間の永きに亘つて區長をつとめる外、國勢調査員二期、賃貸價格調査委員一期、家屋税調査委員二期等の責を果し、現在なほも在鄕軍人分會長、村會議員二期目、村農會副會長、消防組第八部頭の重責にあり、その自治に、產業にと各方面に一身を挺して努力する功勞は實に多大にして、村諸般の上にその足跡を印し、人望ますます高まり、一擧一動明待と感謝を以て注目されてゐる。趣味は運動にして特に馬術に秀で、馬術の達人としても令聞がある。

夫人イツ子さんは淑德の譽れ高く、國防婦人會部落班長の任にあり、終日銃後の護りに奔走の勞を執つてゐる。

長浦村浦木

村會議員 **小泉正次**

曾で村長の重任を三期歴任して、村民

の福祉增進のために献身的なる努力活躍をなし、多大の效を奏せる

氏は、明治九年二月の出生にして、當家四代目に當る。資性すこぶる謹直、溫厚にして篤實、村民間の信望甚だ厚く、現在は三期目の村會議員の任にあり、村產業自治經濟に貢献するところ頗る多大、兼任する耕地整理組合會議員としても寄與尠からず、その任は組合創立當初よりのものである。政友會に屬し長浦村の重鎭と稱せらる。小島、釣に趣味ありその和かなる人格は村民の等しく尊敬するところである。

家業は雜貨商、村内に信望厚く、繁榮を極めてゐる。なほ自治に關與して多年努力する功勞は村當局その外より表彰されしこと數回に亘る。氏の家庭は圓滿にして、羨望されてゐる。

松浦村 松岡

村會議員 勳八等 **湯淺 秀作**

當地屈指の舊家と聞える當家は、二百年以上の家歷を有する家柄にして家業は代々農を營み、また當地開拓に功多き家柄にして、殊に先代佐太郎氏は村長及び村會議員、學務委員、信用組合理事、その外の重任を果せる松浦村伸展の偉大なる功勞者である。

當主はその男、明治十五年九月十日の出生にして、資性穩健、篤實なる人格を有する篤農家、長じて後は專ら家業に精勵してゐたが、日露戰役起るや勇躍應召第一軍に屬して出征、各戰線に於ては常に第一線に活躍、燦たる功勞を樹立して勳八等に叙され、白色桐葉章を賜つた。凱旋歸鄉後は專ら家業に勵むと共に自治公共の事に意を注ぎ、現在村會議員、區長等の任に在る外學務委員、農會副會長信用組合理事の重責にあり、その各方面に献身的努力をなせる功勞は、實に多大にして村民等しく感謝し、尊敬するところである。

長男佐久太郎氏は俊敏の氣性に富む材幹にして、父君を輔佐し、家業に精進し傍ら軍人分會長として活躍してゐたが今次の事變に際し、新發田聯隊機關銃隊の中隊長として勇躍出征し、いま活躍中ある。尙ほ令弟氏は南米ブラジルに在りて農業に從事してゐる。

令息佐久太郎氏

聖籠村

村會議員 **田邊 陳平**

當家は今より二百五十年前に西蒲原郡

より移住せるものにして、代々農業に從事して精農家の聞え高く、先代敬太郎氏は助役、收入役、村會議員、產業組合理事等、地方自治產業の重要職務を歷任せる土地開發の大恩人である。

氏はその男にして明治二十三年十月八日の出生である。加茂農林學校に學びし逸材にして、大正九年以來村會議員として現在に至るほか、同十年より產業組合理事の任にあり、加治川水害豫防組合會議員、村農會代議員を兼ね、自治產業に盡瘁貢献してゐる。政黨は立憲民政黨に屬する。

また氏は資產家二ノ宮孝須家の執事たること十餘年に上り、資性英邁なる人格者として知られる。

南濱村太郎代濱

村會議員 **吉田 由一郎**

明治二十六年七月生れの氏は、先代由吉氏の男で、氏を以つて四代目とする。代々農をもつて家業とし、篤農の聞えが高い。先代由吉氏は、區長、學務委員、村會議員等の各要職を歷任した、當村自治の功勞者である。

質朴にして、溫厚篤實の氏はまた夙に村治に竭し、產業に、育英にその功績尠からず、村民の信望翕然として氏の一身に集り、現時推されて村會議員の要職にあり、夙夜村勢發展に盡瘁してゐる。

政黨は嚴正中立を持してゐる。その重厚圓滿なる人格は、當村最有力者として存在益々重きを加へてゐる。

家庭は春風駘蕩、和氣藹々たるものがあり、附近羨望の的になつてゐる。

川東村大友

村會議員 區長 **星野 敬吾**

星野家は創立以來今日まで世代を重ねて六百餘年を經過せる舊家にて、村内多數の同姓星野家の總本家である。代々農を業とし來れる豪農の家であつた、素封家として遠近に著聞してゐる。氏は全く一村の長者にして明治十八年に生れ家業を繼いでいそしみ、村治百般のことに努力することすこぶる熱心にして、人望きはめて高大にして德風一村にあまねくゆたかである。今や村會議員の任に在つて全力を傾けて盡瘁し、その功勞はなはだ著大である。また區長をも兼ねて盡力し貢献しつゝある。

星野醫院長、星野守衛

星野守衛氏は星野敬吾氏の令嗣子として明治四十年に生れた。東京市荏原區中延町なる醫學博士岡田和一郎先生の昭和醫學專門學校を優秀なる成績を以て卒業した醫學士にして昭和十一月北浦原郡東村上村に内科、小兒科を開設して、開業したる新進有爲の醫師である。氏の學理に精通せると、實技に練達せると、不休不息の研究に據れると、更に溫雅にし

て鄭重、親切にして情味あつく、まことに仁術の本領たるべき人、患家の信頼感謝は絶大であつて、星野醫院の門前はつねに市をなしてゐる。氏は小學校々醫に任ぜられ、在郷軍人會分會副會長を兼任なして、名聲嘖々たるものがある。貞節にして内助の功高き夫人は佳人としての令閨があり、愛息一人があつて理想的な幸福な家庭を營み、日に日に繁榮を加へつゝある。

金塚村小中山

村會議員 **森谷俊平**

分家以來七代目である當家は醫家、また名門の家柄として聞えてゐる。祖父榮八氏の如きは助役、村會議員等を經て、村長に推薦せられ、しかも永年にわたつて盡瘁貢献せる功勞は多大なるものがあり、本村自治の功勞者としてたゝへられ、また内治の功によつて勳八等を賜つてゐる。

當主は明治三十四月一月十六日の誕生である。氏また、祖父の血を繼承せる烈々たる愛郷家で、資性果斷にして明敏達識、謙讓の美德を備へし才幹である。夙に村治に進出し、曩に區長の公職を勤めて區政の向上に盡瘁して好評嘖々たるものがあつた。また消防後援會員としてこれに關與すること十六ヶ年餘、その功績顯著なるものがある。現在衆望を擔つて村會議員として村政の中樞に參與して夙夜村勢發展に力を致してゐる外、農會議員（三年目）を兼ねて、その將來を益々嘱望せられてゐる。

令閨また内助の功多く、零愛相和して頗る圓滿、長男俊文君（九歳）の他五人の子寶に惠まれて、春風洋々たるものがある。尚令閨は氏を扶けて子女教育の外國防婦人會員として社會の公共事業に活躍してゐる賢婦人である。

岡方村高森

村會議員 **外山彌市**

外山家は氏を以て始祖とし創立新しき家庭であるが一門はことごとく舊家名門である。氏は明治十六年五月二日に生れた。つとに家業たる農業にいそしんでから、區代理二箇年勤續、および負債整理組合理事等に歴任して功勞があつた。いまや村會議員に當選して現任し、全力を傾けて盡瘁中である。氏は民政黨の有力なる黨員であつて、熱心に活躍してゐる。淨土眞宗を奉じてその信仰はすこぶるあついものがある。

築地村竹島

村會議員 **岩本長次郎**

現在村會議員、農會副會長、上竹島聯

合養蠶實行組合長、川越土地改良組合長、中條乾繭組合代議員、學務委員、消防小頭兼部頭等の自治、産業教育各方面の公職をつとめ、一身を挺して村勢伸展の爲に盡瘁努力をなしつゝある氏は、温良なる人格者にて村民の信望すこぶる厚く、村政の重鎮と稱されてゐる、これまで表彰さるゝこと數次に及び當村に缺くべからざる存在である。

當家は、古く庄屋をなしたる當村屈指の名門にして、氏を以て六代目とする。先代忠三郎氏は、村會議員を勤めし當村開拓の功勞者にて、當主はその男、兵役は近衛歩兵軍曹にて、在營中の成績拔群であつた。

葛塚町大田古屋

町會議員 養蠶實行組合長 **川崎吉三**

川崎家はその創立以來今日にいたるまで、世代を重ねること十一代に及び、代々農を以て業としたる舊家にして令名が高い。先代達太郎氏は學務委員、社寺總代等を歴任して功勞がはなはだ多大であつた。

當主吉三氏は先代達太郎氏の男として明治二十五年一月八日に生れた。いまや町會議員に選ばれて在任し、農會代議員をはじめ、北部耕地整理組合役員、養蠶實行組合長、太田古屋信用組合理事、畜産組合葛塚町支部副會長等を兼務して、全力を擧げて最善をつくし盡瘁貢献するところつねに顯著なものがある。

氏はその資性はきはめて温厚にして篤實、誠實にして勤勉、しかも明朗にして洒脫である。特に園藝に趣味が深く名手と謳はれてゐる。曹洞宗を奉じてその信仰は甚だ篤い。氏の今後の活躍は全町民のことごとく刮目して待望するところである。一家はつねに圓滿にして和樂のうちに繁榮しつゝある。

京ヶ瀬村下里

村會議員 **杉山市三郎**

當家は三百年を數ふる當村切つての舊家にして、代々村開拓の功多く、先代彦三郎氏は當年七十二歳を以て頗る壯健、曾て村治に專念貢献をなした偉丈夫である。爲に當村の種々なる名公職に選ばれ、その功勞、枚擧に遑なしである。

當主市三郎氏は、その長男にして明治十六年生れ、先代の衣鉢を繼いでまた熱烈眞摯、稀に見る人格者である、村發展の爲に一意力を注ぎ、大正九年睦村會の組織に當り、資財を投じて努力奔走し青年の指導に已れを棄てゝ立ち、隨つて鄉黨の敬慕あつく、青年の長服するところである。

現在、村會議員は二期目にして、また區長の重任を幾ね、その村政各般にわたりて多大の盡力をなし、尙下里青年團友會の名譽會長として、德望を一身に集めてゐる。

岡家非常時に直面するや、直ちに立つて國防婦人會下里支部建設のために、側面援助者として盡瘁し、その成立を容易ならしめた名士でもある。

笹岡村須走

村會議員 **飯野春藏**

當家は開祖以來約百年を閲する名門である。氏は先代米藏氏の長男にして明治二十七年を以て生をこの世に享けた。幼時より頭腦明敏の聞え高く、鄕黨に勉學中は常に拔群の成績を維持してゐた。その後家業に從事すると共に社會公共の事業に關與し、現時村會議員として嘖々たる名聲を馳せてゐる。

性溫厚明朗、近代的進步的思想を有し反資本主義、反共產主義、反ファッシズムの三反主義を以て進む社會大衆黨に篤を置き、私利私慾を忘却の彼方へ捨て、一意大衆生活の向上と鄕土の發展に努力盡瘁し、その功績は一々枚擧の繁に堪へない。一般村民からは絕大の信賴と期待とをかけられ、從來の功績に徵しても、今後の活躍は期して俟つべきものがあらう。

岡方村森下

村會議員 消防部頭 信用組合監事 **原市太郎**

先代要松氏は區長四期間を勤續し、その他の公職、名譽職を多く在勤して盡瘁しその功勞きはめて多大であつた。

當主市太郎氏は先代の長男として明治二十七年に出生した。先代の志を繼いで公共のために熱心に奔走した。則ちいまは村會議員に常選してその任につき、信用組合監事、農區長、新江川水背通水利組合會議員、連續二期、消防組第二部頭等を兼務して努力貢獻してゐる。消防組に多年勤續の功により、縣消防義會より表彰せられた。

氏は民政黨の最も熱心なる黨員として活躍してゐる。淨土眞宗を奉じてその信仰はなはだあつい。

聖籠村

村會議員 **阿部平次**

明治二十年五月一日この世に生を享けたる氏は穩健篤實なる資性を有する圓滿なる人格者にして村民間の人望すこぶる厚く、當村に缺くべからざる人物の一人とされてゐる。

因に當家は二百五十年以上の家歷を有する舊家にして、先代平五郎氏は村會議員、區長をつとめて衆望を博せし自治の功勞者であつた。當主はその養嗣子、尊父の衣鉢を襲ぎて夙に村治に進出、いま

村會議員及び區長の任にあり、その村勢伸展に部落融和に、盡瘁寄與する多大なるものあり、現在ます〳〵以て獻身的活躍をなし着々成果を擧げつゝある。

家庭圓滿にして、家運益々興隆の途上にありて、附近村民の羨望の的となつてゐる。

築地村笹口濱

村會議員 **八幡愼平**

八幡家は築地切つての舊家にして、家系を傳承すること八代に及ぶ。代々公共の事に關與して功多く、庄屋をつとめし名門である。先代金次郎氏は溫厚篤實なる人格者にして、多年に亘つて村會議員及び區長として盡瘁し、村勢伸展の上に尠なからぬ功を效せる自治の功勞者です

當主は、その男として明治十四年三月風々の聲を擧げた。資性すこぶる勤直、而して淸廉潔白、人に接するに溫顏を以てし、村民より稀にみる人格者と敬慕されてゐる。若冠にして篤農家の聞え高く長ずるや尊父の衣鉢を襲いで自治產業の事に關與、會て農會長として產業の發展改良に意を用ひた事あり、村會議員に推擧されては歷任すること三期、現任中にて議員中の元老として益々活躍をなしてゐる。愛任するは產業組合理事、笹口濱聯合桑蠶實行組合長、農業實行組合長等の村內產業方面の重責すべてに關與、その寢食を忘れて活躍盡瘁する功績は實に多大にして、今や當村に缺くべからざる人物の一人として、村民の衆望を一身に集めてゐる。政黨はいづれにも關係して居らずたゞ村民の爲に奔走するを我が使命なりとして努力してゐる。

長男氏は今、新發田聯隊に屬して、今次の支那事變に出征し、活躍中である。

葛塚町

町會議員 **佐藤藤美衛**

當家は木崎村、須戶藤左衛門家より分家せる家柄にて、藤左衛門氏は多年に亘り村長、村會議員、區長その外村內各公職をつとめて村勢伸展上に多大の效を奏せる功勞者であつた。

氏は、その次男として明治三十六年五月二十二日出生し、資性果斷、獨力獨行の氣性に富む村幹である。夙に分家して現業の印刷業を創業し、明星社と稱してゐる。當町屈指の優秀なる技術あり、當地方文化に貢獻多大なるものがある。今やその優秀なる技術と、親切なる應對とを以て文北人の信望高まり、業績日を逐ふて發展を見つゝある。氏はまた自治公共の事にも意を用ひて町會議員の任にあり、その寄與尠なからず、議員中の白眉と稱せられる。

夫人セキ子さんは淑德の譽れが高い。

京ヶ瀨村窪川原

村會議員 **能勢山義平**

氏は氣慨の人である。溫厚の中に秀たる氣骨を含んでゐる。開祖以來八代目にあたり、先代道二郎氏の長男として明治十六年に生をこの世に享けた。現時、

村會議員の要職にありて村勢の發展に盡力するところ頗る多く、議員中の活動家として知られる外、村農會總代・水害豫防組合會議員、水原乾滿組合總代、區長等の諸職を兼ね、殊に區長は十年來その任にあり、部落の繁榮融和を圖り、功績顯著にして、名區長と謳はれ、普く人望を博してゐる。氏が公事にあたつては一身を忘れ、寢食を忘れ、一意公益の增進と鄕土の發展を考へるばかりで、その獻身的努力は何人と雖も眞似し得ざるところである。

笹岡村發久

村會議員 **中山哲令**

淵厚篤實なる人望家として知る我が中山哲令氏は、當地方に於ける民政黨系の重鎭として尊敬されてゐる。先代治郎衛門氏の次男に當り、明治十九年十月の出生である。祖先中には庄屋その他の要職を勤めたる人有り、先代は戶長を初め收入役、村會議員を勤めし功勞者である

氏は新發田中學校に學び、在學中は學業、操行共に良好にして模範生といはれた。社會に出てから後も、人格と智識の人として漸次輿望をあつめ、村會議員、區長、消防組部長、信用組合理事等を歷任すること多年、功績頗る多く、本村自治史上に燦たる光芒を放つてゐる。現時村會議員三期目の任にあるほか、約十年來水利組合會議員の要職を兼ね、一意專心公共に盡瘁してゐる。

長男英治氏は東京農業大學を卒業せる秀才にして、現在は新發田農學校教諭をつとめ、生徒の尊敬厚く令名靑く及ぶ。

岡方村灰塚

村會議員 **小田島六太郎**

小田島家は創立以來今日まで二十代を重ねたる舊家であつて代々農を以て業としてゐる。先代氏は村に於けるあらゆる公職、名譽職を歷任してそれ〳〵功勞が大であつた。當主六太郎氏はその男として明治十一年十二月に生れた。つとに農區長・新江用水組合會議員および、消防組部長等に歷任して功勞があつた。いまは村會議員に當選して連續二期目に及んで盡瘁してゐる。

氏は忠實にして勤勉、人望次第に高きを加へつゝある。民政黨の熱心なる黨員として活躍してゐる。淨土眞宗を奉じて信仰があつい。老來玉成してゐる氏はその人格識見に於いて、その實力才幹に於いて、一村の指導者たる貫祿を示し、今後の活躍盡瘁はめざましいものがあるべしと、全村民の刮目期待しつゝあるところである。

鑑代村

前村長 **堀慶次郎**

堀家は今、六代目に及んでゐる。代々農を主業となし且つ當地方の素封家を以て名を馳せて來た。先代は市五郎氏で、熱心祖業に精を出すと共に村內公共のことに邁進して村民の意に副うところあり。更に人望を加へて村會議員に選ばれ、進んで村長に推され、しかも村長の要職に在ること十二ケ年の久しきに及び、その功また絕大なるものがあり、厚く表彰された。

當主慶次郎氏はその長男に生れた人、父君の衣鉢を繼いで疾くより村治方面に與り、曾て加瀨川豫防組合員として活動し、村役場收入役として村長を輔くること三ケ年、その遺憾なきを得せしめ、また村長に座すること七ケ年、父君に劣らぬ業績を效して今は滿期退職後の身を、家業に專念すると同時に、村內のことに注目してゐる。

長男市太郎氏

長男市太郎氏は當年三十一歲、陸軍步兵少尉で大正六年鑑代村在鄕軍人分會長となり、引續き今日に至つてゐるが、その功勞また決して尠少ではない。

築地村

教育會長 元村長 勳七等 **佐藤龍太郎**

曾て明治三十八年村長に推擧され、續いて六期の永きにわたつて在任、また農會長に任ぜられること二十四ケ年、當村公設消防組頭たること二十二ケ年、それぞれ盡瘁貢獻せる功勞に至つては、眞に算ふべくもなかつた氏は、明治二年十一月四日、古くから庄屋等を勤めた當家に生れた。

日露戰役當時は村長の要職に在つて、しかも內治の功績著なるものがあり、その功に依つて勳七等を下賜されたことをはじめ各方面よりの表彰さるゝ多數に及んでゐる。

氏は政黨等には一切關係せず、すべてに白紙を以て接衝して來た。現在は敎育會長、方面委員・產業組合理事、農會顧問などを兼ねて盡力しつゝある。

葛塚町

町會議員 **山田忠太郎**

山田家は創立よりこのかた五代をかさねて今日にいたりたる舊家であつて、代代大工職を業としてゐたが、その後商業に轉じた。先代彌惣次氏は油製造業をいとなんで盛業を來し、町會議員・區長等に選ばれて活躍し功勞すくなからず、町民の稱讚を博した。

當主の忠太郎氏は先代の長男として明

治十八年十一月に生れた。いまや嚴父の志をついで町會議員に選ばれ、その任に在つて全力をかたむけ盡瘁中である。不偏不黨、嚴正中立である。日蓮宗を奉ず

長男久一氏は三十六歳にして、高田農學校を卒業してから、葛塚町豐名小學校教員をつとめてゐたが、支那事變の起るや召募に應じて、今は新發田聯隊に勤務中である。

京ヶ瀬村駒林

村會議員 **佐藤彌助**

當家は始祖以來九代を累ねる名門にして、代々鄉黨の信望をあつめた家柄である。先代貞作氏は村會議員に選ばれること四回、村内切つての人望家にて、村治に竭せる功績も甚だ多かりしが、今より二十有餘年前他界せられた。

當主彌助氏はその長男に當り、明治十六年十一月の出生である。村會議員たること二期、現にその重責を帶び、村政に獻策頗る多く、議員中での活動家であり聲望高き敏腕家である。住友生命保險株式會社代理店を經營する。

長男進氏は水原農學校を卒業せる俊英にして、目下家業に從事精勵しつゝあり その將來は多大の期待をかけられ、本村が有する若き材幹中の第一人である。

笹岡村笹岡

村會議員 **星野熊太郎**

今より凡そ三百有餘年前に開かれたる當家は、村内有數の舊家たると共に、また村内切つての名門である。始祖以來代代名譽ある役に推されて鄉土發展につくすところ多く、當地方發展の裏面史に當家祖先の名を沒することは出來ない。されば代々名望家として知られ、今も衆庶村民の敬仰の家である。

氏は先代松太郎氏を父とし、明治三年四月十日、その長男として呱々の一聲をあげた。鄉黨を卒へて後、專ら家業に精勵してゐる中、人格と手腕と明敏なる頭腦とに滿腔の信頼を寄せられて、村會議員に擧げられること二回、その他、衛生豫防委員、笹岡第一部消防小頭、農會長郡農會代議員等を歷任して幾多の功績を積み、また南部消防研究會を創立してこれが會長たること二十ケ年、當地消防の改善發達に寄與するところ頗る多く、昭和五年、水原警察署長よりその功を表彰された。

資性温厚、諾否に明かにして、一度引き受ければいかなる障害をも突破してこれを遂行せずんば止まずといふ意志の人でもある。現時、三期目の村會議員をつとめる。趣味は盆栽、家庭はヨシノ夫人と家族八人である。

葛塚町

町會議員 **五十嵐康治**

五十嵐家は創立以來今日まで五代をかさねた舊家であつて、祖父氏の代より雜貨商を營んでゐる。先代三藏氏は學務委員として功勞が大であつた。

當主康次氏は、その次男として明治二

十年二月に生れた。新發田歩兵第十七聯隊に入營した。

先には在鄉軍人分會長の任に在り、また消防組部頭を兼ねて功勞があつた。今は町會議員に選ばれ、方面委員を兼務して盡瘁しつゝある。俳句に造詣が深く俳味に獨特の清新さがある。眞宗を奉じて信仰があつい

京ヶ瀬村京ヶ島

村會議員 **高橋常雄**

氏は新進の活動家として衆望を集め、將來京ヶ瀬村を背負ひ立つべき人と定評がある。明治三十七年五月十三日を以て生をこの世に享け、性温厚にして誠實、義に堅く情に厚く、現時村會議員に選ばれて活躍しつゝあるほか、京ヶ島消防組頭並に青年學校指導員の要職を兼ね、寢食を忘れての努力盡瘁は村民の等しく感謝措く能はざるところである。政黨は政友會に屬する。

また氏は、曾て軍役に服し、歩兵上等兵に任じたる模範兵にして、除隊後、鄉軍の一員として皇運の扶翼に竭すところが多い。誠に氏は鄉土のホープであり、新人中の異彩である。部落民の氏を遇すること、宛も父兄に接するがごとくである。

笹岡村笹岡

村會議員 **小熊正伍**

今や笹岡村の中堅として、その一擧一動は、期待と驚異とを以て囑目されてゐる氏は、明治三十八年呱々の聲を擧げし資性温厚にして磊落、明るき性格の持主である。

そも〳〵當小熊家は三百餘年の家歷を有する笹岡村屈指の舊家にして、代々自治公共の事に關與、當村開拓に功を效せる家柄である。その家に生れし氏も亦、夙に公共の事に竭して村勢伸展上に村民の福祉增進に多大の寄與をなし、功績は人格と相俟つて人望益々高まり、その將來は笹岡を背負ふ人物として期待を持たれ現在も村會議員の任にある。少壯議員としての名聲すでに高く、その一言一句悉く鄉を想ふ眞心より出でたるものにて多數議員間には驚異を以て迎へられ笹岡に缺くべからざる一人として重きを措かれてゐる。

家庭は春風洋々として、圓滿至極である。

葛塚町

町會議員 **石川力松**

石川家はその創始きはめて古く、代をかさねること五代にして今日にいたつてゐる舊家である。代々農を業とする。

當主の力松氏は明治二十九年九月に生